千葉市昭和の森遺跡群Ⅲ

－辰ケ台遺跡・屋敷内遺跡・東城楽台遺跡他－

2021

千葉市教育委員会
千葉市埋蔵文化財調査センター

千葉市昭和の森遺跡群Ⅲ

－辰ケ台遺跡・屋敷内遺跡・東城楽台遺跡他－

2021

千葉市教育委員会
千葉市埋蔵文化財調査センター

屋敷内遺跡10号住居跡出土土器

屋敷内遺跡出土坏類

巻頭図版 2

辰ケ台遺跡出土瓦塔

住吉遺跡出土石斧製作資料

住吉遺跡出土縄文土器

例　言

1　本書は千葉市緑区小食土町・土気町・小山町地先の「千葉市昭和の森」に所在する遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査は公園整備に伴うもので、事業地内に所在する遺跡全体を昭和の森遺跡群と総称している。本事業ではこれまでに３冊の報告書を刊行しているが、シリーズ番号のない報告１冊があるため、本書は４冊目だがシリーズ名はⅢとした。

2　本書では、既刊の３冊の報告書に所収した以外の調査を扱った。該当する発掘調査は千葉市教育委員会（昭和59年度まで）、財団法人千葉市文化財調査協会（昭和60年度～平成13年度）、千葉市埋蔵文化財調査センター（平成14年度～）が実施した。詳細は第１章第１節に記載した。

3　公園整備事業はほぼ終息しており、本書が最終報告となるため、当地区に関わる発掘成果のとりまとめを行った。

4　遺跡の範囲や呼称は混乱が多く、既刊の報告書と異なる場合がある。本書の内容が正しく、今後包蔵地名・範囲を改める予定である。

5　整理作業は、千葉市公共事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の一貫として令和元年度・２年度に実施した。

6　本書の執筆は、第２章～第９章の中・近世の記載と、第10章第３節について菅谷智也子氏にお願いした。奈良・平安時代について岸本高充が行い、それ以外の執筆と編集を西野雅人が行った。

7　出土遺物の分類・執筆にあたっては、縄文土器について上守秀明氏（千葉県教育振興財団）、中村信博氏（茂木町教育委員会）、峰村篤氏（松戸市教育委員会）及び千葉市教育委員会の加納実、菅谷通保、松田光太郎から、縄文石器について橋本勝雄氏（千葉県教育振興財団）、長田友也氏（中部大学）、古代土器類について立原遼平氏（鹿嶋市教育委員会）、小林嵩氏（千葉市教育振興財団）及び千葉市教育委員会の山下亮介、戸村正己より、中近世陶器について中野晴久氏にご教示を得た。

8　石器の石材鑑定は柴田徹氏に依頼し、結果と所見を付表３・５と本文に提示した。剥片石器の実測は株式会社アルカに委託した。

9　炭化物・土サンプル等はフルイ等を用いて内容を確認し、炭化材の大きめの破片と加工材のみを保管した。

10　出土資料及び調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理する。

11　土気地区の出土資料と発掘成果については、土気あすみが丘プラザ展示室（千葉市緑区あすみが丘7-2-4）で公開しており、本書の成果を追加する予定である。

12　発掘調査から報告書刊行に至るまでに以下の諸機関・諸氏より御指導・御協力を賜った。
文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課、千葉市公園建設課、旧千葉市昭和の森事務所、千葉市緑公園緑地事務所及び、６に挙げた皆様、加藤正信氏（千葉県教育庁文化財課）

凡　例

1　昭和の森遺跡群に含まれるのは第１表の12遺跡である。本書に所収したのは第１表の事業を太字にした調査であり、各種遺物表に示した遺跡番号はこの表に示したものである。

2　本事業で検出した遺構は第２表のとおりである。本書に所収したのは報告欄に○をつけたものである。遺構番号は、調査時点や過去の報告書で使われたものを必要に応じて変更しており、第２表に新旧番号の対照関係を示した。

3　掲載遺物の基礎データは紙幅の都合で印刷できなかったため､付表２～８として付録ＤＶＤに収めた。付表１は掲載遺物全点の索引である。codeは将来のデータベース化に備えて重複のない番号を与えたものであり、先頭文字はJd：縄文土器、Js：縄文石器・石製品、Kd：古代土器、Ks：古代土・石製品、kt：古代鉄製品、Ktm：古代製鉄関連遺物、Md：中・近世土器、Ms：中・近世土・石製品である。

4　印刷した本文、表、挿図、写真図版のデータを併せてＤＶＤに収録した。

5　引用・参考文献は第１章の末尾にまとめて掲載した。

6　遺構図の方位は座標北であり、標高は海抜高で表示した。基準点測量は行われておらず、座標は示していない。

7　遺構図の縮尺は各図に示した。遺物図の縮尺は復元実測が1/4、断面実測が1/3、石鏃が4/5、石製品は1/3、鉄器は1/3、銭は2/3である。それ以外の縮尺を適応するものは各図に示した。遺物写真の縮尺は任意である。

8　第１図で国土地理院発行の２万５千分の１地形図、第２図で第一軍管地方二万分の一迅速測図、図版１で電子国土基本図（オルソ画像・2007～）、図版１で国土地理院ウェブサイトの空中写真を使用した。

9　遺構・遺物実測図における網掛けは図上に示した。

本文目次

巻頭図版
例言
凡例
目次
第１章　本書及び遺跡群の概要…… 1
　1　事業と発掘調査の概要…… 1
　2　整理作業の方法…… 8
　3　遺跡群と各遺跡の概要…… 8
第２章　辰ケ台遺跡……15
　1　概要……15
　2　縄文時代……21
　3　奈良・平安時代……26
　4　中・近世……29
　5　昭和40年度調査概要……32
第３章　屋敷内遺跡……34
　1　概要……34
　2　旧石器・縄文時代……34
　3　奈良・平安時代……34
　4　中・近世……62
第４章　東城楽台遺跡……63
　1　概要……63
　2　縄文時代……63
　3　古墳時代～平安時代……65
　4　中・近世……75
第５章　枯木台南遺跡……81
　1　概要……81
　2　縄文時代……81
　3　古墳時代～平安時代……84
　4　中・近世……84
第６章　西平台遺跡……90
　1　概要……90
　2　出土遺物……90
第７章　住吉遺跡……93
　1　概要……93
　2　縄文時代……93
　3　奈良・平安時代…… 112
　4　中・近世…… 115

第８章　東住吉遺跡…… 116
1　概要…… 116
2　縄文時代…… 116
3　古代、中・近世…… 119
第９章　東住吉南遺跡…… 121
1　概要…… 121
2　縄文時代…… 121
3　奈良・平安時代…… 121
4　中・近世…… 134
第10章　その他の遺跡…… 135
1　金堀砦跡…… 135
2　小食土廃寺跡…… 135
3　荻生道遺跡…… 135
4　土気城跡…… 137
第11章　まとめ…… 139
1　縄文時代…… 139
2　古墳時代…… 141
3　奈良・平安時代…… 142
4　中・近世…… 146
写真図版
報告書抄録（巻末）
付表（DVD-ROM所収）

挿図目次

＜全体＞
第１図　土気地区遺跡群…… 1
第２図　土気地区の位置……10
第３図　土気地区周辺の地形……11
第４図　昭和の森遺跡群と周辺の遺跡……12
＜辰ケ台遺跡＞
第５図　辰ケ台遺跡調査区（１）全体……16
第６図　辰ケ台遺跡調査区（２）昭和57年度
……17
第７図　辰ケ台遺跡調査区（３）昭和58年度-1
……17
第８図　辰ケ台遺跡調査区（４）昭和58年度-2
……17
第９図　辰ケ台遺跡調査区（５）昭和59・60年度
……18
第10図　辰ケ台遺跡調査区（６）昭和60年度全体
……19
第11図　辰ケ台遺跡調査区（７）昭和61年度
……20
第12図　1号・２号住居跡・１号溝 ……22
第13図　20号住居跡……22
第14図　縄文時代遺物（１）……24
第15図　縄文時代遺物（２）……25
第16図　19号住居跡……27
第17図　縄文時代遺物（３）……28
第18図　奈良・平安時代遺物（１）……28

第19図　奈良・平安時代遺物（２）……30
第20図　奈良・平安時代遺物（３）……31
第21図　中・近世遺物……31
＜屋敷内遺跡＞
第22図　屋敷内遺跡調査区（１）……35
第23図　屋敷内遺跡調査区（２）……36
第24図　旧石器・縄文石器……36
第25図　２号・３号住居跡……38
第26図　４号・５号住居跡……39
第27図　６号・７号住居跡……41
第28図　８号住居跡……42
第29図　９号住居跡……43
第30図　10号住居跡……44
第31図　11号・12号住居跡……46
第32図　13号・14号住居跡……47
第33図　15号・16号住居跡……48
第34図　17号・18号住居跡……50
第35図　19号・20号住居跡……51
第36図　奈良・平安時代遺物（１）……52
第37図　奈良・平安時代遺物（２）……53
第38図　奈良・平安時代遺物（３）……54
第39図　奈良・平安時代遺物（４）……55
第40図　奈良・平安時代遺物（５）……56
第41図　奈良・平安時代遺物（６）……57
第42図　奈良・平安時代遺物（７）……58
第43図　奈良・平安時代遺物（８）……59
第44図　奈良・平安時代遺物（９）……60
第45図　奈良・平安時代遺物（10）……61
第46図　中・近世遺物……61
＜東城楽台遺跡＞
第47図　東城楽台遺跡調査区……64
第48図　縄文時代遺構・遺物……65
第49図　１号・２号住居跡……67
第50図　３号・５号住居跡……68
第51図　４号・６号住居跡……69
第52図　７号住居跡・１号建物跡……70
第53図　２号建物跡・溝……72
第54図　１号墳（１）……73
第55図　１号墳（２）……74
第56図　奈良・平安時代遺物（１）……76
第57図　奈良・平安時代遺物（２）……77
第58図　奈良・平安時代遺物（３）……78
第59図　奈良・平安時代遺物（４）……79
第60図　奈良・平安時代遺物（５）……80
第61図　中・近世遺物……80
＜枯木台南遺跡＞
第62図　枯木台南遺跡調査区（１）全体……82
第63図　枯木台南遺跡調査区（２）１次・２次
……83
第64図　１号住居跡……85
第65図　５号住居跡……86
第66図　６号住居跡……87
第67図　１号墳……88
第68図　中・近世遺物……89
第69図　２号溝……89
＜西平台遺跡＞
第70図　西平台遺跡調査区……91
第71図　縄文時代遺物……92
第72図　奈良・平安時代遺物……92
＜住吉遺跡＞
第73図　住吉遺跡調査区（１）全体……94
第74図　住吉遺跡調査区（２）昭和58年度……95
第75図　住吉遺跡調査区（３）昭和59年度Ａ…96
第76図　住吉遺跡調査区（４）昭和59年度Ｂ…97
第77図　11Ｃ区石器集中……98
第78図　縄文土器（１）……100
第79図　縄文土器（２）……101
第80図　縄文土器（３）……104
第81図　縄文土器（４）……105
第82図　縄文土器（５）……107
第83図　旧石器・縄文石器（１）……109
第84図　縄文石器（２）……110
第85図　縄文石器（３）……111
第86図　製鉄関連遺物集中……113
第87図　奈良・平安時代遺物……114
第88図　中・近世遺物……114
＜東住吉遺跡＞
第89図　東住吉遺跡調査区……117

第90図　縄文時代遺物（１）…… 117
第91図　縄文時代遺物（２）…… 118
第92図　奈良・平安時代遺物…… 120
第93図　中・近世遺物…… 120
＜東住吉南遺跡＞
第94図　東住吉南遺跡調査区（１）…… 122
第95図　東住吉南遺跡調査区（２）…… 123
第96図　１号住居跡・１号建物跡…… 124
第97図　２号建物跡（１）…… 126
第98図　２号建物跡（２）…… 127
第99図　３号建物跡…… 128
第100図　４号建物跡 …… 129
第101図　建物群Ｂ …… 130
第102図　奈良・平安時代遺物（１）…… 131
第103図　奈良・平安時代遺物（２）…… 132
第104図　奈良・平安時代遺物（３）…… 133
第105図　奈良・平安時代遺物（４）…… 134
第106図　中・近世遺物 …… 134
＜他の遺跡＞
第107図　小食土廃寺跡調査区 …… 136
第108図　荻生道遺跡・土気城跡出土遺物 … 138
＜まとめ＞
第109図　縄文時代の土地利用 …… 140
第110図　屋敷内10号住居跡出土香炉写真・実測図 …… 142
第111図　集落の変遷 …… 144

表目次

第１表　調査一覧……3
第２表　遺構一覧……4
第３表　縄文土器出土点数…… 139
第４表　古代遺構出土遺物集計…… 145
第５表　中・近世土器類物集計…… 147

写真図版目次

＜全体＞
図版１　空中写真（１）
図版２　空中写真（２）（３）
＜辰ケ台遺跡＞
図版３　調査（１）
図版４　調査（２）・出土遺物（１）
図版５　出土遺物（２）
図版６　出土遺物（３）
図版７　出土遺物（４）
＜屋敷内遺跡＞
図版８　調査（１）
図版９　調査（２）
図版10　調査（３）
図版11　調査（４）・出土遺物（１）
図版12　出土遺物（２）
図版13　出土遺物（３）
図版14　出土遺物（４）
図版15　出土遺物（５）
図版16　出土遺物（６）
＜東城楽台遺跡＞
図版17　調査（１）
図版18　調査（２）
図版19　調査（３）
図版20　出土遺物（１）
図版21　出土遺物（２）
＜枯木台南遺跡＞
図版22　調査・出土遺物
＜西平台遺跡＞
図版23　調査・出土遺物
＜住吉遺跡＞
図版24　調査
図版25　出土遺物（１）
図版26　出土遺物（２）
図版27　出土遺物（３）

図版28　出土遺物（４）
図版29　出土遺物（５）
図版30　出土遺物（６）
＜東住吉遺跡＞
図版31　調査・出土遺物（１）
図版32　出土遺物（２）
＜東住吉南遺跡＞
図版33　調査
図版34　出土遺物（１）
図版35　出土遺物（２）
図版36　出土遺物（３）
＜他の遺跡＞
図版37　金堀砦跡・小食土廃寺跡・荻生道遺跡調査　荻生道遺跡・土気城跡出土遺物

付録DVD

＜付表＞
付表1　掲載資料索引
付表2　縄文土器
付表3　縄文石器・石製品
付表4　古代土器
付表5　古代土・石製品
付表6　古代金属製品
付表7　中・近世土器類
付表8　中・近世土器以外
＜写真＞
巻頭図版１・２、写真図版１～37（カラー写真）
＜その他＞
報告書抄録

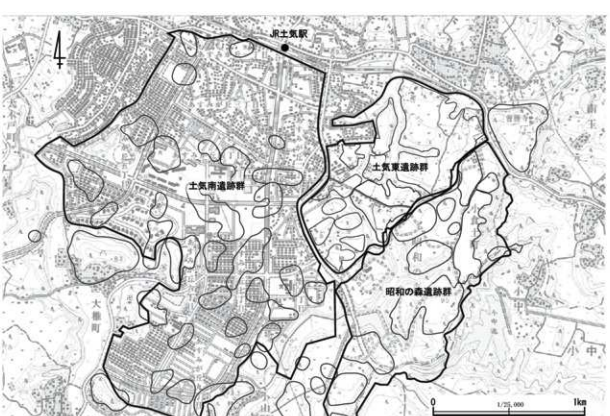
第１章　本書及び遺跡群の概要

１　事業と発掘調査の概要

（１）事業と遺跡群

千葉市昭和の森は、千葉市東端部の緑区土気町・小食土町・小山町内に跨る面積105.8haの市営公園である。南北2.3㎞、東西0.8㎞と市内では最大、県内でも有数の規模を誇る総合公園である。昭和44年、山武郡土気町の千葉市編入を記念して、大字小食土のほぼ全体を敷地とする整備構想が持ちあがり、昭和46年から整備事業に着手、昭和50年４月に部分開園した。キャンプ場、野球場、テニスコート、サイクリング・ウォーキングコースなどの施設を備えた当時国内最大級の都市公園であった。公園の一部は県立九十九里自然公園に指定されており、平成元年には「日本の都市公園100選」に選定されている。なお、旧千葉市ユースホステルには採集遺物の一部が展示されていたが、平成26年に昭和の森フォレストビレッジとしてリニューアルオープンしている。発掘調査は昭和51年度から平成２年度までの14年にわたって実施し、以後一部追加的な調査を実施している。

公園整備は、基本的に旧来の地形を活かす方針で行われており、包蔵地についても大半は公園の地下に保存されている。図版２は整備が進んだ平成７年の、図版１は近年の航空写真である。本調査は、試掘・確認調査のあと、地下への影響が避けられない部分のみ実施している。とくに重要と判断された小食土廃寺跡、荻生道遺跡、辰ケ台遺跡については全域を養生して現状保存し、現地に看板を設置している。小食土廃寺跡は、千葉県教育委員会が重要遺跡確認調査（古代寺院跡）の対象に選び、瓦葺きの基壇建物をも



第１図　土気地区遺跡群

つ古代寺院の存在を確認している（永沼1986）。荻生道遺跡は、昭和51年の本調査で方形区画溝を伴い２棟が整然と並ぶ掘立柱建物跡を検出した。とくに重要な遺構として2,500㎡を保存することとなり、昭和54年３月２日付で県史跡に指定された（塚原・飛田2004）。その後、建物跡の正確な位置が不明であったため、平成19年度に確認調査を行っている（千葉市教育振興財団2009）。

土気地区では、昭和51年から平成20年にかけて区画整理とゴルフ場開発に伴う大規模な発掘調査を実施している。第１図に示した土気南遺跡群（あすみが丘）、土気東遺跡群（あすみが丘東）、昭和の森遺跡群の３つの遺跡群、あるいはその南側に位置する鹿子遺跡群（東急セブンハンドレッドCC）を含めた４つの遺跡群を土気遺跡群と総称している。土気南遺跡群は33か所の遺跡があり、昭和54年度から平成元年度まで調査を実施して８冊の報告書を刊行している。鐘つき堂遺跡、北河原坂第１遺跡、文六東第１遺跡、文六西第２遺跡の一部は未刊行である。土気東地区は12か所の遺跡があり、平成２年度から20年度まで調査を実施して、報告書１冊と概報１冊を刊行している。黒ハギ遺跡、長塚遺跡、五十石遺跡、上塚遺跡、北河原坂第１遺跡、文六西第２遺跡、宮台遺跡は未刊行である。周辺の遺跡群では、土気城跡と西大野第１遺跡に未刊行の調査がある。

（２）発掘調査

「昭和の森遺跡群」は、昭和の森公園造成事業範囲にかかる遺跡を包括した12遺跡の総称である。造成工事が及ばない３遺跡（小食土廃寺跡・金堀砦跡・枯木台遺跡）以外を調査しており、これまでに以下の報告書を刊行している。今回の報告ですべての調査報告を完了する。

・辰ケ台遺跡S60・61（寺門1989）
・荻生道遺跡S51（塚原・飛田2004）
・荻生道遺跡H18（塚原2009）
・枯木台南遺跡H1・2（菊地1992）※報告書では「枯木台遺跡」
・枯木台南遺跡H17（塚原2009）
・住吉遺跡S61（寺門1989）
・東住吉遺跡S54（田川・高橋1983）
・東住吉遺跡S61（築瀬1989）

このほか、本事業以外で行われた調査がある。

・辰ケ台遺跡S40（川戸1965）
　東金高校考古学クラブによる調査。手書き概報を第２章に転載。
・荻生道遺跡H19（千葉市教育振興財団2009）
　年報にのみ掲載
・黒ハギ遺跡H18（塚原2009）
　土気東遺跡群に属するが南東端部を公園の再整備事業で調査。

所収遺跡の調査の概要や担当者を第１表に示す。

（３）整理作業

出土遺物の水洗・注記については発掘調査後に随時実施した。その他の作業については、令和元年から２か年で実施した。

令和元年度
　分類・記録整理～実測・トレース
　期間　平成31年４月～令和２年３月

担当　西野雅人

令和２年度

挿図・図版作成～刊行、収納用整理

期間　令和２年４月～令和３年３月

担当　西野雅人・岸本高充

第１表　調査一覧

No.	遺跡	調査名	事業	期間	種別	面積	担当	報告書略称	備考
1	金堀背跡		調査歴なし						旧称観ケ台遺跡
2	辰ケ台遺跡								別称観ヶ台貝塚、観ケ谷遺跡
a		S40	学術調査	48.08.07-08.13	学	不明	川戸彰	未	辰ヶ台貝塚。本書で概要報告
b		S55	昭和の森	55.10.20-11.26	本？	3000?	村田六郎太	未	詳細不明。県抄録3000㎡本調査
c		S57	昭和の森	57.09.07-06.30	確	100/10000	横田正美	未	「サイクリングコース」の一部。55年10月にも発掘過知あり
d		S58	昭和の森	58.07.04-07.08、58.07.18-08.06	確	60/500、164/1200	横田正美	未	遺物あるが全体図・台帳のみ
e		S59	昭和の森	59.10.01-10.25	本	150	湖口淳一	未	S58確認範囲の一部本調査。県抄録目次「辰見台貝塚」
f		S60	昭和の森	61.01.06-02.27	本	695	寺門義範	昭和の森60-61	S58確認範囲の一部本調査＋画積は要精認
g		S61	昭和の森	61.10.13-10.16	本	136/750	佐藤順一	昭和の森60-61	
3	屋敷内遺跡								「屋敷ノ内」は誤り
		S56	昭和の森	56.12.01-57.02.03	本	900	横田正美	未	
4	東城楽台遺跡								
a		S56	昭和の森	56.05.25-57.02.27	本	5000	横田正美	未	
b		S57・58	昭和の森	58.02.07-03.31 58.04.18-06.06	本	4900	横田正美	未	4538㎡終了、残りは継続
5	小食土廃寺跡								
		S60	県重要遺跡	60.10.07-11.05	確	800	永沼律朗	県1986	県重要遺跡確認調査（古代寺院跡）
6	荻生遺跡								
		S51-1	昭和の森	51.09.01-51.06.10	確	10000	市川勇	昭和の森Ⅰ	1次
		S51-2	昭和の森	51.11.01-52.01.31	本	10000	市川勇	昭和の森Ⅰ	1次
		S58-1	昭和の森	58.08.07-06.30	確	210/1,400	湖口淳一	昭和の森Ⅰ	2次
		S58-2	昭和の森	58.08.08-09.03	本	500	横田正美	昭和の森Ⅰ	2次
		S62	昭和の森	62.05.20-06.24	本	500	村田六郎太	昭和の森Ⅰ	3次
		H18	昭和の森	19.02.01-03.31	本	552	山下亮介	昭和の森Ⅱ	4次
		H19	市重要遺跡	19.07.05-07.24	確	125	山下亮介	未	5次。周辺圏綿再整備に伴い指定範囲内の追構確認
7	枯木台遺跡								調査歴なし
8	枯木台南遺跡								一部「枯木台」として調査
a		S57	昭和の森	57.07.26-07.30	確	216/1700	横田正美	未	1次確認。「枯木台」
b		S59	昭和の森	59.09.06-09.29	本	160	湖口淳一	未	1次本調査。「枯木台」＝誤り
c		H01	昭和の森	02.03.06	確	20/100	菊地健一	昭和の森H2	2次確認「枯木台」。報告では確認範囲読み取れない
d		H02	昭和の森	02.05.06-05.25	確・本	54／500,187	菊地健一	昭和の森H2	2次確認続き本調査
e		H17	昭和の森	17.11.28-12.07	確・本	28/410.51	山下亮介	昭和の森Ⅱ	3次。確認と住居１軒拡張
9	西平台遺跡								「西平台」「東大滝」「西大滝」
a		S57	昭和の森	57.08.07-06.30	確	1000の一部	横田正美	未	「サイクリングコース遺跡」の一部。旧称「西平台」「西大滝」
b		S59	昭和の森	59.09.03-09.05	確	40/100	湖口淳一	未	旧称「大滝」
10	住吉遺跡								
a		S58	昭和の森	58.09.05-11.19	確	1800/17000	横田正美・湖口淳一	未	A区の大半
b		S59-A	昭和の森	59.10.26-60.01.25	本	310/1500	湖口淳一	未	A区の西端
c		S59-B	昭和の森	59.10.26-60.01.25	確	1340/23000	湖口淳一	未	B地区全体
d		S61	昭和の森	61.08.06-08.30	本	790	菜瀬裕一	昭和の森60-61	B地区の一部
11	東住吉遺跡								
a		S53	昭和の森	54.02.05-3.07	確	1750	武田宗久	一部未	抄録記載の縄文早期遺構・遺物の報告が未了
b		S54	昭和の森	54.10.29-11.30	本	800	山本勇・田川良	市文化財調査報告6	「昭和54年度文化課事業報告」に前年度確認範囲の本調査の記載あり
c		S61	昭和の森	61.07.10-08.07	本	120	菜瀬裕一	昭和の森60-61	
12	東住吉南遺跡								
		S57	昭和の森	57.04.19-58.02.05	確	8900/16000	横田正美	未	計画変更により1400㎡本調査→確認のみに変更。年度事業報告では約9,600㎡

第２表　遺構一覧

No.	遺跡名	調査名	遺構種	現地No.	新No.	時期1	時期2	報告	備考
02	辰ケ台	S59/S60	住居	1号住居	1号住居	古代	08C初	○	報済、S59分含め再録
02	辰ケ台	S59/S60	住居	2号住居	2号住居	縄文前期	関山	○	一部S60来報告、旧
02	辰ケ台	S60	住居	3号住居	3号住居	奈良・平安		済	
02	辰ケ台	S60	住居	4号住居	4号住居	奈良・平安		済	
02	辰ケ台	S60	住居	5号住居	5号住居	奈良・平安		済	
02	辰ケ台	S60	住居	6号住居	6号住居	縄文前期	関山	済	
02	辰ケ台	S60	住居	7号住居	7号住居	縄文前期	関山	済	大型住居、炭化クルミ出土
02	辰ケ台	S60	住居	8号住居	8号住居	縄文前期	関山	済	
02	辰ケ台	S60	住居	9号住居	9号住居	奈良・平安		済	
02	辰ケ台	S60	住居	10号住居	10号住居	縄文前期	関山	済	
02	辰ケ台	S60	住居	11号住居	11号住居	奈良・平安		済	
02	辰ケ台	S60	住居	12号住居	12号住居	奈良・平安		済	
02	辰ケ台	S60	住居	13号住居	13号住居	縄文前期	関山	済	
02	辰ケ台	S60	住居	14号住居	14号住居	縄文前期	関山	済	貝層あり
02	辰ケ台	S60	住居	15号住居	15号住居	縄文前期	関山	済	
02	辰ケ台	S60	住居	16号住居	16号住居	縄文前期	関山	済	確認のみ
02	辰ケ台	S60	住居	17号住居	17号住居	縄文前期	関山	済	確認のみ
02	辰ケ台	S60	住居	18号住居	18号住居	縄文前期	関山	済	確認のみ
02	辰ケ台	S55	住居	S55-1住	19号住居	古墳～古代	07C末-08C初	○	
02	辰ケ台	S55	住居	S55-2住	—	奈良・平安		—	断面図のみ、図載外
02	辰ケ台	S55	住居	S59-3住	20号住居	縄文前期	関山	○	
02	辰ケ台	S57	住居	H1	—	平安時代		—	確認調査のみ
02	辰ケ台	S57	住居	J1	—	縄文前期	関山	—	確認調査のみ
02	辰ケ台	S58	住居	関山住居1	—	縄文前期	関山	—	確認調査のみ
02	辰ケ台	S58	住居	関山住居2	—	縄文前期	関山	—	確認調査のみ
02	辰ケ台	S58	住居	土師住居1	—	古代		—	確認調査のみ
02	辰ケ台	S58	住居	土師住居2	—	古代		—	確認調査のみ
02	辰ケ台	S58	住居	土師住居3	—	古代		—	確認調査のみ
02	辰ケ台	S60	土坑	1号土坑	1号土坑	縄文		済	
02	辰ケ台	S60	土坑	2号土坑	2号土坑	古代		済	
02	辰ケ台	S60	土坑	3号土坑	3号土坑	縄文		済	
02	辰ケ台	S60	土坑	4号土坑	4号土坑	縄文		済	
02	辰ケ台	S60	土坑	5号土坑	5号土坑	縄文		済	陥し穴
02	辰ケ台	S60	土坑	6号土坑	6号土坑	縄文		済	陥し穴
02	辰ケ台	S60	土坑	7号土坑	7号土坑	縄文		済	
02	辰ケ台	S60	土坑	8号土坑	8号土坑	縄文		済	
02	辰ケ台	S60	土坑	9号土坑	9号土坑	古代		済	
02	辰ケ台	S60	土坑	10号土坑	10号土坑	縄文		済	陥し穴
02	辰ケ台	S60	土坑	11号土坑	11号土坑	縄文		済	
02	辰ケ台	S60	土坑	12号土坑	12号土坑	縄文		済	陥し穴
02	辰ケ台	S59/S60	溝	1号溝	1号溝	中世以降		○	報済、S59分含め再録
02	辰ケ台	S59/S60	溝	2号溝	2号溝	不明		済	
02	辰ケ台	S57	溝	溝1～4	—	不明		—	確認調査のみ
03	屋敷内	S56	住居	1号住居	1号住居	古代	07C末-08C初	○	
03	屋敷内	S56	住居	2号住居	2号住居	奈良・平安	08C後-9C	○	
03	屋敷内	S56	住居	3号住居	3号住居	奈良・平安	08C後-9C前	○	
03	屋敷内	S56	住居	4号住居	4号住居	奈良・平安	08C後	○	
03	屋敷内	S56	住居	5号住居	5号住居	奈良・平安	08C後	○	
03	屋敷内	S56	住居	6号住居	6号住居	古代	07C末-08C初	○	
03	屋敷内	S56	住居	7号住居	7号住居	奈良・平安	08C	○	
03	屋敷内	S56	住居	8号住居	8号住居	奈良・平安	08C後-9C	○	
03	屋敷内	S56	住居	9号住居	9号住居	奈良・平安	08C後-9C	○	
03	屋敷内	S56	住居	10号住居	10号住居	奈良・平安	09C後	○	
03	屋敷内	S56	住居	11号住居	11号住居	奈良・平安	平安	○	
03	屋敷内	S56	住居	12号住居	12号住居	奈良・平安	08C後	○	
03	屋敷内	S56	住居	13号住居	13号住居	奈良・平安	08C後	○	
03	屋敷内	S56	住居	14号住居	14号住居	奈良・平安	平安	○	
03	屋敷内	S56	住居	15号住居	15号住居	奈良・平安	平安	○	
03	屋敷内	S56	住居	16号住居	16号住居	奈良・平安	08C-9C	○	
03	屋敷内	S56	住居	17号住居	17号住居	奈良・平安	平安	○	
03	屋敷内	S56	住居	18号住居	18号住居	奈良・平安	平安	○	

No.	遺跡名	調査名	遺構種	現地No.	新No.	時期1	時期2	報告	備考
03	屋敷内	S56	住居	19号住居	19号住居	奈良・平安	08C後	○	
03	屋敷内	S56	住居	20号住居	20号住居	奈良・平安	08C後~9C	○	
04	東城楽台	S56	古墳	1号墳	1号墳	古墳	07C	○	二重周溝主体部一部遺存
04	東城楽台	S56	住居	1号住居	1号住居	奈良・平安	08C後	○	
04	東城楽台	S57・58	住居	2号住居	2号住居	奈良・平安	09C前	○	
04	東城楽台	S57・58	住居	3号住居	3号住居	奈良・平安	09C2-3/4	○	
04	東城楽台	S57・58	住居	4号住居	4号住居	奈良・平安		○	
04	東城楽台	S57・58	住居	5号住居	5号住居	奈良・平安	08C3/4	○	
04	東城楽台	S57・58	住居	6号住居	6号住居	奈良・平安	08C後~9C	○	
04	東城楽台	S57・58	住居	7号住居	7号住居	奈良・平安	08C4/4	○	
04	東城楽台	S57・58	掘立柱	1号掘立	1号建物	奈良・平安		○	
04	東城楽台	S57・58	掘立柱	2号掘立	2号建物	奈良・平安		○	
04	東城楽台	S56	土坑	1号土坑	1号土坑	不明		○	
04	東城楽台	S57・58	溝	1号溝	1号溝	中・近世		○	
04	東城楽台	S57・58	溝	2号溝	2号溝	中・近世		○	
04	東城楽台	S57・58	溝	3号溝	3号溝	中・近世	近世	○	
05	小食土廃寺跡	S60	基壇	基壇	基壇	奈良・平安		済	
05	小食土廃寺跡	S60	溝	1号溝	1号溝	奈良・平安		済	
05	小食土廃寺跡	S60	掘立柱	北側掘立柱群	北側建物群	奈良・平安		済	
05	小食土廃寺跡	S60	掘立柱	西側掘立柱群	西側建物群	奈良・平安		済	
05	小食土廃寺跡	S60	住居	1号住居	1号住居	奈良・平安	09C前	済	
06	荻生道	S51	古墳	1号古墳	1号墳	古墳後期		済	
06	荻生道	S51	古墳	2号古墳	2号墳	古墳後期		済	
06	荻生道	S51	古墳	3号古墳	3号墳	古墳後期		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	1号掘立	1号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	2号掘立	2号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	3号掘立	3号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	4号掘立	4号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	5号掘立	5号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	6号掘立	6号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	7号掘立	7号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	8号掘立	8号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	9号掘立	9号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	10号掘立	10号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	11号掘立	11号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	12号掘立	12号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	13号掘立	13号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	14号掘立	14号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	15号掘立	15号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	16号掘立	16号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	掘立柱	17号掘立	17号建物	奈良・平安	08C後	済	
06	荻生道	S51	掘立柱	18号掘立	18号建物	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	1号住居	1号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	2号住居	2号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	3号住居	3号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	4号住居	4号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	5号住居	5号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	8号住居	8号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	9号住居	9号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	10号住居	10号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	11号住居	11号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	12号住居	12号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	13号住居	13号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	14号住居	14号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	15号住居	15号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	16号住居	16号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	17号住居	17号住居	奈良・平安		済	2軒重複or建て替え
06	荻生道	S51	住居	18号住居	18号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	19号住居	19号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	20号住居	20号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	21号住居	21号住居	奈良・平安		済	
06	荻生道	S51	住居	22号住居	22号住居	奈良・平安		済	

No.	遺跡名	調査名	遺構種	現地No.	新No.	時期1	時期2	報告	備考
06	荻生遺	S51	住居	23号住居	23号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	24号住居	24号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	25号住居	25号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	26号住居	26号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	27号住居	27号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	28号住居	28号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	29号住居	29号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	30号住居	30号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	31号住居	31号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	32号住居	32号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	33号住居	33号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	34号住居	34号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	35号住居	35号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	36号住居	36号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	37号住居	37号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	38号住居	38号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	39号住居	39号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	40号住居	40号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	41号住居	41号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	42号住居	42号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	43号住居	43号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	44号住居	44号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	45号住居	45号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	46号住居	46号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	47号住居	47号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	48号住居	48号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	49号住居	49号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	50号住居	50号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	51号住居	51号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	52号住居	52号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	53号住居	53号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	54号住居	54号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	55号住居	55号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	56号住居	56号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	57号住居	57号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	58号住居	58号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	59号住居	59号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	60号住居	60号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	61号住居	61号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	62号住居	62号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	63-A号住居	63-A号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	63-B号住居	63-B号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	64号住居	64号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	65号住居	65号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	66号住居	66号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	67号住居	67号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	68号住居	68号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	69号住居	69号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	70号住居	70号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	71号住居	71号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	72号住居	72号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	73号住居	73号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	74号住居	74号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	75号住居	75号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	76号住居	76号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	77号住居	77号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	78号住居	78号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	79号住居	79号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	80号住居	80号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	81号住居	81号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	住居	82号住居	82号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	土坑	1号土坑	1号土坑	奈良・平安		済	

No.	遺跡名	調査名	遺構種	現地No.	新No.	時期1	時期2	報告	備考
06	荻生遺	S51	土坑	2号土坑	2号土坑	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S51	土坑	3号土坑	3号土坑	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S58	溝	1号溝	1号溝	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S62	古墳	4号古墳	4号墳	古墳後期		済	
06	荻生遺	S62	住居	83号住居	83号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S62	住居	84号住居	84号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	S62	土坑	4号土坑	4号土坑	縄文時代		済	溝型陥し穴
06	荻生遺	S62	古墳	5号古墳	5号墳	古墳後期		済	
06	荻生遺	S62	古墳	6号古墳	6号墳	古墳後期		済	
06	荻生遺	H19	住居	85号住居	85号住居	奈良・平安		済	
06	荻生遺	H19	住居	86号住居	86号住居	奈良・平安	07末-8初	済	
06	荻生遺	H19	住居	87号住居	87号住居	奈良・平安	08C後	済	
06	荻生遺	H19	住居	88号住居	88号住居	奈良・平安	08C後	済	
06	荻生遺	H19	住居	89号住居	89号住居	奈良・平安	08C	済	
06	荻生遺	H19	住居	90号住居	90号住居	奈良・平安	09C	済	
06	荻生遺	H19	住居	91号住居	91号住居	奈良・平安	09C前	済	
06	荻生遺	H19	住居	92号住居	92号住居	奈良・平安	08C	済	
06	荻生遺	H19	住居	93号住居	93号住居	奈良・平安	09C前	済	
06	荻生遺	H19	住居	94号住居	94号住居	奈良・平安	08C後	済	
06	荻生遺	H19	溝	2号溝	2号溝	奈良・平安		済	2-3号は道側溝
06	荻生遺	H19	溝	3号溝	3号溝	奈良・平安		済	2-3号は道側溝
06	荻生遺	H19	溝	4号溝	4号溝	奈良・平安		済	
06	荻生遺	H19	溝	5号溝	5号溝	奈良・平安		済	
06	荻生遺	H19	土坑	5号土坑	5号土坑	縄文		済	楕円型陥し穴
08	柏木台南	S59	住居	1号住居	1号住居	奈良・平安	07末-8初	○	
08	柏木台南	S59	住居	2号住居	2号住居	奈良・平安		－	確認のみ
08	柏木台南	S59	住居	3号住居	3号住居	奈良・平安	09C	－	確認のみ
08	柏木台南	S59	住居	4号住居	4号住居	奈良・平安		－	確認のみ
08	柏木台南	H01/02	住居	1号住居	5号住居	奈良・平安	08C初	済	既報告で1号、5号に訂正
08	柏木台南	H17	住居	1号住居	6号住居	奈良・平安	平安	済	既報告で6号
08	柏木台南	H01/02	古墳	1号古墳	1号墳	古墳		済	
08	柏木台南	S59	溝	1号溝	1号溝	中・近世	中世以降	○	
10	住吉	S61	住居	1号住居	1号住居	縄文前期		済	
10	住吉	S61	土坑	1号土坑	1号土坑	縄文		済	
10	住吉	S61	土坑	2号土坑	2号土坑	縄文		済	
10	住吉	S61	土坑	3号土坑	3号土坑	縄文		済	
10	住吉	S61	土坑	4号土坑	4号土坑	不明		済	
10	住吉	S61	土坑	5号土坑	5号土坑	縄文		済	
10	住吉	S61	土坑	6号土坑	6号土坑	縄文		済	
10	住吉	S61	土坑	7号土坑	7号土坑	不明		済	
10	住吉	S61	土坑	8号土坑	8号土坑	不明		済	
10	住吉	S61	土坑	9号土坑	9号土坑	縄文		済	
10	住吉	S61	土坑	10号土坑	10号土坑	不明		済	
10	住吉	S61	土坑	11号土坑	11号土坑	不明		済	
10	住吉	S61	土坑	12号土坑	12号土坑	縄文		済	
10	住吉	S61	土坑	13号土坑	13号土坑	縄文前期		済	
10	住吉	S61	土坑	14号土坑	14号土坑	不明		済	
10	住吉	S61	土坑	15号土坑	15号土坑	縄文		済	
10	住吉	S61	溝	1号溝	1号溝	中・近世		済	
11	東住吉	S54	住居	1号住居	1号住居	奈良・平安	平安	済	
11	東住吉	S61	住居	1号住居	2号住居	奈良・平安	平安	済	
12	東住吉南	S57	住居	1号住居	1号住居	奈良・平安	08C後	○	
12	東住吉南	S57	住居	2号住居	2号住居	奈良・平安		－	確認のみ
12	東住吉南	S57	住居	3号住居	3号住居	奈良・平安		－	確認のみ
12	東住吉南	S57	住居	4号住居	4号住居	奈良・平安		－	確認のみ
12	東住吉南	S57	住居	5号住居	5号住居	奈良・平安	08C1/4	○	
12	東住吉南	S57	住居	6号住居	6号住居	奈良・平安		－	確認のみ
12	東住吉南	S57	住居	7号住居	7号住居	奈良・平安	10C前	○	
12	東住吉南	S57	住居	8号住居	8号住居	奈良・平安	09C末-10初	○	
12	東住吉南	S57	建物跡	1号建物	1号建物	奈良・平安	平安	○	
12	東住吉南	S57	建物跡	2号建物	2号建物	奈良・平安	平安	○	
12	東住吉南	S57	建物跡	3号建物	3号建物	奈良・平安	平安	○	
12	東住吉南	S57	建物跡	4号建物	4号建物	奈良・平安	09C後-10前	○	

2　整理作業の方法

（1）全体

本報告書は昭和の森造成に伴う発掘調査事業の最終報告となるため、これまで報告されていない調査と、整理対象から漏れた作業が行われていない遺物を洗い出し、整理・報告対象を選定した。必要なものは既刊分の内容や図を引用・採録した。遺構番号は既刊分も含めて遺跡ごとに通し番号を与えた。表２は全体の遺構一覧であり、本書で扱う遺構に○をつけた。確認調査のみの場合は原則として遺物を掲載する場に番号を付けた。出土遺物は複数の調査区がある場合でも遺跡ごとにまとめ、数量に応じて時代・種類ごとに収納した。印刷費用の都合により、掲載遺物の属性表はDVDに付表として収録した。写真図版はモノクロ印刷としたが、DVDにはカラー写真を収録した。

（2）縄文土器

７遺跡出土の7,035点について、点数が少ない場合は遺跡や調査年次ごとに一括し、点数が多い場合は遺構やグリッドごとに分類・集計を行った（付表2-2）。縄文のみ、沈線のみ、無文など分類できないものは「無文等」にまとめ、有文については以下の基準で集計し箱に収納した。分類群が連続しないのは作業の便宜のため汎用的に利用しているからである。なお、弥生土器が２点含まれていた。図・写真を掲載したのは279点であり、属性は付表2-1に示した。

１群：燃糸文土器、２群：沈線文土器、３群：条痕文土器、４群：羽状縄文系土器、
５群：浮島・興津式系・諸磯式系土器、６群：前期末～中期初頭の土器、８群：阿玉台・勝坂式土器、
10群：加曽利E式土器、12群：称名寺式土器、14群：堀之内式土器、15群：加曽利B式土器、
17群：後期安行式土器、18～21群：縄文晩期土器

（3）古墳時代から平安時代の土器

５遺跡出土の9,689点のうち、特徴的なものや遺構の時期推定に必要な604点を抽出し、図と写真を掲載した。掲載資料の属性は付表4-1に、遺構等ごとの破片数は付表4-2に示した。土師器と須恵器の判別については、ロクロ成形を行い、焼き締まりが精緻で胎土の色調が灰色～黒のものを須恵器としたが、全てを満たさなくても器種などを考慮し判断したものもある。ふすべ焼土器、ロクロ土師器などの土師器の細分については判別が困難であるため行わなかったが、ロクロ土師器は付表の備考欄に記した。

（4）中・近世の土器

941点を観察し72点を掲載した。観察と記載及び第11章３まとめの記載を菅谷智也子氏に依頼した。

（5）土器以外の遺物

基本的に全点を掲載資料として観察を行い、時代・種類ごとに付表に提示した。ただし、礫は点数と重量、近世以降の瓦は点数のみを集計して提示した。必要に応じて一部を図化・写真掲載した。主体となるのは縄文時代の資料で、石器411点、石製品２点の全点を掲載した。土製品は出土していない。叩き割り・潰し、突き砕き・潰し、擦り潰し等に複合的に使われた礫石器は磨石類とした。使用痕の略号は（西野・米倉他2017）の方法によった。なお、下層の調査はしていないが、遺構や縄文包含層から出土した旧石器ないし縄文時代草創期の石器21点を縄文時代の部分に掲載した。

3　遺跡群と各遺跡の概要

（1）遺跡群周辺の地理

千葉市は北西から南東に29.3㎞に及ぶ広い市域をもつが、土気地区はその南東端にあって九十九里浜の南部にある大網白里市に隣接している。第２図のように房総の三大水系が交わる特別な場所である。水系

を分かつ分水嶺は尾根上の自然道として長く機能していた。日光・足尾山麓から土気地区につながる「下野－北総回廊」と、房総丘陵と下総台地をつなぐ「南総－北総回廊」と呼ばれる二つの自然道が交差するのが昭和の森である（第２図右下・第３図）。第３図の右側に広がる広い谷が九十九里水系であり、左下に広がる樹枝状の谷が東京湾に注ぐ村田川水系、左上の樹枝状の谷は印旛沼から太平洋につながる鹿島川水系の谷である。また、第２図のように下総台地がもっとも東西にくびれる位置にあたることから、土気－生実間の尾根は東京湾側と九十九里側を最短で結ぶ陸路であり、村田川は東から西への物流に最適な水路であった。第４図でみると、二つの回廊の交差点は辰ケ台遺跡にあって、ここを起点にして小食土廃寺跡と荻生遺遺跡の間、長塚遺跡と上塚遺跡の間を抜けるのが下野－北総回廊である。標高は100mに及び、下総台地の最高地点となっている。東側は房総丘陵の北端部にあたり、海蝕崖に接している。「土気」地名の由来について、「峠」から転訛したという説があるが、まさにそう呼ぶに相応しい地形と言える。この地名については、茂原市藻原寺所蔵の「仏像伽藍記」の貞和２年（1346）の記事に「度解」「土解」の表記があり（佐藤2008）、千葉県所蔵の本寿寺文書「徳川家康朱印状（折紙）」には、あすみが丘東１丁目に現存する本寿寺に充てた天正19年（1591）の朱印状に現在と同じ「土気」の表記がみられる。名称は中世以前から存在したことがわかる。

以上のように内陸的な性格がつよいが、縄文時代早期後葉から前期前半には海進の影響によって海が近接していた。辰ケ台遺跡から出土した貝類は、九十九里海岸の外洋と小さな内湾の干潟で採取されたものとみられる。

（２）遺跡群と周辺の遺跡

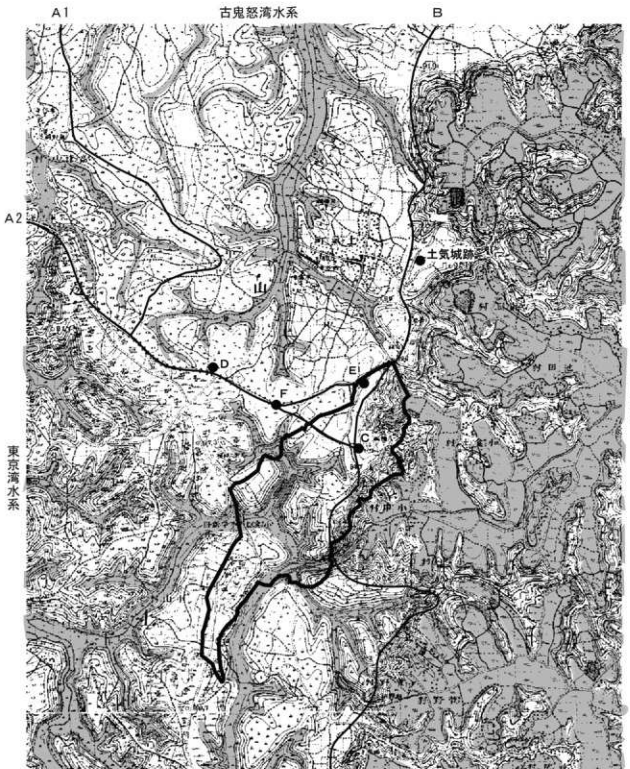
あすみが丘とあすみが丘東の開発範囲は東西・南北とも約３kmに及んでおり、広大な範囲を面的に調査したことによって、独自性のつよい地理・地形を活かした歴史の展開が明らかになっている。とくに縄文文化の幕開け～前半期の展開、古代上総国の経営基盤～武士の時代の幕開けに関する資料が豊富である点が特筆される。本事業の調査は確認調査が多く、遺跡の内容は未だ不明な点が多いが、広域の調査によって土地利用の時期的な傾向が見えてきた。

旧石器時代　下総台地は野生動物の宝庫であり、近世まで優秀な狩場として知られていた。土気地区は、野生動物の移動ルートとなった二つの自然道が交わる枢要の地であった。当事業ではローム層の調査を実施していないため実態は不明であるが、周辺遺跡群の成果からみて地下に数多くの遺跡が保存されているものと考えられる。特筆すべき資料として、弥三郎第２遺跡出土の尖頭器・加工具、赤坂遺跡第２ブロック出土の尖頭器・掻器・接合資料等、後台遺跡出土の神子柴型片刃石斧、北河原坂第２遺跡出土の細石刃を挙げることができる。

縄文時代　旧石器時代から引き続き狩猟活動が生産と生活の中心であったとみられる縄文早期から前期前葉までの遺跡が多い。早期前葉の撚糸文系土器、中葉の沈線文土器、前期初頭から前葉の花積下層式・関山式土器が充実しており、本書においても多くの資料を追加することができた。住居跡の検出により集落の形成が認められる遺跡も多く（辰ケ台遺跡、住吉遺跡、南河原坂第２遺跡、東台遺跡、小山遺跡）、東台遺跡は17軒の住居跡をもつ集落の全容を知りうる。前期中葉以降は少ないが、文六第１・第２遺跡では浮島・興津・十三菩提式がややまとまって出土している。東京湾沿岸に大型貝塚が形成された中・後期の資料は少ないのが特徴であり、称名寺式・堀之内式・加曽利Ｂ式・晩期終末など、特定の時期に包含層が形成されている。特筆すべき資料としては、小山遺跡出土の初期土偶及び製作関連資料、中鹿子第２遺跡出土の初期土偶（市指定）、坂ノ越遺跡157号土坑出土の早期底部方形土器、東台遺跡出土の二ツ木式土器、文六第２遺跡出土の十三菩提式土器を挙げることができる。

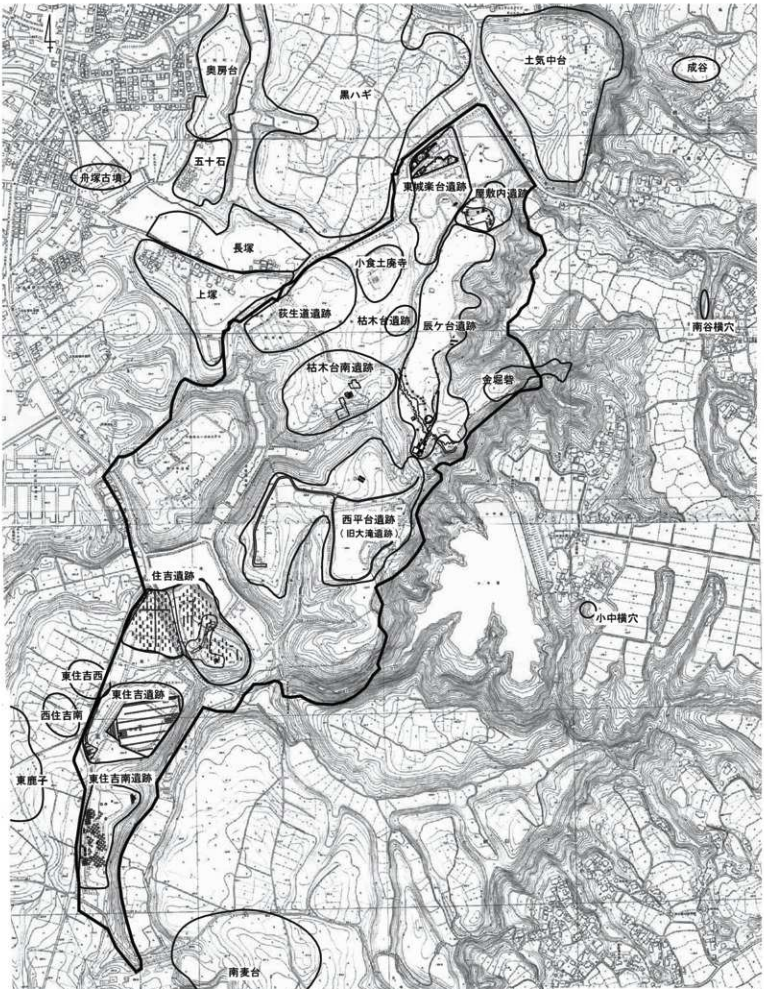
千葉県の地形は沖積低地、下総台地、房総丘陵からなり、水系は東京湾、古鬼怒湾、九十九里の三つに区分される（房総の三大水系）。土気地区は千葉市域の南東端にあり、房総丘陵の北端に近い。3つの水系が集まる唯一の場所であり、下野－北総回廊と南総－北総回廊が交わるのが昭和の森である。

第2図　土気地区の位置



Ａ１は第２図の下野－北総回廊である。Ａ２は東京湾と九十九里間を最短で結ぶ「土気往還」（土気－生実ルート）である。Ｂは南総－北総回廊である。Ａ１とＢが房総の三大水系を分けており、昭和の森のＣ地点で交差していることがわかる。Ｄは舟塚古墳、Ｅは東城楽台１号墳である。東城楽台１号墳は土気－生実ルートがＦ地点で枝分かれして北総方面に向かう道沿いにある。２基の古墳は、生実－土気－武射を結ぶルート沿いに形成された古墳群の盟主古墳である。古墳群はさらに土気城跡との間にある土気中台遺跡に続いている。

第３図　土気地区周辺の地形



第４図　昭和の森遺跡群と周辺の遺跡

弥生・古墳時代・飛鳥時代　弥生時代から古墳時代前半期の遺構は発見されておらず、遺物の出土もごく少ない。房総の古墳時代の特徴は11の国造が群雄割拠の呈をなしたことであり、東京湾沿岸の菊間・海上・馬来田・須恵国造は前期から、九十九里沿岸の武射国造は後期から、ヤマト王権の前線基地の役割を担った。この二大勢力に挟まれた千葉市域から土気地区は有力豪族の空白地帯であったが、６世紀後半に集落と中小古墳群が急増する。この地域の開発は、二大勢力を結びつける王権拡大に関わるものであったとみられており、中村恵次は土気地区を「東京湾沿岸と九十九里沿岸地域との中間に位置する両古墳文化の接壌地帯」と表現している（中村1966）。本書に所収した東城楽台１号墳は、舟塚古墳、長塚５号墳に次ぐ規模をもち、横穴式石室をもつ土気古墳群東端の盟主墳に位置づけることができる。なお、東側の丘陵裾には成谷・南谷・小中などの横穴が点在する（第４図）。特筆すべき資料としては舟塚古墳出土の須恵器（早稲田大学所蔵）を挙げることができる。

奈良・平安時代　８世紀後半の上総国分寺造営事業に伴い、上総－下総国境付近に生産遺跡が集中する。土気地区はその東端にあたり、山辺郡域の台地上全域に及ぶ開発集落群の南部に位置していた。古墳時代の開発集落がさらに広大な開発拠点となったものとみられる。本書であつかう小食土廃寺、荻生道遺跡のほかに以下のような遺跡が知られる。

土気南遺跡群には、上総国分寺所用瓦や須恵器を生産し、後に土師器も生産した大規模な窯業生産地の南河原坂窯跡群、土師器・須恵器を生産した坂ノ越遺跡、丘陵頂上の瓦葺建物や細尾根上の集落、鉄・銅の生産遺物や多量の炭化米が発見された鐘つき堂遺跡がある。土気東遺跡群には、住居跡945軒、掘立柱建物跡245棟を検出した土気地区最大の集落であり、中世にも居館を伴う拠点であり続けた黒ハギ遺跡がある。鹿子遺跡群には、建物群が稠密に展開（大規模倉庫や村落内寺院含む）し、多数の墨書土器が出土した中鹿子第２遺跡、南麦台遺跡、砂田中台遺跡がある。南麦台遺跡の大網白里市域からは、「下総国千葉郡千葉郷」の線刻をもつ紡錘車が出土しており、上総国山辺郡と下総国千葉郡との関係を明確に示すものとして貴重である。発掘の成果は、国分寺造営という古代国家の巨大プロジェクトを担う場所としてきわだった繁栄の時代を迎えたことをものがたっている。良好な資料は枚挙に暇がないが、多くの遺跡から出土した仏教関連の文字資料や、五十石遺跡出土の把手付中空円面硯附盤（市指定）、黒ハギ遺跡出土の権を挙げることができる。

中・近世　古代末に房総で反乱を起こした平忠常や、千葉氏の祖・平常兼が土気地区を拠点としていたと伝わるが、確実な史料や発掘成果はなく、酒井氏が土気城を根城としたこと以外、確かなことはわかっていない。この時期の動向を知る手がかりとして、古代から中世まで集落・居館であり続けた黒ハギ遺跡の発掘成果を挙げることができ、なんとか整理・刊行を実現したいところである。土気城は天正３年（1575）に北条軍に攻められ、翌年北条氏の軍門に下り、天正18年（1590）には北条氏とともに滅びることとなった。城跡は宿町と城郭が一体化した中世末期の構造をよく残しており、近くには東上総七里法華の根本道場とした本寿寺がある。

参考文献

◆当事業の既刊調査報告書等

田川良・高橋政充1983「東住吉遺跡」『千葉市文化財調査報告書第６集』

永沼律朗1986『千葉市小食土廃寺確認調査報告書』千葉県文化財センター

寺門義範1989『千葉市辰ケ台・住吉・東住吉遺跡－昭和の森遺跡群昭和60・61年度調査報告書－』

築瀬裕一1989「東住吉遺跡」『千葉市辰ケ台・住吉・東住吉遺跡－昭和の森遺跡群昭和60・61年度調査報告書－』

菊地健一1992『千葉市枯木台遺跡－昭和の森遺跡群平成２年度調査報告書－』

山下亮介1994「土気城跡」『千葉市文化財調査協会年報６－平成４年度－』
塚原勇人・飛田正美2004『千葉市昭和の森遺跡群Ⅰ－荻生道遺跡－』
菊地健一2008『千葉市土気城跡』
塚原勇人2009『千葉市昭和の森遺跡群Ⅱ－荻生道遺跡・枯木台南遺跡・黒ハギ遺跡－』
塚原勇人2012「土気城跡」『埋蔵文化財調査センター年報24』
◆概報・事業関連
川戸彰1965「辰ケ台貝塚について」『東金高等学校考古学クラブ文化祭発表要旨』東金高校考古学クラブ
ライフ計画事務所1980『千葉市昭和の森基本計画』
千葉市教育振興財団2009「荻生道遺跡」『埋蔵文化財調査センター年報21－平成19年度－』
◆縄文時代関連
宍倉昭一郎1974「小食土辰ケ台貝塚」『千葉市史　原始古代中世』千葉市史編纂委員会
石井寛1982「南関東西南部（多摩丘陵以南）」『シンポジウム堀之内式土器資料集』市立市川考古博物館
上守秀明2012「前期前葉土器群における結節回転の意義（其の２）－類例の追加２　土気南遺跡群の事例－」千葉縄文研究５
◆古墳時代
中村恵次1966「千葉県山武郡土気町舟塚古墳の調査」古代48
塚原勇人2009「土気地区の古墳群」『千葉市昭和の森遺跡群Ⅱ－荻生道遺跡・枯木台南遺跡・黒ハギ遺跡－』
◆奈良・平安時代
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
倉田義広1983「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』史館同人
佐久間豊・豊巻幸正・笹生衛1983「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』史館同人
宮内勝巳1983「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』史館同人
佐久間豊1983「斜格子状暗文を有する土師器坏について」史館15
西山克己1984「東国出土の暗文を有する土器(上)－資料紹介－」史館17
西山克己1985「東国出土の暗文を有する土器(下)－東国出土の暗文土器－」史館18
北川恵一1988「「騎東型の甕」の初現と終末について」『沼津市博物館紀要』12沼津市歴史民俗資料館
松村啓司1989「村のくらし」『古代史度元９　古代の都と村』講談社
谷旬・郷堀英司・小林信一他1993『千葉県文化財センター研究紀要14』千葉県文化財センター
松原典明・村田六郎太1996「南河原坂窯跡群本調査報告」『土気南遺跡群Ⅶ』
天野努2001「掘り出された古代の村落」『千葉県の歴史　通史編　古代２』千葉県
白井久美子・田中裕2002「古墳時代から平安時代の土器」『千葉市鷲谷津遺跡』千葉県文化財センター
築瀬裕一2002「ハケ調整の土器群」『千葉市土気東遺跡群Ⅰ－奥房台遺跡・五十石遺跡－』
浅利幸一他2003『上総国分寺台遺跡調査報告書Ⅸ　市原市稲荷台遺跡』市原市教育委員会
長原豆2004「市内出土の瓦塔・瓦堂について」『千葉市越川戸遺跡』
長原豆2005『千葉市居寒台遺跡　平成16年度調査』
栗田則久2007「上総国・下総国における開発－印旛沼西岸・九十九里南部地域の様相－」古代文化59-2
井上喜久男 2015「編年論」『愛知県史 別編 窯業１ 古代 猿投系』愛知県
◆中・近世及びそれ以降
三杉隆敏・榊原昭二1989『陶磁器染付文様事典』柏書房
田川憲1990『上小岩遺跡Ⅱ』上小岩遺跡調査会
中世土器研究会1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
小高春雄1998「土気城跡」『千葉県の歴史　資料編中世１（考古資料）』千葉県
築瀬裕一2002「土気城跡」『図説　房総の城郭』千葉城郭研究会
国立歴史民俗博物館2004『佐倉城跡発掘調査報告』
千葉市立郷土博物館2009『平成21年度企画展　千葉市の戦国時代館跡』
塚原勇人2009『千葉市土気東遺跡群調査概報』
岡田茂弘・柴田龍司他2012『下総臼井城』臼井城跡研究会
塚原勇人2020「中世の焼き物―市内の遺跡を中心に―」令和2年度ちば埋文講座配布資料

第２章　辰ケ台遺跡

１　概要

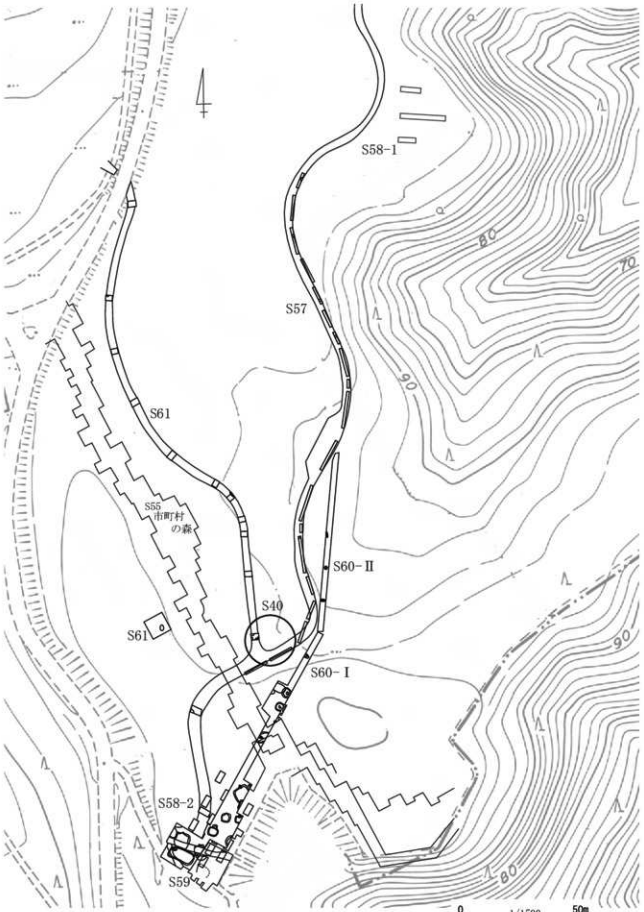
遺跡は昭和の森の北東端、大網白里市との市境にあり、大網白里市の小中貝塚と同一遺跡である。旧字名は土塚・松ノ木・辰ヶ谷にあたる。千葉市側は下総台地の東端、大網白里市側は房総丘陵の北端付近にあたり、標高は98ｍを測る。狭隘な分水嶺は、東京湾水系村田川本谷奥部と九十九里水系金谷郷谷を分けるもので、第１章で記載したように、下総丘陵と下総台地を結ぶ「南総－北総回廊」と、日光・足尾山麓から続く「下野－北総回廊」の交差点でもあった。遺跡は昭和30年代に存在が知られたらしく、昭和40年に発掘調査が行われたことによって、九十九里水系の貝塚として、前期関山式期の貝塚として、きわめて稀有な遺跡であることが周知された。この調査と、当事業の確認調査の成果が、当遺跡に関する過去の情報のすべてといえる。なお、当初は辰ケ台貝塚、小食土辰ケ台貝塚の異称があった。過去の表記にはぶれがあるが、大きい「ケ」で統一した。

昭和40年の調査は事業外ではあるが、未報告のままであったので、参考資料として掲載するとともに、保管されていた縄文土器と動物遺体については、ほかの遺物と同様に整理対象とした。縄文土器の注記はAT-1からAT-6があり、概報でいうＡトレンチ１区～６区にあたる。集計した数量は「最も良好な文化遺物を出したのは２区と３区である」といった記載に概ね符合するので、出土した土器の大半が保管されていたものと考えられる。以下は各年度・調査区の調査概要である。

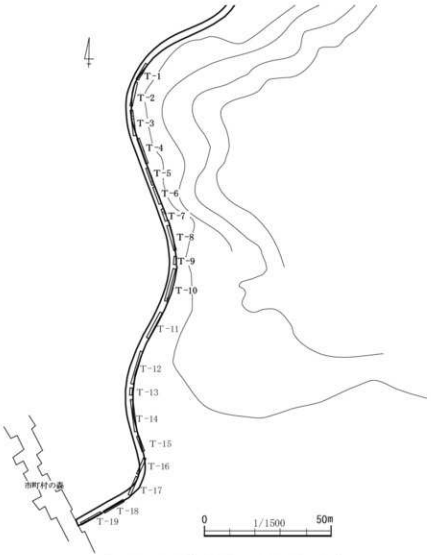
昭和40年（第５図）　８月７日～13日までの７日間、川戸彰氏が担当し、東金高等学校の生徒が参加して実施された。加曽利貝塚博物館所蔵の「武田宗久資料」のなかに川戸氏による２つの手書き原稿があったため、本章の末尾に内容を転載した。千葉市史にも記載がある（宍倉1974）。出土遺物は千葉市で保管していたため整理対象とした。調査地点は手書き原稿の「辰ケ台852・895番地地先」という記載と、昭和10年代の地図を照合した結果、第５図に○を示した付近と判明した。ただし、範囲が重なる61年度の確認調査ではそれとわかる結果が得られていない。調査は、３か所ある貝層散布のうちの一つにかかる幅２ｍ、長さ20ｍのトレンチと、別地点の長さ４ｍのトレンチの２か所で実施している。前者では縄文前期前葉・関山式期の良好な包含層が、後者では厚さ30㎝の混土貝層がみつかっている。出土遺物は土器、石器（磨製石斧・石鏃）、貝類（ハマグリ主体。マガキ・ハイガイ・アサリ多。シオフキ・オキシジミ・ダンベイキサゴ・バイ・ツメタガイ・アラムシロ・ウミニナ類）、動物骨（イノシシ・シカ・魚類）である。

昭和55年（第５図）　県抄録に3,000㎡の本調査とあるもので、別の資料から「市町村の森」造成に伴う調査と判明したが記録類や文書が見当たらず詳細は不明である。調査位置は第５図に示した部分だが、範囲は事業範囲か、実際の掘削範囲かは不明である。図面や注記・遺物台帳には「休憩所Ａ地点」「古墳」「小鍛冶」「園路」「植栽」の記載が見えるが、それらの位置や、調査区画の一部が残されている古代の１号・２号住居跡の位置も不明である。平面図のあるS55－１号は19号住居とし、断面図のみの2号は新番号を与えなかった。

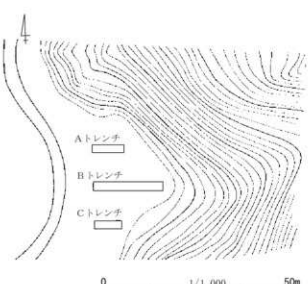
昭和57年（第５・６図、図版３）「サイクリングコース遺跡」として調査。コースは南側の西平台遺跡に連続している。56年10月にも発掘通知が出ているが、別地点であったものか確認できなかった。57年度はT1～T19の19本の確認トレンチから住居跡２（縄文前期関山式期・平安時代各１）、溝４を検出し、確認調査のみで終了した。県抄報では溝６となっており、遺構確認図がもう一つ存在した可能性がある。縄文前期の住居跡はT-19、平安時代の住居跡はT-1で検出している。



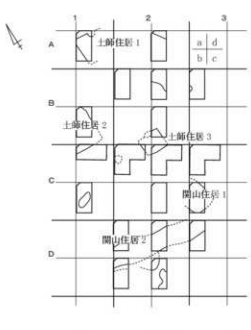
第５図　辰ケ台遺跡調査区（１）全体



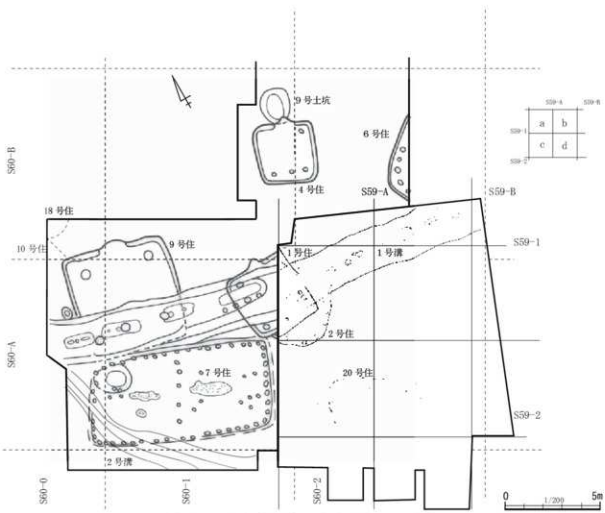
第６図　辰ケ台遺跡調査区（２）昭和57年度



第７図　辰ケ台遺跡調査区（３）昭和58年度



第８図　辰ケ台遺跡調査区（４）昭和58年度

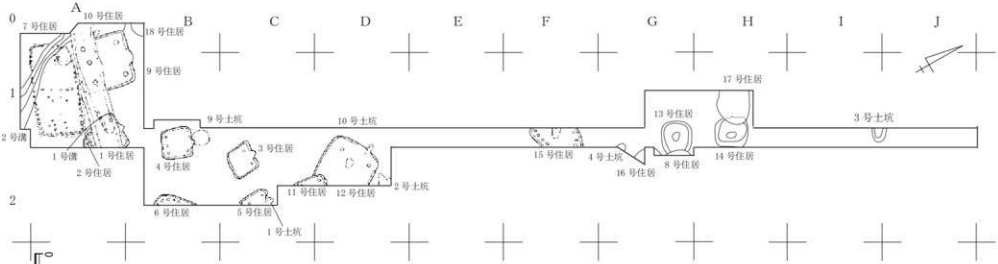


第９図　辰ケ台遺跡調査区（５）昭和59・60年度

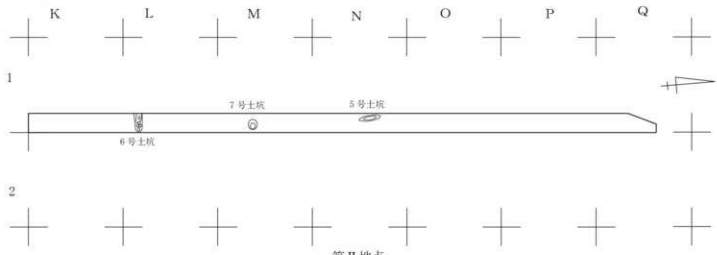
昭和58年-1（第５・７図）　太陽の広場展望園地整備工事に伴い、60㎡/500㎡確認調査を実施した（7/4～7/8）。現図や遺物は残されておらず、記録類は文書添付図とみられる1/200地形図にトレンチを入れたもののみで、複数ある。現図は元々存在しない可能性が高い。トレンチはA～Cの３本で幅２m×33m＝計66㎡。Aトレンチで「住居跡状落ち込み」１か所を検出としている。なお、トレンチが４本入っている図、５本入っている図も存在する。４本のものは計画段階＝実際とは異なるものとみられる。５本のものは実際に入れて遺構を検出しなかったのか、入れなかったのか明確でない。したがって確実な情報として３本のものを採用した。

昭和58年-2（第５・８図、図版４）「レストハウス予定地」の対象面積1,200㎡の確認調査を実施した（7/18～8/6）。19か所、164㎡のトレンチ調査で縄文前期の住居跡２、奈良・平安時代の住居跡3、時期不詳の溝２を検出した。全体図は28か所のトレンチが入ったものもあり、一部遺構の形が入っている。実際には約300㎡調査した可能性があるが、トレンチごとの図も19か所分であるためこれを採用した。縄文土器、石器、剥片、鉄滓が取上げられている。その後、昭和59・60年度に一部の本調査が行われている。

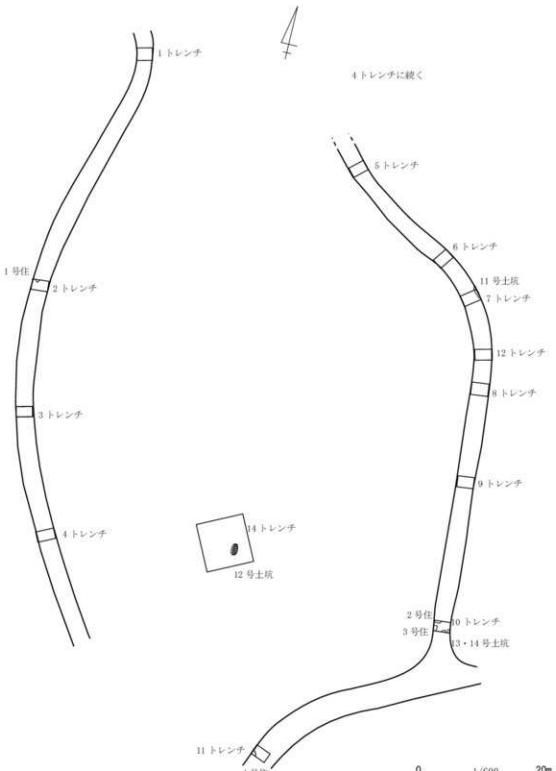
昭和59年（第５・９図）　S58-2の確認結果を受けて、工事の必要な160㎡の本調査を実施した。一部は、このあと述べるS60・61でも調査されており、この部分は刊行済みである。59年度の調査範囲では、住居跡３軒（縄文前期関山期２、奈良・平安１）、溝１条を調査している。当該調査分の遺物は保管されておらず、以下の「調査年不明」の一部である可能性がある。


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
0
1
2
7号住居
10号住居
18号住居
9号住居
2号溝
1号溝
1号住居
2号住居
4号住居
9号土坑
10号土坑
3号住居
6号住居
5号住居
11号住居
12号住居
2号土坑
1号土坑
15号住居
4号土坑
16号住居
13号住居
8号住居
17号住居
14号住居
3号土坑
0
1/400
10m

第Ⅰ地点


K
L
M
N
O
P
Q
1
2
7号土坑
5号土坑
6号土坑

第Ⅱ地点



第11図　辰ケ台遺跡調査区（７）昭和61年度

昭和60・61年（第５・９～11図） S60は、S58-2確認調査範囲の本調査の一部と、確認トレンチ１か所追加、別地点の確認・本調査（？）を実施した。報告書刊行済みであるが（寺門他1989）、未整理の遺物が見つかったため今回報告するとともに、第10・11図に調査結果を再録した。

調査年不明遺物 縄文土器、土師器等計11箱あり。保管遺物の半分を占めており、既刊報告書では扱われていないため、整理対象とした。

２　縄文時代

既刊報告書によって前期前葉・関山式期の集落として知られているが、未報告の遺構を掲載するとともに、集落の全体について簡単に記しておく。遺構外出土も含めて、遺物の大半は関山式土器であり、この時期のみ積極的に土地利用が行われたことが明らかになった。

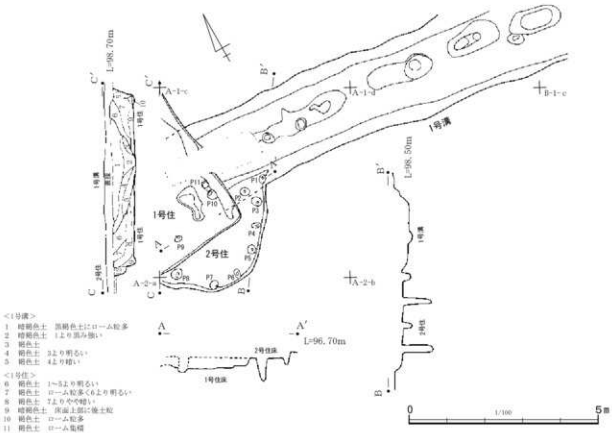
（１）住居跡

２号住居跡（S59・S60、第９・12図、図版３） 長さ・幅不明、深さ0.３mの隅丸長方形の住居跡である。１号住居跡と１号溝によって竪穴の大半が失われている。昭和59年度と60年度調査区に跨っている（第９図）。壁に沿って柱穴が並ぶ。既報告には全体図のみの掲載であったため、図示する予定であったが失念してしまった。P1～P11は当住居跡に伴う可能性があり、壁際のものが多い。深さは21～30cm：P1・４・６・８、31～50cm：P9～11、深いものがP2の58cm、P3の75cm、P5の79cm、P7の52cmである。調査図面により遺物を点上げしたことがわかるが、既報告に遺物の記載はなく、今回実物を確認できなかった。ただし、１号住居跡の未掲載土器には関山式土器が複数混じっているので、前期前葉・関山式期の住居跡としておきたい。

20号住居跡（S59-3号住、第13図、図版３） 推定5.２m×3.２mの隅丸長方形の住居跡である。過去の造成によってハードロームの途中まで削平されており、床面や壁、炉の一部が部分的に遺存していた。ほぼ中央に炉をもち、その周囲の床面残存範囲の一部も焼けており、上屋を焼却した可能性が高い。柱穴は壁際に巡るものが多い。60cm以上の深さをもつP1～P6は主柱穴の可能性がある。P1は119cm、P3は115cmとくに深い。P9（37cm）、P10（74cm）は出入口施設に関わるものか。その他のうちPNoをつけていないものは20cm未満、P7・８・11・12は30～40cm台である。出土遺物はないが、周囲の出土土器と遺構の形状から前期前葉の住居跡とみてよいであろう。

その他の住居跡 既報告で縄文時代前期前半の住居跡として遺構・遺物の記載があるのは、６号・７号・10号・13号～15号の６軒である（寺門他1989）。今回は２号と20号について記載を行った。残りの４軒については調査区の端で検出したため上面の確認にとどめたものであり、今回も出土遺物を確認できなかった。形状をみると、８号：円形か楕円形、16号：楕円形？・17号：楕円形？・18号（円形or楕円形）である（第10図）。情報が乏しく不確実ではあるが、形状から古代の住居跡の可能性は低く、遺構外出土も含めて関山式期以外の土器は少ないので、既報告のとおり関山式期の住居跡に含めておく。なお、58年度－２調査区で確認した住居跡（第８図）のうち2D区検出は２号、3C区検出は６号住居跡であろう。

住居跡の分布 住居跡は1A～2Bと1F～1H付近の２か所に集中している。中央に遺構の空白地帯を想定できるので、住居跡が環状に分布するいわゆる環状集落であった可能性を検討する必要がある。57年度調査区南端付近で住居跡を検出しておらず、遺物も少ないことは否定材料であるが、トレンチを一つしか設けていないため明確な答えは得られていない。いずれにせよ、二つの回廊が交わるこの地に、縄文人はたびたび訪れたが、集落を形成したのは関山式期のみであったことが判明した。

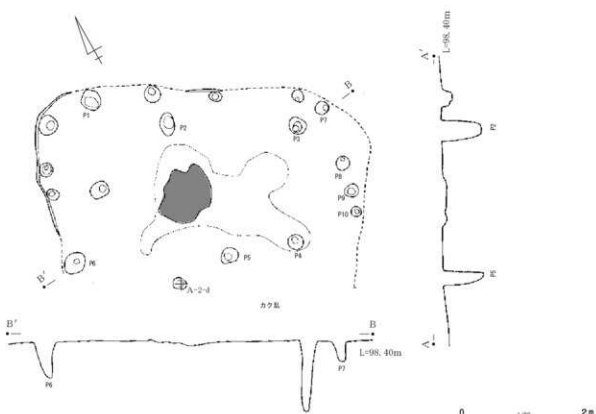


<1号溝>
1 暗褐色土 黒褐色土にローム粒多
2 暗褐色土 1より黒み強い
3 褐色土
4 褐色土 3より明るい
5 褐色土 4より暗い

<1号住>
6 褐色土 1～5より明るい
7 褐色土 ローム粒多く6より明るい
8 褐色土 7よりやや暗い
9 暗褐色土 床面上部に焼土粒
10 褐色土 ローム粒多
11 褐色土 ローム塊

<2号住>
12 明褐色土 やや汚れたローム

第12図　1号・2号住居跡・1号溝



第13図　20号住居跡

（2）縄文土器（第14・15図、図版４～６）

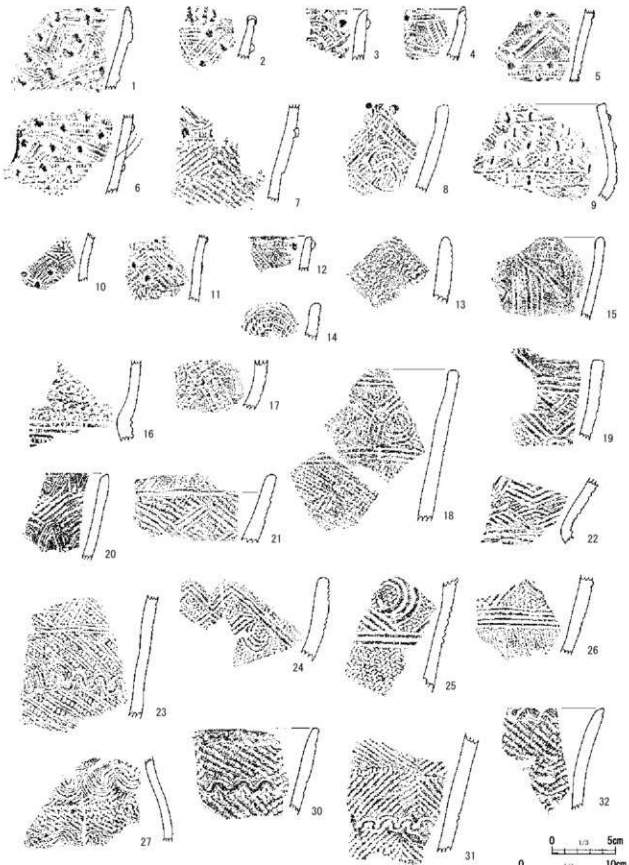
1,731点の縄文土器が出土しており、内訳は早期後葉３、前期前葉1,568、中葉９、後葉15、中期初頭１、前半４、後半９、後期前葉８、晩期前半４、詳細不明110点である。詳細不明を除けば前期前葉・関山式土器が９割を占めて、他の時期は少ない。関山式土器は、昭和40年度調査区で788点（Ａトレンチ２区で337点、次いで３区で172点、５区で107点）、55年度調査区では477点、58年度調査区では303点（3C区で204点と多い）出土している。これをみると、遺構外出土土器が多いのは住居跡を検出した部分と、やや北側のS40年度調査地点である。

図示したのは56点である。１～48は胎土に繊維を含む前期前葉の土器で、二ツ木式から関山Ⅱ式までである。昭和40年は関山式のみであり、二ツ木式は58年の調査で出ている。１～32に主幹文様をもつものを集めた。いずれも深鉢であり、６は片口が付く。１～８は文様帯に地文がなく、半截竹管の内側による梯子状沈線をもつもの。上下を区画し、内部に蕨手状・鋸歯状・山形の文様があり、文様の交点に瘤状貼付文をもつものが多い。１・２は平行沈線間に管内痕が付かない。３～８は管内痕と刻みをもつ。胴部には末端環付縄文や羽状縄文が施文される。２・８には口唇上に角状突起がつく。９～11は文様帯の地文に縄文をもち、格子状・鋸歯状文・瘤状添付文をもつ。12～16は地文を伴わない文様帯に爪形文による梯子状・幾何学状文様をもつもの。12は瘤状添付文をもつ。16は主幹文様が不明だが、括れ部に爪形文による区画をもち、末端環付縄文が多段に施文される。18～32は地文縄文を伴う文様帯に平行沈線によって幾何学文や鋸歯状文・コンパス文・ループ文が描かれるものである。幾何学文は2本の平行沈線で比較的丁寧に施文し（18・19・24～26）、鋸歯文やコンパス文・ループ文は浅く・ラフに施文する（20・21・23・26～32）。地文は斜縄文・羽状縄文（18・20～22・30～32）、異節縄文（19）、異条縄文（23・28・29）、組紐（24～26）、末端環付縄文（27）がある。21は口縁の水平が２段ある。28・29は同一個体の可能性が高く、胴下半がつよく張り出す器形である。以上のうち１～３は二ツ木式、４～17は関山Ⅰ式、18～32は関山Ⅱ式であろう。33～48は関山式の主幹文様をもたないものである。36・37は鉢、39は小形深鉢、そのほかは深鉢である。33～36は口唇直下に無文帯をもつ。33は頸部から口縁が大きく開く深鉢であろう。末端付縄文と羽状縄文の構成が多く、44～47は組紐、43は異節縄文が施される。43は上部にループ文、下部に鋸歯状文がみえる。48は地文をもたず半截竹管の内側による平行沈線で水平区画と鋸歯状文を施す。胎土に繊維を含んでおり、この時期のものであろう。49はフネガイ科の貝殻による刻みをもち、以下に櫛状工具による平行沈線文を施す。浮島式である。50は折り返した大波状口縁をもつ土器であり、51は同一個体の胴部であろう。60年度調査区でも同様のモチーフ・器形の土器が出土している。興津式であろう。52は結節回転文をもつ前期末～中期初頭の土器、53は中期初頭・五領ヶ台式。54～56は加曽利E式で54はEⅠ、55はEⅡ、56はEⅢ式であろう。

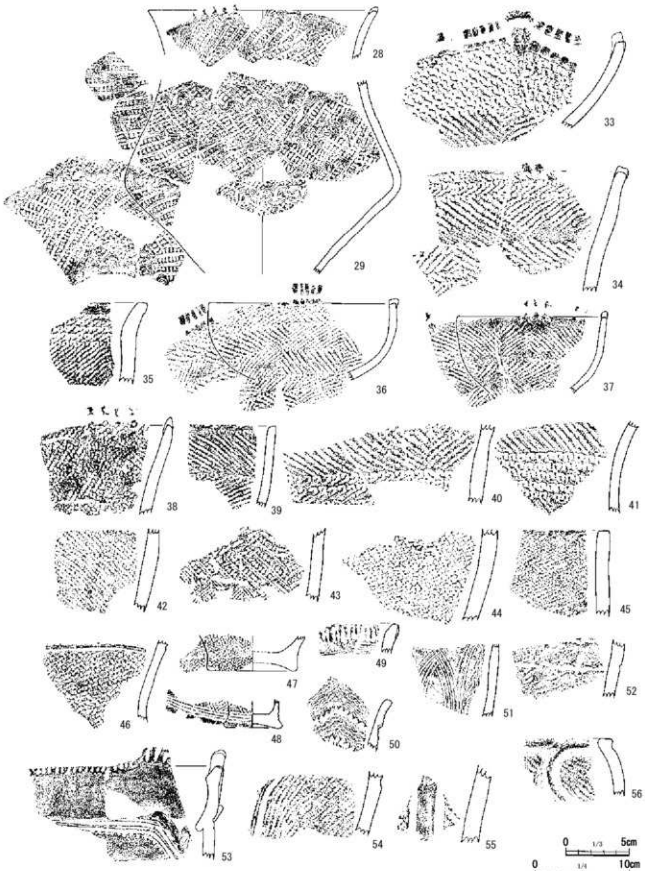
（3）石器（第17図、図版７）

石器90点と礫142点・3.9kgが出土している。点数は多くはないが、関山期の当地域の特徴をある程度示す資料といえよう。石器の内訳は、石鏃６点、石錐２点、打製石斧１点、磨製石斧１点、石皿・台石１点、磨石類５点、器種不明２点、剥片類72点である。このうち磨石類１点と石鏃４点を図示した。

57は角閃岩製の磨石類である。横断面杏仁形の石器が破損した後、両端に粗い剥離を加え、さらに片面のほぼ全体と、片面の一部を研磨している。打製石斧として再利用され、さらに磨石類として敲打・擦りに使われたようである。再加工前の石器は、磨製石斧ないし礫斧が候補となる。住吉遺跡の石器製作資料の主体を占めるのも角閃岩であるが、石材の特徴は異なっている。石鏃のうち、58は凸基形、59～61は凹基形である。石鏃未成品は、剥片類２点、他の石器１点に含めた疑問付きのものを含めて５点である。石



第14図　縄文時代遺物（1）



第15図　縄文時代遺物（2）

鏃・石錐・剥片類の石材をみると、チャート33点、黒曜石32点と拮抗し、黒曜石は信州・霧ケ峰産が多い。チャートは赤色系・青色系・その他があり、板状のものと小礫由来のものが混じる。57は角閃石製の磨石類で、礫斧（磨製石斧）を転用したものとみられる。このほか、コハクの剥片１点が60年度13号住居跡から出土している。既報告にも13号住居跡から剥片の出土が記載されており、未掲載遺物のなかに破砕小片３点が保管されていた。なお、同年度の調査で遺構検出のみ行った17号住居跡からはコハク製の玦状耳飾が出土している。小破片であるが推定径３センチにもなる優品とみられる。九十九里沿岸は中期にも銚子産コハクの流通に関わったとみられ、前期のレとして注目される。なお、旧石器も６点出土している。すべてガラス質黒色安山岩製で、台形様石器１点、石刃２点、剥片３点である。礫は広域から出土していて集中は認められない。

（４）動物遺体

S40調査区で貝類と獣骨が取り上げられている。採取位置・方法は不明であるため、比較分析等には堪えないが簡単に内容を記載して保管対象としておく。

貝類　二枚貝は左右の多い方をとり最小個体数を示すと、湾奥泥底種２種10個体（マガキ９・オキシジミ１）、内湾砂底種３種９個体（アカニシ１・ハマグリ７・アサリ１）、外洋砂底種１種７個体（チョウセンハマグリ７）となる。この内容と手書き概報の記載を比較すると、今回確認できて概報に見られないもの２種（アカニシ、チョウセンハマグリ）、逆に概報にあって今回確認できなかったもの７種（ハイガイ・シオフキ・ダンベイキサゴ・バイ・ツメタガイ・アラムシロ・ウミニナ科）があり、かなりの齟齬がある。

陸生哺乳類　シカの遊離歯１点と、骨片がある。シカまたはイノシシの可能性が高い。当遺跡は東台遺跡とともに九十九里本系ではごく少ない前期の貝塚・集落として貴重である。狩猟好適地に立地する集落として、貝以外に獣骨が採集されていることはきわめて興味深い。当遺跡の東側急崖の下には小中池がある。谷は広く縄文海進により海域が入り込んだ可能性がある。小中池からこの付近の谷を集めた金谷郷谷低地の間に、ハイガイ・マガキが生息する湾奥泥底干潟、ハマグリ・シオフキ・アサリが生息する内湾砂底干潟が存在し、外洋砂底干潟にはチョウセンハマグリ・ダンベイキサゴが生息していたと推定される。こうしたいくつかの海域で貝類を採取していた可能性が高い。

３　奈良・平安時代

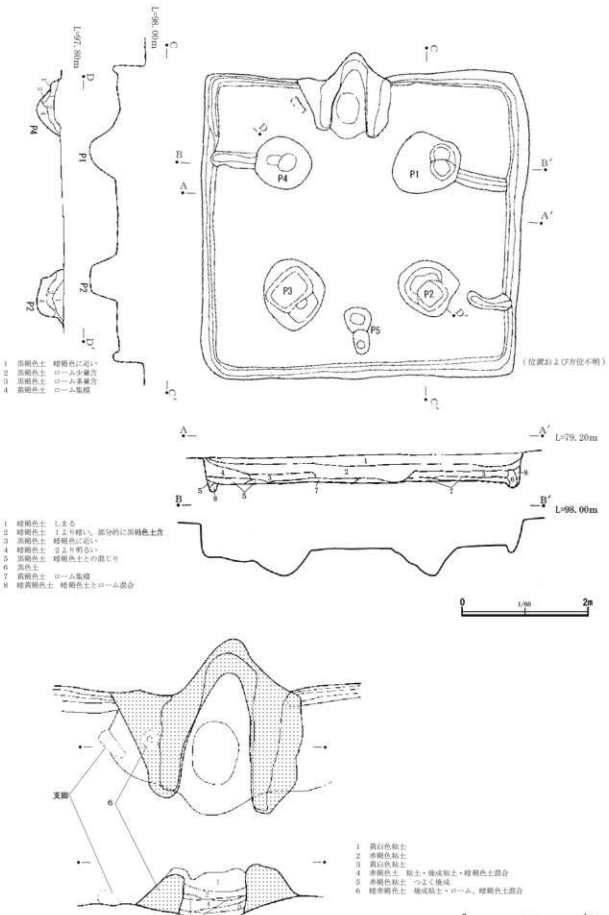
（１）住居跡

１号住居跡（S59・60-1住、図版３）

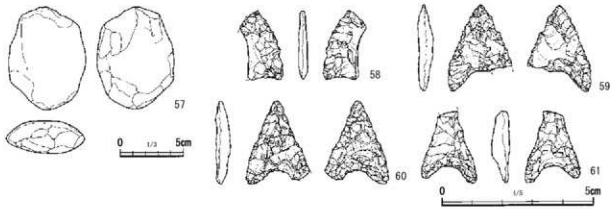
昭和59年調査区と昭和60年調査区にまたがる。60年調査分は報告済みだが、59年調査分は図示されていないため、今回合成して図示予定であったが失念してしまった。一辺3.８mの方形、深さ0.４mの竪穴をもち、覆土の半分以上は１号溝に切られている。周溝がほぼ全周し、カマドは北壁中央に位置する。カマドから支脚と２点の杯が出土している。坏はいずれもロクロ成形ではなく、扁平であることから８世紀初頭のものであり、住居跡の時期も同様であるとする。安山岩製の鉄床石が出土している。鉄床石については遺構外遺物で記載する。

19号住居跡（S55-1住、第16・18図、図版６・７）

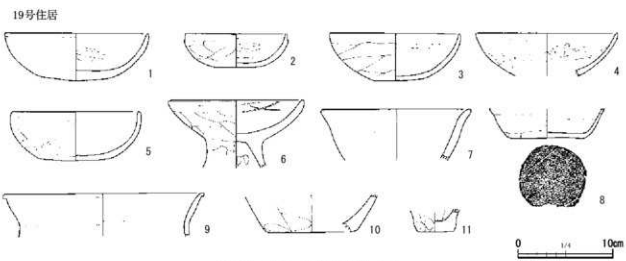
55年度調査区で検出したが位置と方位は不明である。4.８m×5.０mのわずかに横長の方形、深さ0.４mの掘り込みをもつ。壁溝が全周し、主柱穴３本につながる根太溝をもつ。主柱穴P1～P4はいずれも上部が著しく広がっており、柱材を抜去したものとみられる。カマドの東脇には何らかの高まりが記録されており、これと覆土７層は根固め土を掘りだしたローム主体の土であった可能性がある。P5は出入口施設であ


L=97.80m
L=98.00m
P1
P2
P3
P4
P5
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
1 黒褐色土　暗褐色に近い
2 黒褐色土　ローム少量含
3 黒褐色土　ローム多量含
4 黄褐色土　ローム塊
（位置および方位不明）
L=79.20m
1 暗褐色土　しまる
2 暗褐色土　1より暗い、部分的に黒褐色土含
3 黒褐色土　暗褐色に近い
4 暗褐色土　2より明るい
5 黒褐色土　暗褐色土との混じり
6 黒色土
7 黄褐色土　ローム塊
8 暗黄褐色土　暗褐色土とローム混合
0
1/60
2m
支脚
1 黄白色粘土
2 赤褐色粘土
3 黄白色粘土
4 赤褐色土　粘土・焼成粘土・暗褐色土混合
5 赤褐色粘土　やよく焼成
6 暗赤褐色土　焼成粘土・ローム、暗褐色土混合
0
1/30
1m

第16図　19号住居跡



第17図　縄文時代遺物（３）



第18図　奈良・平安時代遺物（１）

ろう。カマドは北東壁のほぼ中央にあり、左袖付近から支脚と高坏(第18図６)が出土している。出土土器は195点で、掲載資料のうち６・７の高坏は飛鳥時代末以前までさかのぼるが、一方で１～５の坏はロクロ形成ではなく、蓋受けを痕跡として残すものであることからいずれも７世紀末～８世紀初頭のものと考えられる。遺構の時期も同様であるとした。

（２）遺構外出土遺物

土器（第19・20図、図版６・７）

454点あり、須恵器が比較的多い。34は南河原坂窯産の須恵器瓦鉢（鉄鉢形土器）である。陶器も７点と多く、30・36は東海産とみられる灰釉陶器である。飛鳥時代から平安時代前半ごろのものである。

瓦塔（第20図、巻頭図版２、図版７）

11点取り上げられている。調査区の判明しない55年度の調査で出土したものとされ、越川戸遺跡の報告のなかで「昭和の森遺跡群内出土瓦塔」として詳細に報告している（長原2004）。本書では概要の記載と４点について実測図の再掲と写真の掲出を行った。45～47は屋蓋部で、45は丸瓦と飛檐垂木、46は丸瓦、隅木、飛檐・地垂木、47は隅木部の表現があり、瓦当面と下面は赤彩されている。48は九輪で筒状の外面に「大」の刻書をもつ。旧図は断面が左右逆転していたため反転して掲載した。ほかに九輪部１点、丸瓦表現を確認できる屋蓋部４点、部位不明の同一とみられる小片２点がある。還元焔焼成で色調は灰色、九輪は屋蓋部より軟質で水洗時に表面が剥離しブラシ目がつき、色調は白味がつよい。製作年代は、屋蓋部

の編年研究から８世紀後葉～９世紀初頭と推定されている。

瓦（付表５）

古代瓦が６点出土している。いずれも平瓦であり、体部凹面に布痕跡をもつ。凸面はナデ調整４点、縄叩き１点、不明１点である。

他の土製品

焼成粘土塊が３点、貝化石をもつ岩塊２点が出土している。いずれも時期不明であるが、古代の可能性が高いとみてここに掲載した。

石器（第20図、図版７）

鉄床石２点と磨石類１点が出土している（図版7-5）。鉄床石は１号住居跡出土の付表5-23と２号住居跡出土の24である。いずれも安山岩製の台石で、敲打された部分に黒色の鉄分が付着、光沢強く下部に被熱赤色化と表面の破損が認められる。２点の質感は酷似しており、同一個体であった可能性がある。磨石類は砂岩の楕円礫を素材としており、焼け礫から転用されている。平面の中央に敲打痕、周縁には敲打または粗い研磨による変形が顕著であり、片側の一部分に広い研磨面がつく使用痕は縄文時代では見ないタイプである。

製鉄関連遺物（付表6-2）

昭和55年調査区（市町村の森）地点で多数出土しているほか、58年度・59年度調査区でも数点出土している。内容は羽口２点、鍛冶滓74点（碗形滓５・炉内滓64・粒状滓１・流動滓１・鉄塊系３）である。55年度調査区では63点・1881.3ｇとまとまっており、注記の内容から、製鉄関連遺物を示す「Fe」番号で点上げされたものが大半を占める。図面等がないため「２号住」から３点出土したこと以外は位置不明である。土器の注記にみられる「小鍛冶」炉またはそれをもつ住居跡が存在した可能性が高いが、遺構や集中の存在について明確な情報は得られなかった。他の調査区からは14点、292.6g出土している。奈良・平安時代の集落で鍛冶が行われたものとみられる。１号・２号住居跡から鉄床石が出土していることから、少なくとも8世紀初頭には鍛冶が行われたであろう。

4　中・近世

（1）溝

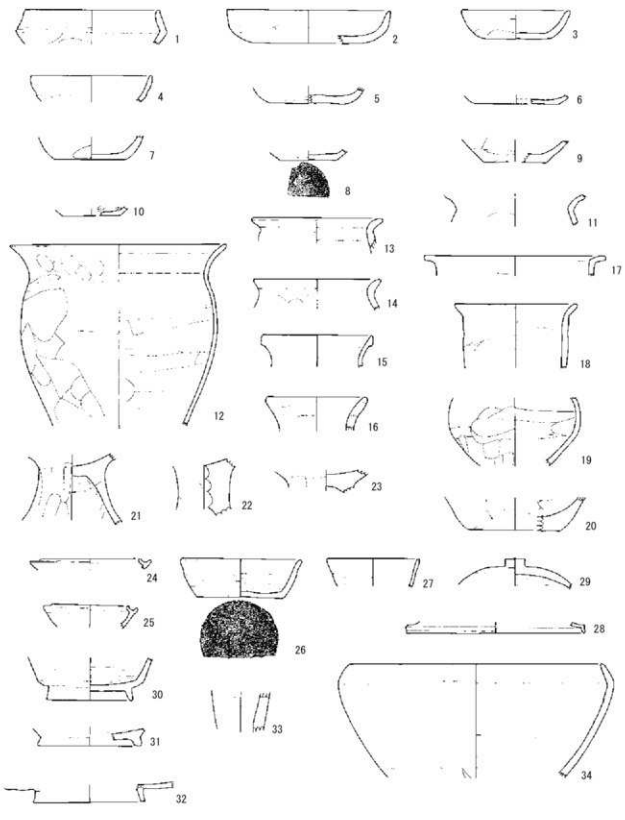
1号溝（第９・13図、図版３）

昭和59年・60年調査区にまたがり、１号・２号住居跡の覆土を切る溝である。60年調査分は報告済みだが、59年分は未掲載であったため再掲する。東西とも調査区外に伸びており、本遺跡がのる台地の東端と、西に入る支谷の谷頭を結ぶ位置にある。幅2.5m、深さは最大0.6mあり、底面は丸みをもつ。底面には小ピット列がある。

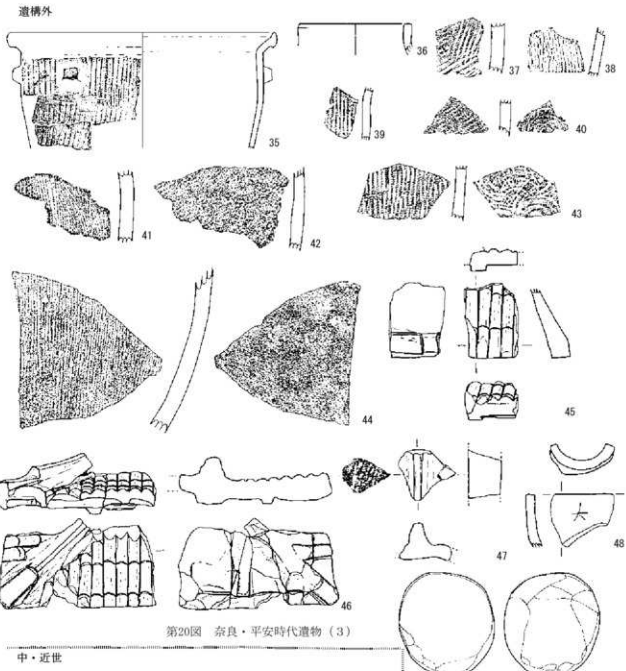
（2）出土遺物（第21図、図版７）

中世末から近世にかけての陶磁器が出土している（第21図、付表７）。１は、瀬戸美濃の天目碗、4は、備前の茶入と思われる破片である。中世末から近世初頭に、本遺跡に関わる人物が茶の湯を嗜んだことが伺える興味深い資料である。同時期の資料では、ほかに、志野釉や灰釉の皿が出土している。５は18世紀前半の肥前陶器で、体部に刷毛で白泥を施した製品、６は三島手の製品である。図示はしなかったが、破片資料の中に、19世紀の大堀相馬(福島県)の土瓶や飯能(埼玉県)の土鍋など、東日本で新しく興った産地の資料がみられた。また、19世紀の瀬戸美濃の磁器製品もみられた。銭貨は、寛永通寶が１点みられた。そのほか中近世～近現代の砥石が15点、瓦が22点出土している。砥石は流紋岩製が多く、付表８－112は

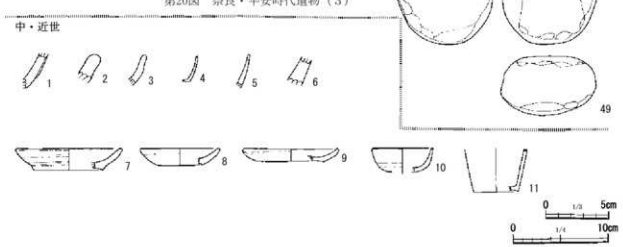
遺構外



第19図　奈良・平安時代遺物（2）



第20図　奈良・平安時代遺物（3）



第21図　中・近世遺物

京都鳴滝産の珪質粘土岩製で、「鳴滝砥石」と呼ばれるブランド品である。

5　昭和40年度調査概要

二つの手書き資料の一部を入力して再掲する。一部現代仮名遣いに改めた。

『東金高等学校考古学クラブ文化祭発表要旨』（昭和35～40）

辰ケ台貝塚について

昭和40年度文化祭

東金高校考古学クラブ顧問　川戸彰

今夏、発掘調査した辰ケ台貝塚は、千葉県山武郡土気町小食土字辰ケ台地籍に縄文式時代前期に属する貝塚である。貝塚は小中池北方背後に迫る標高約95mの平坦な台地の一角に存し、３つの小貝塚よりなる貝塚である。小貝塚がいくつかの点在によって構成される貝塚は前期に通有なタイプを示すものである。発掘調査は、昭和40年８月７日より８月13日迄の６日間に渡って実施された。先ず初め、辰ケ台852番地先の畑地に農道と並行して北西から南東に幅２m、長さ20mのAトレンチを開設し、更にトレンチ北西端より４m㌢つに区切って、１～５区に分ち、発掘を開始した。中途に於いて２区と１区にまたがって住居址の遺構らしきものが現われたので南西側即ち農道側一杯幅１m、長さ５mの拡張区を設け発掘を続けたが、明確な遺構をつかむことができなかった。以上のAトレンチに於いて遺物の出土量の多くを占めた地区は２区を中心とする１区及び３区であった。また発掘調査の承諾を得てある辰ケ台895番地先に幅２m、長さ４mのAトレンチ６区を設定し、発掘したが遺物の出土は皆無に近かった。出土遺物の中、自然遺物には、ハマグリ・カキ・ハイガイ・アサリ・ダンベイキサゴ・バイ・ツメタガイの貝類の他、シカ・イノシシの獣骨、及び魚骨１片などが発見されている。一方、文化遺物には、縄文式前期の関山式土器の破片多数を始め磨製石斧片１、石鏃４を採集することができた。

千葉市小食土町辰ケ台貝塚

1　種類

縄文式前期貝塚

2　発掘の動機及び調査の経過

九十九里沿岸の東金・大網・本納付近の海岸平野には中期以降の石器時代遺跡の存在が知られている。更にさかのぼった前期の遺跡になると、台地に近い東金市山口・本納町橘神社付近に発見例があげられるが、両総用排水の工事や耕地整理の折の偶然的発見だけにその実体は必ずしも明らかではない。

日頃、前期の海進海退問題及び該時期文化の究明を期していたので、先述の前期の低地遺跡と関連させながら台地上ではあるが、将来、煙滅の恐れなしとしない本辰ケ台貝塚をえらび発掘調査を計画した次第である。

発掘調査は、昭和40年８月７日から同月13日までの７日間、川戸が担当者となり、東金高等学校の助力のもと実施した。

3　遺跡の位置

辰ケ台貝塚は小中池湖をもって知られる大網白里町小中部落及び小中湖北方背後の台地に存する。部落から遺跡の所在する台地に出るには急峻な坂道をのぼりかなりの比高をもっている。標高は約90米をはかり、一帯は多少の起伏をのぞいて平坦地が連亙する。尚付近一帯は一部山林の外は畑地に拓かれており本貝塚は小中湖をのぞむ急崖近くの畑地内に占位する。

4　発掘の状態

小中部落から台地にあがり西北方向に道をとって間もなく行くと道路をはさんで畑中に貝類が僅か散布している所が見当るがこれが辰ケ台貝塚である。今回は作物の間をえらんで道路の東側にトレンチを入れて調査をすすめた。

まず有田茂氏所有の畑の道路ぎわに並行させて幅２ｍ×長さ２０ｍ（主軸は北西から南東）のトレンチを設定した。これをＡトレンチとよび４ｍずつ区切って北西側から１区・２区・３区・４区・５区とした。さらに有田氏北隣りの武田治雄氏所有畑に幅２ｍ×４ｍのトレンチを付設し、これを６区とした。

Ａトレンチの１区は貝類が表面に散布し貝層の調査に期待をかけたが生姜をいけるための本地方で俗にいう“むろ”をうがたれた所で殆ど攪乱状態にあり貝層をとらえることが出来なかった。貝層はみられなかったが最も良好な文化遺物を出したのは２区と３区であり、４・５の両区及び6区は殆ど遺物の包含が認められなかった。

Ａトレンチ２～３区における層位及び遺物の出土状態をみると表土下は黒褐色土層がローム層に達するが、表面よりローム層までは45～60㎝をはかり、このうち表面より深さ30～60㎝の所に遺物の包含が多かった。

また、貝層を調査するため、道路の西側、武田氏所有畑地に１ｍ×2.5m範囲の試掘溝を設け、発掘を行った。層位は地表下20㎝で混土貝層となるが、本層の厚さは25～30㎝にてローム層に達する。尚、ボーリング調査であるが、本地点貝塚が径約３ｍくらいの小規模なものである事を知った。

貝相は４×５㎝くらいのハマグリが多く、他に目立った貝類としてはカキ・ハイガイ・アサリがあげられ、魚骨が多かったのに対し、獣骨は極少を記録した。

5　出土遺物

自然遺物　　貝類－ハマグリ・カキ・ハイガイ・アサリ・シオフキ・オキシジミ・ダンベイキサゴ・バイ・ツメタガイ・アラムシロ・ウミニナ。獣類－イノシシ・シカ。その他に魚骨がある。

文化遺物　　土器－関山式土器の破片。石器―磨製石斧片１　石鏃３　同破片２

以上

第３章　屋敷内遺跡

１　概要

事業地北端の村田川の谷を望む標高96～97mの台地上にある。東側は急崖が公園の緑地となっており、小中川の支谷谷頭に至る。西に東城楽台遺跡、南に辰ケ台遺跡が隣接し、村田川を挟んで北側には中台遺跡がある。ただし、本来の遺跡北半部は古くに削平され、現在は第一駐車場となっている。東城楽台とは現代の道で便宜的に区分したものであり、黒ハギ・東城楽台・屋敷内は本来一つの遺跡とみるべきであろう。東西600m、南北600mほどの土気地区最大の平坦地であり、当遺跡は、古代から中世までつながる最大の集落跡の東端にあたる。

既刊の報告書等に示された当遺跡の範囲は誤っており、今回訂正する。これまで辰ケ台遺跡の北端部となっていた部分＝東城楽台遺跡の東側までが当遺跡である（第４図）。遺跡の名称は「屋敷ノ内」「屋敷の内」という表記があったが、小字名の「屋敷内」を採用している。昭和50年代以降、事業地北端部の調査・報告がなかったため、こうした誤りが訂正されないままとなっていた。調査を実施したのは、公園の第１サイクリングセンターと第１売店付近であり、昭和56年12月から57年２月にかけて、900㎡の本調査を実施している（第22図）。５m間隔で１mのセクションベルトを残して内部を掘り下げ、遺構を検出した部分についてベルトを外し、遺構の精査を実施している（図版８）。ただし南東から南西にかけては本調査を実施していない。経緯を確認できなかったが、保存協議が行われ、現状保存の措置が取られたのであろう。調査区は10mのグリッドを採用し、西から東へ１～16、北から南へA～Oと付け、1Hのように表記する。調査範囲にあたるのは８～15、H～Nである。一括取上げの遺物は５mの小グリッドで上げている部分があり、北西→北東→南西→南東の順にａ～ｄと付けている。

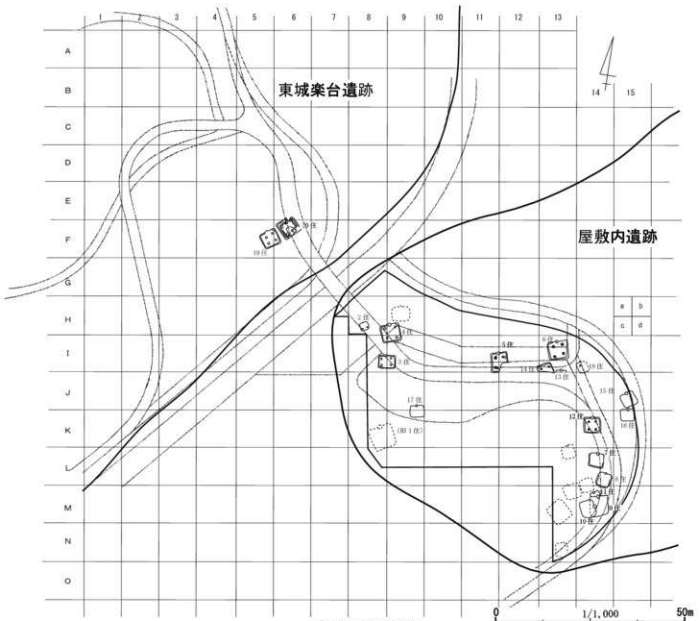
なお、事業範囲の中央や南側は広範囲で削平されており、大規模な集落遺跡の北端部のみ調査した形である。過去の調査歴はないので、現地でつけた住居番号をそのまま採用し、本調査に至らなかった遺構には番号を付けない方針としたが、調査の途中で中断して平面図のない１号住居跡については、取り上げられた遺物を掲載した。注意が必要なのは、当遺跡の56年度調査で検出した19号・20号住居跡は道を挟んだ西側であるので、明らかに東城楽台遺跡に属している（第22図①）。整理作業の終盤でこのことが判明したため、非常に紛らわしいが、19号・20号という番号も踏襲したまま本章に掲載している。

２　旧石器・縄文時代

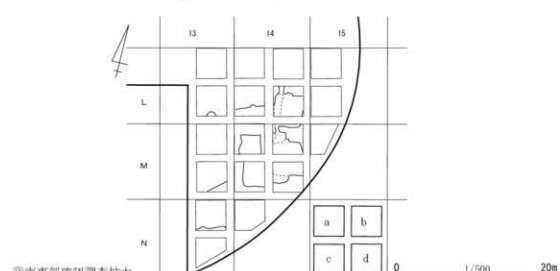
旧石器２点、縄文時代石鏃３点が出土しており（図版11）、縄文土器はみられない。第24図に示した４点の石器は、いずれも奈良・平安時代の住居跡覆土に流入したものである。石鏃２点（１・２）は黒曜石製である。旧石器はいずれも硬質頁岩製で、有樋尖頭器（３）と微細剥離をもつ石刃（４）である。そのほか75点・1.7kgの礫が出土している。

３　奈良・平安時代

調査区の東端と西端で奈良・平安時代の住居跡の集中がみられる。中央部は削平されており、例えば13Iグリッドの13号・14号住居跡は北端部のみ遺存して南部は床面下まで削られていた。本来の集落は調査区外の東側の丘陵部の手前まで広域に分布している可能性が高い。西側の東城楽台遺跡には明らかに分布がつながっており、さらに西側には黒ハギ遺跡がある。当遺跡はきわめて大規模な集落の東端部分ということになる。

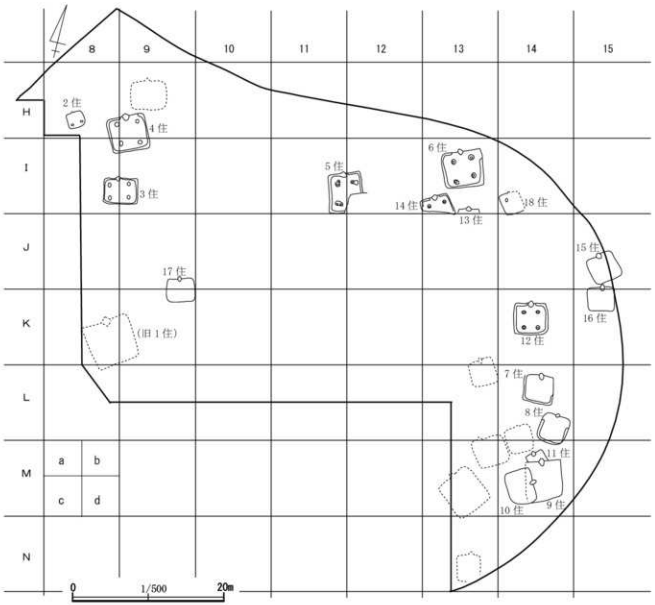


①昭和56年度全体

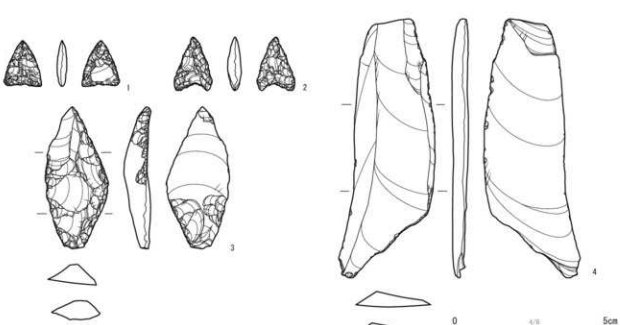


②南東部確認調査拡大

第22図　屋敷内遺跡調査区（1）



第23図　屋敷内遺跡調査区（2）



第24図　旧石器・縄文石器

（1）住居跡

1号住居跡（第23・36図、図版12・14） 8Kに位置する。調査途中で保存が決まり埋め戻された。北側中央にカマドをもつ方形の竪穴である。調査は確認面付近のみだが出土土器の破片数は577点に及ぶ。掲載土器（第36図）をみると、坏の多くがロクロ成形はしておらず、蓋受けを削り出しで痕跡程度に成型しており、甕も口縁部が単純に引き出しただけの形状のものしか見られないため、8世紀初頭までのものと考えられる。住居跡の時期も同じであるとする。16～18の須恵器坏身は他の遺物よりも古い時期（TK217、6世紀第2四半期前葉）を示しているが、胎土や焼成などから搬入品であると考える。ほかに礫が9点出土している。

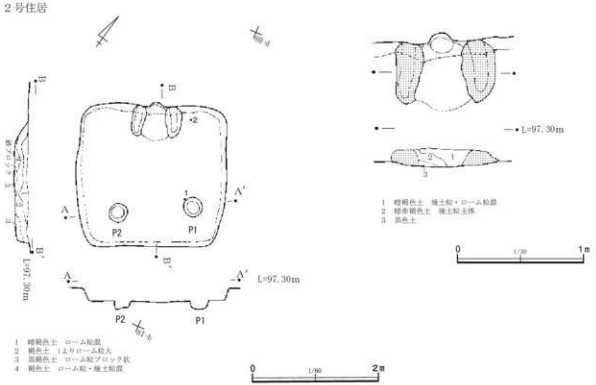
2号住居跡（第25・36図、図版8・14） 8Hに位置する。2.3m×2.4mの正方形、深さ0.2mのごく小さな竪穴住居跡である。二つの窪みが記録されているが、明確な柱穴や壁溝をもたない。北壁中央にカマドをもち、煙道の切込みはごく小さい。出土遺物は35点と少なく、図化できたものは2点である（第36図）。いずれも8世紀後半以降のものである。土器と住居形状を合わせて考えると住居跡の時期は平安時代である。土器以外では灰が付着した丸瓦1点、支脚側面小片1点が出土している。

3号住居跡（第25・37図、図版8・12・14） 9Iに位置する。4.0m×4.6mの横に長い長方形の住居跡である。竪穴の覆土はごくわずかしか遺存せず、検出面付近で壁溝と床面をとらえた。カマドは煙道の切込みと焼土・灰の分布により北壁の中央やや西寄りに付設されたことがわかる。P1～P4が主柱穴であろう。P2・P3はやや南壁に近すぎるが、土層断面には細い柱痕跡が認められる。P7は上部が方形、下部は丸い。なお、原図には北西隅で北壁からやや離れたところを巡る壁溝が記録されている。掘りすぎを訂正したものかどうか判断ができないが、柱穴からみても建て替えられた可能性がある。床の硬化面の形状からみると、南側に出入口を付設し南北中央を土間としていた可能性が高い。出土遺物は126点と少ないが北東隅からカマドの間にやや集中していた。坏の形状より土器は8世紀前半のものである。また掲載したもの（第37図）のうち3の坏体部内面には斜格子状暗文、5の坏底部内面には螺旋状暗文が見られる。5の螺旋状暗文を有する坏は、佐久間豊（佐久間1983）によれば8世紀第3四半期以降は見られないとのことであるので、8世紀第2四半期以前ということになる。一方、3の斜格子状暗文は間隔が広く8世紀第4四半期から9世紀第1四半期のものとされている。よって、住居跡の時期は8世紀後半～9世紀前半ということにしたい。土器以外では紡錘車が出土している。

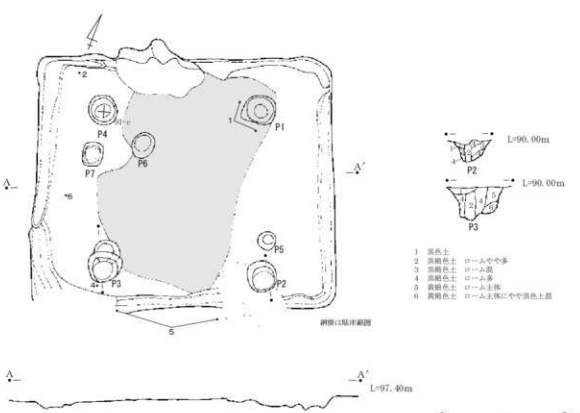
4号住居跡（第26・37図、図版8・12・14） 9Hに位置する。4.8m×5.3mの横長長方形の住居跡である。4本の主柱穴は2ないし3個の重複があり、建て直しがあったと推定される。ほぼ全周する壁溝の幅が一定でないのも掘り返しによるものであろう。西壁のみ、壁溝付近に小さな柱穴がある。カマドは北壁中央にある。出土土器は646点と多く、竪穴の北半に集中、とくに北西隅とカマド東側に顕著であった。図示した15点の土器（第37図）のなかに、胴部片ではあるが、外面にヘラミガキ痕の残る常総型の甕（4）が含まれていた。周辺の遺跡と同様に、この地域まで常総地域との交流があったことが示唆される。甕口縁の形状、住居の形状より遺構の時期は8世紀前半のものと推測される。土器以外では平瓦1点、不整形の焼成粘土塊1点、礫4点が出土している。

5号住居跡（第26・37・38図、図版8・12・15） 11Iに位置する。5.2m×5.3mの正方形、深さ0.2mの竪穴住居跡である。竪穴は東側に向けて浅くなり、南東部は攪乱で失われている。壁溝は北東部で欠く。主柱穴は3本を示し得たが、図版8に攪乱坑の底にもう1基が写る。P1～P3には建て替えの痕跡がある。カマドは北壁中央にあり、燃焼面の下部は深くえぐれている。出土土器は174点と少ないが、北西隅から対角線上に半分の空間にややまとまっていた。第37図3の坏は7世紀代を示すが、それ以外のほとんどは

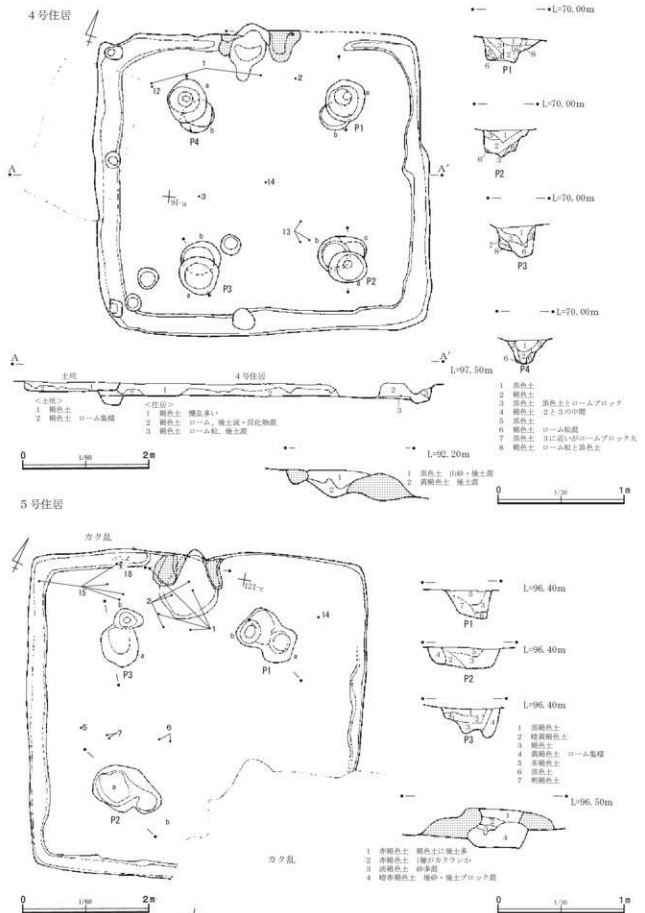
2号住居



3号住居



第25図　2号・3号住居跡



第26図　4号・5号住居跡

8世紀前半のものである。遺構の形状も考え住居跡の時期は8世紀前半とする。

6号住居跡（第27・38図、図版8・15） 13Jに位置する。4.8～5.0m×4.8mのやや歪な方形、深さ0.3mの竪穴住居跡である。4本の主柱穴をもつ。柱穴の上部が広がっており、柱は抜き取られた可能性がある。壁溝は北東隅付近で欠く。カマドは北壁中央にある。出土土器は121点で全体に散在し、やや北西隅に多かった。7世紀ごろのものと考えられる須恵器の坏（第38図5）も出土したが、7世紀末～8世紀初頭のものがほとんどであり、遺構の時期を示すものであると考える。7は口縁がぼってりとして広く平らな底部を薄くつくるもので盤としておく。土器以外では小さな土玉状の製品が出土している。対向する2か所に未貫通孔をもつ。

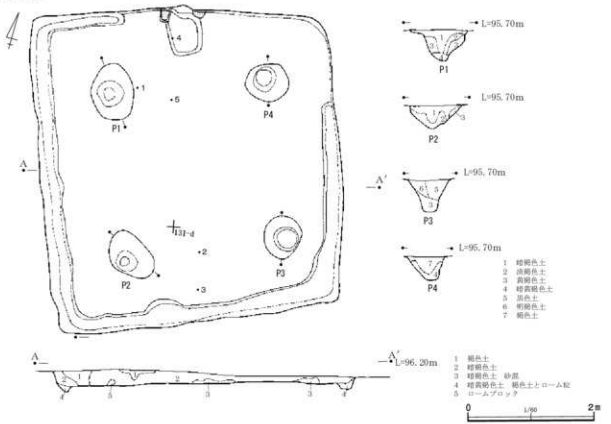
7号住居跡（第27・38図、図版9・12・15） 14Lに位置する。4.0m×3.8mの略正方形、深さ0.4mの竪穴住居跡である。北側に7号がある。東西の壁が攪乱坑によって壊されている。柱穴はなく壁溝は南壁付近のみ確認された。カマドは北壁中央に痕跡が残る。西壁中央には焼土とロームブロックの集積が記録されているが性格は不明である。出土土器は60点と少ないが西壁寄り、東壁寄りにやや集中していた。第38図1・2は西壁付近の竪穴の範囲の内外から出土したが、当遺構に帰属するものと判断した。2の杯は底面に墨書をもつが釈読できない。住居跡の時期としては、甕口縁の特徴により8世紀末から9世紀前半とした。土器以外では礫が3点出土している。

8号住居跡（第28・39・40図、図版9・12・15） 14Lに位置する。南側に9号・11号がある。4.3m×4.0mの略正方形、深さ0.4mの竪穴住居跡である。壁溝は北西部以外を巡り、カマドは北壁中央にある。主柱穴4本のうち、P2は重複がある。その他も掘り込みの上部が広がっているが、建て替えや柱の抜き取りは明確でない。出土土器は259点とやや多く、とくに北東隅と南西隅付近に多かった。掲載資料のうち、坏の多くは南河原坂窯産と考えられるが、底部調整は静止ヘラケズリと回転ヘラケズリが混在しており、上限は8世紀第3四半期の古相までさかのぼるとみられる。一方、器壁に対してほぼ垂直で比較的高い把手を持つ甑（24・25）や、11・12・22の甕口縁の形状は9世紀後半の特徴である。よって、遺構の時期としては8世紀後半～9世紀としたい。土器以外では平瓦1点が出土している。

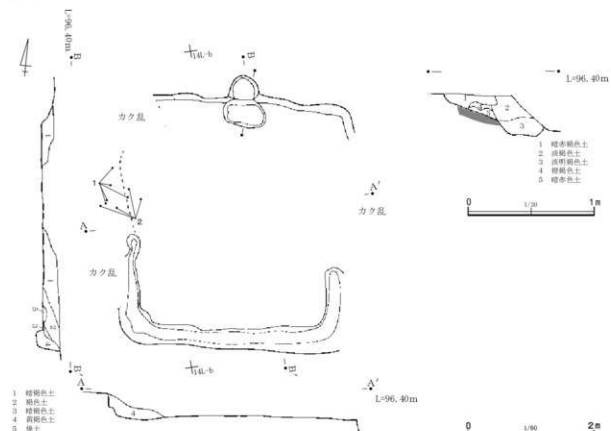
9号住居跡（第29・40・41図、図版9・12・13・15） 14Mに位置する。10号・11号住居跡と重複し、10号より古く、11号より新しい。5.3m×4.9mの縦長長方形、深さ0.5mの竪穴住居跡である。壁溝は全周する。主柱穴4本には柱の抜き取り痕が認められる。P3は下部が方形である。カマドは北壁中央にあり、煙道が長い。出土遺物は443点と多く、竪穴の全体に分布していた。8号住居跡と同様に南河原坂窯のものと思われる坏が多数出土し、その時期は8世紀後半とみられる。一方で甕は9世紀前半の特徴を示しており、住居跡の時期は8世紀後半～9世紀前半ごろとしたい。9は見込みに焼成前に「苧田」を線刻している（図版13）。土器以外では平瓦1点、支脚の上端部片2点、礫4点が出土している。炭化材が取り上げられており、大きめの破片を保管した。また焼成粘土塊が1点出土している。

10号住居跡（第30・41・42図、巻頭図版1、図版9・13～15） 14Mに位置し、9号住居跡と重複、11号住居跡と近接する。4.6m×4.5mの略正方形、深さ0.4mの竪穴住居跡であり、壁溝が全周する。柱穴は不規則に多数分布している。やや深いのは0.5mのP2・3・4、0.4mのP6、0.3mのP7で、他は0.2m以下である。P2とP3、P4とP5は壁際に規則的に並ぶようにみえる。ただしP5の深さは不明である。P2－P3－P6－P8は長方形に並ぶように見えるが、P8はごく浅く小さいもので、柱穴かどうか疑問である。カマドは東側中央にあるが、袖や燃焼部が残っており、内部からは多量の土器が出土した。北壁中央ややや北寄りにもカマド煙道部の切込みがあり、古いカマドの痕跡とみられる。やや南側にずれた床面に何らかの記録があり山砂の可能性がある。燃焼部の窪みは見られず、壁溝がきれいに巡る。貼床により被覆された可能性があるが、貼床下の調査を実施していない。この付近から南側の広い範囲のみ床面が焼けていることから、北

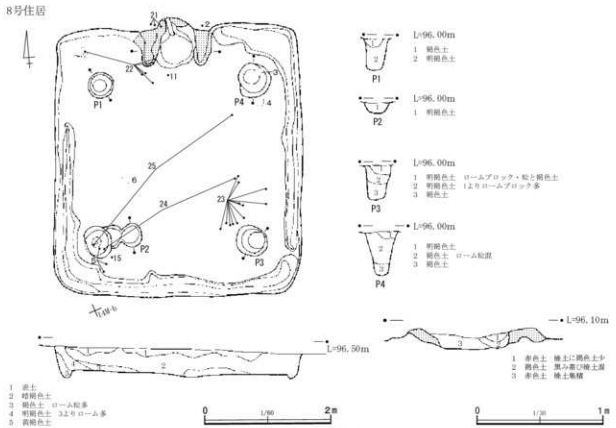
6 号住居



7 号住居



第27図　6 号・7 号住居跡



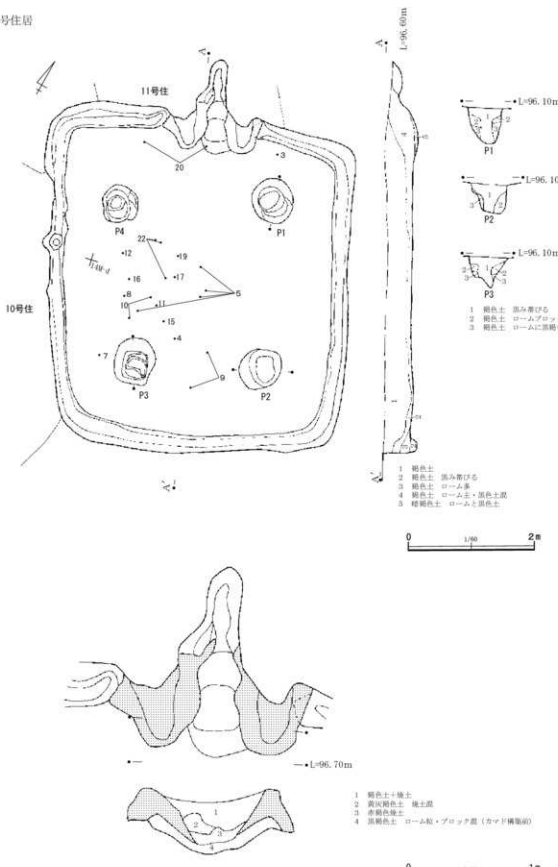
第28図　8号住居跡

側にカマドをもつ住居が焼失した後、建て替えたとみられる。焼付床面には長方形の1.0×0.7m、深さ0.1mの長方形の掘込みがあり、周囲を幅0.1mの白色（黄白色）粘質土が巡っている。

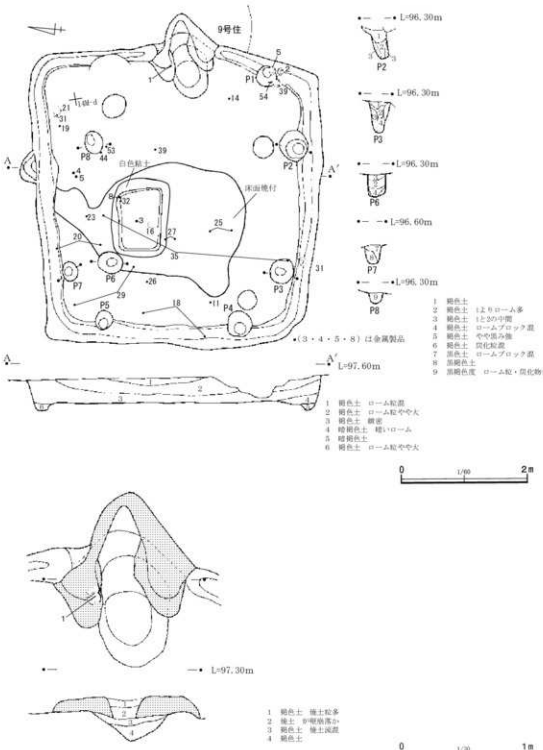
土器の出土点数は1,986点を数える。甕甑類705点・36%、坏鉢類1,228点・64%となり、今回の整理対象では唯一皿や盤が数多く混じる。坏・皿には完形のものが多く、使用感が認められないものも目立つ。通常の大きさの甕・甑は破片のみであり、砲転用の可能性のある須恵器甕胴部片（52）がある。状態が良いのは小形甕（36・37・39）である。掲載資料は第41図から第42図に53点を図示した。器種構成は多様である。小形の坏（14）、灯明具に転用した坏（6・21・24）、墨書土器（35・38・40）、香炉蓋（44）、高台付盤？（43）、片口鉢（53）がある。遺物分布も粗密があり意図的に集積された可能性がある。住居規模に対する遺物点数の多さも考慮すると、本遺構が祭祀の場であった可能性も残るが、土器の多くは別の場所で使用後、廃絶後それほど時間をあけず竪穴に廃棄されたと推測する。土器からみるとその時期は9世紀後半であり、9号住居跡との切り合い関係も矛盾しない。35・38は「丈」の墨書をもつ。40は「介」に似るが独特の書体であり、「打ち割り」行為が明らかである。43は器種が明確でない。体部は大きく開き、外側に広がる高脚高台がつくものとみられる。大型台付鉢（火舎香炉）の可能性がある。44は香炉の蓋である。天井部中央をきわめて薄くつくり、方形の透かし孔をあけている。体部にも3単位の透かし彫りをもつ。形状は甑形に近い2連の孔とみられる（図版16拡大写真）。21の煤状黒変は内面中位以上にリング状を呈し、範囲下端は鮮明である。灰を敷き詰めて焼香するなどの用途が考えられる。44の香炉蓋とサイズが一致し、一組で香炉として使われた可能性がある。

土器以外では焼成粘土塊がまとまって出土した。詳細は（3）に記載したが壁体状の大きなものを含んでいる。第42図54は柄杓に似た土製品で、壁際で坏（2・5）と小形甕（39）とともに出土している。ほ

9号住居



第29図　9号住居跡


9号住
L=96.30m
L=96.60m
L=97.60m
L=97.30m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
自色粘土
床面焼付
(3・4・5・8)は金属製品
1 暗色土 ローム粒混
2 暗色土 ローム粒やや大
3 暗色土 鉄蓋
4 暗褐色土 暗いローム
5 暗褐色土
6 暗色土 ローム粒やや大
1 暗色土
2 暗色土 1より ローム多
3 暗色土 1と2の中間
4 暗色土 ロームブロック混
5 暗色土 やや焼み強
6 暗色土 焼化粒混
7 黒色土 ロームブロック混
8 黒褐色土
9 黒褐色度 ローム粒・焼化物多
1 暗色土 地土粒多
2 地土 炉壁焼落か
3 暗色土 地土混度
4 暗色土
0 1/60 2m
0 1/20 1m

第30図　10号住居跡

かに平瓦２点、瓦小片１点、刀子３点、不明金具１点、礫２点が出土している。また、炭化材が多数取上げられており、大きめの破片を保管した。１点はヘラ状に加工されたようだが図示できなかった。

11号住居跡（第31・42図、図版９・16）　14Mに位置する。長軸不明、幅2.8ｍの方形、深さ0.2ｍの小さな竪穴住居跡である。南側を９号住居跡に切られている。壁溝があり、北東壁中央にカマドをもつ。出土遺物は６点のみで、図化できたのは鉢（第42図１）1点のみである。土器からは８世紀以降としか推定できないが、住居の形状、遺構の切り合いより、遺構の時期は９世紀以降、平安時代としたい。

12号住居跡（第31・43図、図版９・10・14・15）　14Kに位置する。4.3ｍ×4.4ｍの正方形、深さ0.6ｍの竪穴住居跡である。壁溝が全周する。主柱穴４本と他の１本をもつが深さや状況は不明である。P2・P3の脇や南壁中央付近の床面からやや上に焼土の集積が見られた。柱を抜き取った後に上屋を焼却した可能性がある。カマドは北壁中央にある。出土土器は445点と多く、竪穴全面から出土したが、北西隅から対角線上の半分に集中していた。８世紀初頭を示す高坏（第43図７・８）も出土したが、甕口縁の形状が上方へのつまみ出しをもつものと水平に延びるものが混在していることが、８世紀後半の特徴であり、遺構の時期を示すと推測される。土器以外では薄い板状の鉄製品１点、礫４点、焼成粘土塊１点が出土している。

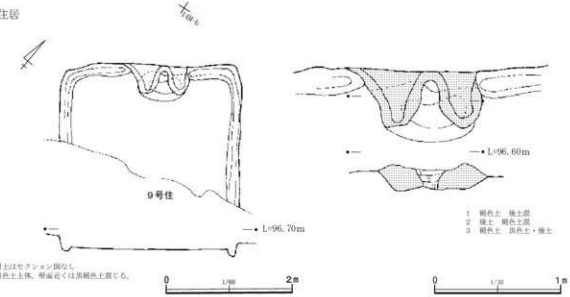
13号住居跡（第32・42図、図版10・16）　13Iに位置し、西側に14号が隣接する。周囲が削平されており、カマド付近のみ検出された。カマドを北壁中央とすれば一辺3.2ｍ程度の住居跡となる。カマドはわずかに東側の袖が遺存し、燃焼部の床面は深く抉れている。出土遺物は９点のみであり、図化できたのは坏１点（第42図１）のみであった。遺構に伴うものであるならば８世紀前半であると推測される。土器以外では支脚？小片１点と、10号と同様の壁体状の焼成粘土塊１点が出土している。

14号住居跡（第32・42図、図版10・16）　13Iに位置する。長軸不明×幅4.1ｍの方形、深さ0.2ｍの竪穴である。東側に13号が隣接、６号住居跡にも近い。北壁中央の山砂や焼土がありカマドの痕跡とみられる。壁溝をもつ。主柱穴とみられる掘り込みがあるが深さや状況は不明である。出土遺物は61点と少なく、図化できたのは坏１点（第42図１）である。遺構に伴うものであるならば８世紀前半のものであると考えられる。遺構の形状とも矛盾しないが絞り込むには情報が不足しているため、本遺構の時期は奈良・平安時代としたい。

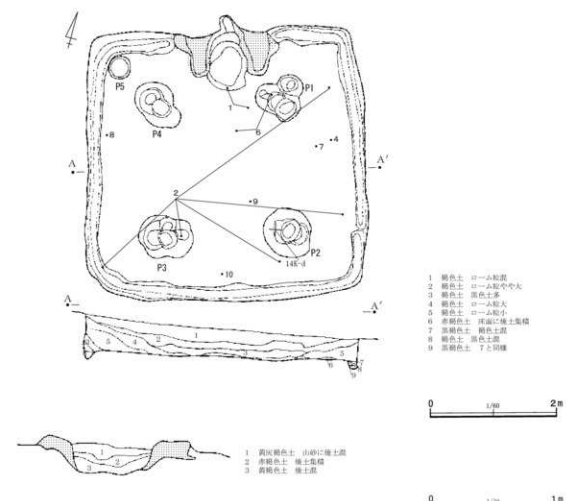
15号住居跡（第33・43図、図版10・16）　15Jに位置する。3.5ｍ×3.8ｍのやや横長の隅丸方形、深さ0.5ｍの竪穴住居跡である。南西隅が16号と重複し、当住居跡が新しい。柱穴と壁溝は記録されていないが、写真で南壁中央付近にみえる黒色落込みは出入口ピットの可能性がある。また、壁際の全周が床面と色調が異なっており、壁溝も存在した可能性が高い。カマドは北壁中央やや右寄りにある。出土土器は172点で、竪穴全体に散在していた。図化した３点（第43図）のうち、ほぼ完形の３の甕は９～10世紀ごろのものであると考えられる。遺構の形状と矛盾せず、住居跡の時期は９～10世紀、平安時代としたい。土器以外では、礫が１点出土している。

16号住居跡（第33・43・44図、図版10・14・15）　15Kに位置する。4.5ｍ×4.9ｍのやや横長の方形、深さ0.5ｍの竪穴住居跡である。北壁やカマドの一部が15号の竪穴に切られている。壁溝は西壁から南壁のみ検出した。カマドは北壁中央にある。主柱穴が４本あり、いずれも柱の抜き取りの痕がある。西壁周溝内には焼土の集積があった。上屋を焼却した可能性がある。出土土器は336点と多く、竪穴全面に分布したがやや西側に多かった。24点を図化した（第43・44図）。甕の口縁は上方へのつまみ出しが施されるもの（10・13）、斜め上方へ延びるもの（16）、ゆるく外反するもの（９・15）が混在しており、８世紀から９世紀にかけての特徴である。住居跡の時期も奈良時代から平安時代前半としたい。土器以外では礫が３点出土している。

11号住居

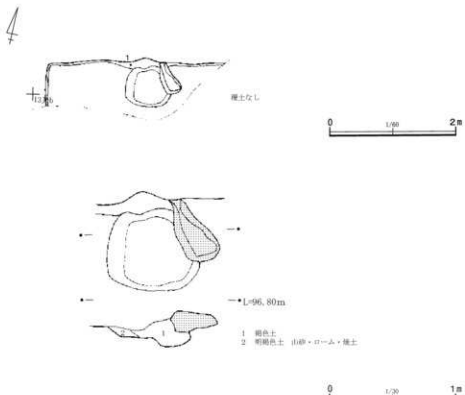


12号住居

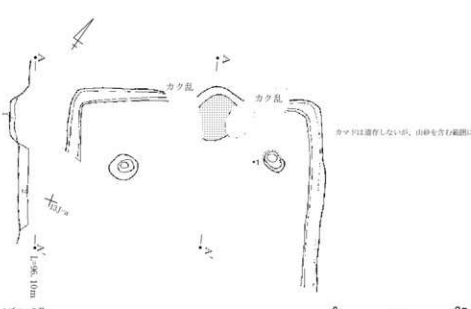


第31図　11号・12号住居跡

13号住居

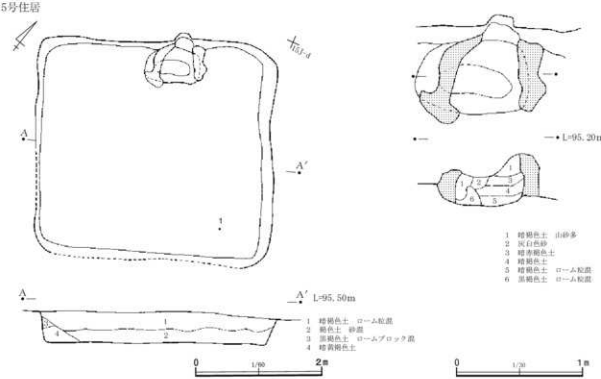


14号住居

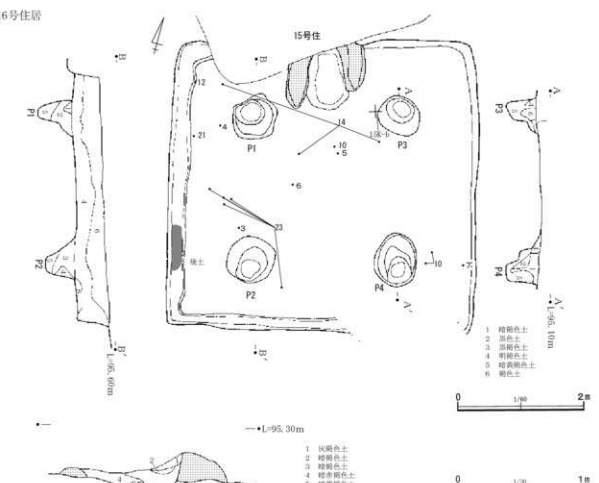


第32図　13号・14号住居跡

15号住居



16号住居



第33図　15号・16号住居跡

17号住居跡（第34・44図、図版10・16） 9Kに位置する。3.0m×3.4mのやや横長の方形、深さ0.3mの竪穴住居跡である。壁溝や柱穴は見られず、北壁中央にカマドをもつ。出土遺物は64点とわずかであり、図示したのは８世紀なかごろのものとみられる坏の破片（第44図１） １点のみである。遺構の時期は住居の形状から平安時代とした。

18号住居跡（第34図、図版10・16） 14Iに位置する。3.0m×幅不明の方形の掘り込みと床面をわずかに検出した。斜面側の東半分は床面が遺存しないが、カマドの痕跡があり、これを中央とすれば正方形ないしわずかに横長の竪穴を想定できる。壁溝や柱穴は見られない。床の硬化の形状から、南壁に出入口が付設されていたであろう。出土遺物は出入口付近でわずかにみられたが土器細片５点のみであり、図化できるものはなかった。遺構の時期は住居の形状から平安時代とした。

19号住居跡（第35・44図、図版10・11・14・16） 本来は東城楽台遺跡に含まれる。正確な位置は不明であるが、第22図に示した付近とする図面のコピーが存在しており、20号住居跡と隣接していたようである。4.4m×4.4mの正方形、深さ0.2mの竪穴住居跡である。壁溝が全周し、主柱穴を４本もつ。カマドは北壁中央にある。主柱穴には柱の抜き取り痕が認められる。出土遺物は69点と少ないが、奈良時代前半の坏（第44図１～４）が出土していることから、19号住居跡は８世紀前半の遺構である。

20号住居跡（第35・44図、図版11・14・16） 東城楽台遺跡に含まれる。19号住居跡の位置は不明確だが、当遺跡の西側に隣接したとみられる。5.0m×5.0mの正方形、深さ0.3mの竪穴住居跡である。床面下で古い壁溝を検出しており、3.7m×3.7mの正方形の住居から、竪穴を四方に拡大して建て替えを行ったものとみられる。新・旧住居は壁溝が一部を巡り、カマドを北壁中央に付設したものとみられる。主柱穴４本も建て替え前後の重複が認められる。遺物の出土はまばらだが南半がやや多かった。出土土器は112点で細片が多く、図化できたのは３点のみであった。タタキ目のある土師器片（３）から８世紀後半以降とみられ、住居の形状から奈良時代後半としたい。土器以外では刀子片が１点、礫が２点出土している。

（２）遺構外出土土器（第44・45図）

2,342点のうち28点を掲載した明確なものだけでも８～10世紀と幅広い時期の土器が出土している。８～10の灰釉陶器や７の小形の鉢とみられる土器など特殊なものも散見される。

（３）土器以外の出土遺物（付表５・６）

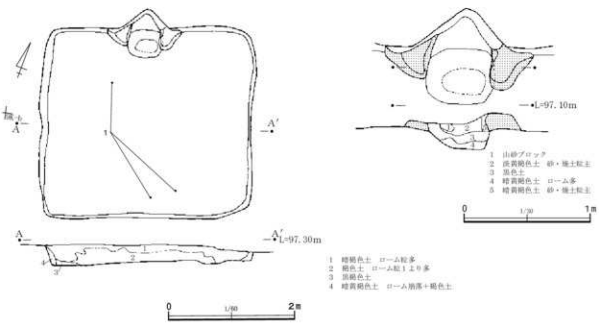
瓦 古代瓦が24点出土している。10号住居跡で２点、２号・４号・８号・９号・20号住居跡で各１点出土したほか、遺構外を含めると、東端の住居跡群と、北西端の住居跡群からJ10区付近にまとまりがある。体部凹面が遺存するものはすべて布痕跡をもつ。凸面が遺存するものは縄叩き13点、ナデ調整７点である。付表5-23は瓦当部の剥離痕をもつ。８は２号住居跡から出土しており、灰が付着している。１・４は砥石に転用されている。カマドの構築材など、転用の目的で持ち込まれたものが中心であろう。

支脚 11点出土した。９号住居跡から別個体の２片、２号・12号住居跡から１点のほかは住居跡群付近の遺構外で取り上げられている。

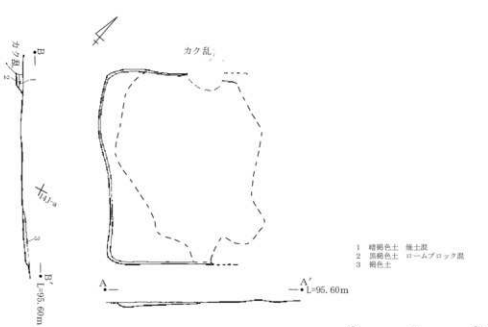
焼成粘土塊 10号住居跡から多数出土している。付表５に９点を掲載し、７点を図版16に示した。不整形の小塊状のものと、仮に壁体状としたものがある。壁体状としたもののうち、40は残存長13.4cmのもっとも大きな破片である。外面は明褐色から橙褐色の繊維を含む粘土の層で24mmの厚みをもつ。外面は平瓦の凸面状に曲面をなしている。内側は繊維主体に粘土を含む黒灰色の層で14mmの厚みをもつ。小塊も含め同時に様々な粘土塊が偶然焼成したものであろう。住居跡に付属する何らかの構造物の一部が焼成を受けた可能性があるが、出土位置はばらついており詳細は不明である。

不明土製品 第42図54（図版16）は10号住居跡出土の柄杓状の土製品である。全長約８cm、径５cmの器部

17号住居

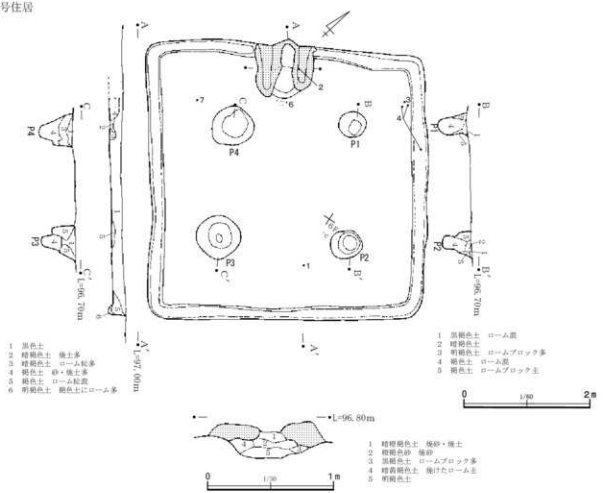


18号住居

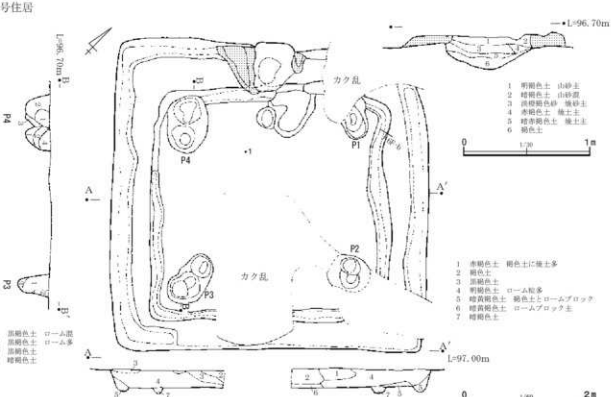


第34図　17号・18号住居跡

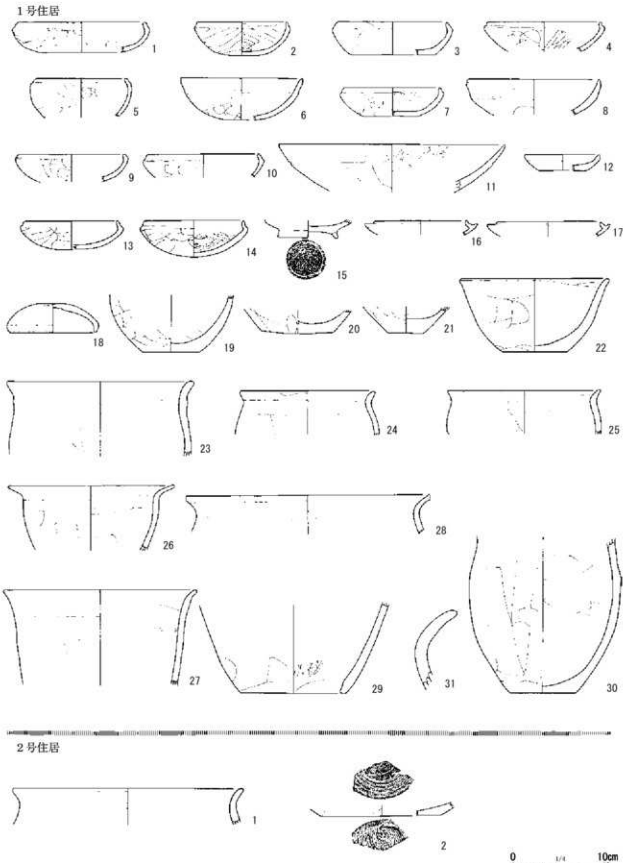
19号住居



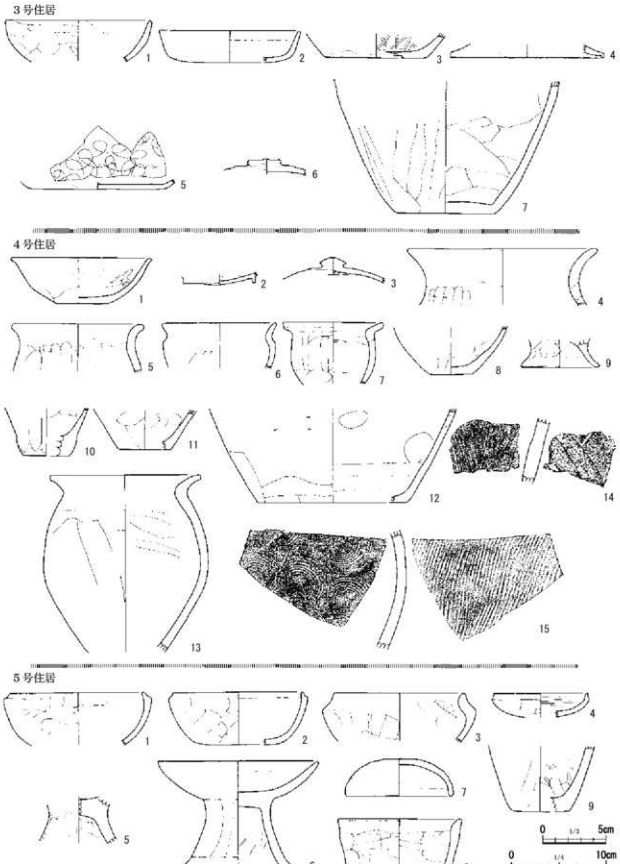
20号住居



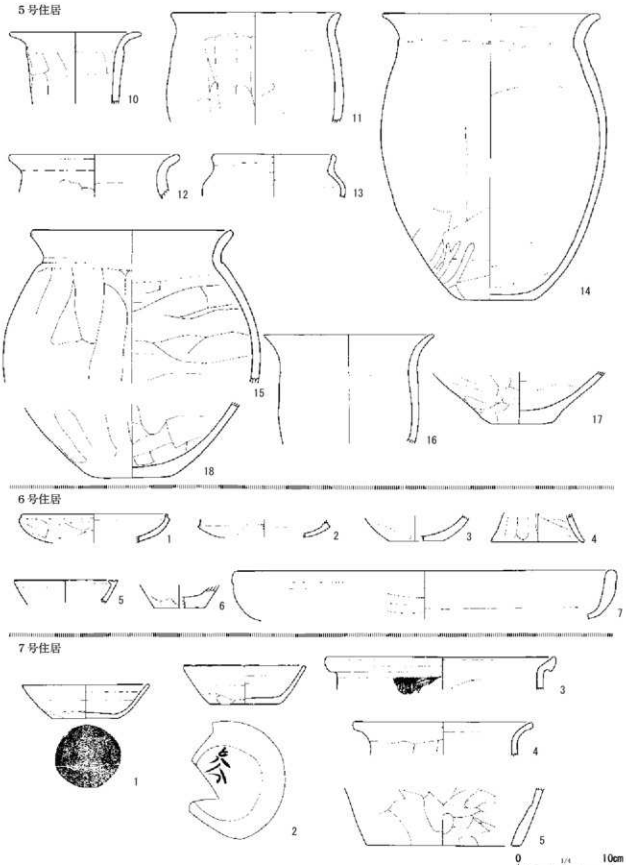
第35図　19号・20号住居跡



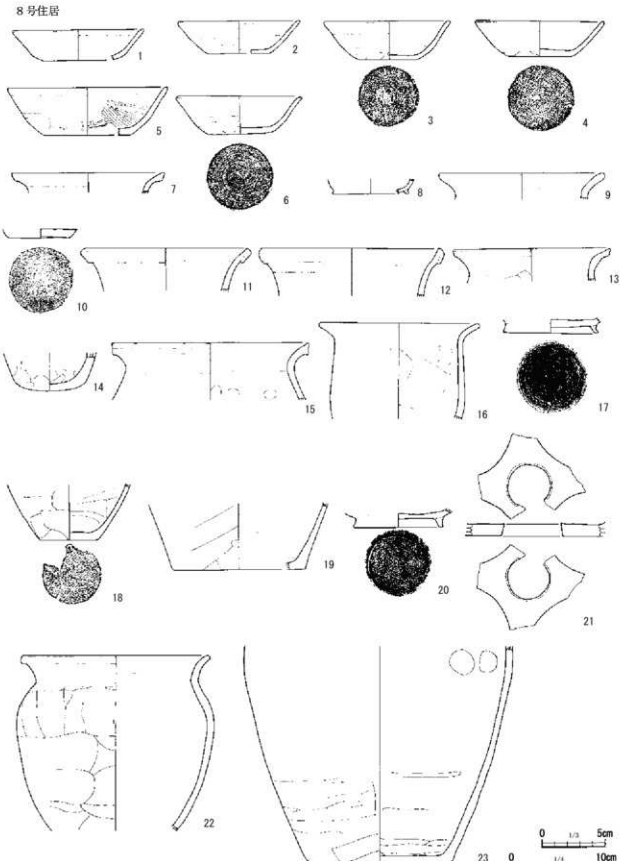
第36図　奈良・平安時代遺物（1）



第37図　奈良・平安時代遺物（2）



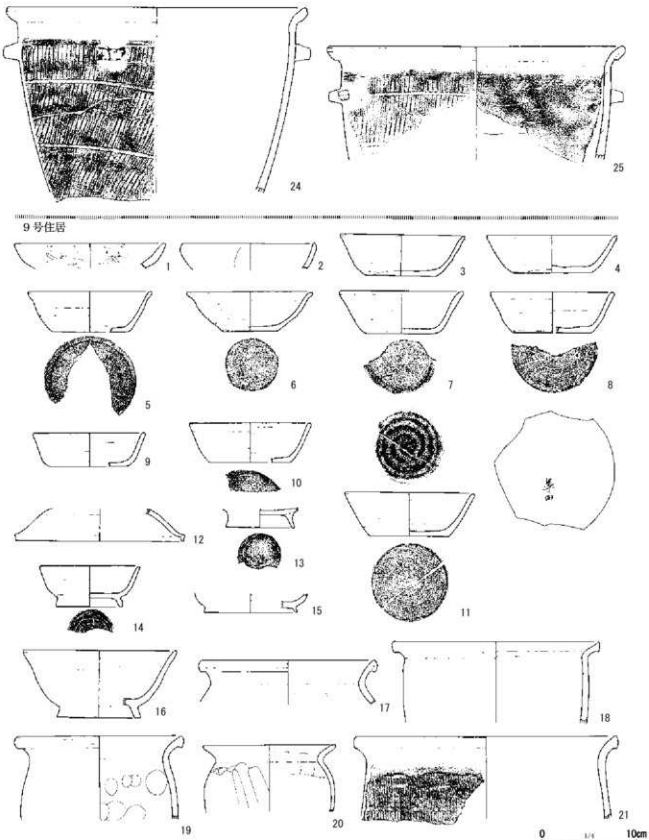
第38図　奈良・平安時代遺物（3）



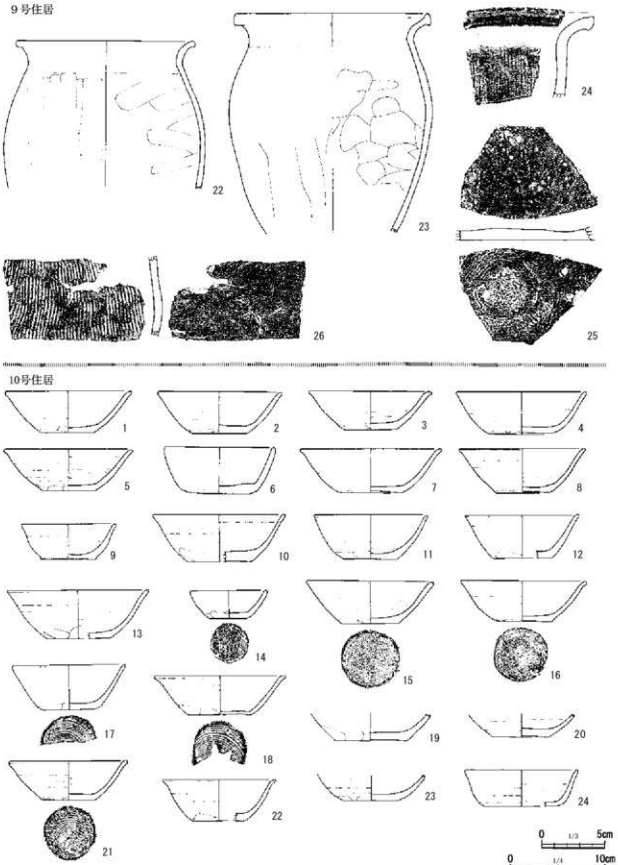
第39図　奈良・平安時代遺物（4）

8号住居

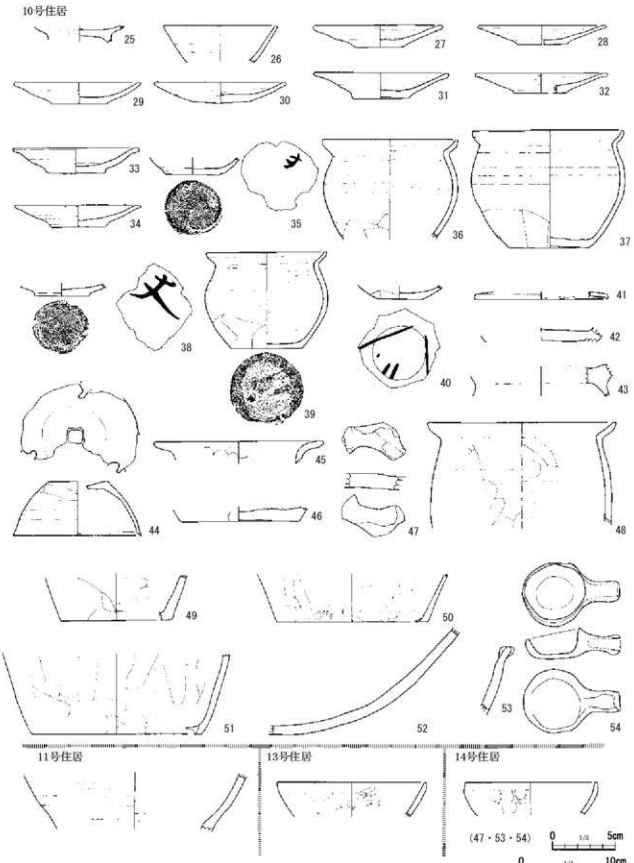
9号住居



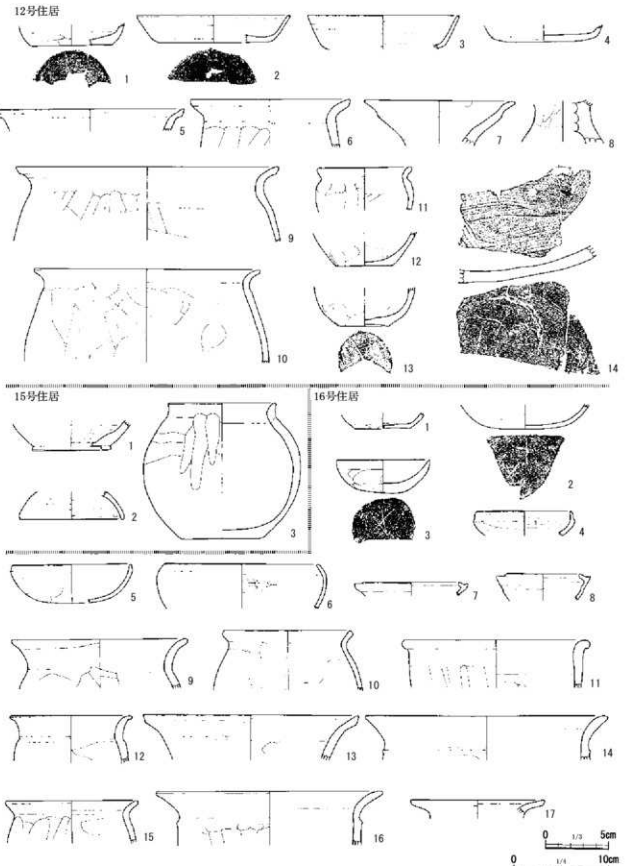
第40図　奈良・平安時代遺物（5）



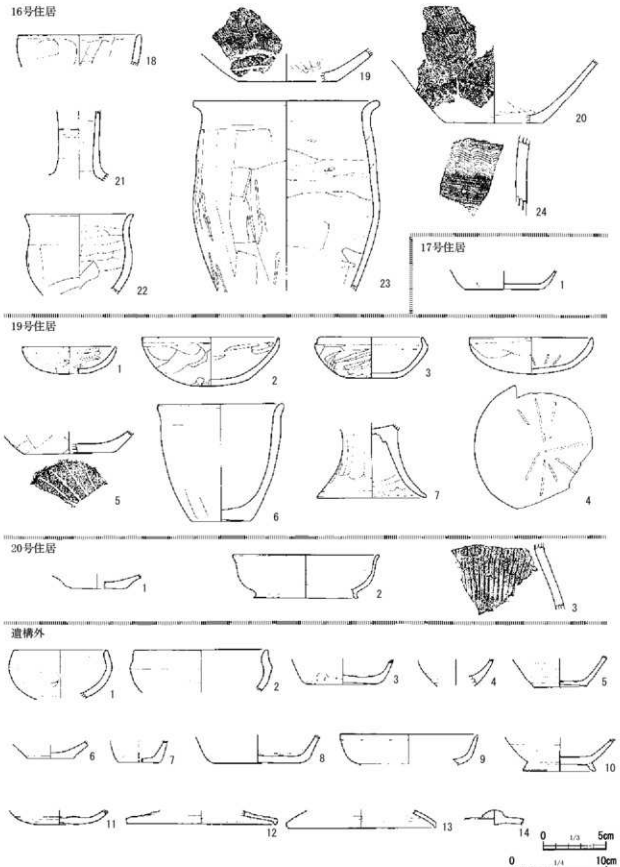
第41図　奈良・平安時代遺物（6）



第42図　奈良・平安時代遺物（7）

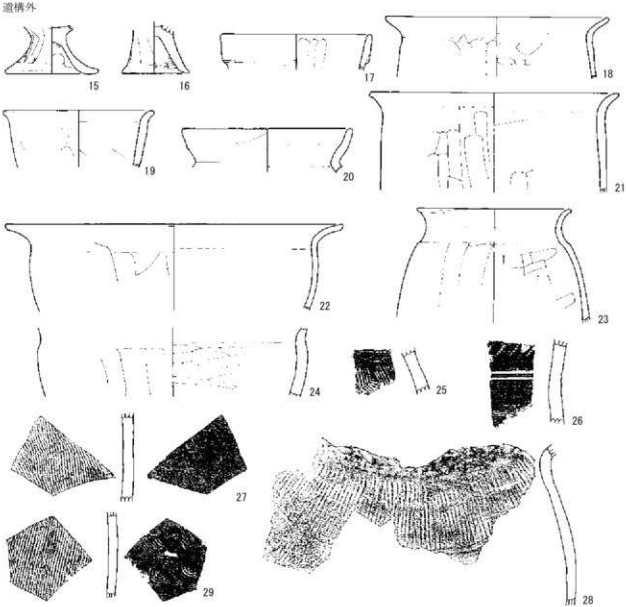


第43図　奈良・平安時代遺物（8）



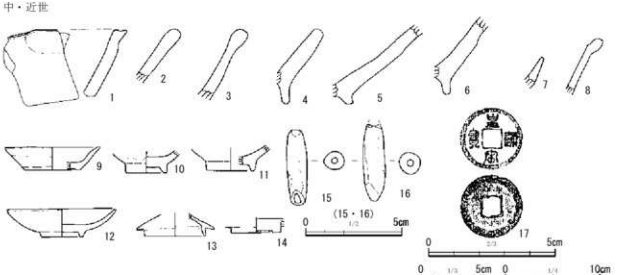
第44図　奈良・平安時代遺物（9）

遺構外



第45図　奈良・平安時代遺物（10）

中・近世



第46図　中・近世遺物

に３cmの柄部が付く。完形坏２点、小形甕１と共伴する点に特殊性が現れる。柄はソケット状で棒を差し込むことができる。用途は不明だが、関連資料として約500m西方にある荻生道遺跡10号住居跡出土の須恵器片口付容器を挙げる。片口の反対側体部に方形の孔が開いており棒を差し込んだものであろう。片口付鉢は土製品が出土した住居跡からも破片が出土しており、ここでも使用された可能性がある。本資料の性格は明らかにできないが、住居跡一括資料から想定される祭祀の場で何らかの役割を果たしたのであろう。付表5-55は玉状の土製品で、対抗する２面に未貫通孔をもつ（図版16）。56（図版16拡大写真）は性格不明の土製品である。現存長29.8mm、幅16.7mm、厚さは1.7mm～2.7mmのごく薄いものの破片で、本来は径２cm～３cmほどの管状であったとみられる。表面は丁寧にナデられ、箬書きのようなごく細く浅い沈線が２条つく。上部に縁辺が残り、側面にスリット状の端部がみえる。内面は木質の圧痕がつく。棒状のものに粘土を巻き付けて焼成した何らかの製品と推定されるが、用途や性格は不明である。注記がなく出土位置は不明だが、炭化物が出土した住居跡から取り上げられたものであろう。

岩塊　貝化石を含む岩塊である（図版16、付表５－57～59）。貝殻を含む土ないし泥が長期間を経て固まったものである。時期は不明だが人が持ち込んだことは間違いなく、貝殻の形をした塊を取り出した残りとみられる。古代の住居跡群付近の遺構外から３点出土しているため、ここに掲載した。

軽石・礫　軽石は４点出土している（付表５－60～63）。うち１点は研磨された面をもつ。礫は全体で75点出土したうち、該期の住居跡から32点出土している。縄文土器は出土していないので、遺構外出土の礫についても、この時代に持ち込まれたものが含まれているであろう。

金属製品　鉄鏃１点、刀子４点、その他３点がある（付表6-1－２～９。図版16）。２は鉄鏃の頚部または基部とみられる。３～６は刀子で、３～５は10号住居跡、６は20号住居跡出土である。

製鉄関連遺物　11軒の住居跡（１・４・６～10・12・15・16・20号）から59点・600.7ｇの鉄滓が出土した（付表6-2）。１号で８点、６号で21点、10号で15点とややまとまるが、多くの住居跡から出土したことが特徴である。遺構外出土71点・980gも、削平範囲以外の広範囲から分散出土しており、東城楽台遺跡にも続いている。8Iと14Jでやや多い。出土したのは羽口２点、鍛冶滓106点（碗形滓４・炉内滓101・流動滓１）、鉄塊６点、鉄製品16点である。出土した住居跡の年代は８世紀初頭～９世紀代にわたっており、８世紀代が中心である。比較的長い期間にわたって鍛冶が行われたものとみられる。

4　中・近世（第46図、図版16）

陶磁器が多数出土している。13世紀の常滑片口鉢が多数出土している。破面に二次加工が確認できる資料もある。その他に、詳細な時期は特定できないが、甕の破片が多数確認できた。７は小片であるが、志野釉を施し、鉄で花文を描いた皿であると思われる。10～13は17世紀後半から18世紀前葉にかけて肥前で生産された陶器である。12は京焼を模した皿で、内面に施された山水楼閣文が特徴的な製品である。また、10・11は銅緑釉が施された皿と碗である。13は赤褐色の胎土に、白泥を刷毛で施し、その上に透明釉をかけた製品である。これらは当該時期の肥前陶器のなかでも生産数が多い日常の器であった。しかし関東では、より近い生産地である瀬戸美濃が隆盛し、肥前陶器の流通はそれほど多くない。14は19世紀の大堀相馬の土瓶の蓋である。土瓶本体の破片も出土していたが、小片のため図示しなかった。15・16は管状土錘である。時期は不明である。土錘は一般的には漁網に取り付ける沈子と考えられるが、畑作地では、鳥よけのネットに錘として取り付けることもあったようだ。銭貨は皇宋通寶が１点、寛永通寶が２点である。17は北宋銭の皇宋通寶（初鋳1038年。篆書体。径24.9mm・至輪径21.5mm）である。国内出土渡来銭で最も多い銭種である。そのほか近世以降の瓦が12点取上げられている。

第４章　東城楽台遺跡

１　概要

事業地北端の遺跡であり、土気東遺跡群と隣接する標高93～95mの台地上に立地する。旧字名は榎戸と清水谷である。西側の黒ハギ遺跡とは北東から南西に入る浅い谷が入るものの同一台地上といえ、当遺跡の南西部は完全につながっていた。また東側の屋敷内遺跡は現代の道で便宜的に区分したものであり、黒ハギ・東城楽台・屋敷内は本来一つの遺跡とみるべきであろう。東西600m、南北600mほどの土気地区最大の平坦地であり、古代から中世までつながる最大の集落跡である。東側の隣接地は北半が屋敷内遺跡の削平部分、南半は屋敷内遺跡と辰ケ台遺跡がある（第４図）。南西には浅い支谷を挟んで小食土廃寺跡がある。

調査地点は大きく二つに分かれている。一つは遺跡の北端部にあたる公園管理事務所予定地（現在の千葉市緑公園緑地事務所）である（第47図）。昭和56年度に１次調査（5,000㎡の本調査）、57・58年度に２次調査（4,900㎡の本調査。57年度末に4,538㎡完了とし、残りの範囲の調査を58年度に継続して実施）が行われている。１次調査区は、２次調査区の内部であり、年次も継続していることから、遺構・遺物の報告にあたっては区別せずに行う。なお、未調査部分はすでに削平された部分で、発掘事業の現地詰所や倉庫が置かれていた。調査区は10mのグリッドを採用し、東から西へ、通常の逆に１～16、北から南へA～Ｉと付け、1Aのように表記する。なお、調査区は表土下まで広く削平された後に盛土されていたため、遺構の残りは悪い。遺構は調査区の西側に偏っており、古代集落の主体は調査区外であって、遺構の分布も黒ハギ遺跡と連続している。

もう一つの調査地点は、屋敷内遺跡の西側、遺跡東端の中央付近である（第22図）。調査は屋敷内遺跡の一部として実施され、19号・20号住居跡を検出しているが、明らかに当遺跡の範囲に含まれる。整理作業の終盤でこのことが判明したため、そのまま屋敷内遺跡のなかで報告している。これによって、古代集落は黒ハギ遺跡から屋敷内遺跡まで連続していたことが確認された。

２　縄文時代

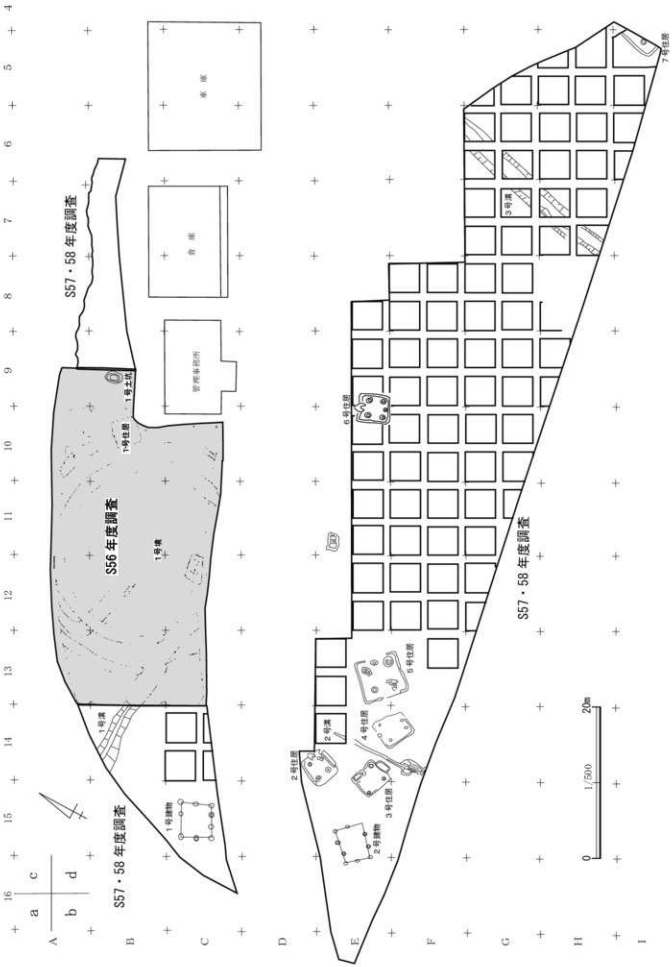
（１）土坑

１号土坑（56-1号土坑）（第48図）　9Bに位置する。楕円型陥し穴とみられる。検出面は2.3m×1.5mの楕円形、下部は1.5m×0.9mのやや角をもつ不整楕円形で、底面はほぼ平坦である。深さは1.9mである。出土遺物はなく、年代の手がかりは少ないが、下部がほとんど崩落ロームで埋まっていることから、遺跡内で土器が採集された縄文中期や後期ではなく、早期以前の遺構であり、２m以上の深さをもつイノシシ用の罠として掘られた可能性が高い。

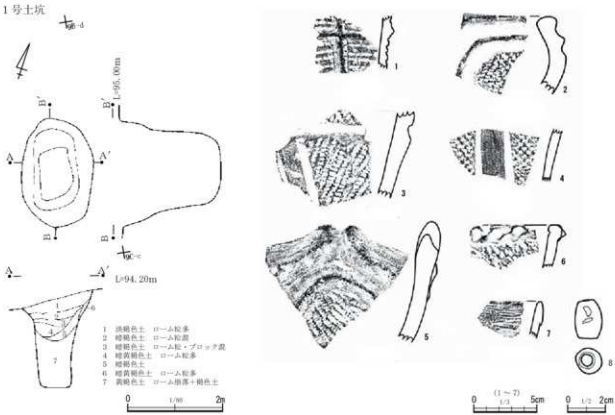
なお、調査時に２号・３号土坑とした掘り込みがあったが、２号は各時代の土器小片が出土した方形掘り込みでおそらく新しい時代のもの、３号は遺物がなく不整形であることから遺構として扱わなかった。

（２）縄文土器（第48図、図版20）

調査区全体で20点の縄文土器が出土した。有文では中期前半の阿玉台式１点、後半の加曽利E式10点、後期中葉の加曽利B式１点であった。７点を図示した。１～５は中期の土器で、１は阿玉台式並行の土器。２～４は加曽利EⅡ式のキャリパー形、５は加曽利EⅣ式であろう。６は後期の加曽利B２式の粗製土器、７は晩期終末の折り返し口縁に燃糸文を施文する土器である。



第47図　東城楽台遺跡調査区



第48図　縄文時代遺構・遺物

（3）石器・石製品（第48図、図版20）

8は玉である。中膨れの管状、古墳時代の勾玉に似た形状は前期に多い。穿面が2か所残っており、小穿を加工したものであろう。石材は鑑定もれだが、色調は薄茶色とオリーブ色の斑状を呈し光を通す。メノウとみられる。ほかにホルンフェルス製の台石（？）小片1点と穿11点・303ｇが出土している。

3　古墳時代～平安時代

（1）住居跡

56年調査区で1号住居跡、57・58年調査区で2号～7号住居跡を検出している。14E区を中心とした径20ｍの範囲に4軒が集中する。遺構番号は現地で付けたものをそのまま使用する。なお、前章で屋敷内遺跡19号・20号として報告した2軒の住居跡は、当遺跡内の遺構である。

1号住居跡（第49・56図、図版17・20・21）　10Bに位置し、1号墳の周溝を切る。竪穴は3.5×3.8ｍのやや横長の略方形、壁は0.4ｍで垂直に立ち上がり、壁溝はほぼ全周する。深さ0.2ｍ未満のごく浅いくぼみを5か所で検出しているが、柱穴と判断するのは難しい。カマドは北壁の東に偏った位置にあり、内部から左袖にかけてほぼ完形の支脚が出土している。出土遺物は562点と多く、分布は南壁の中央付近からカマド方向に帯状に集中がみられ、とくに南壁から中央付近に多い。上屋を残す時期に出入口から投棄された可能性がある。図示した土器（第56図）には盤状杯（1）や鉄鉢（21）がみられる。南河原坂窯の坏や在地の甕が出土しており多くは8世紀後半のものである。土器以外では軽石が出土している。

2号住居跡（第49・57図、図版17・20・21）　14Eに位置する。竪穴は4.2×3.7ｍの縦長長方形、壁は0.3ｍでほぼ垂直に立ち上がり、一部に幅広で浅い壁溝が遺存する。床面の遺存は不良であったらしく、凹凸が目立つ。柱穴は深さ0.5ｍ～0.7ｍの主柱穴P1～P4を検出している。P1には深さ0.4ｍの新しい掘り込み

があるが、建て替えによるものか柱の抜き取りによるものか判断が難しい。カマドは北壁中央にあり、焚口が遺存する。出土遺物は405点と比較的多く、土器では坏や甕が出土した。特に甕の口唇部形状が単純にナナメ上方に伸びるものと、上方につまみ出すものとが混在しており、これらの特徴から住居跡は９世紀前半と考えられる。22は甑の胴部片と思われる。表面に刃物で器厚の半分ほどを切ったような跡があり、甑の把手の作成痕であるとした。ただし把手そのものや取付け部が残存しておらず、また破片の右側破断面にも切り込みがあることなど、別のものである可能性がある。

３号住居跡（第50・57図、図版17・21）　14Eに位置する。竪穴は3.5×3.7mのやや横長の略方形、壁は、ほぼ残存せず、壁溝はほぼ全周する。遺存状態は悪く、覆土等の情報はない。四隅の窪みは浅く底は凸凹であり、柱穴ではないであろう。北壁中央の壁溝の途切れた部分はカマドの痕跡であろう。出土遺物は36点と少なく、図化した土器は３点である（第57図）。灰釉陶器（２）は東海由来のものと考えられ８世紀第２四半期ごろのものであるが、坏と甕は９世紀第２～３四半期ごろのものである。遺構の形状から見て住居跡の年代も同じであるとする。

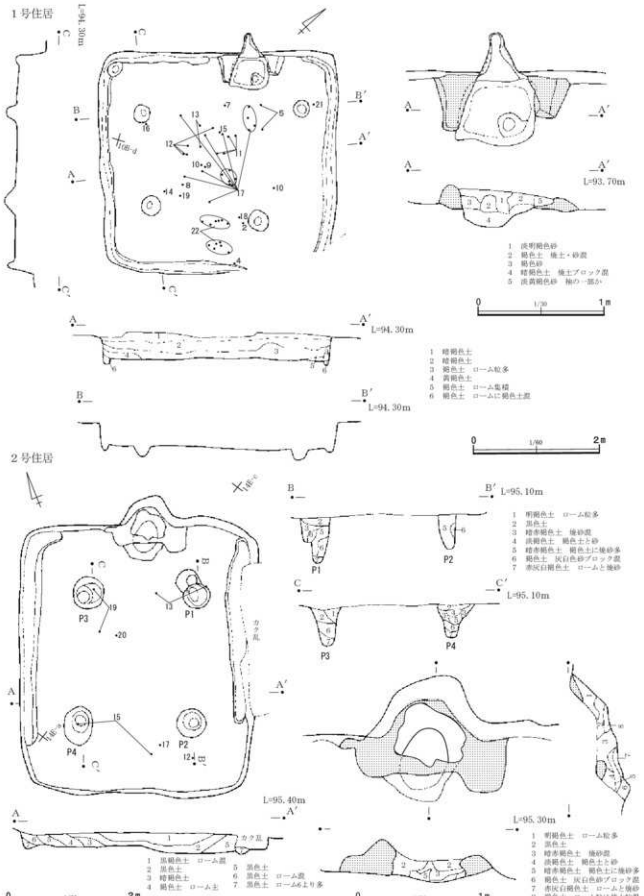
４号住居跡（第51図、図版18）　14Fに位置する。竪穴の一部が遺存するもので、ほぼ東西の辺は4.4m、壁は0.2m、壁溝をもつ。深さ0.3mほどのP1とP4は主柱穴か。擂鉢状で壁に寄りすぎたP2は主柱穴ではないであろう。P3はごく浅いくぼみで出入口施設か。西壁中央には焼土の堆積と窪みがあり、カマドの痕跡とみられる。出土遺物は細片が５点出土したのみで、図化できるものはなかった。住居跡の年代は奈良・平安時代とする。

５号住居跡（第50・58図、図版18・21）　13Eに位置する。柱穴や壁溝が辛うじて遺存したもので、5.7×5.9mの比較的大きな竪穴である。壁溝ほぼ全周する。柱穴は深さが不明だが写真によりかなり深いことがわかる。上部が広がり、別に不整形の掘り込みをもつことから、柱材の抜き取りが行われたものとみられる。カマドは検出していないが北東側の壁中央にあったものとみられる。出土遺物は47点と少なく、図化できたのは鉢１点（第58図１）のみであるが、遺構の形状も矛盾しないことから、住居跡の年代は８世紀第３四半期としておきたい。

６号住居跡（第51・58図、図版18・21）　10Eに位置する。竪穴は4.4×4.1mの縦長の略方形、壁は0.2m未満で、壁溝はほぼ全周する。柱穴は深さ0.6m～0.7mのP1～P3、0.5mのP4が主柱穴、0.3mのP5は出入口施設であろう。カマドは北西壁中央にある。主柱穴の上部は大きく広がっており、柱材の抜き取りが行われた可能性がある。出土遺物は250点で分布は南東隅から中央、カマド付近に伸びており、それ以外はごく少ない。図示したのは14点である（第58図）。坏の底部調整はヘラケズリ主体であるものの（４・５～７・９・10）、回転ヘラ切り（１）と回転糸切り痕を残すもの（２・３）も存在する。甕の口唇部の形状は上方へのつまみ出しを持つもの（14～16）、横に強く張り出すもの（17・19）、ゆるく外反するもの（12・13・18）が混在する。以上から土器の年代は８世紀後半から９世紀後半と考えられ、遺構の時期も同様であるとする。土器以外では支脚１点、焼成粘土塊１点が出土している。

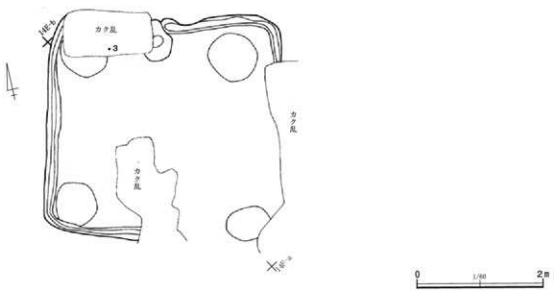
７号住居跡（第52・58図、図版18・21）　5Iに位置する。調査区南東端にあり竪穴南西隅のみ調査した。壁溝が全周、P1は深さ0.5mで主柱穴であろう。土器は89点出土し、図化したのは３点である（第58図）。１の甕は、６号住居跡の甕(同図15)と酷似しており同時期と思われ、その口縁の形状より８世紀第４四半期のものであり、遺構の時期も同様であると考える。土器以外に焼成粘土塊が１点出土している。

屋敷内19号・20号住居跡（第35・44図、図版10・11・14・16）　屋敷内遺跡の56年度調査で検出したものだが明らかに当遺跡に属している。整理作業の終盤でこのことが判明したため、やむを得ず屋敷内遺跡の節で報告している。

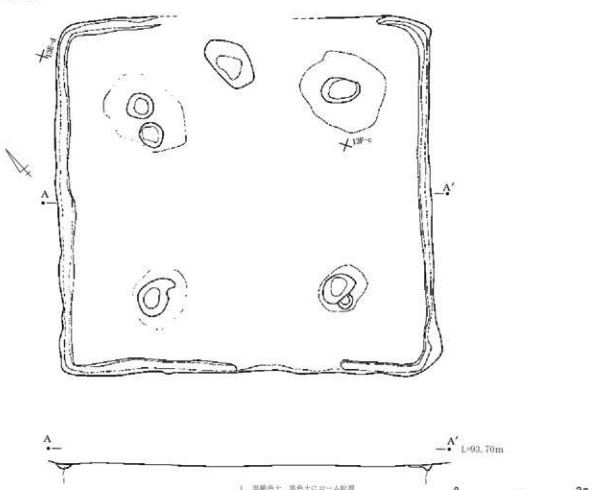


第49図　1号・2号住居跡

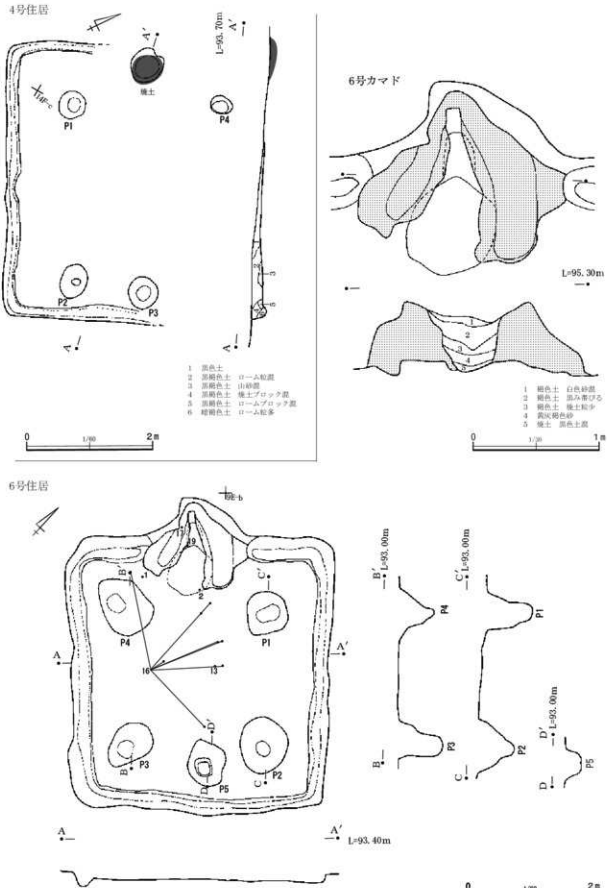
3号住居



5号住居

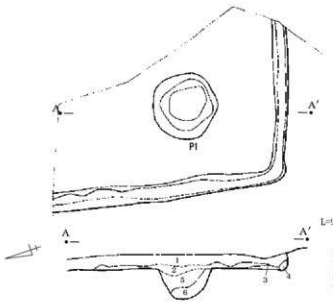


第50図　3号・5号住居跡

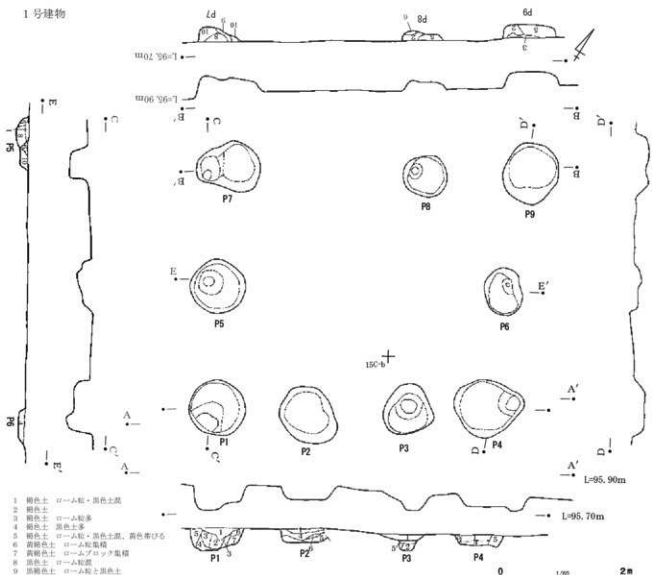


第51図　4号・6号住居跡

7号住居



1号建物



第52図　7号住居跡・1号建物跡

（2）掘立柱建物跡

1号建物跡（第52・59図、図版18・21） 15Cに位置する。梁行2間（3.7m）×桁行3間（4.7m）の掘立柱建物跡である。柱穴は20cm～30cmと浅く、桁側の柱1つが検出されていない。柱間寸法は、梁行方向は2.0m等間、桁行方向は1.3m～1.7mを測る。北側の梁行の軸がややずれているため、P4とP3の間が極端に狭いなど、桁行方向のばらつきが大きい。P10・P11は建物に付随するものかどうか不明である。出土遺物は17点と少なく、土器で図化できたのは破片2点である（第59図）。遺物が少なく判断は難しいが、坏底部の調整が回転ヘラケズリである（1）ことと、土師器器面にタタキ目を施す（2）ことから8世紀後半以降であると思われる。遺構の時期としては奈良・平安時代としたい。

2号建物跡（第53・59図、図版18・21） 15Eに位置する。梁行2間（3.5m）×桁行3間（4.5m）の掘立柱建物跡である。柱穴は20cm未満とごく浅く、東側隅の柱穴は検出されていないが、柱筋は概ね通っており、建物跡とみてよいであろう。柱間寸法は、梁行方向は1.7m等間、桁行方向は1.3m～1.5mとややばらつく。出土遺物はわずかで、土器で図化できたのは破片1点（第59図1）のみであり、遺構の時期としては奈良・平安時代としたい。土器以外では柱穴内から支脚片が出土している。

（3）古墳

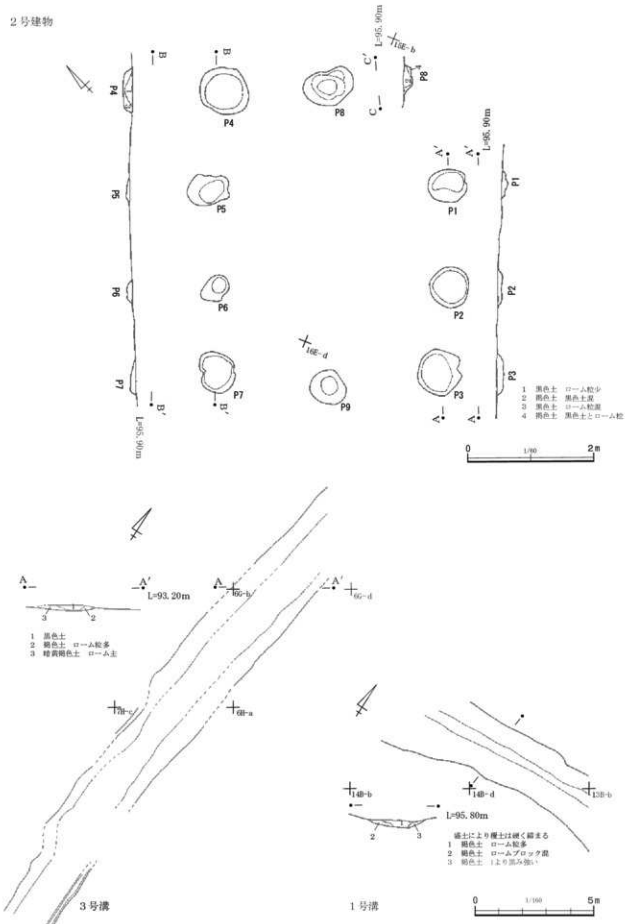
東城楽台1号墳（第54・55・59図、図版19・21）

56年度調査区の9A～13Cの台地上平坦部に位置し、1号溝に切られる。二重周溝をもつ古墳である。墳丘はすでに削平され、埋葬施設と周溝の一部を検出した。発見された古墳は1基であり、本来単独であった可能性がつよいがこれまでの1号墳という呼称を踏襲した。

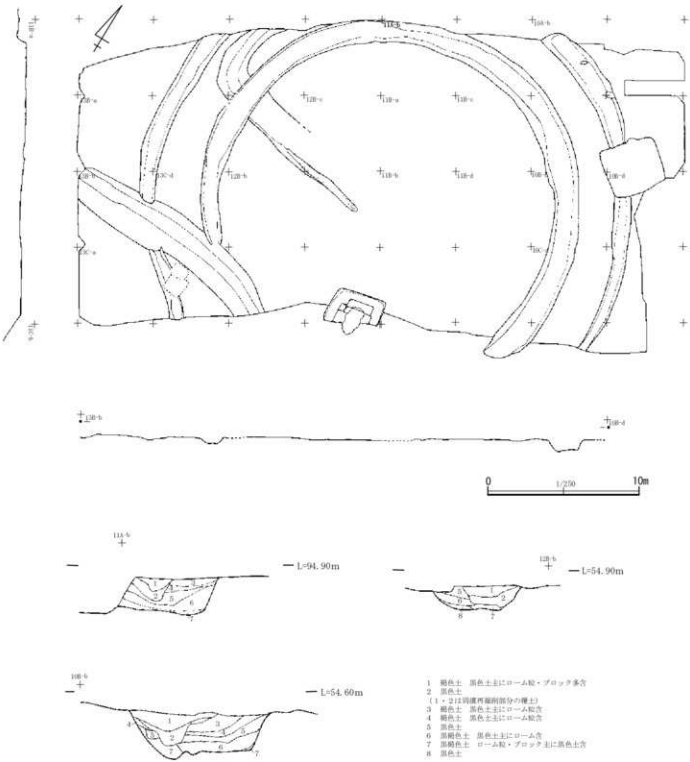
墳丘と周溝 周溝は二重にめぐる。外周溝の南西部がくびれているように見られ、帆立貝形古墳の可能性もあるが、円墳としておく。規模は、外周溝の外縁径32.5m、残存する内周溝の内径22.0mである。周溝は、北西部と南東部が削平されている。上端幅は内周溝が2.0m、外周溝が1.5mである。底幅は、内周溝北西側で0.4mと狭く、東側で1.4mと広い。外周溝は東側で0.4mと狭く、北側が1.1mと広い。内周溝の断面はおおむね逆台形であり、深さは内周溝で0.65m～0.75m、外周溝は不明である。周溝覆土は下から黒褐色土、黒色土、褐色土の順でレンズ状に堆積し、その後、1号溝が掘り込まれて黒色土、褐色土が新たにレンズ状に堆積している。

埋葬施設 墳丘南側に構築されている。横穴式石室または箱式石棺とみられる。東西の壁、北側の小口、それぞれ1枚ずつの截石が遺存し、天井石ないし蓋石は遺存しない。掘形は長方形を呈し、規模は長軸長不明、短軸長3.5mである。やや緩やかに掘り込まれ、検出面からの深さは0.64mである。底面は平坦な部分もあるが大きく攪乱を受けている。石室または石棺は、軟質砂岩の截石を組み合わせて構築されている。東西の壁の截石は南側に向かって斜めに削られ三角形を呈している。東側の壁の截石は、長さ0.48m～0.8m、高さ最大0.44m、厚さ0.52mであり、西側の壁の截石は、長さ1.16m～1.36m、高さ最大0.6m、厚さ0.68m～0.76mである。北側の小口は、一枚の截石（長さ1.68m、高さ0.6m、厚さ0.52m～0.6m）を側壁に持たせかけさせるように置いている。埋葬施設の床面は掘り込まれ、攪乱を受けていた。また、攪乱を受けた床の覆土から東西の壁、北側の小口から崩落した截石の破片と直刀片が出土した。

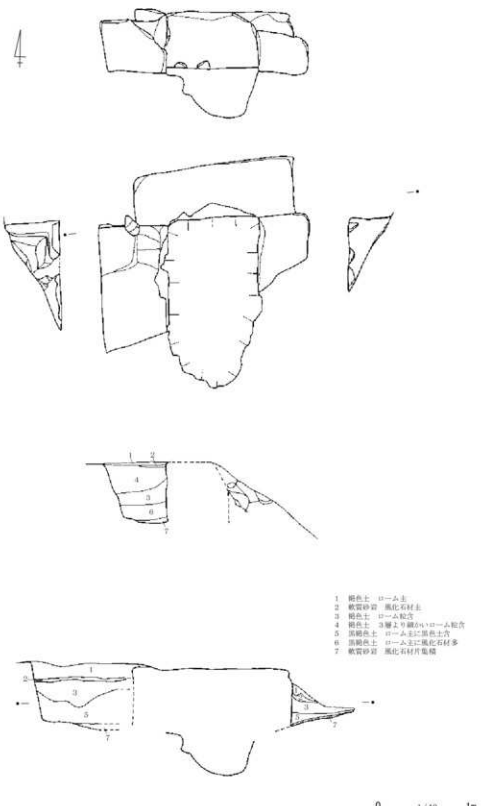
出土遺物 内周溝の北側（グリッド10A-b、10A-d、10B-a）から、土器、土製品、石器が合計198点出土した。そのうち、土器10点（上記グリッド出土は内5点）を図示した。10A-bから7世紀後半の坏（第59図5）と高坏（7）が出土しており、古墳の造営年代を示す可能性がある。土器以外では、主体部から鉄製大刀が出土したが、元の形状を留めておらず掲載できなかった。破片に鉄鏃小片が混じっており、糸による緊縛痕跡をもつ樺巻き部分であった。


2号建物
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P1
P2
P3
L=95.90m
1 黒色土 ローム粒少
2 黒色土 黒色土混
3 黒色土 ローム粒混
4 暗色土 黒色土とローム粒
0 1/80 2m
L=93.20m
1 黒色土
2 暗色土 ローム粒多
3 暗黄褐色土 ローム主
L=95.80m
盛土により覆土は緩く締まる
1 暗色土 ローム粒多
2 暗色土 ロームブロック混
3 暗色土 1より黒み強い
3号溝
1号溝
0 1/160 5m

第53図　2号建物跡・溝


0
1/250
10m
L=94.90m
L=54.90m
L=54.60m
1 褐色土　黒色土主にローム粒・ブロック多含
2 黒色土
（1・2は周溝西縁削剥分の埋土）
3 褐色土　黒色土主にローム粒含
4 褐色土　黒色土主にローム粒含
5 黒色土
6 黒褐色土　黒色土主にローム含
7 黒褐色土　ローム粒・ブロック主に黒色土含
8 黒色土

第54図　1号墳（1）


1 褐色土 ローム主
2 軟質砂岩 風化石材主
3 褐色土 ローム粒含
4 褐色土 3層よりも細かいローム粒含
5 黒褐色土 ローム主に黒色土含
6 黒褐色土 ローム主に風化石材多
7 軟質砂岩 風化石材片集積
0 1/40 1m

第55図　1号墳（2）

なお、後述する１号溝出土土器（第59図）のうち、TK217（７世紀前半）の須恵器（２～４）は１号墳周溝から流入した可能性が高い。周溝の上部まで削平された際に、溝に流入したものだけが残されたのであろう。これらも７世紀代との見方を補強する。

また、グリッド9B-dから脚付盤の脚部（９）が出土した。側面にタテヘラケズリ調整を施すなど、土気遺跡群で出土例が多い時香盤のものと類似点もあるが、東住吉南遺跡例（第104図22）や南河原坂窯跡群遺跡32号住居跡出土のそれらと比較すると脚部が極端に短い。盤内面の残存部に凹凸が少なく黒彩が施されているなど相違点も多く、時香盤の可能性は低いと判断した。１号墳周溝北側やその付近からは木葉痕の付いた手づくね土器（１）や坏（２～４）、高坏（６・８）が出土している。高坏は８世紀初頭以前のものであるため、古墳に伴う可能性はあるが、坏は９世紀～10世紀のものである。脚付盤と手づくね土器を含む古代の土器の出土は、１号墳が古代において信仰の対象となった可能性を示唆する。

（４）遺構外出土土器（第60図）

土師器坏７点、甕４点、須恵器提瓶？１点を図示した。提瓶（10）はその表面調整より器種を判断した。８世紀後半が主体であり、６世紀前半、９世紀代が各１点混じっていた。

（５）土器以外の出土遺物（付表５）

瓦　古代瓦が６点出土している。いずれも体部凹面に布痕跡をもち、凸面なナデ調整するものが４点、縄叩き１点、不明１点である。３号溝とその周辺で４点出土している。

支脚　１号・６号住居跡、１号建物跡で各１点出土している。

製鉄関連遺物　鍛冶滓が13点・181.4ｇ出土している。10E区で３点そのほかは分散している。遺構外出土土器の主体を占める８世紀第３四半期が年代の候補となろう。

４　中・近世

（１）溝

近世及び時期不明の溝を３条検出している。

１号溝（第53・59図、図版19）　56年度調査区の13Bから57・58年度調査区の14Bに跨り、１号墳周溝を切る。両側が調査区外に続いているが、57・58年度の南側調査区には連続していない。上部の幅2.4m、深さ30cm、断面丸底の浅い溝である。覆土は、後世の盛土によって硬く締まっていた。出土遺物は中・近世陶器１点と、第59図に示した古墳時代後期～奈良時代の土器７点である。須恵器（２～４）は１号墳周溝から流入した可能性が高く、古墳の年代を示す貴重な資料となった。

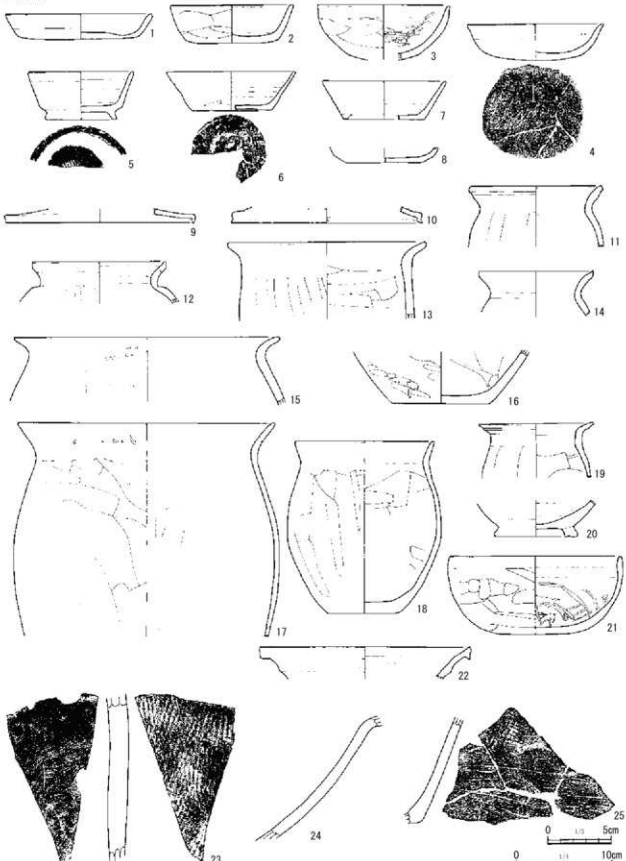
２号溝（第47・59図）　14E～14Fで検出した。詳細図面がなく、全体図（第47図）にのみ示した。幅は狭い。調査したのは長さ16m分で、北側は途切れており、南側は調査区外に続く。出土遺物は古代の土器30点で、第59図に４点を図示した。ただし、古代の土器は遺構でないと判断した南端の掘り込みから出土したものが大半を占めており、溝の時期は不明である。中・近世またはそれ以降の蓋然性が高い。

３号溝（第53・59図、図版19）　66～7H上部の幅2.8m、深さ20cmのごく浅い溝である。24m分を調査しており、南北で調査区外に続いている。18世紀後半から19世紀代を中心とした陶磁器が219点と、古代の土器２点（第59図）が出土している。近世の溝とみられる。

（２）出土遺物（第61図、図版21）

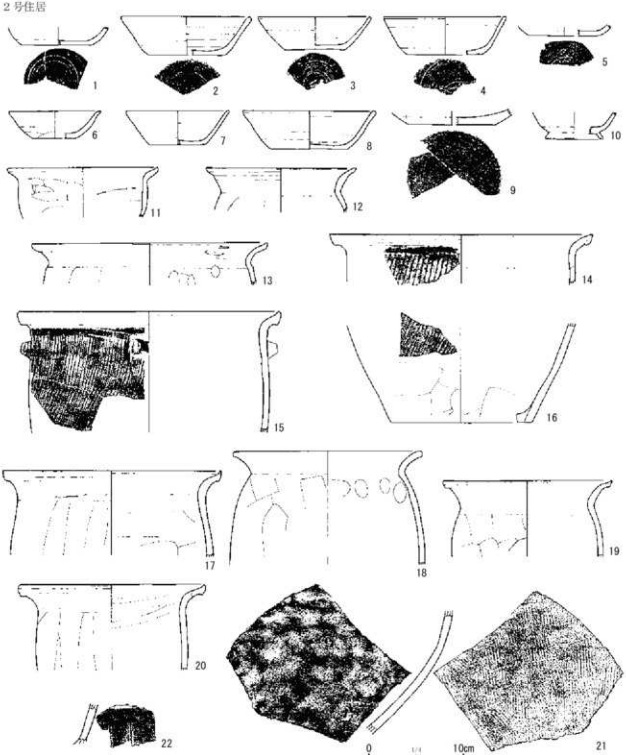
中世から近世に到る陶磁器が大量に出土している。中世では、15世紀から16世紀の製品が多い。皿などの日常使いの製品の外に、瀬戸美濃の天目碗も破片がみられた。図示したものは口縁部であるが、胴部の破片なども含まれる。また、胴部のため細かな時期の比定は出来ないが、常滑の甕や瀬戸美濃の擂鉢の破

1 号住居



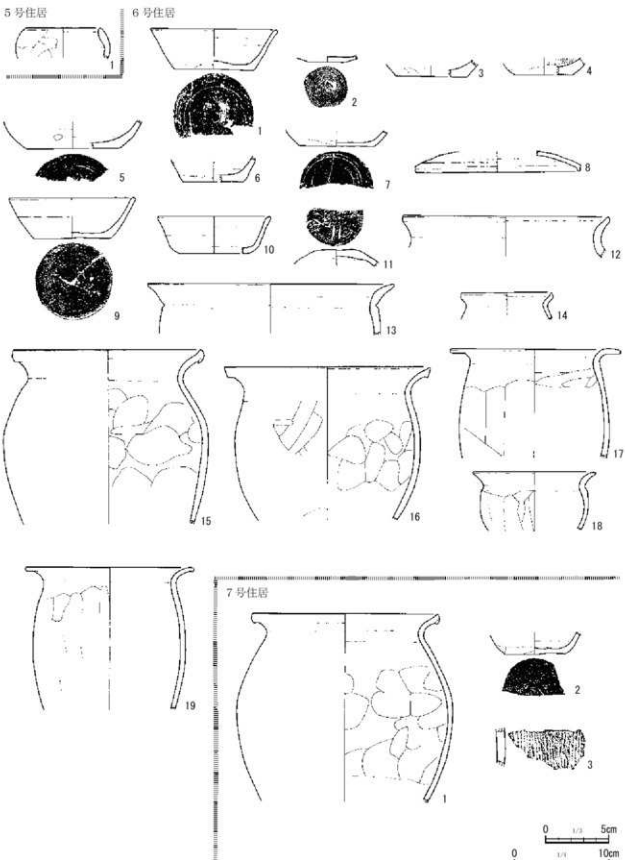
第56図　奈良・平安時代遺物（1）

2号住居

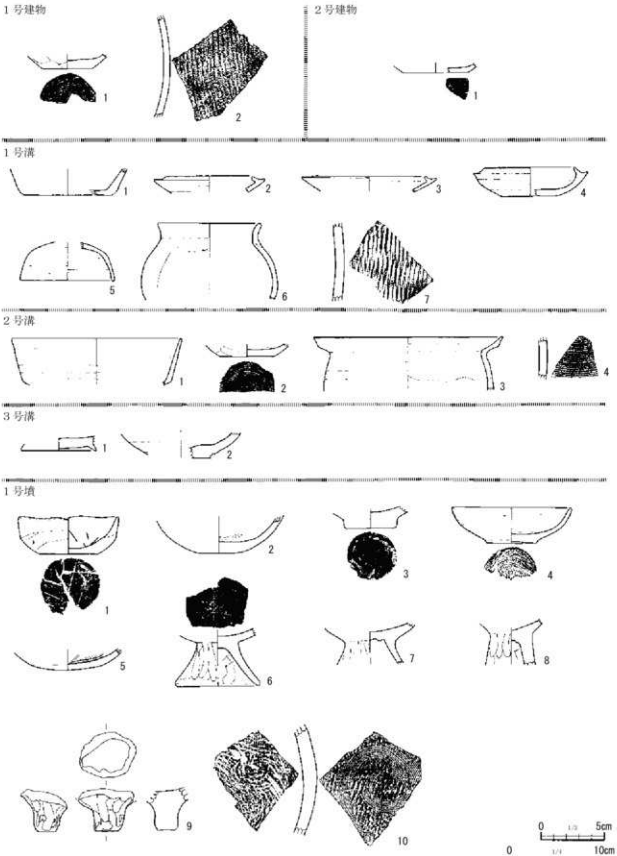


3号住居

第57図　奈良・平安時代遺物（2）

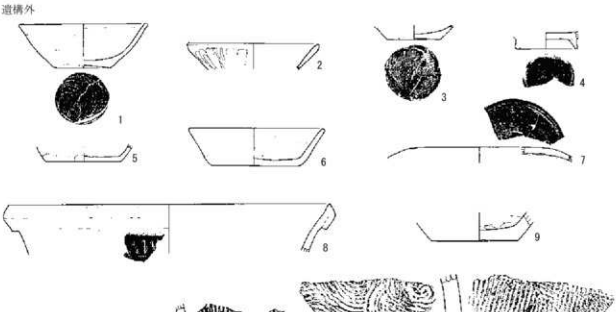


第58図　奈良・平安時代遺物（3）



第59図　奈良・平安時代遺物（4）

遺構外



第60図　奈良・平安時代遺物（5）

第61図　中・近世遺物

片も多い。近世はすべての時期の遺物がみられ、肥前の磁器も多くあるが、いずれも細片である。8は口縁部で文様は確認できないが、おそらく肥前陶器の三島手の鉢であると思われる。10は肥前の色絵磁器である。染付に赤、緑の上絵の具を用いて文様を施している。上絵付はあまり丁寧ではない。初期の色絵磁器は高級品であったが、18世紀後半には大量に生産され、庶民も持てるものとなったことが伺える。11は17世紀後半から18世紀初頭の肥前磁器の瓶である。また、細片で図示はしなかったが、中世末から近世初頭の志野釉の施された製品や19世紀の大堀相馬(福島県)の製品もみられた。同じく、図示はしなかったが、素焼のミニチュア製品、どろめんこなどの玩具も出土した。銭貨は2点出土した。図示したものは北宋銭の熙寧元寶（初鋳1068年。真書体。径24.6㎜・至輪径21.4㎜）である。背面は輪幅が極端に広い。国内出土渡来銭の最上位を占める銭種である。他に寛永通寶が1点出土している。

第５章　枯木台南遺跡

１　概要

遺跡は事業地の中央やや北寄りに位置する（第４図）。北側の荻生道遺跡及び調査歴がない枯木台遺跡と同一台地上にあり、その南端から斜面部にあたる。現在は公園のモミジ広場やローラーすべり台となっている。標高は北端の98mから南部95mまで緩やかに下がり、南端では斜面部の84m付近まで調査している。これまで、遺跡名称や範囲の混乱が著しかったが、『昭和の森遺跡群Ⅱ』（塚原2009）で、台地北部の狭い範囲を枯木台遺跡、南部の広い範囲を枯木台南遺跡としており、これを踏襲する。ただし、枯木台遺跡は調査や試掘の履歴がないため本来の範囲は不明である。荻生道、小食土廃寺、辰ケ台遺跡、枯木台南遺跡の遺構群が続いていることは明らかであり、４遺跡に囲まれた全域を包蔵地とすべきであろう。下野－北総回廊、土気往還が通ることは疑いなく、重要な場所と言える。当遺跡の調査にあたっては当初は枯木谷遺跡、その後枯木台遺跡の名称が使われた。旧字名は枯木台遺跡の部分が枯木谷、当遺跡は黒荻・松ケ谷である。当遺跡の名称は「枯木台」遺跡の南側にあることに因むものであろう。

発掘調査は、遺跡内の南部の一画で３次にわたって行われている（第62図）。調査区の設定は１次と２次で異なり、３次では設定されていない（第63図）。なお、１次調査は本書に所収するが、２次調査は平成４年（菊地1992）、３次調査は平成21年（塚原2009）に報告書刊行済みである。

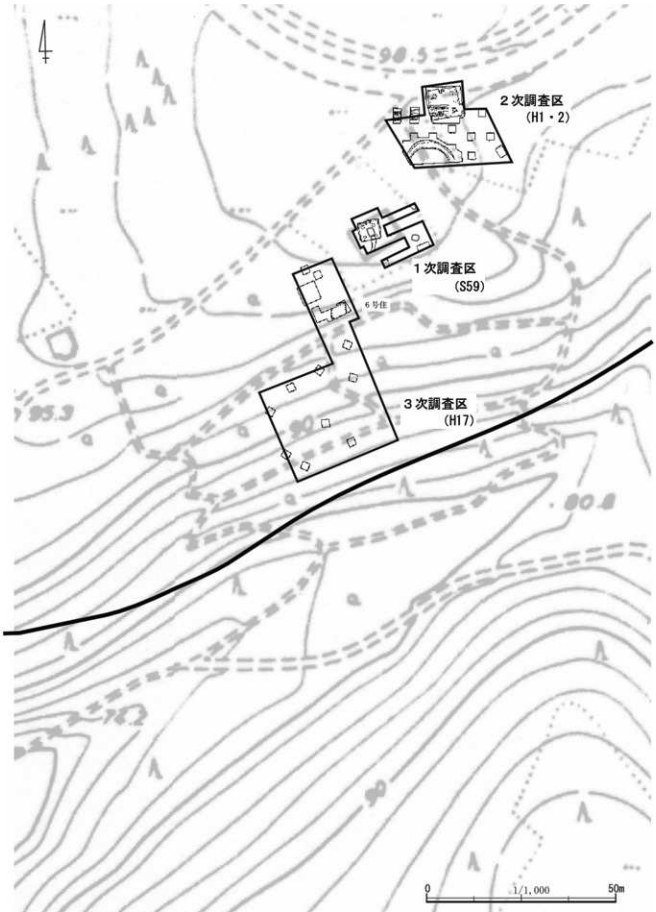
１次調査（昭和57・59年度）　広場施設の建設に伴い、昭和57年に対象面積1,700㎡のうち216㎡の確認調査を行い、住居跡４軒、土坑１基、溝１条、炭窯２基を検出した（第63図）。昭和59年には160㎡の本調査を実施し、住居１軒・溝１条を精査した。住居跡のうち２号～４号の３軒は確認調査のみで埋め戻しが行われた。なお、報告書刊行済みの２次調査の住居跡に１号が付されているが、その後刊行された『昭和の森Ⅱ』所収の３次調査で検出した住居跡では６号を付していることから、１次調査分の住居番号はそのままとした。調査区は10mグリッドを組み、西から東へA～C、北から南へ１～３として、1－Aのように表記する。

２次調査（平成元・２年度）　広場施設の建設に伴い、平成元年度に100㎡のうち20㎡の確認調査、２年度に追加分500㎡のうち54㎡の確認調査と、遺構周辺を拡張して187㎡の本調査を実施した（第63図）。古墳は外周径19mの円墳で、古墳時代後期の高杯が出土している。住居跡は古墳時代後期・６世紀末～７世紀初頭のものである。報告書では１号住居としているが、その後に刊行された『昭和の森Ⅱ』所収の３次調査で６号を付していることから、１次調査の住居（未調査を含む）を１号～４号とし、２次調査１号は、本書では５号住居と呼称する。調査区は５mグリッドを組み、西から東へA～H、北から南へ１～７として、1－Aのように表記する。

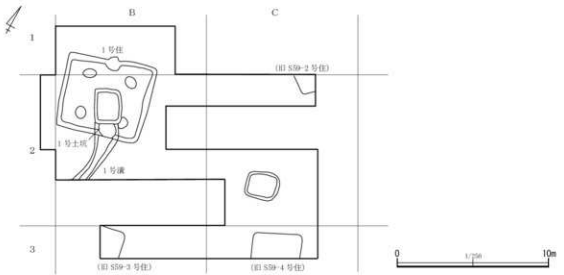
３次調査（平成17年度）　台地の南端から斜面部であり、遊戯場と第２駐車場に至る道路の拡幅工事に伴い、対象面積410㎡のうち、26㎡（２m四方のグリッドA～Mの13か所）の確認調査と、遺構周辺を拡張して51㎡の本調査を実施している。台地縁辺部分のグリッドDで平安時代の住居跡１軒を検出し、一部を拡張して精査している。住居跡の番号は、前述のとおり６号を踏襲する。なお、調査区の設定は行っていない。

２　縄文時代

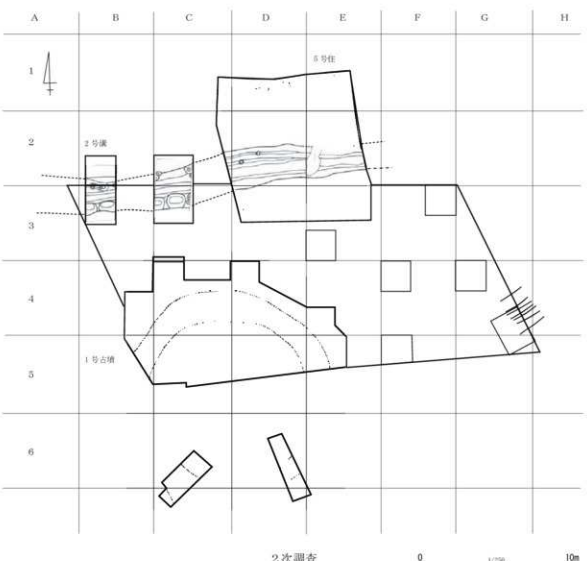
土器片２点と礫３点・97ｇが出土している。土器は早期前葉の撚糸文土器と中期後半の加曽利E式各１点である。



第62図　枯木台南遺跡調査区（１）全体



1次調査



2次調査

第63図　枯木台南遺跡調査区（2）1次・2次

3　古墳時代～平安時代

（1）住居跡

整理対象とした１次調査区では確認調査４軒の住居跡を検出し１号を本調査した。他３軒は確認のみで終えたが既報告で５号・６号を付けているためそれに従う。この２軒についても遺構図を組み込んでしまったため遺物も含め再録した。２号～４号については奈良・平安時代の可能性が高いものとしておく。

１号住居跡（旧S59－１号住。第64図、図版22）　2Bに位置する。5.0m×5.7mの横長長方形、壁は0.4mで垂直に立ち上がり、壁溝が全周する。４本の主柱穴は0.6m～0.8mの深さをもつ。出入口施設の有無は１号溝と時期不明の炭窯によって不明である。カマドは北壁の中央にある。床面はロームによる貼床が行われ（A断面）、固く踏みしめられている。52点の土器が出土し、うち６点を図化した。いずれも８世紀初頭から前期ころの時期を示し、とくに１・２の坏は蓋受けを痕跡として残す８世紀初頭のものである。また、カマドから「駿東甕」と呼ばれるハケ調整の甕の口縁～胴部上半が出土している。口縁下部から胴部にかけてハケ目調整し、口端内側に稜をもつ「駿東甕」はこれまで土気東遺跡群で発見され、注目されていたが（簗瀬2002）、昭和の森遺跡群では初見である。時期としては、口唇部内面に粘土帯を貼りつけて肥厚し、口縁部と胴部の器厚に差がないことから８世紀初頭とし、住居跡も同時期とした。

５号住居跡（旧H2－１号住。第65図）　主柱穴（P1～P4）には柱の抜き取り痕がみられた。P4でみると、柱の根固めの上部を掘削し、柱を抜き取った後に上屋の残りを焼却して焼土が堆積したと推定される。坏（１・２・５）の形状は８世紀初頭のものであり、住居跡の時期は７世紀末～８世紀初頭とする。

６号住居跡（旧H17－１号住。第66図）　3.9m×3.9mの正方形、壁は0.4mで垂直に立ち上がり、壁溝が全周する。主柱穴は検出されず、南壁寄り中央にP1をもつ。出入口施設とみられる。カマドは北壁中央やや東寄りに位置する。第66図３の坏は８世紀初頭のものであるが、２の坏や６の甕の口縁の形状は９世紀中ごろの特徴であり、住居跡の形状と合わせ、遺構の時期は９世紀、平安時代としたい。

（2）古墳

１号墳（第67図、図版22）　周溝外形11m、墳丘径11m弱の円墳であり、周溝のみが遺存する。調査対象となった北半の一部と南半に設定した２つのトレンチで周溝を調査した。断面図のようにソフトローム（Ⅲ層）上に薄く堆積した旧表土（Ⅱa層、黒色土）で周溝を検出している。周溝の断面形は丸底である。２トレンチで溝の幅が広がっており、帆立貝形となる可能性も考えられるが、追加の確認トレンチを入れる意図がなかったことと規模から円墳としておく。

（3）土器以外の遺物（図版22）

瓦　古代瓦が２点出土している（付表５）。いずれも本体凹面に布痕跡をもち、凸面に縄目をもつ。

4　中・近世

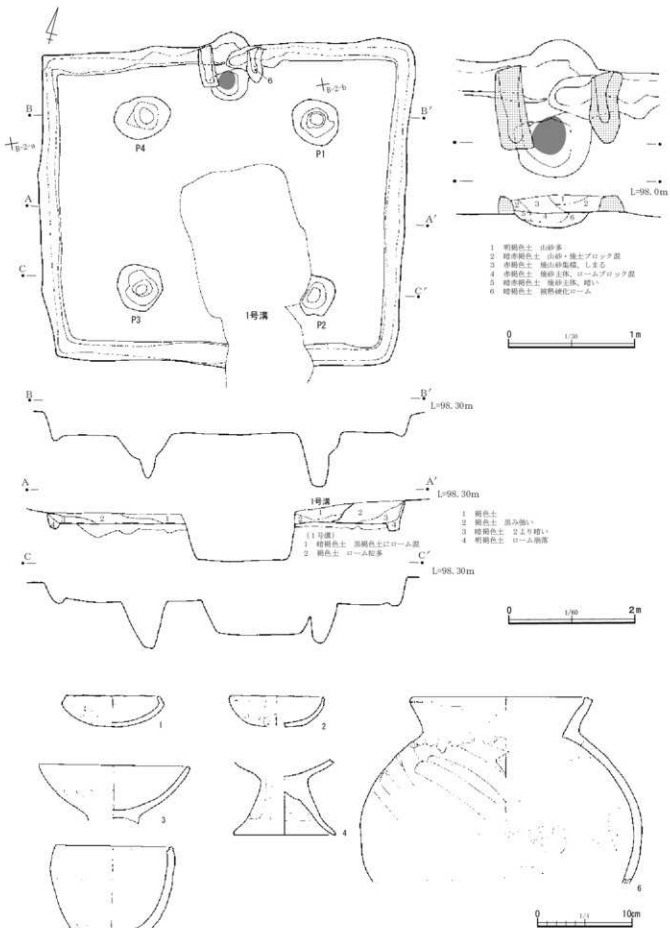
（1）溝

１号溝（第63・64図）　１次調査・59年度調査区の2Bに位置する。１号住居跡を切っている（第64図A断面）。出土遺物はないが、１号住居跡から近世の素焼土器が出土している。近世以降の蓋然性が高い。

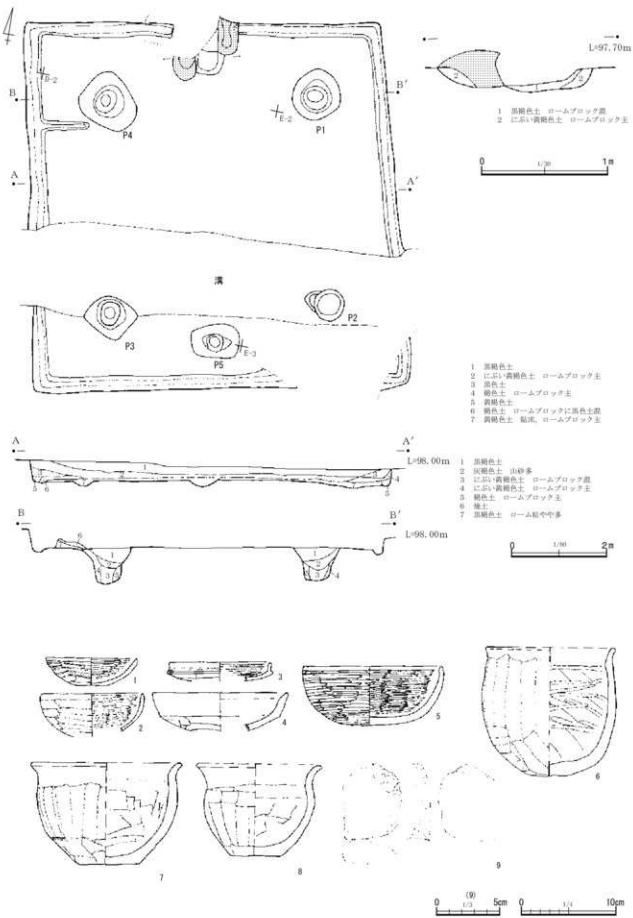
２号溝（第63・69図）　２次調査区の3B～2Eに位置し５号住居跡を切る。遺物はないが中世末以降か。

（2）出土遺物（第68図、図版22）

中世末から近世に到る陶磁器破片がみられた。いずれも小片である。図示したものは、中世末の備前の擂鉢口縁部（１）と、志野釉が施された皿口縁部（２）である。志野釉の施された製品は、江戸市中の近世初頭の遺跡からも多く出土している。他に、細片であるが、18世紀の肥前磁器などが確認できた。

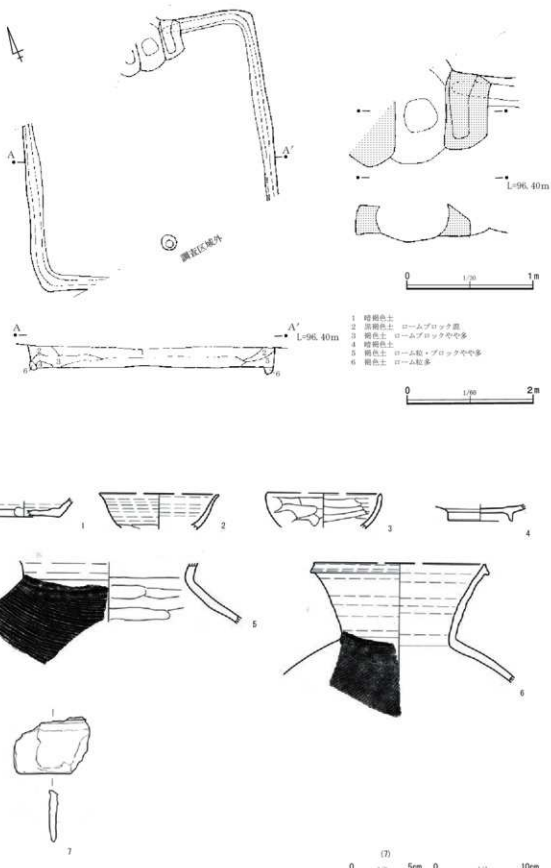

P1
P2
P3
P4
1号溝
L=98.0m
L=98.30m
1 明褐色土 山砂多
2 暗赤褐色土 山砂・地土ブロック混
3 赤褐色土 地山砂粒混、しまる
4 赤褐色土 地砂主体、ロームブロック混
5 暗赤褐色土 地砂主体、暗い
6 暗褐色土 固熱硬化ローム
1 褐色土
2 褐色土 黒み強い
3 暗褐色土 2より暗い
4 明褐色土 ローム塊混
(1号溝)
1 暗褐色土 黒褐色土にローム混
2 褐色土 ローム粒多
0 1/30 1m
0 1/80 2m
0 1/3 10cm

第64図　1号住居跡

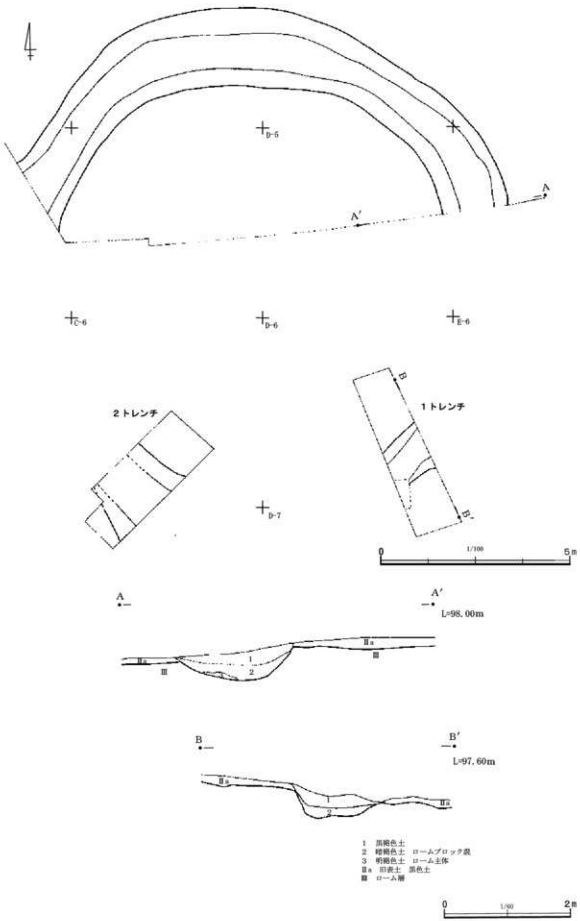


L=97.70m
1 黒褐色土 ロームブロック混
2 にぶい黄褐色土 ロームブロック主
0 1/30 1m
P1
P2
P3
P4
P5
E-2
E-3
溝
1 黒褐色土
2 にぶい黄褐色土 ロームブロック主
3 黒色土
4 褐色土 ロームブロック主
5 黄褐色土
6 褐色土 ロームブロックに黒色土混
7 黄褐色土 貼床、ロームブロック主
L=98.00m
1 黒褐色土
2 灰褐色土 山砂多
3 にぶい黄褐色土 ロームブロック混
4 にぶい黄褐色土 ロームブロック主
5 褐色土 ロームブロック主
6 焼土
7 黒褐色土 ローム粒やや多
0 1/80 2m
(9)
0 1/3 5cm
0 1/4 10cm

第65図　5号住居跡

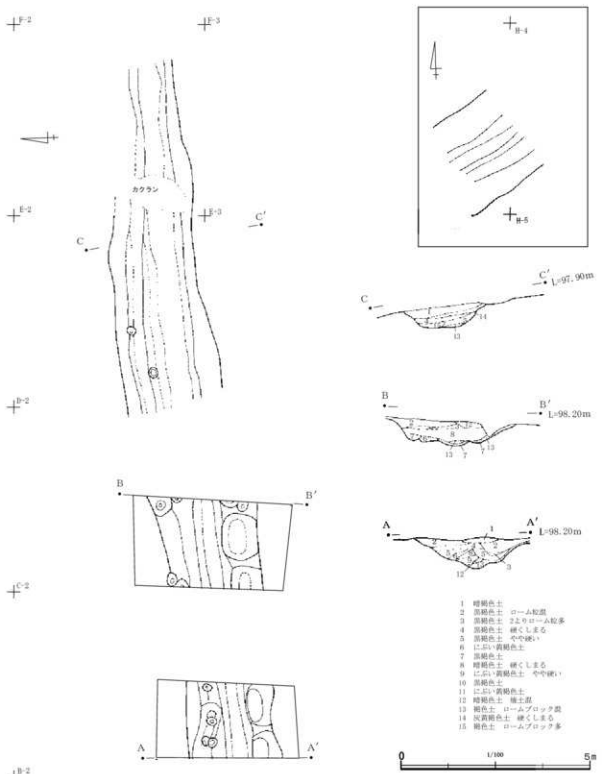

A
A'
調査区域外
L=96.40m
1 暗褐色土
2 黒褐色土 ロームブロック混
3 褐色土 ロームブロックやや多
4 暗褐色土
5 褐色土 ローム粒・ブロックやや多
6 褐色土 ローム粒多
0 1/20 1m
0 1/60 2m
1
2
3
4
5
6
7
(7)
0 1/3 5cm
0 1/1 10cm

第66図　6号住居跡


D-5
A
A'
C-6
D-6
E-6
2トレンチ
1トレンチ
D-7
0
1/100
5m
A
A'
L=98.00m
Ⅱ
Ⅲ
Ⅱa
Ⅲ
1
2
B
B'
L=97.60m
Ⅱa
Ⅱ
1
2
1 黒褐色土
2 暗褐色土 ロームブロック混
3 明褐色土 ローム主体
Ⅱa 旧表土 黒色土
Ⅲ ローム層
0
1/50
2m

第67図　1号墳

第68図　中・近世遺物



第69図　2号溝

第６章　西平台遺跡

１　概要

遺跡は事業地中央付近の比較的広い台地上に立地する（第４図）。幅60ｍほどの細尾根でつながる東西二つの台地を含み、旧字名は西側が西大滝・東大滝、東側が平台・西平台であった。現在はお花見広場・展望台広場・花木園・紫陽花園・梅林となっており、サイクリングコースが周回している。東側台地は標高98ｍの広い平坦面をもつ。その東端は標高99ｍとなって丘陵と急崖に至り、大網白里市の人工池である小中池を望む。九十九里水系の谷頭である。遺跡内にある標高101ｍの展望台からは遠く太平洋を眺望できる。西側台地は85ｍをピークに緩やかな馬の背状を呈し、標高95ｍ付近までが遺跡範囲として括られている。小支谷を挟んだ北側には枯木台南遺跡があり、北東端の細尾根は辰ケ台遺跡につながっている。この細尾根は「南総－北総回廊」の一部である。南西には村田川の谷の対岸に住吉遺跡が存在する。現在は公園整備に伴って地続きとなっているが、本来は比較的幅広い谷であった（第３図）。

遺跡のほぼ全体を細長くめぐる「サイクリングコース」の工事に伴い、昭和57年度に確認調査を実施した。調査時は「サイクリングコース遺跡」と仮称、東側を「西平台遺跡」、西側を「西大滝遺跡」としており、県分布地図では「西平台遺跡」と「東大滝遺跡」としている。昭和59年度には東側台地北端に20㎡の確認トレンチを２本入れ、縄文土器と古代の土器が出土したが確認調査で終了している。なお、終了確認文書の写しの存在から昭和55年度にも調査が行われているが詳細不明である。以上のように遺跡の範囲や名称の混乱が著しいが、今後は第4図の通りとする。調査状況写真がないため図版23に調査後の航空写真を示した。

調査の成果は、縄文時代、奈良平安時代、中・近世の遺物が少量得られたのみである。これは軽微な工事のみで全面が保護されたことによるものであり、遺跡の内容はほとんどわかっていないが、縄文時代早・前期、平安時代及び近世以降の土地利用を伺うことができた。

調査概要は以下の通り（第70図）。

第１次調査（昭和57年度）　調査区は設けず、道路予定地に幅の狭いトレンチを多数入れた。

第２次調査（昭和59年度）　西に下る緩斜面の標高95ｍ付近に２本のトレンチを入れた。

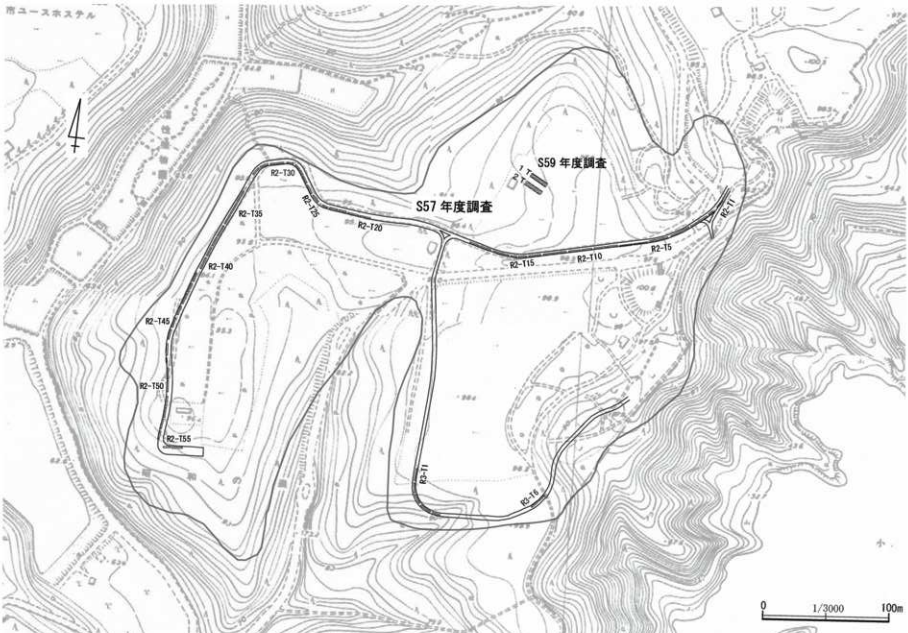
２　出土遺物

（１）縄文土器（第71図、図版23）

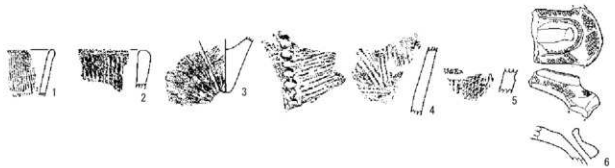
38点の縄文土器が出土した。早期前葉・撚糸文土器から前期後葉・諸磯式土器までが比較的まとまっており、中期後葉の加曽利Ｅ式土器、後期前葉の堀之内式、中葉の加曽利Ｂ式、晩期前半の土器が数点混じる。もっとも多いのは前期前葉～中葉だが大破片はない。第71図１・２は早期前葉・撚糸文土器であり、１は夏島式、２は稲荷台式である。３は早期中葉・田戸下層式中段階の底部、４は早期後葉・茅山下層式の口縁部である。５は加曽利ＥⅡ式の連弧文系である。６は後期中葉・加曽利Ｂ式の釣手土器の釣手部破片である。縄文施文の例は少ないであろう。昭和の森遺跡群では加曽利Ｂ２式を中心とした粗製土器が散見されるが精製土器はきわめてすくない。こうした器種がもちこまれることもあったことを示す貴重な資料といえる。

（２）縄文石器（付表３）

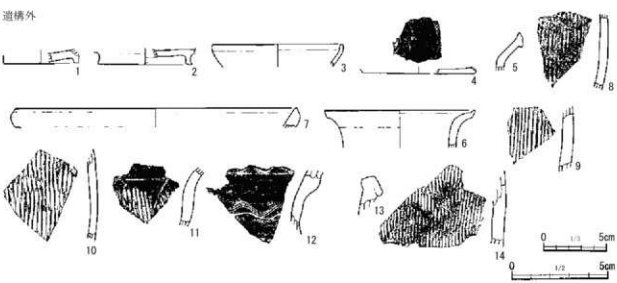
玉髄質岩の大形剥片１点と礫18点・576ｇが出土している。



第70図　西平台遺跡調査区



第71図　縄文時代遺物



第72図　奈良・平安時代遺物

（3）奈良・平安時代遺物（第72図）

土器のほとんどが細片としての出土であり、遺構に伴うものはない。14点を図化した。甕5～7は9世紀後半～10世紀前半とみられ、タタキ目のある土師器片もありこちらは9世紀後半以降と推定される。全体としては9世紀後半～10世紀前半とする。土器以外では古代瓦1点、砥石1点、鉄滓3点・253.6gが出土している（付表5）。瓦は体部凹面に布痕跡をもち、凸面はナデ調整されている。砥石は銚子砂岩製の大形板状砥石で、破損後にも破損面以外を砥面とする再利用が行われている。

（4）中・近世遺物

18世紀から近代の陶器破片が散見されるのみであった（付表7）。破片はいずれも小片であり、図示はしなかった。

第７章　住吉遺跡

１　概要

遺跡は事業地南半に位置する。住吉・東住吉・東住吉南の３遺跡は、小山町の広い台地上にあり、台地中央を南北に貫く旧道の東側が事業地となった。そのうち旧字住吉の部分が当遺跡である。北側には村田川水系の谷があり、公園はこの谷を人工池「下夕田池」として取り込んでいる（第４図）。標高は76m～82mと南に向かって徐々に高くなっているが、村田川北岸の西平台遺跡までに比べるとかなり低い。これは北岸が丘陵に接しているのに対して、南岸では丘陵との間に広い台地を挟むからなのであろう（第３図）。西側事業地外の旧字西住吉地区は低位段丘であり、遺跡西端は緩やかな段丘崖となっている。遺跡中央を北北西－南南東に通るあすみが丘から永田方面に続く道を挟んで西側をＡ区、東側をＢ区と呼称する（第73図）。Ａ区は58年と59年に調査しており、同一のグリッド配置を意図したものとみられるが、59年のグリッドは10mほどずれ、軸も北西－南東に若干ずれているため、別のグリッド配置として扱った（第74・75図）。以下は年度ごとの調査概要である。

昭和58年度　Ａ区の大半、17,000㎡の範囲のうち1,600㎡の確認調査を実施。住居7軒・土坑４基・溝４条、旧石器集中地点、土塁・空堀を検出したとされているが、記録類や文書から図示できたのは一部である（第74図）。

昭和59年度　Ａ区の西側斜面地約1,500㎡と、Ｂ区の全体23,000㎡のうち1,340㎡の確認調査を実施した（第73図）。Ａ区では対象範囲約1,500㎡のうち、約310㎡の確認・本調査を実施。溝４条と旧石器時代の石器集中地点３か所を検出したとされている（第75図）。整理作業の結果、石器集中は縄文時代の石器製作跡と礫の集中であった。Ｂ区では縄文時代前期・後期の住居６軒、早期の土坑４基、奈良・平安時代の住居跡１軒、中・近世の土塁・空堀２基・溝１条を検出したとされている（第76図）。確認調査のみで終了し、昭和61年度に一部本調査が行われている。

昭和61年度　昭和59年度に確認調査を実施したＢ区の中央を南北に縦断する第Ⅰ地点・園路部分（720㎡。幅６～７m、延長110m）と、第Ⅱ地点・休憩舎建設予定地（約70㎡）の２か所、合計790㎡について本調査を実施した（第73図）。縄文前期前葉・関山式期の住居跡１軒、縄文時代の陥し穴８基（溝型２・楕円型６）、中・近世の溝１条、時期不明の土坑７基を調査しており、遺構外からは関山式土器と縄文時代早期中葉の沈線文土器、後期前葉の堀之内１式土器が多数出土している。報告書刊行済みである（寺門1989）。

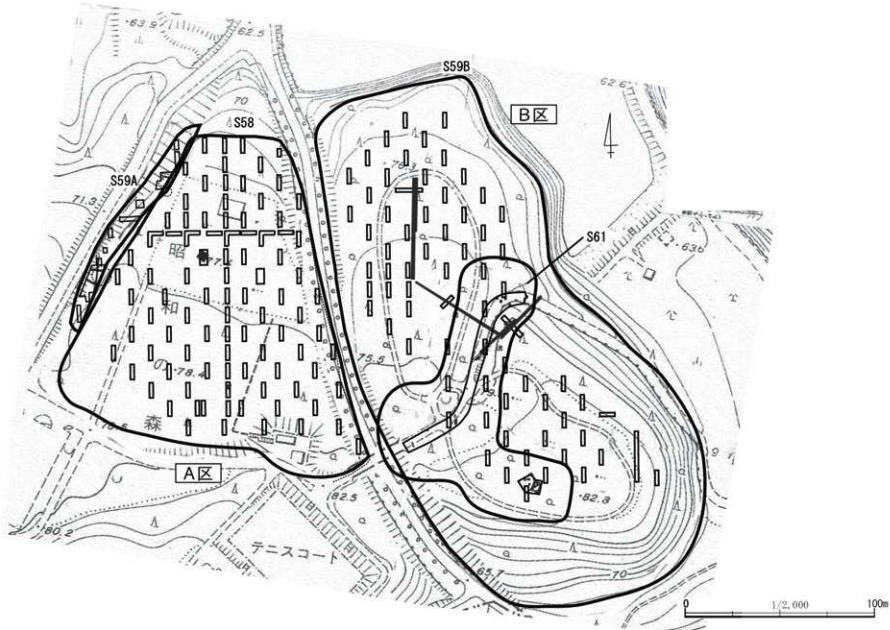
２　縄文時代

調査時点で旧石器時代の石器集中地点として調査された資料群は、いずれも縄文時代のものであった。掘りこみを有する遺構は検出していないが、11Ｃ区の石器集中を石器製作跡として報告する。

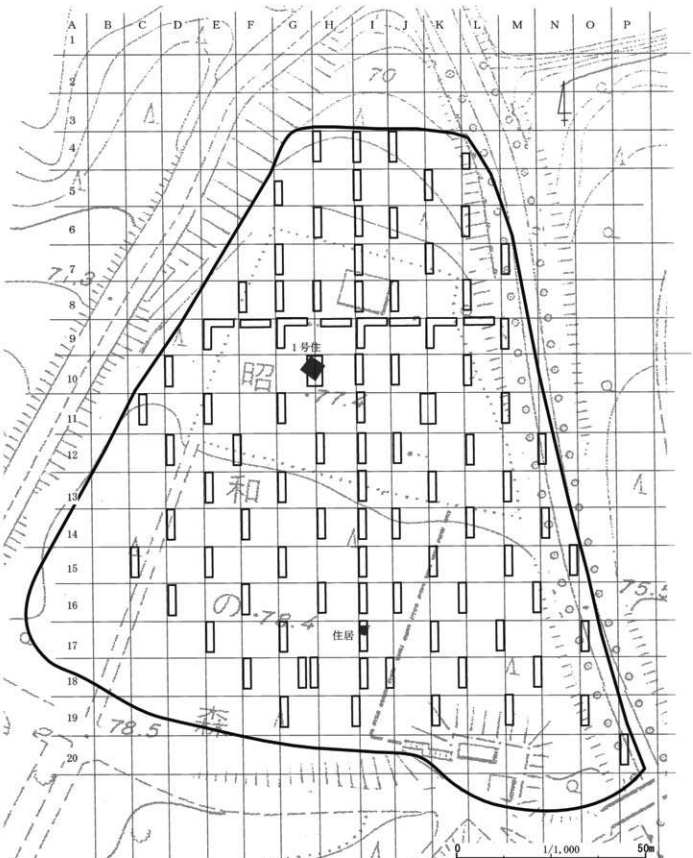
（１）11Ｃ区石器集中（第77図、図版24）

59年度Ａ調査区の西側緩斜面（第75図）の10m×７mほどの範囲から、縄文石器と１個体分の土器がまとまって出土した。包含層を切る１号・３号・４号溝や、隣接グリッド出土の石器も一括資料に含めた。

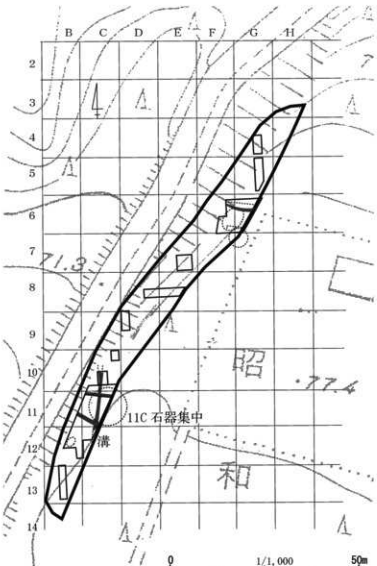
遺物内容（第80図90、83～85図、巻頭図版２・図版29・30）（２）（３）に記載する内容をまとめると、出土したのは破砕礫・剥片類208点、台石１点、叩石３点、磨石１点、礫３点と早期末葉の土器１個体である。土器は口縁から底部までの破片が多数出土しており、早期末葉・入海Ⅱ式並行の県内で出土例の少



第73図　住吉遺跡調査区（1）全体



第74図　住吉遺跡調査区（２）昭和58年度

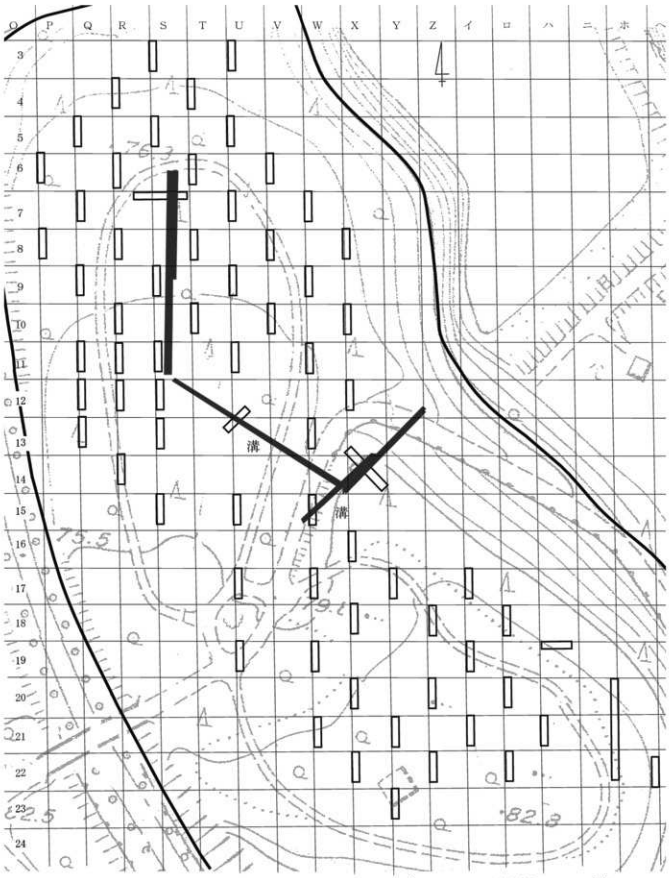


第75図　住吉遺跡調査区（３）昭和59年度Ａ

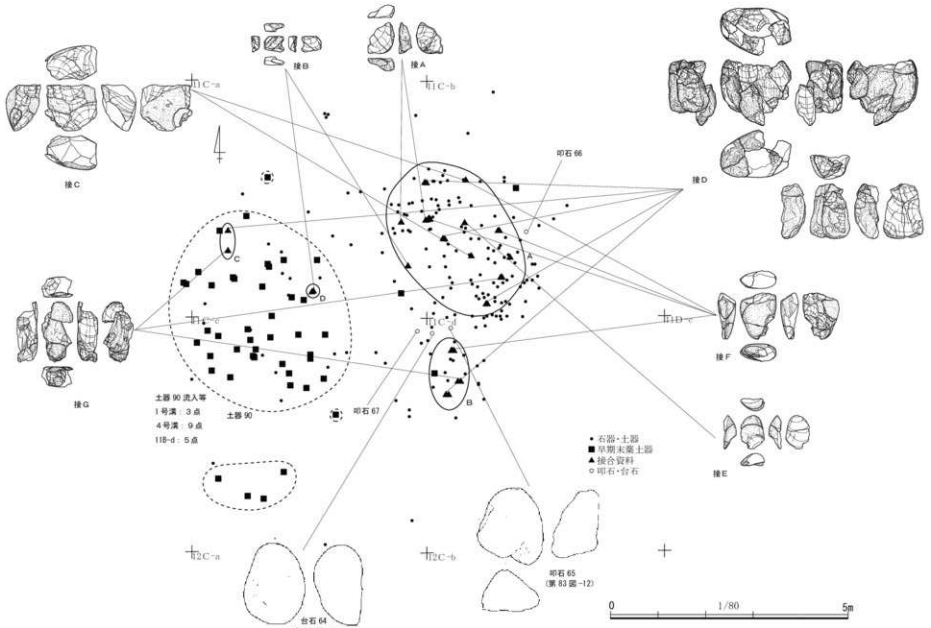
ない貴重な資料である（第80図90）。持ち込まれた礫は角閃岩と変質ドレライトを中心としており、ホルンフェルスや砂岩が混じる。角閃岩と変質ドレライトは接合資料がある。これらの資料が近接して発見されており、台石と叩石と使って礫を打ち割った場所ととらえることができる。その目的は石斧（礫斧ないし礫石斧）の素材を得ることにあったとみられるが、必ずしも良い素材がとれていないようであり、この場で研磨加工などが行われた証拠は見当たらない。

出土分布（第77図、図版24）　関連資料は10m×８mの範囲から出土しており、いくつかのまとまりがみられる。第77図の■は土器、▲は石器接合資料、○は叩石・台石、・はその他の点上げ遺物の出土位置を示す。石器接合資料は3.2m×2.2mほどの範囲から14点が（Ａ）、１m南側から６点が（Ｂ）出土した。やや西側に離れた場所からも３点出土しており（Ｃ・Ｄ）、土器の出土範囲に含まれている。Ａ～Ｄは相互に接合関係がある。台石・叩石はＡとＢの間から３点が近接して（図版24）、Ａの東側から１点出土している。この状況からみて、Ａ・Ｂの付近で礫の打ち割り作業が行われたとみてよいであろう。土器は小片が多く、有文30点の内訳は早期後葉が23点に、早期前葉１点、前期後葉４点、前期末１点、中期中葉１点が混じる。唯一の復元個体90は、同一個体の破片が4.4m×3.6mの範囲に集中し、その周辺や溝からも出土している。この個体以外の土器小片も早期後葉が中心で前後の時期が混じらないことから、90の土器は石器製作の年代を示すものと考えられる。

石器群の性格　（３）の記載は石器群の製作技術的な観察・検討が不十分だが判明した事実から簡単な所見を述べておく。早期末葉に、この場所に土器と礫、ハンマーが持ち込まれ、礫の打ち割りが行われたものとみられる。礫斧の素材を得ることが目的の一つであり、ある程度形状を整えるところまで行い、素材は持ち出されたものと推定される。その際、土器１点が破損したか意図的に破壊されて残された。主要な石材の産地は、角閃岩が茨城北部の日立市方面、変質ドレライトが新潟県北部の奥三面遺跡方面と推定される。土器は東海系とみられ、西関東～東海方面から持ち込まれた可能性がある。多方面に由来するものが一括出土したことや、なぜこれほどのものがこの地に持ち込まれ、この場で作業を行ったのかなど、資料のもつ意味は明らかにできないが、しばしば北・東関東や西関東と東京湾沿岸の流通拠点となった土気



第76図　住吉遺跡調査区（4）昭和59年度B



第77図　11C区石器集中

地区の特質をものがたる資料といえる。

（2）縄文土器

4,691点と多数の縄文土器が出土している（付表２）。早期から晩期まであり、早期前葉から前期末と中期後半から晩期終末までが連続している。長期間にわたって断続的な土地利用があったと推定される。土器の出土数のピークは関山式期だが、沈線文土器、条痕文土器、堀之内式土器もかなりまとまっている。未掲載も含めた点数は沈線文451点、条痕文387点、関山937点、堀之内314点である。調査区でみると55年度Ｂ調査区で1,978点と全体の84％が出土しており、これはどの時期も同様である。遺構を伴わないため復元個体は少ないが、３点を巻頭図版２に示した。

出土状況　なお、掲載資料のうち注記に住居跡とあるものをみると、①59A-12Cから加曽利Ｂ式１点、②59B-06Rから加曽利Ｂ式１点、③59B-08Xから関山式１点、堀之内１式４点、加曽利Ｂ式１点、④59B-20Zから関山式９点がある。確認トレンチで検出した落ち込みから取上げたものとみられる。③は複数の時期が混じっているが（第82図146～148、156）、保存状態の良いものがまとまっているので、堀之内1式の遺構の可能性がある。④は第80図97・99～101、第81図112・114・117・120・125が出土している。関山１式と２式が混在するが、関山式の遺構が存在した可能性が高い。

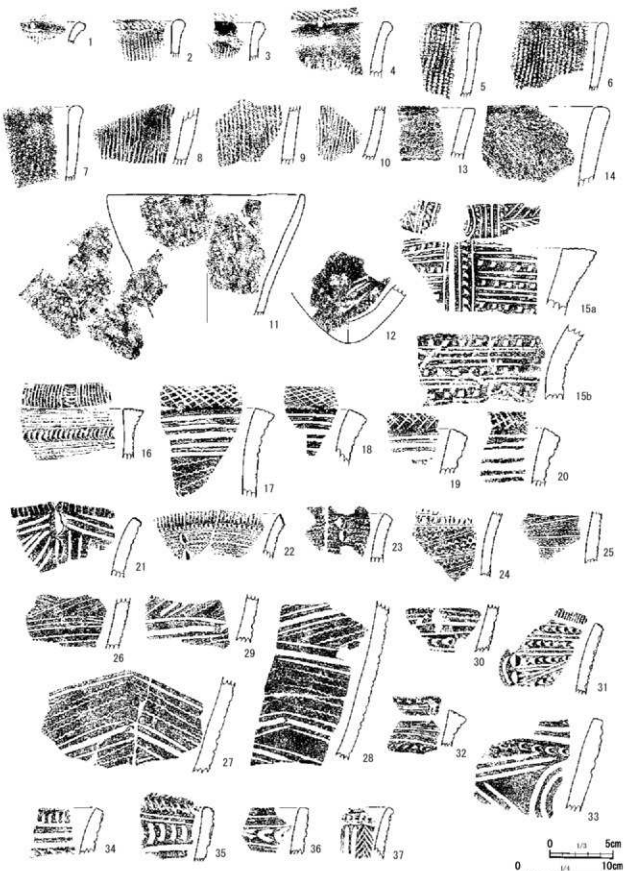
点数の多い時期の分布傾向をみると、59Bの南部は沈線文土器・条痕文土器・関山式が共通して多い。そのほかでは沈線文土器は59Aの北部、条痕文土器は59Bの北端部と59Aの南部、関山式は59Bの北部に多い。

早期前葉（第78図、図版25・28）

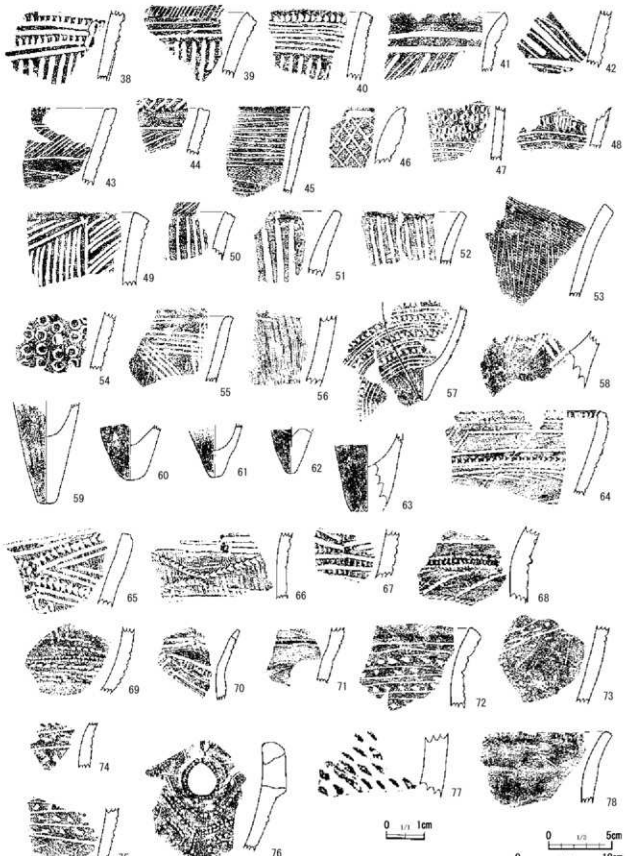
１～14は撚糸文土器である。１～４は井草式で、口縁部が肥厚し、口端ないし口頸部に原体圧痕をもつ。１は口縁が強く外反して口端・口頸に撚糸原体を押圧する。２～４の肥厚はわずかで口端や口縁外面上端に縄文を押圧する。５～11は夏島式。５～７は口縁円頭状、８～11はこの時期の胴部破片である。12は撚糸文土器の底部である。13・14は撚糸文系の終末に位置づけられる天矢場式で、口縁は角頭状、外面は削痕、口端～内面はナデ調整される。

早期中葉（第78～80図、図版25・26）

15～77は沈線文土器とこれに共伴する押型文土器である。15～63は田戸下層中段階の土器である。口縁の作りや文様がシャープで、丁寧に器面調整がなされている。色調は断面も含めて橙褐色が多いが、15・31は砂粒を多く含み色調がやや白っぽい。15～23に口縁部を集めた。口縁の内面は直線状かわずかに緩やかなカーブをもつ。15～20のように外面が広がり、平坦な口端部に幅広の文様帯をもち、細沈線文を施すものがまとまっている。21以外は平縁である。15・16はとくに幅広い意匠文をもつ。15a・bは同一個体で、分厚く大きな土器である。16は爪形文が付加され、沈線は細く深い。17～20は口端部に格子目文をもつ。口縁部文様帯は横位の集合沈線に連続刺突が付加される。15は縦区画をもつ。17～20の集合沈線は３条目に太沈線となる点で共通する。その下部には17・18でフネガイ科腹縁文が付く。21～23・31・33～37の口端は広がらず、21・23・31は角頭状、22は外削ぎ状。狭い口端部に21・22・31は短沈線を充填、23は無文とする。32は口端が広がり沈線と刺突文をもつが施文は粗い。33～36は口端がやや窄まり丸みをもつ。33は波状口縁である。21～36までの口縁部から胴部には太沈線・細沈線によって多段の文様構成をもち、斜位に展開するものが多い。フネガイ科腹縁文や細沈線、爪形文を集合充填するものが多く、粘土の高まりを残した爪形文で縦位の区画をもつものも多い。なお24は天地逆である。37は小形土器で、太く浅い２条の沈線＋刺突文により横位に、太沈線により縦位に区画して、細沈線による綾杉文を充填する。38～49は文様構成がやや単純化したもので、向を変えた集合沈線を方施文する。沈線の引き方はやや雑である。横位沈線区画内に短い沈線を充填するもの（43・44）、刺突文を充填するもの（47・48）、格子目文をもつも


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
13
14
11
12
15a
15b
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
29
30
31
27
28
32
33
34
35
36
37
0
1/3
5cm
0
1/4
10cm

第78図　縄文土器（1）


38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
0 1/1 1cm
0 1/2 5cm
0 1/4 10cm

第79図　縄文土器（2）

の（46）などがある。43と44は一緒に取り上げられている。口縁部はやや開くもの（41）や、膨らみをもつもの（46）があり、すべて平縁。50～53は縦位の沈線のみと単純な構成で沈線の施文も粗い。53のみ波状口縁。54～56はこの段階に位置づけられると考えられるもので、54は縦位の円形刺突文を満たしていくもの、55は条痕によるもの、56は強い擦痕のつくものである。57～63はこの段階に位置づけられる尖りのつよい尖底部を集めた。57は小形土器の胴部以下が復元できたもので、横位の沈線間に刺突を充填する。

64～75は田戸下層最新段階の土器である。口縁部は内弯するものや（64・65・69・71）、厚さやカーブが途中で変化するもの（70・72・74・78）になり、口端は丸みを帯びる。65・70・76のように波状口縁の割合が高い。器面調整は大まかになっており、65～67のように表面に縦位の条痕やハケメを残すものが混じる。色調は橙褐色が多いが、胎土は黒いものが主体である。文様は、細沈線と結節沈線・押引文があり、方向が揃っていないものが多い。沈線間に刺突を充填するもの（72～75）は前代にも見られるが沈線は粗雑で胎土に繊維を含む。64～69は先端剣先状の多截竹管を使っている。64・68・69は結節沈線と押捺をもつ微隆起線による区画文・意匠文をもち、短沈線やフネガイ科腹縁文が付加される。65～67は太沈線と幅広の結節沈線または連続刺突で菱形の文様を描く。太沈線ははみ出した粘土をそのまま残すのが特徴である。70も多截竹管による粗雑な文様をもつ小形土器である。71は小さな貝殻の腹縁押圧を繰り返して文様を描き、一部は微隆起状になっている。72～75は粗放で間隔の広い集合沈線の間に刺突列を充填するもの。口縁部は横位に、胴部下半は斜位の文様となっている。76は田戸下層新段階または田戸上層式である。波状口縁の頂部に高く盛り上げた円孔をもつ。2列の結節沈線により微隆起線意匠文間に結節沈線意匠文を充填する。77は楕円型押型文を施文した細久保式。胎土に白色鉱物混じる。なおこの図のみ原寸である。92は赤彩を施した浅鉢形のミニチュア土器である。丁寧に成形・施文され、内面はとくに入念に磨かれている。口縁は角頭状で口端に斜向する短沈線を施す。口縁は横位、胴部は斜位の沈線と剣先状結節沈線を集合させる。赤色顔料は過剰な洗浄もあって、口縁の結節沈線内部のみ確認できる。ベンガラとみられる。文様と出土土器構成から田戸下層式か。

早期後葉・末葉（第79・80図、図版26）

78～87は早期後葉の土器であり、すべて胎土に繊維を含む。78～80は子母口式であろう。無文（78・79）と粗放な沈線意匠文をもつもの（80）である。79は波状口縁で焼成後の穿孔がある。80の文様は木葉ないし魚骨に似た印象である。81～85は茅山下層式である。81は無文で、条痕文をナデ消している。82は波状口縁の把手部分であり、口縁に沿ってと刻み隆帯を囲んで押引文を施文する。83・84は頸部下端の張り出し部分で外面は条痕上にRLを施文、内面は条痕が重畳する。同一個体の可能性があり、83は上下逆の可能性が高い。85は波状口縁がわずかに遺存するもので外面は条痕のみ、内面は粗いナデ調整。86～90は早期末葉の土器である。86は波状口縁に隆帯で狭い文様帯を形成し、フネガイ科腹縁文を２個一組で施文する。87は刻み隆帯と絡状体圧痕文をもち、内面は条痕が残る。88は尖底部である。

89～91は早期末葉の土器である。89・90は東海系の土器とみられる。89は上ノ山式、90は入海Ⅱ式並行であろう。89は半截竹管内側による集合沈線で格子目文を描く。口唇は交互押圧を施す。90は前述した11C区石器集中に伴う土器であり、第77図に出土状況を示す。復元はごく一部にとどまるが、口縁から底部までの破片が多数出土している。わずかに内弯する平縁平底の深鉢であり、胴部下端はやや飛び出して底部は薄く、編組成品の圧痕が付く。器面は内外とも粗いナデで凹凸があり、とくに底部は顕著で手捏ね風である。文様は７本歯の櫛状工具を斜めに押し込み、下側に引いて施文して鋸歯状文を胴部全体に施す。器壁は薄く繊維は含まない。91も早期末葉の土器であろうか。波状口縁に３段の横位隆帯をもつ。

前期（第80・81図、図版26・27）

93～130は前期初頭から前葉の羽状縄文系土器であり、胎土に繊維を含む。93～96は花積下層式である。93～95は折り返し口縁の土器で、口縁を厚くつくる。93は口縁下端に幅広の押引文、口唇上は刻みを入れる。平行撚糸側面圧痕を95は縦横に、94・96は斜めに施文し、95は短沈線を充填する。96は折り返しをもたない大きな波状口縁の土器で、平行撚糸側面圧痕でジグザグ意匠を描く。波頂部から垂下する隆帯が欠損している。97～109は関山Ⅰ式で、刻み隆帯、円形貼付文、撚糸側面圧痕文が特徴である。口唇形態は多様である。区画は刻み隆帯によるもの（98～101・105～109）が多いが、沈線＋刺突によるもの（102～104）もある。101は刻み隆帯に撚糸側面圧痕が、98はハの字状の刺突文が沿う。97は大きな波状口縁をもつもので、平行撚糸側面圧痕により口縁直下を区画し、さらに縦・斜めに区画する。撚糸側面圧痕は98～100・102でループ状の意匠を描く。地文は97が組縄、98・101が羽状縄文、102～104・108は末端環付縄文、106は末端環付＋羽状縄文である。99・100・105・107～109は地文をもたず刺突文を充填する。

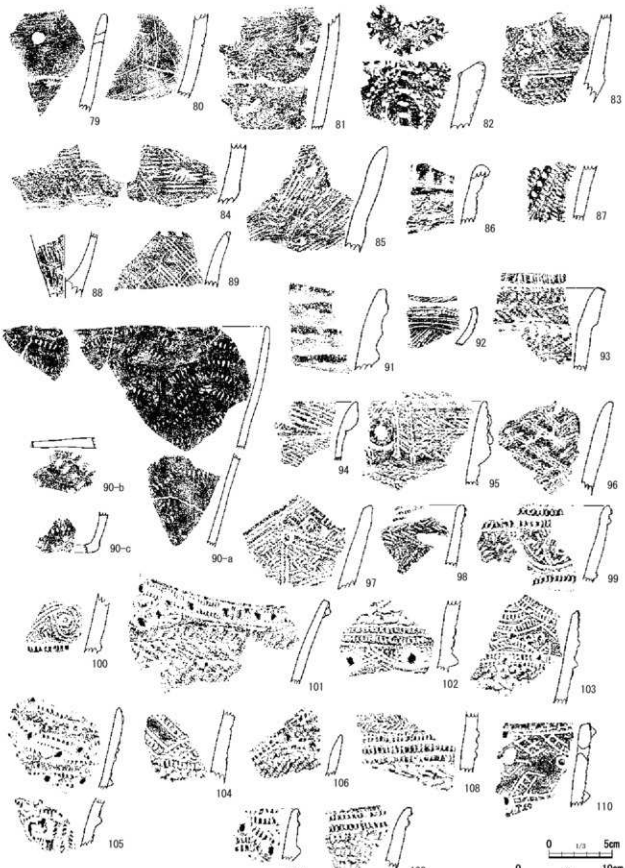
110～122は関山Ⅱ式であろう。口唇形態は内削ぎ状が多い。区画は沈線＋刺突によるもの（110・112・113・115・117・119～121）、１本引きの沈線のみのもの（114・116・122）、半截竹管管内痕を残す平行沈線のもの（118）、区画をもたないもの（111）がある。意匠文も同じ手法をとり、口縁部文様帯には縄文をもたず、短沈線（111・115・118・120・121）や刺突文（112・117）が充填される。123は口唇の丸い単節縄文のみの口縁部で、関山式か。124～127は関山式の胴部破片である。124～126は末端環付縄文、127は結節回転文が多段に施文されている。128は羽状縄文をもつ底部で、底面にも縄文を施文する。関山式または黒浜式であろう。129・130は黒浜式の口縁と胴部であり、半截竹管内側で口縁部に２条の押引文区画を行い、胴部に斜行する平行沈線を施文する。横位の区画では管内痕が付いている。131は浮島Ⅰ式であろう。撚糸文施文→櫛描沈線により上部を横位区画→縦位区画→斜位に充填→短沈線により縦・横の区画という順で文様を描く。撚糸文と縦位の櫛描文は、施文はきわめて弱くその後の施文で痕跡的である。132～134は十三菩提式のトロフィー形深鉢である。59A調査区の北側の拡張区の5G・6Fから出土している。132・133が口縁部付近で、134は胴部から括れ部で、接合しないがこのような位置関係になると推定される。口縁は比較的緩い波状口縁で内屈し、口縁部下端の張出し以下は徐々に窄まって括れ部に至る。以下は広がりつつ底部に至る。半截竹管を４本束ねた工具の内側を器面にあてて押引き意匠文を多段に描く。その後口唇直下と意匠文の間隙に印刻文と、括れ部の上の横位沈線を加えている。括れ部上の段には粘土の移動による高まりがある。押引文は管内痕を残し、上部では屋根瓦状を呈す。下部では構成と施文が雑で間隔が広くなっており、上部から下部へという施文順を示唆する。括れ部の破片の内面のみ被熱黒変しており、煮炊きに使われたのであろう。135も6Fから出土しており、前期後葉であろう。136～139は前期末～中期初頭の大木式系土器の破片である。136は結節回転文が斜向している。

中期～後期初頭（第81・82図、図版27）

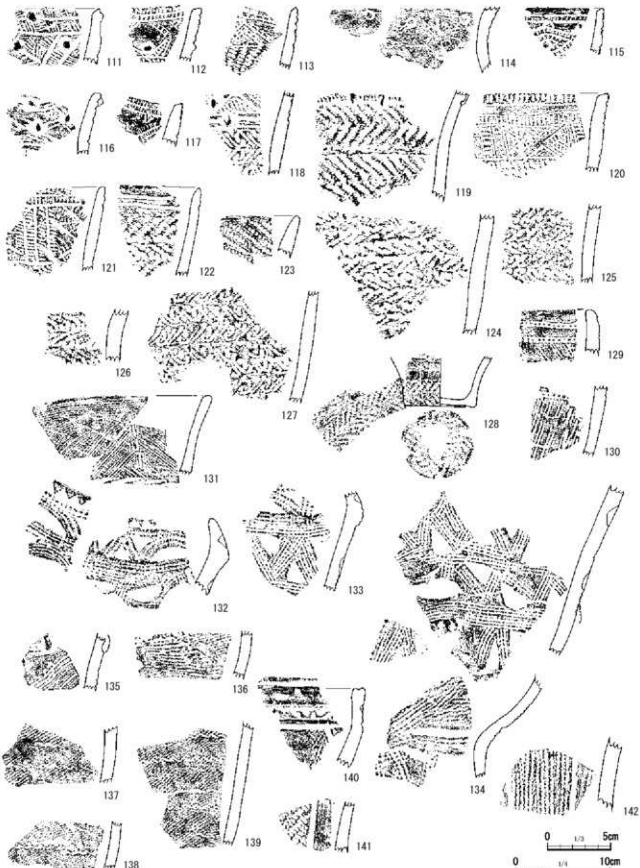
140～143は中期後半の加曽利E式土器である。140は胴部の一部のみRLを縦施文後、沈線を垂下。口唇上に沈線を施す。143は単節RLをきれいに縦施文し、磨消をしない。以上はEⅠ式、141・142は比較的幅狭の磨消縄文をもつEⅡ式であろう。144は横向きの橋状把手をもつ小形土器であり、顔料容器に使われる例が知られるものである。この個体も内面に黒色塗膜がわずかに残る。漆の可能性が高い。外面には赤色顔料がみられる。類例から後期初頭・称名寺式期であろう。

後期前葉（第82図、図版27・28）

145～158・173は後期前葉・堀之内１式である。145・146・148は綱取式土器の系譜をひく口縁部無文帯を省略した類型である。147・149は綱取式土器の系譜をひく類型、150・151もおそらく綱取式土器の系譜をひく類型であろう。149～153の沈線は器面の比較的軟らかい段階で施される。154は指頭圧による円形


79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
91
92
93
90-b
90-c
90-a
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
106
108
110
105
107
109
0 1/3 5cm
0 1/6 10cm

第80図　縄文土器（3）


111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
0 1/3 5cm
0 1/4 10cm

第81図　縄文土器（4）

押捺が口縁端部に巡る個体で、半精製的な個体であろう。155は円孔のある山形口縁を有する個体で、口縁下に縄文が施される。器面の比較的軟らかい段階で太い単沈線で意匠が施されている破片が主であることから、堀之内１式期の中段階の所産で、５段階細分でのおそらく第３段階のものと思われる。

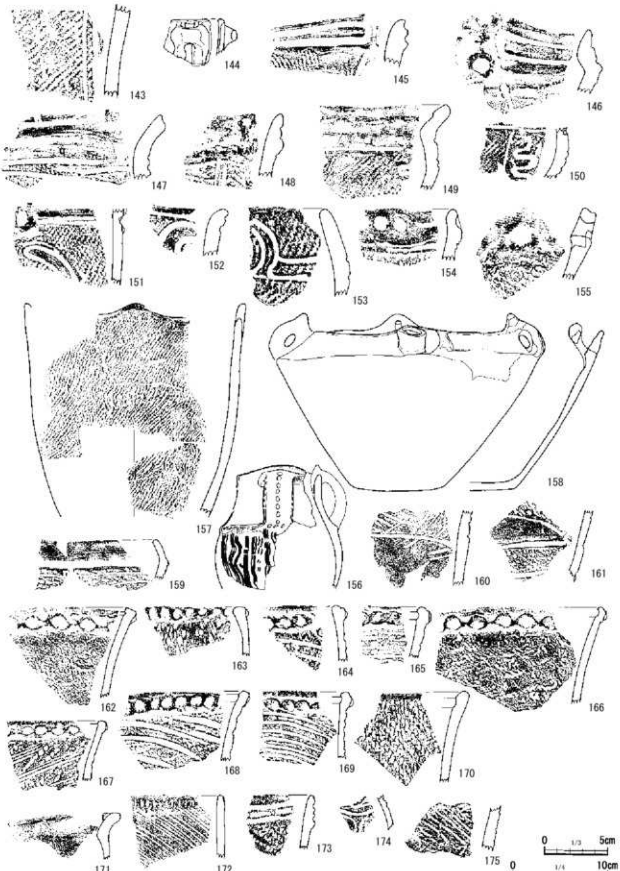
156は口径が体部最大径に比して明瞭に劣る壺形の個体である。無文の口部と竹管状工具による縦位の疎らな懸垂文が施される体部は、隆帯風の効果と刺突列を有する凸帯によって画される。凸部から連なるように縦位の橋状把手が作出され、把手側面にも同様の刺突列が施される。橋状把手下端には横位の、橋上把手中央部には縦位の刺突列が施される。内面の調整は横位のケズリ後にやや丁寧なナデ調整が施され、体部器表面における半精製的な印象との齟齬がある印象を受ける。時間的な位置づけについて、本遺跡から出土している後期前半の破片から、堀之内１式期の中段階の所産で、５段階細分でのおそらく第３段階のものと思われる。158は４単位の注口付き鉢形土器もしくは注口付き浅鉢形土器で、注口部左側の単位部は欠損している。焼成は全般的にやや甘い。比較的粗雑な成形・整形の注口は内屈する口縁部に付着する。注口と口縁部の接続に係る調整は不完全な印象があり粗雑である。口縁部の断面は内湾し、口唇面外端と頂部は比較的雑な面取りがなされる。注口部背面の口縁部は波状を呈するように見受けられるが、これは注口自体の背面から注口右側へ連続する横向きのC字状の隆帯上の効果によるものである。この横向きのC字状の隆帯風の効果は、称名寺式期終末に散見される注口付き浅鉢形土器からの系統的変化（形骸化）をうかがうことができる。具体的には注口部とその上部付近に施される所謂C字状貼付文もしくは捻転状C字状貼付文からの系譜であろう。なお、称名寺式期終末における好例としては、横浜市都筑区三の丸遺跡例（石井1982）などが挙げられよう。注口部右側の単位部は横断面が内湾する縦位橋状把手で、口縁部と体部を画する隆帯上の効果から連なるように成形される。把手上部と下部には円孔が施される。上部の穿孔部は山形状に上部に突出する。注口部に対向する単位部は、貼付けが剥離している。単位部の左上口縁部は山形状もしくは波状を呈するようである。個体全般にわたり整形はやや粗雑な印象があり、体部は棒状工具によるタテ方向のミガキ調整である。体部上半には黒色の煤の付着が認められる。体部内面下半は黒色化が認められ、底面のみ器面の剥離が進行している。本個体は、器種としては中期以来の浅鉢形土器の伝統のなかにありながら、称名寺式期における複数の系譜関係からの影響や、被熱をうかがうことができるなど、粗雑な成形・整形すなわち形骸化の評価を含めたところで、後期における器種分化や土器使用における行為を知るうえで、貴重な個体であると言えよう。時間的な位置づけについて、本遺跡から出土している後期前半の破片から、堀之内１式期の中段階の所産で、５段階細分でのおそらく第３段階のものと思われ、時間的位置づけを明確にすることができる貴重な例であると言えよう。

後期中葉～晩期（第82図、図版28）

159～161・171は加曽利B式の精製土器である。159は口縁の無文帯下に段をもち横位沈線間に列点文を充填する。161は沈線意匠文内に縄文を充填する。以上は加曽利B2式前半の土器。171は波状口縁の小形無文土器で、全面を丁寧に磨き内面に刻み突起を付ける。160は粗放な斜向沈線の後に横位沈線区画を行っている。以上の２点は加曽利B2式の中位のもの。162～170は加曽利B式の粗製土器である。接合する162・166と167・170は加曽利B2式、163～165・168・169は加曽利B3式である。172は曽谷式～安行１式の粗製土器であり、条線と刻みをもつ。174は小形の壺形土器であり、赤彩され胎土は異質である。後期中葉～後葉の土器か。175は原体の不明な縄文がついており、土器とは思えないほどに軽い。時期不明であるが掲載しておく。

（３）石器・石製品（第83～85図、図版29・30、付表３）

石製玦状耳飾１点、石鏃７点、磨製石斧１点、石皿・台石類３点、磨石類21点、石斧製作関連の接合資


143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
157
158
159
156
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
0 1/3 5cm
0 1/4 10cm

第82図　縄文土器（5）

料７組25点、剥片類245点、他の製品１点、旧石器13点の計317点と、礫1,828点が出土している。礫を除くと、早期末葉の石斧製作関連資料とみられる11C区出土が214点と圧倒的に多い。ややまとまっているのは59年度Bの21イ区の23点、21ホの７点の剥片類で、それ以外は散在したものである。

旧石器（第83図、図版29）　風化や形態から旧石器と推定したものが13点あり、内訳は尖頭器１点（１）、片面加工石器１点（２）、加工のある剥片２点、石核１点、剥片８点である。石材はガラス質黒色安山岩が４点、玉髄質岩が３点ある。１は大きな石刃の主要剥離面を残し、一面の側縁から下端を剥離したものである。土気地区の後台遺跡から出土した「神子柴型石斧」に似るが厚みがなく、研磨はみられない。

石製品（第83図、図版29）　10は含メノウ脈軟質凝灰岩製の玦状耳飾である。スリットと穿孔部を含む約半分が遺存する。径23㎜、厚さ9.4㎜と小さく厚い。穿孔は両面。色調は乳白色で風化著しい。

石鏃（第83図３～８、図版29）　凹基形６点と未成品１点がある。チャートが５点を占める。石鏃の主要素材はチャートであり、50点と黒曜石の５点を大きく上回る。おもにチャートの小礫を挟み割り（両極打撃）素材で石鏃を製作していたとみられる。

石錐（第83図９、図版29）　チャート製で細長い剥片の半分に調整を加えている。先端に使用による摩滅が認められる。

磨製石斧（付表23）　ホルンフェルス製で刃部がわずかに確認できる。薄い剥片状で一面に砥面をもつ。刃部再生剥片を砥石に転用したものであろう。

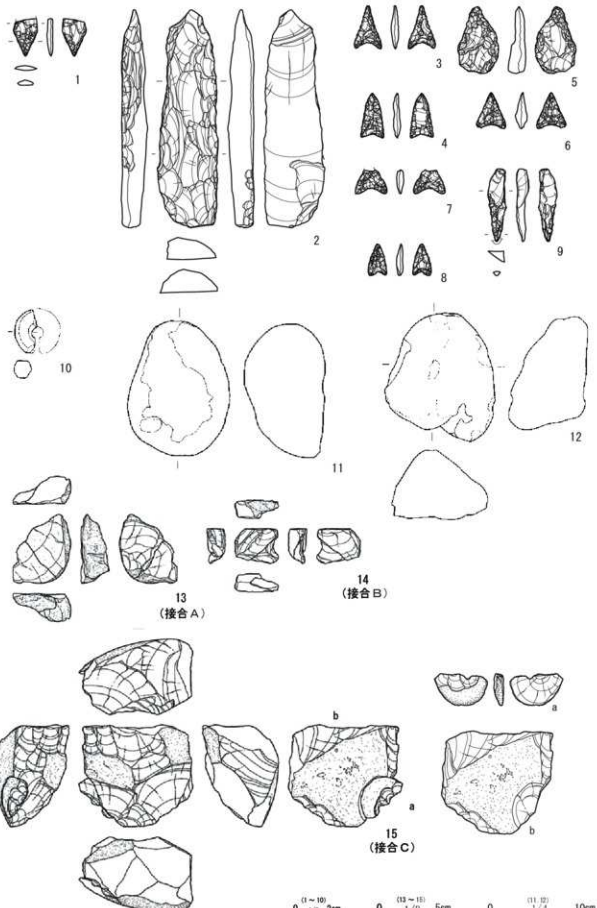
磨石類（付表26～42）　安山岩製が６点、砂岩製が５点とやや多い。形状は不整形礫と楕円礫が中心で棒状や四角柱が混じるなど多様である。

11C区石器集中及び関連資料（第77・83～85図、巻頭図版２、図版30）　石斧製作に関わる資料である。11C区出土の214点のうち、208点が破砕礫・剥片類であり、それ以外は台石１点、磨石類５点に過ぎない。礫も３点のみである。剥片石器や礫を伴わないことが特徴といえる。

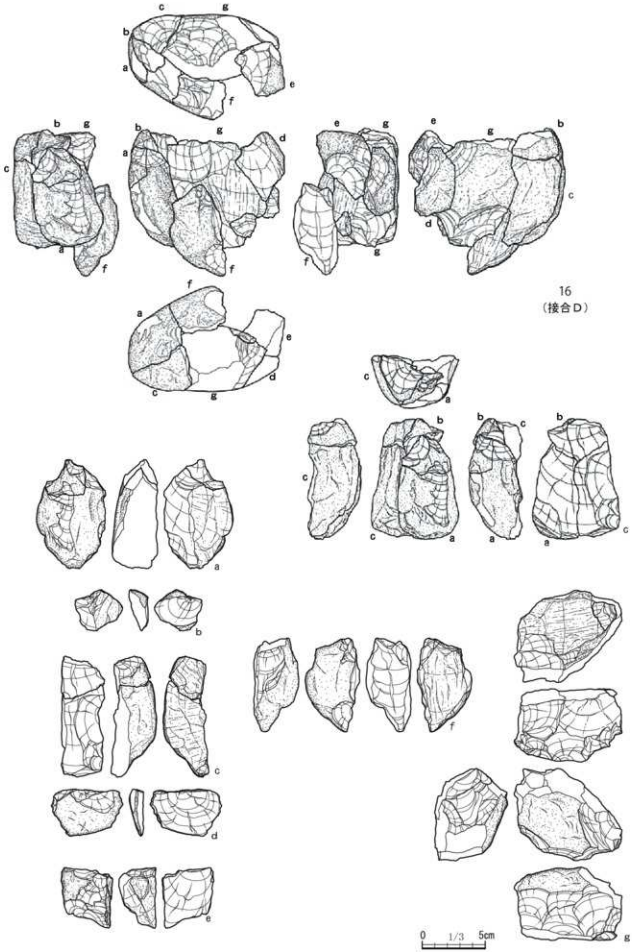
接合資料と剥片類　破砕礫・剥片類の石材は角閃岩57点、変質ドレライト51点が双璧であり、ホルンフェルス27点、砂岩20点がややまとまっている。このうち、石斧製作に関わる可能性が高いのは角閃岩である。接合資料はA・B・D・F・Gの５組あり、石材の特徴は酷似している。そのうち、接合F（第85図18）は片面がほぼ全体平滑に研磨され、もう一方では破面を研磨している。刃部や明確な加工痕は観察できないが、形状や石材の特性から、礫斧またはその未成品の可能性がある。ただし、さらに打ち割りを行っており、石斧の製作以外の意図があったと推定される。接合D（16）は10点が接合した。長さ20cm程度、幅15cm、厚さ９cmの大きな礫を打ち割っている。接合Cは変質ドレライトの大きな焼け礫を連続剥離しており、剥片１点が接合した。両面に自然面が残る。充分礫斧の素材となりうる大きさだが、厚みを減じるのが難しかった可能性がある。接合Eは挙大の安山岩礫の剥片２点が接合したものである。ホルンフェルスと砂岩も礫を打ち割っている。剥片状のものが主体である。

剥片類のサイズ（長さ）をみると、変質ドレライトは平均37.2㎜、角閃岩は同28㎜で、20㎜以下の小さなものも多い。素材の荒割りの後、形状を整える段階の打ち割りも行われた可能性がある。

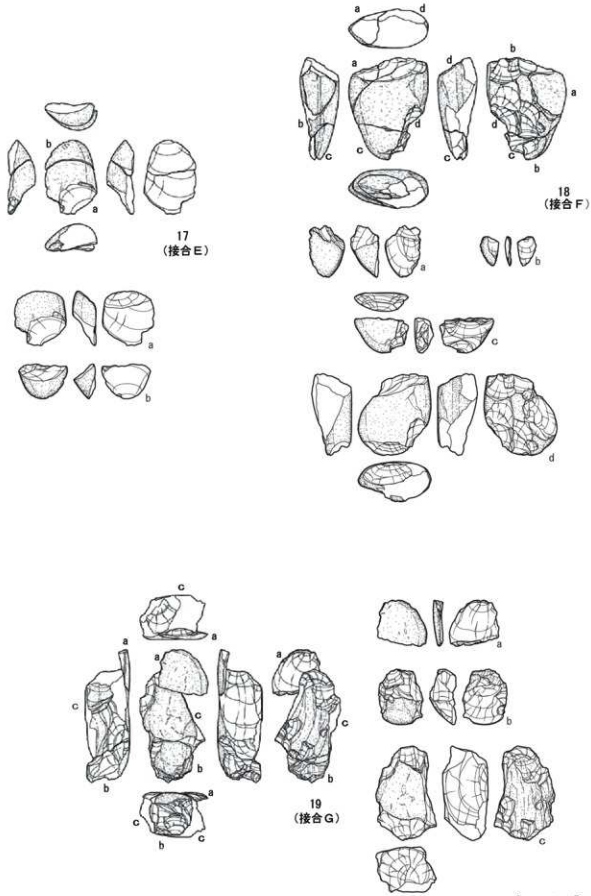
敲打具　11は花崗岩の大きな不整形礫の１面に大きな剥離をもつ。反対の面に敲打による剥離や窪みをもち、端部に敲打痕がある。大きな剥離は地面に安定的に置くためのものとみられ、台石とした。12はチャートの大きな不整形礫であり、端部６か所に敲打による剥離・白色化が認められる。大きなものだが、多くの端部を使っていることから、おもに手にもって使った可能性が高い。そのほか図示しなかった磨石類が３点あり、付表66は石英の破砕礫で端部に敲打痕をもつ。67は閃緑岩で端部・側縁・敲損面に敲打痕をもつ。68は被熱赤色化した砂岩に研磨痕がつくものである。



第83図　旧石器・縄文石器（1）



第84図　縄文石器（2）



第85図　縄文石器（3）

資料群の中には石斧の素材に適した形状がほとんど見当たらないが、形状を整える作業を行った形跡がある。しかし、残された資料を見る限り、良好な素材はあまり得られなかったようである。研磨加工が行われた可能性があるのは1点のみであり、砥石を伴っていない。

礫　1,828点ときわめて多い。分布範囲は調査区全体に及んでいるが、59年度Bの南端、59年度調査区、58年度の北端と台地の縁辺に集中が認められる。最大の集中は59B南端部であり、915点・21.7kgと確認トレンチのみとしては驚くべき数である。点数の分布をみると径40m～50mの2群に分かれる可能性が高く、調査区東端の22ホで230点ともっとも多いことから、さらに谷に続いていた可能性が高い。多い順に集中を挙げる。59B南端B：669点・14.9kg、59B南端A：246点・6.8kg、59A-A：108点・3.3kg、59A-B：76点・2.2kg、58北端：69点・2.5kg。59A-Bが11C石器集中にあたるが、11C自体は礫が3点とごく少なく、隣接する10Cや12Bで多かった。

礫の集中範囲の土器の傾向をみると、58年度の北部はどの時期の土器も多くない。59Aの北部は沈線文土器が多く、南部は条痕文土器が多い。59Bでは北部、南部とも沈線文・条痕文・関山のいずれも多い。礫が多く持ち込まれた時期を特定するのは難しく、礫の分布のほうが、土器よりもかなり広い。礫が持ち込まれた時期や土地利用の傾向を土器の分布から読み取るのは難しい。土器の消費・廃棄が少ない機会もかなり多かった可能性が高い。

3　奈良・平安時代

（1）製鉄関連遺物集中

58年度調査区の11Jと11Kにまたがる2本のトレンチ、幅4m×幅8mの範囲から633点・2,402gの製鉄関連遺物が出土している（第86図）。製鉄関連遺構は伴っていないが遺物集中遺構としてあつかう。隣接トレンチではほとんど出土していないことから、分布は径20mより小さい範囲に収まるのであろう。第86図の分布をみると、種類ごとの有意なまとまりは見出すことができず、全体として左のトレンチが分布の中心であったとみられる。11J・11Kは鉄滓以外の遺物が乏しく、土器を伴っていないことが特徴である。58年度調査区全体では8世紀後半から9世紀代の土器が出土しており、中・近世の出土遺物はごくわずかである。以上により奈良・平安時代にこの付近で鍛冶が行われたと推定される。

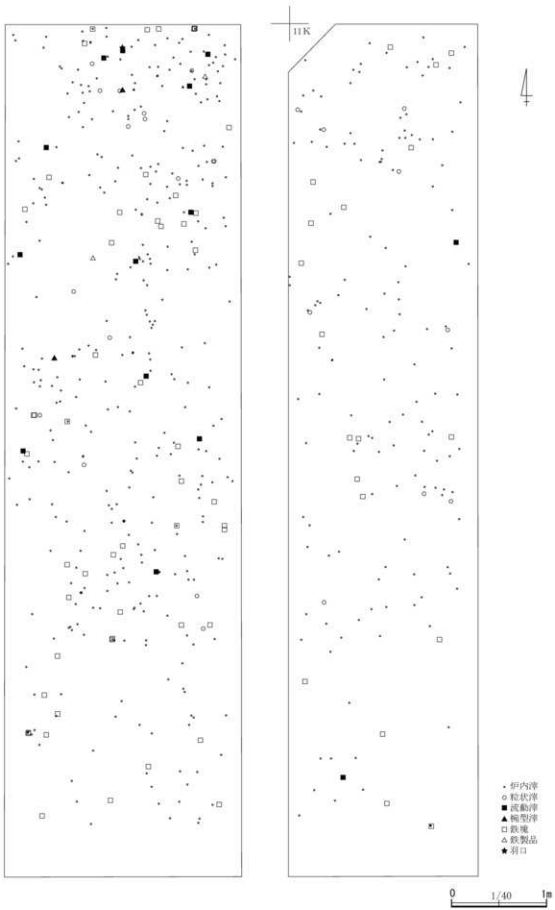
（2）遺構外出土遺物

土器（第87図、図版30）　28点を図化した。ほとんどが破片資料であるが、8（第87図）はほぼ完形の坏であり、焼成の様相から窯内でどのように配置され焼かれたのかを類推できる資料である。時期としては、口唇部に外への折り返しと上方へのつまみ出しを有するが、胴部にタタキ目のない甕（14～17・20）、口縁部の調整は同様だがタタキ目を有する甕（22）、水平に大きく張り出す口唇部を持つ甕（18・21）などから8世紀後半から9世紀中ごろの土器であると思われる。

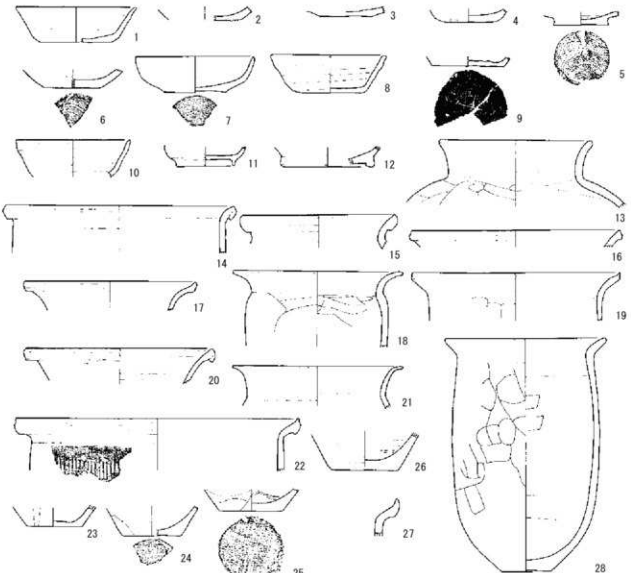
瓦　古代瓦が5点出土している。観察可能な3点は体部凹面に布痕跡をもつ。凸面は縄叩き1点、格子叩き1点、ナデ調整2点である。

他の土製品　焼成粘土塊、不明土製品、貝化石を含む岩塊2点がある。不明としたものは土器類の注口に似た形状だが土器ではなく、時代も不明である。

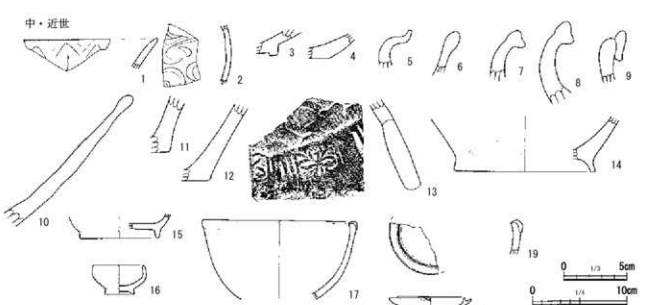
製鉄関連遺物　調査区全体で680点・3824.8gの鉄滓等が出土している。1号住居跡で2点・16.6gが出土したほかは遺構外で取り上げられたものである。東側のB区では広大な範囲から7点の出土に留まる。西側のA区では59年度の狭小な範囲から12点出土しており、溝を含めた11C区から9点と集中がみられる。残りの大半は58年度調査区出土だが、前述の製鉄関連遺物集中から9割を超える633点が出土している。



第86図　製鉄関連遺物集中



第87図　奈良・平安時代遺物



第88図　中・近世遺物

その他のトレンチからは合計47点・1422.8ｇ出土しているが、１トレンチの最大は３点で、広域から分散的に出土している。

4　中・近世

（1）溝

59年度調査区Aで４条の溝、59年度調査区で３条の溝を検出した（図版24）。出土遺物は数点の中・近世土器小片のみであった。中・近世またはそれ以降のものであろう。

（2）出土遺物（第88図、図版30）

13世紀に比定される中国産青磁が３点出土している。いずれも小片ではあるが、連弁文や唐草文を線彫りした製品である。同時期の常滑の片口鉢や甕も多くみられる。13は常滑の甕の破片であるが、破面に磨ったような二次加工の痕跡がみられる。図示はしていないが、同様な資料が遺跡内で散見された。17は瀬戸美濃で生産された17世紀末から18世紀前半の片口鉢である。口部は出土していないが、同時期の鉢には灰釉が施されるのに対して片口鉢は飴釉が多いこと、鉢の口縁部に厚く返しを作っていることから、片口鉢であると判断した。また、図示はしていないが、どろめんこ３点、寛永通寶8点、渡来銭と思われる判読不能の銭が1点出土した（付表８）。寛永通寶のうち２点は鉄銭である。寛永通寶は一般に銅銭がよく知られるが、少量ではあるが鉄銭も存在した。そのほか、近世以降の砥石に転用された硯１点、砥石７点、瓦５点が出土している。付表8-6は粘板岩製の硯を砥石に転用したものである。硯は石材の観察から硯石として名高い琵琶湖西岸の高島石の可能性が高い。

第８章　東住吉遺跡

１　概要

遺跡は事業地南半に位置する。住吉・東住吉・東住吉南の３遺跡は、小山町の広い台地上にあり、台地中央を南北に貫く旧道の東側が事業地内となっている。当遺跡は住吉遺跡の南側の旧字東住吉の北半分にあたる。南半分は東住吉南遺跡である。標高は90ｍと、住吉遺跡よりかなり高い。事業地外の西側は低位段丘であり、調査区の西側が緩やかな段丘崖となっている。ここには東住吉西遺跡・西住吉南遺跡・西住吉遺跡があるが、いずれも調査歴がなく詳細は不明である。遺跡の現況はテニスコート・野球場・第３駐車場となっている。３次にわたる調査を実施しており、２次・３次調査については報告書刊行済みである（第89図）。今回は、未刊行の１次調査（昭和53年度）と、２次調査（昭和54年度）のうち、報告書に掲載しなかった１号住居跡以外の遺物を整理対象とした。なお、１次調査については記録類が保管されていなかったため、調査範囲やグリッド、遺構の存在や分布等に関する情報が得られていない。以下は年次ごとの調査概要である。

１次調査（昭和53年度）　野球場とテニスコートの工事に伴い約18,000㎡を対象として1,750㎡の確認調査を実施した。住居跡１軒を確認しており、その本調査は２次調査で実施している。

２次調査（昭和54年度）　１次調査の調査区の西側の残りの約990㎡を対象とした確認調査（確認のみで終了）と、1次調査で検出した住居跡部分を拡張し50㎡の本調査を実施した。掘削面積は合計で800㎡である。調査から報告まで日本考古学研究所の協力を得ており、報告書刊行済みである（田川・高橋1983）。１号住居跡は平安時代のもので「雄鳥？」「丈」銘墨書土器、「Ｚ」状の記号を刻んだ甕底部、提げ砥、銅製帯金具（丸鞆）、平瓦片が出土している。

３次調査（昭和61年度）　体育館の建設と園路工事に伴い約1,300㎡のうち112㎡の確認調査と、住居跡を検出した部分の拡張・本調査約80㎡を行った。報告書刊行済みである（築瀬1989）。住居跡は平安時代のもので多くの土器が出土、墨書土器「萬」がある。

２　縄文時代

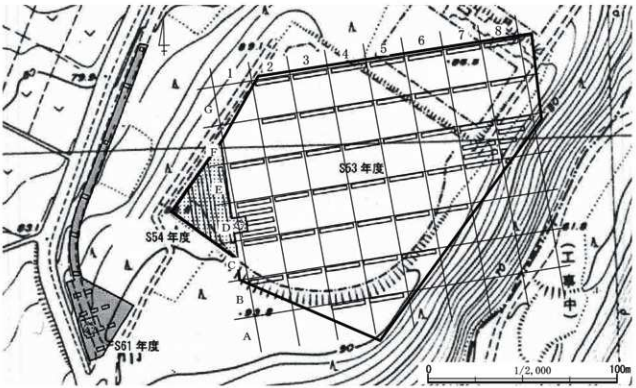
（１）遺構

縄文土器の「TP」の注記から陥し穴が16基以上検出されたと推定される。形状や分布は不明であり、陥し穴から出土した土器が遺構に帰属するかどうかは慎重に判断すべきだが、概要を知るための情報として、有文土器の出土点数を示しておく。TP10は加曽利ＥⅠ式１点、TP11は堀之内１式３点、TP12は田戸下層式１点、TP13は田戸下層式２点・堀之内１式１点、TP15は田戸下層式６点・早期末葉１点・花積下層式５点、TP16は田戸下層式１点である。また、礫が合計で164点・5,362ｇと多量に出土している。

（２）縄文土器（第90・91図、図版32）

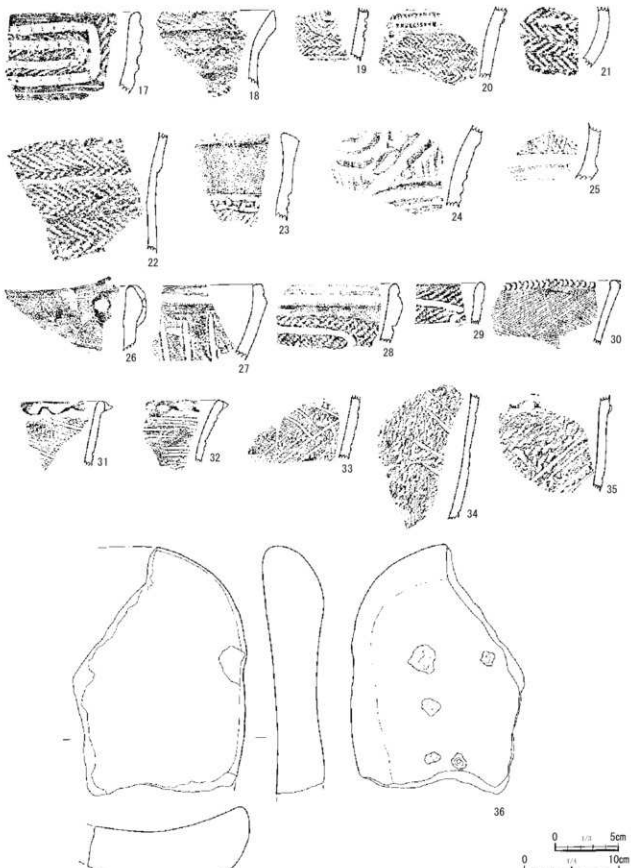
480点の縄文土器が出土しており（付表２）、早期前葉～前期前葉、後期前葉～中葉が多い。とくに多いのは早期後葉の条痕文土器である。

早期　１は早期前葉撚糸文系の稲荷台式土器である。口唇は丸頭状で単節LRが粗く施文される。２～11は早期中葉の沈線文土器、及びこれに伴う押型文土器である。２～７は田戸下層式中段階の土器である。２～６は太沈線による区画内に太沈線を充填し、さらに３は短沈線、５は刺突文を充填する。拓本では見えないが５は下部にフネガイ科の貝殻刺突文をもつ。２は口縁が肥厚して角頭状を呈する。平坦な口唇上に



第89図　東住吉遺跡調査区

第90図　縄文時代遺物（1）



第91図　縄文時代遺物（2）

は細沈線による格子目文が施される。7は細沈線の意匠文間に円形刺突を充填するものであるが、この時期に伴うものであろう。8は細久保式の押型文土器であり、横長の楕円文を描く。

9～11は田戸下層最新段階の土器である。9は多截竹管を使用して横位・斜位区画内に短沈線・菱形刺突を充填し、円形貼付文を付加する。外面に縦方向のハケメ状調整痕が付くのが特徴である。10は細い押引文区画＋充填を口縁部と口唇上に施し、刻みを付加する。口縁は指押圧により大きくゆがんでいる。11は沈線内に貝殻腹縁文を入れ込んで区画し、貝殻腹縁文を充填する。12～14は早期後葉茅山下層式である。刻みを付加した隆帯区画内に、12は押引意匠文、13は半円形刺突文、14は多截竹管による楕円・弧状・縦の凹線意匠文、円形刺突文、押引文を充填する。器面調整は14が条痕、12・13では条痕をナデ消す。15・16は早期末葉の下吉井式である。15は沈線を付加した低い隆帯で口縁の上下を区画し、押引意匠文を施文する。内面は細く弱い条線が付く。16は2条の低い貼付隆帯によって横位区画し、平行沈線による弧状意匠文を描く。隆帯上の刻みは弱い条痕。17も早期末葉の土器であろう。口縁部に隆帯と幅広の押引文による二重の楕円区画文をもつ。高い部分には弱い条痕調整上に斜めの短沈線ないし刻みが施される。

前期　18～22は前期初頭・花積下層式である。18と22は折り返し口縁の地文に単節縄文を施す。22は羽状縄文の土器であり、21も同様の破片とみられる。20は刻みを付加した隆帯と、その下端に沿う燃糸の側面圧痕によって横位に区画し、ループ状の側面圧痕文と円形刺突文、連続刺突文を施文する。19も同様の土器であろう。

中・後期　23～25は中期後半の加曽利E式前半期の土器であり、23・24は加曽利EⅠ式、25は加曽利EⅡ式であろう。26～35は後期の土器である。26～29は前葉の堀之内1式である。26は綱取式土器の系譜をひく類型の単位部左側の破片であり、円孔部分で欠損している。27・28は綱取式土器の系譜をひく類型の口縁部無文帯を省略した類型、もしくは朝顔形の類型であろう。26～29の沈線は器面の比較的軟らかい段階で施している。器面の比較的軟らかい段階で太い単沈線で意匠文が施されている点から、堀之内1式期の中段階の所産であり、5段階細分でのおそらく第3段階のものと思われる。30～35は後期中葉の土器である。30は加曽利B2式の半精製土器で、斜向する集合沈線の方向を変えながら左から右に施文している。頸部は無文、口端は刻みを加えている。31～35は粗製土器で31・32はB2式、33～35はB3式である。

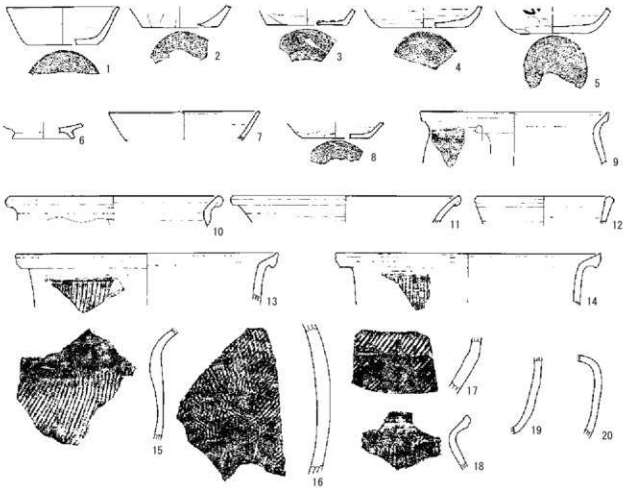
（3）石器（第91図）

打製石斧、石皿、磨石類、剥片各1点、計4点が出土している（付表3）。打製石斧は扁平礫を周縁加工したもの。石皿（36）は多孔質安山岩製で表に7か所の窪みをもつ。剥片はチャートに両極打撃を加えたものである。礫は全体で262点、10kgと多量に出土している。過半数の171点が前述の「TP」から、91点がD7・D8区から出土している。

3　古代、中・近世

奈良・平安時代（第92図）　遺構外出土土器のうち20点を図化した。甕口唇部を折り返す（9～11）、あるいはその断面を三角形に成形（13・14・18）し、さらに胴部にタタキ目を施した甑（あるいは甕）は9世紀中ごろの特徴である。他にも灰釉陶器（12）や墨書土器（5）も見られる。土器以外では鍛冶滓が1点出土している。

中・近世（第93図）　近世の陶磁器が出土しているが、いずれも細片である。1は志野釉が施された皿である。このほかに、図示はしなかったが、寛永通寶が1点出土している。また、どろめんこ3点、瓦2点が出土している。



第92図　奈良・平安時代遺物

第93図　中・近世遺物

第９章　東住吉南遺跡

１　概要

遺跡は事業地南半に位置する。住吉・東住吉・東住吉南の３遺跡は、小山町の広い台地上にあり、台地中央を南北に貫く旧道の東側が事業地内となっている。その南部の旧字東住吉の北半分が東住吉遺跡、南半分が当遺跡である。標高は東住吉遺跡と同じ90ｍである。現況は多目的広場であり、道路を挟んで西側の事業地外は畑地となっている。南側は東急セブンハンドレッドゴルフクラブであり、鹿子遺跡群として広域の発掘調査が行われている。隣接するのは中鹿子第１遺跡である。調査区は10ｍのグリッドを採用し、西から東へ03・02・01・１～15、北から南へＡ～Ｗと付け、１Ａのように表記する（第95図）。確認調査は５ｍの小グリッドごとに１ｍのセクションベルトを設け、その内部を掘り下げている。

昭和57年度調査　対象面積16,000㎡の確認調査を行い、1,400㎡について本調査に着手したが、工事の計画変更により途中で中止になった。文書上は確認調査のみとなっている。確認調査で検出したのは住居跡11軒、掘立柱建物跡８棟であり、一部の住居跡については掘り上げの途中で終了し埋め戻されている。なお、調査区の正確な位置は不明であるが、昭和57年12月に調査中に撮影された空中写真（図版33）により概ね第94図のようになるであろう。

２　縄文時代

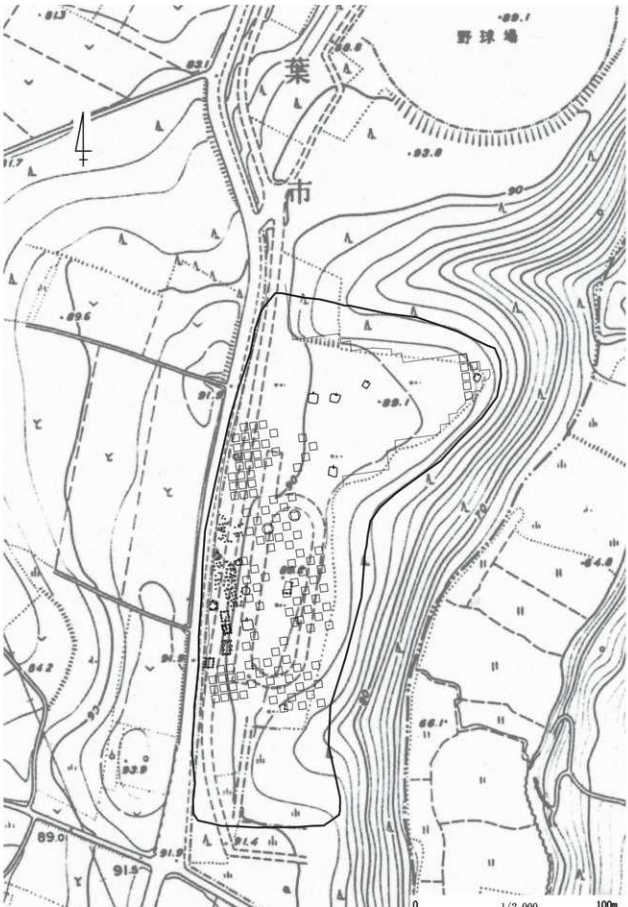
縄文土器は71点あり、細別不明が50点で、有文は早期前葉から前期前葉が中心である。早期後葉条痕文系が９点ともっとも多い（付表２）。図示できるものはなかった。石器は石鏃２点、磨石類１点、礫303点・3.5kgである（付表３）。礫は広範囲から出土しているが、01P・010で72点、458ｇと集中している。１号住居跡から３点、７号住居跡から11点出土しているので、古代に持ち込まれたものも混じっているであろう。

３　奈良・平安時代

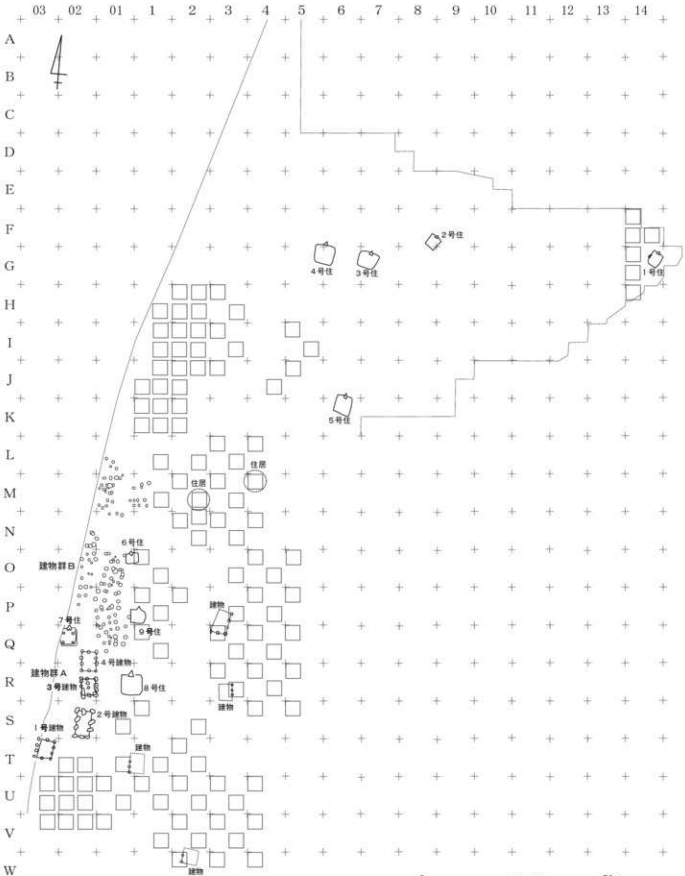
遺構は広域に分布しているが、調査区南東部に集中がみられる。住居跡は、6G～8Fに２号～４号の３軒が、02Qを中心とした南北40ｍ×東西30ｍに６号～９号の４軒がある。掘立柱建物は02Q～03Tに４棟が集中しており（建物群Ａ）、２号～４号は棟を合わせている。また、10～2Rにも別の建物群が存在した（建物群Ｂ）。以下では調査を完了して記録類が残された１号住居跡と１号～４号建物跡と、調査途中で終了したが記録類がある５号・７号・８号住居跡と建物群Ｂのみ記載し、その他については全体図（第95図）に位置のみを示した。

（１）住居跡

１号住居跡（第96・102図、図版33・34・36）　3.7ｍ×3.7ｍの隅丸正方形、深さ0.5ｍの竪穴住居跡である。壁溝と柱穴をもたない。カマドは北壁と西壁のそれぞれ中央にあり、いずれも袖が遺存している。袖が高く残るのはＡであり、ＢからＡに作り替えたものとみられる。Ｂも床面より上に30㎝ほどの高さで袖が残っており、旧カマドを完全に崩さないまま生活したと推定される。竪穴中央部の床面より10㎝～20㎝上から床面にかけて（断面図６層）に1.8ｍ×0.5ｍの範囲に炭化物の集中があり、焼土や炭化材を含んでいた。平面図に示したのは炭化材と甕の破片である。径10㎝、長さ70㎝程度の１本の木材のようであり、柱材の可能性がある。なお、覆土中層の３層にも炭化材と焼土が多く混じっていた。

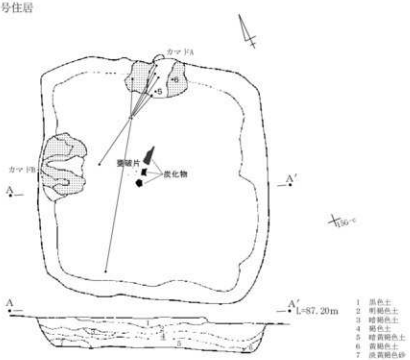


第94図　東住吉南遺跡調査区（1）

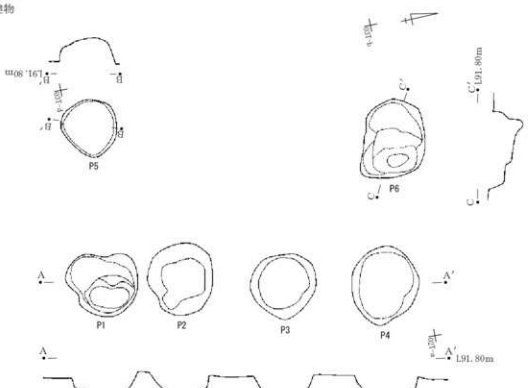


第95図　東住吉南遺跡調査区（2）

1号住居



1号建物



第96図　1号住居跡・1号建物跡

出土遺物は34点と少ないが、カマドAの内部や周辺に大破片がやや集中し、ほかは散漫である。図示したのは6点である。第102図5の坏蓋は体部上半を回転ヘラケズリで調整しており8世紀第2四半期ごろのものと推測される。6の坏身も底部と体部下端を非常に丁寧な回転ヘラケズリで調整しており8世紀後半のものであると考えられる。本遺構の時期は8世紀後半としたい。

5号住居跡（第102図、図版34） 平面図等の記録がなく、遺構に関する記載はできない。出土遺物は2点のみである。坏（1）の形状は8世紀第1四半期、奈良時代前期以前のものである。

7号住居跡（第102図、図版33・34～36） 掘削が終了した時点で本調査が打ち切りになり、土嚢を詰めて埋め戻した。大半を埋め戻したあとに撮影（図版33）と平面図の作成を行っているが、図は掲載しなかった。この図と遺物分布図、写真により概要を記載する。4.0m四方の隅丸正方形、深さ0.5mの竪穴住居跡であり、北壁中央にカマドをもつ。壁溝が巡り、北東と南東隅に柱穴をもつ。出土遺物は竪穴全体から多数出土しており、南半、カマド付近及び北東隅に集中する。出土土器は破片が大半であるが972点と多く、このうち27点を図化した。1・2の坏は底径と口径の比が3弱を示しており、23はロクロ成形の小形甕である。また、26・27の灰釉陶器はその高台の断面形状が三日月状をとるという特徴から猿投窯O-53号窯期のものであると考えられ、以上のことから時期は10世紀前半のものである。遺構の年代も同じであると推測する。21の甕には、図中に表すことはできなかったが、破片上端に指による粘土の付着痕が残されている。墨書土器（14・15・18・19）も出土しているが、後述する遺構外出土遺物の墨書土器の多くがこの7号住居周辺から出土したことと、出土分布におけるレベルの記録がないことから、本遺構に伴わない可能性は否定できない。土器以外では平瓦2点、丸瓦2点、焼成粘土小塊5点が出土している。

8号住居跡（第103図、図版35・36） 掘り上げの途中で調査が打ち切りとなったため、遺物分布図と出土遺物のみが残されている。遺構に関する記載はできない。出土土器は124点で、10点を図化した。墨書土器（第103図5・6・7）が出土している。坏の口唇部が外方に引き出されていること、底径と口径の比が2弱と比較的小さいことから9世紀末～10世紀第1四半期を遺構の時期とする。

その他の住居跡（第95図） 以上で取り上げなかった住居跡（2号・3号・4号・6号）は確認調査で終了し、全体図でのみ存在が確認できる。出土遺物もないため遺構番号を付けずに5号住居跡以下の番号を繰り上げるべきだったが調査時点の番号を採用した。これらも周辺の遺構から奈良・平安時代の住居跡の可能性がある。

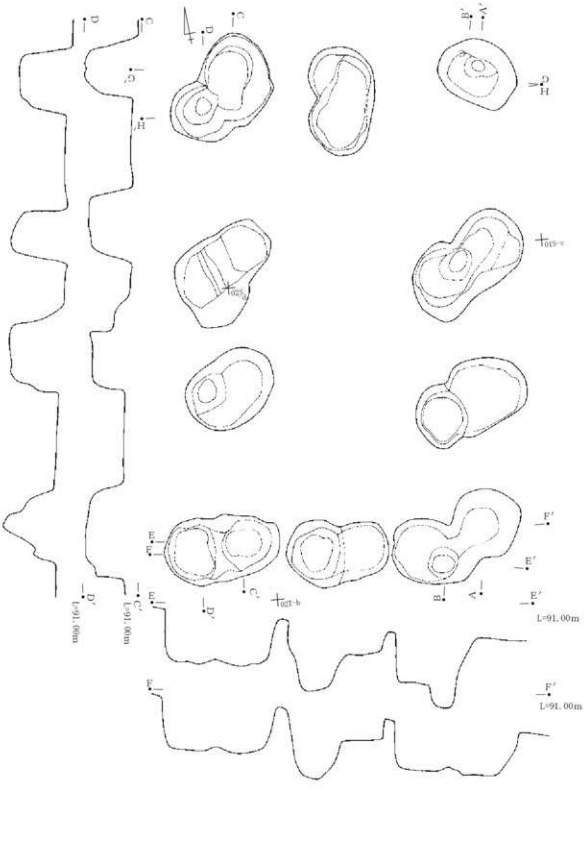
（2）掘立柱建物跡

調査を終えて記録されたのは1号～4号の4棟である。「コ」の字状に配置した建物群であったとみられ、建物群Aと呼称する。そのほかの場所については、遺構検出作業の途中で調査が打ち切りになったようである。建物群A以外にも多数の遺構が存在したことは間違いなく、多数の柱穴の上場のみ記録が残されていた建物群Aの北側の一群を建物群Bとしておく（第95図）。

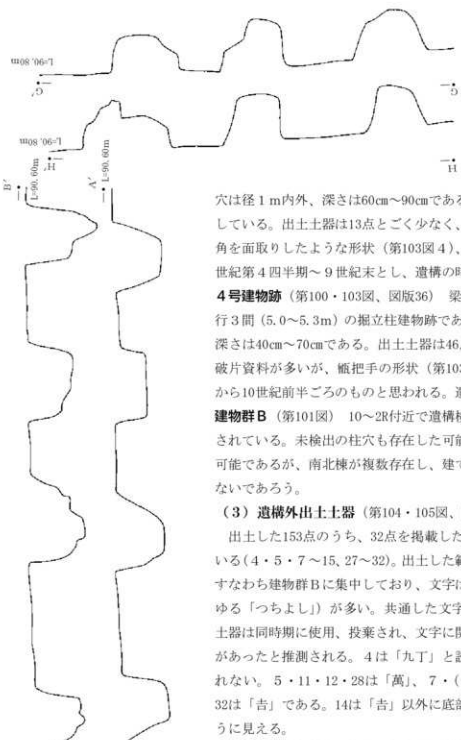
1号建物跡（第96図、図版33） 梁行不明×桁行3間（4.5m）の掘立柱建物跡である。柱穴は径1m内外、深さは30cmである。出土遺物は皆無であり、遺構の時期は柱穴の形状や周囲の状況から平安時代としたい。

2号建物跡（第97・98・103図、図版33） 梁行2間（4.0m）×桁行3間（7.0m～7.5m）の掘立柱建物跡である。柱穴は径1.0m～1.2m、深さは60cm～80cmである。やや軸をずらして建て替えられた可能性が高い。出土土器は37点で、うち6点を図化した。タタキ目のある土師器甕、あるいは甑胴部片（第103図5・6）、甕の口縁の形状（3・4）により9世紀第2四半期以降のものであると考えられる。遺構の時期としては周囲の状況も考慮し平安時代としたい。

3号建物跡（第99・103図、図版33） 梁行2間（3.7m）×桁行3間（4.3m）の掘立柱建物跡である。柱



第97図　2号建物跡（1）



第98図　2号建物跡（2）

穴は径1m内外、深さは60cm～90cmである。平瓦・丸瓦各1点が出土している。出土土器は13点とごく少なく、7点を図示した。坏底部の角を面取りしたような形状（第103図4）、甕口縁の形状（5）から8世紀第4四半期～9世紀末とし、遺構の時期は平安時代とする。

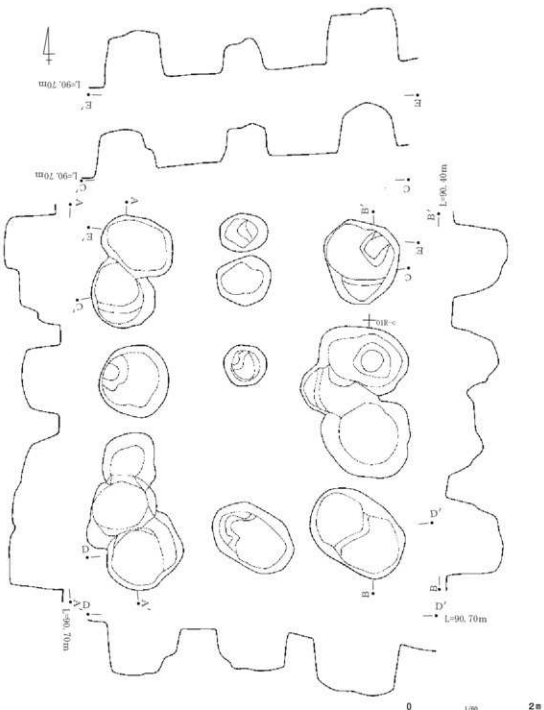
4号建物跡（第100・103図、図版36）　梁行2間（3.8m～4.0m）×桁行3間（5.0～5.3m）の掘立柱建物跡である。柱穴は径0.8m～1.0m、深さは40cm～70cmである。出土土器は46点で、うち7点を図化した。破片資料が多いが、甑把手の形状（第103図6・7）から9世紀後半から10世紀前半ごろのものと思われる。遺構の時期も同じとする。

建物群B（第101図）　10～2R付近で遺構検出の途中の平面図のみが残されている。未検出の柱穴も存在した可能性が高く、建物の想定は不可能であるが、南北棟が複数存在し、建て替えも行われたことは疑いないであろう。

（3）遺構外出土土器（第104・105図、図版35・36）

出土した153点のうち、32点を掲載した。墨書土器が多数含まれている（4・5・7～15、27～32）。出土した範囲はグリッド02M～1Q付近、すなわち建物群Bに集中しており、文字は「萬」「吉」（下の長いいわゆる「つちよし」）が多い。共通した文字が書かれていることから、土器は同時期に使用、投棄され、文字に関係する何らかの施設や行為があったと推測される。4は「九丁」と読めるが1文字であるかもしれない。5・11・12・28は「萬」、7・（8）・10・13～15・29・31・32は「吉」である。14は「吉」以外に底部中央に○が描かれているように見える。

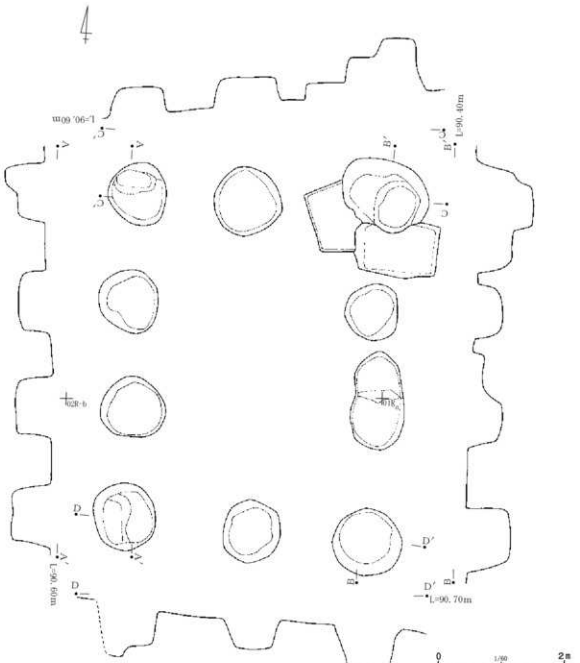
22は須恵器脚付盤である。わずかに遺存する見込みが中心側に高まることから、渦巻き状の隆帯をもつ香印盤とみられる。仏教法要に使う置香炉の一種で、灰の上に香を一筆書き状に盛り、一端に火をつけて焼香するものである。古代の類例は全国的にみても土気地区にもっとも集中しているが（南河原坂窯跡群32号住居跡出土の他は未公表）、見込みの隆帯や、脚の有無・形状は多様である。本例は太く短い三足をもつ現状では唯一の例である。出土土器は、甕あるいは甑（18～20）の口縁の形、坏の形状（2～5・7）より9世紀第2四半期～10世紀前半のものである。



第99図　3号建物跡

（4）土器以外の出土遺物

瓦及び瓦に類似する製品（付表５）　古代瓦が20点、古代瓦？としたものが８点ある。色調はすべて酸化焼成のようである。合計28点のうち、７号住居跡で４点、３号建物跡から２点、建物群Bから１点出土している。観察可能なものでは体部凹面に布痕跡をもつものが17点、ナデ調整するものが２点ある。凸面はナデ調整して叩き目を消しているものが12点と多く、縄叩きが６点と続く。15は瓦当部が剥がれた痕跡をもつ軒丸瓦であり、凸面は平行叩き後にナデ調整している。ほかに質感と色調が瓦に似る製品が８点ある。平瓦のような曲面をもち両面とも粗いナデが施すものと両面が平坦で磚に似るものがある。29は凸面に沈

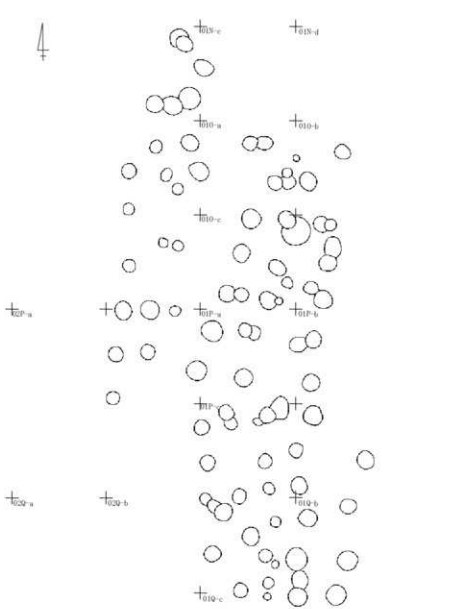


第100図　4号建物跡

線が施されている。建物群の範囲から15点の瓦が出土しており、他の遺跡も含めて住居跡が集中するところよりもまとまった数といえる。住居跡とは異なる形で瓦が使用された可能性がある。

その他の土製品（付表５）　土製紡錘車１点、羽口１ないし２点、支脚１点、須恵器転用砥石１点、焼成粘土塊14単位31点、不明土製品７点がある。紡錘車は小片である。羽口は同一個体２片であるかもしれない。一方は被熱により灰色に変色している。焼成粘土塊はすべて小塊で７号住居跡から５点、建物群Ａ・Ｂから26点出土している。建物群で多数出土しているのは、倉庫の火事などの可能性を示唆する。

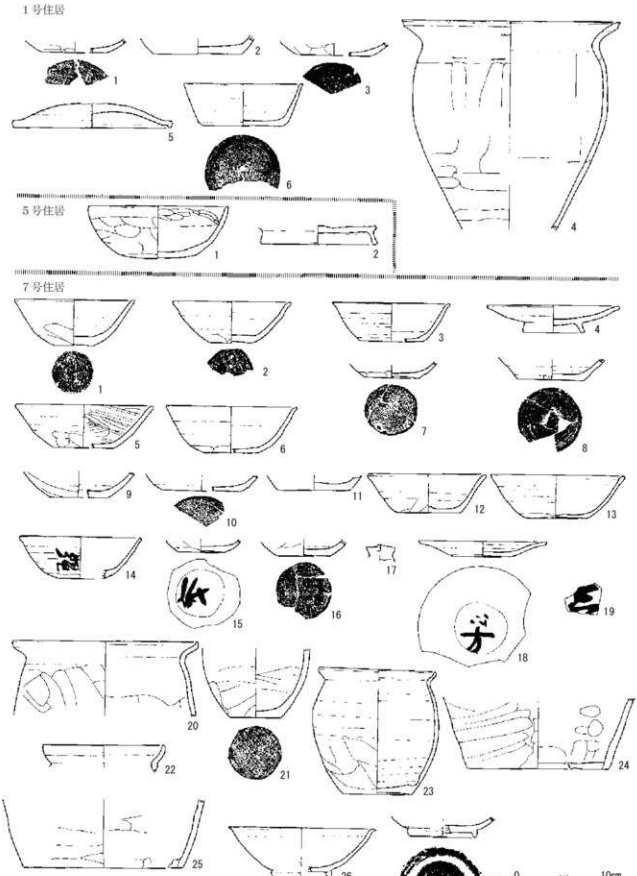
石製品（第105図、図版36）　石帯が２点出土している。丸鞆（33）と巡方（34）各１点である。いずれも裏・側面は成形時の擦痕を残し灰色、表面は入念な研磨で黒色を呈しているなど共通点が多い。丸鞆は裏面に３対の帯留孔をもつ。巡方は裏面に４対の帯留孔をもち、１孔はひび割れを避けて通常とは異なる位



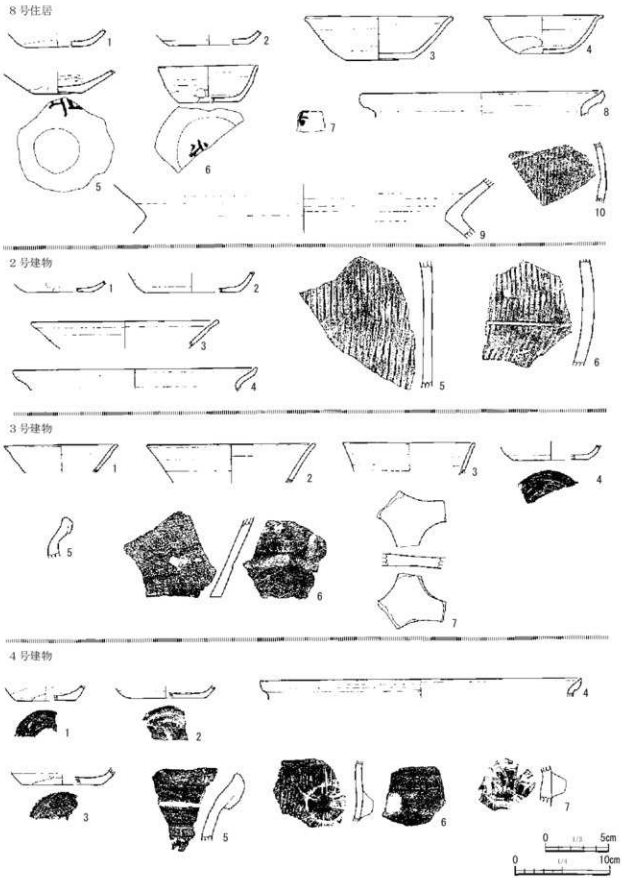
第101図　建物群B

置にある。

製鉄関連遺物（付表6-2）　鍛冶滓が23点・645.1ｇ出土している。1P区で16点とまとまって出土している。1P区では平安時代の土器が１点出土している。遺構外では8世紀後半から9世紀代の土器が出土している。中・近世の遺物はごくわずかであることから、古代に鍛冶が行われたものと推定される。また、１号住居跡と７号住居跡では炭化材が取り上げられていた。大きめの破片を保管した。７号住居跡のものは板状で、加工品の可能性がある。

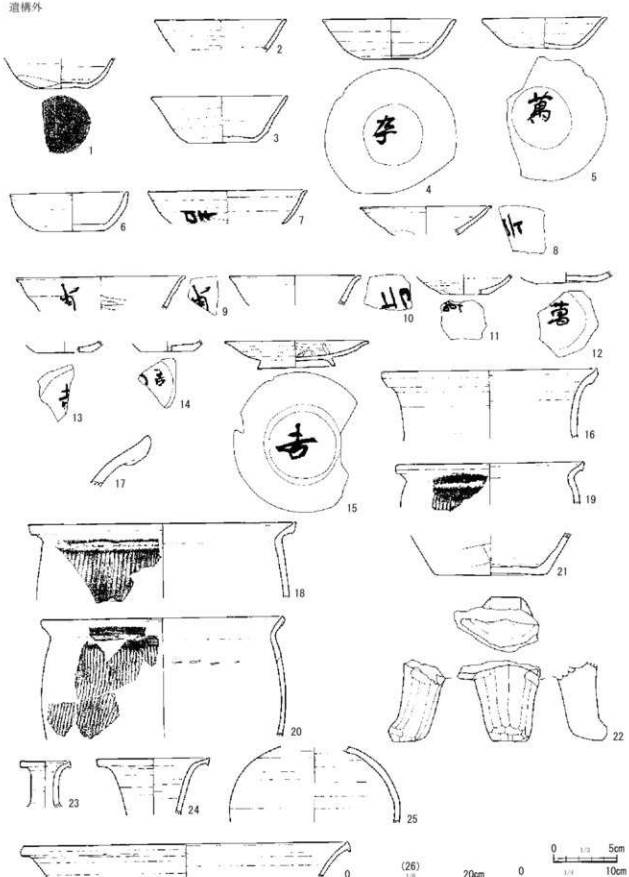


第102図　奈良・平安時代遺物（1）



第103図　奈良・平安時代遺物（2）

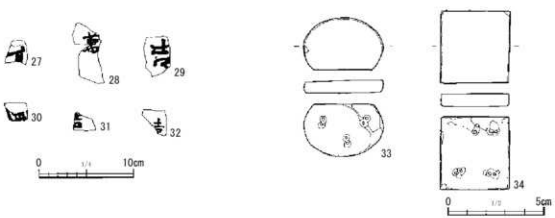
遺構外



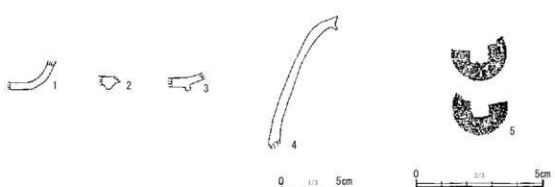
第104図　奈良・平安時代遺物（3）

4　中・近世（第106図、図版36）

中世から近世、近代に到る陶磁器が出土しているが、いずれも細片であった（付表７・８）。２・３は16世紀末から17世紀中葉の瀬戸美濃の製品で、２は志野釉、３は灰釉を施した皿である。寛永通寶が１点出土している。腐食が激しく、上部は欠損している。「永」「寶」は陰刻されているようである。銭銘の陰刻は希少であり、あまり類例がない。あるいは二次加工品や、彷銭のたぐいであるかもしれない。図示はしなかったが、どろめんこが３点、土製のサイコロが１点出土している。どろめんこは近世から昭和30年代まで、子供の遊び道具として存在していた。古いものは丸形で単純な模様のものが多いが、新しくなるほど手の込んだ形になっていく傾向がある。本遺跡のどろめんこも手の込んだ形であり、近世後半から近代に到る新しいものであろう。また瓦が77点出土している。



第105図　奈良・平安時代遺物（４）



第106図　中・近世遺物

第10章　その他の遺跡

この章では直接整理作業の対象としなかった遺跡について、これまでの調査成果と未報告の資料の概要を追補する。

1　金堀砦跡

辰ケ台城跡・小中前田城とも呼ばれるが『昭和の森Ⅰ』報告以来、字名を採りこの名称を採用している。調査歴はない。昭和の森公園の東側に張り出した丘陵の細尾根先端部に位置する。標高は98mを測り、丘陵と台地境を堀切で分断した小規模な城である。現在八幡神社のある主郭は平坦に造成されており、南側の腰曲輪に一部土塁が巡っている。

2　小食土廃寺跡（第107図）

小食土廃寺跡は標高約100mの台地上に立地する。千葉県教育委員会による古代寺院跡確認調査事業に伴って、平成５年に調査が行われ、基壇建物を伴う古代寺院跡であることが判明している。基壇は掘り込み地業と木造基壇外装を伴う東西14.8m、南北11.8mの規模をもち、周囲には、東西48m、南北41m～46mの長方形の区画溝が巡り、建物の位置は区画内中心部よりもかなり西方に寄っている。区画溝外の北方と東方には掘立柱建物群が存在し、北方の建物群には小鍛治関連遺構が存在する可能性がある。創建年代は８世紀後半と推定されており、創建時に使われた瓦は、上総国分寺Ｂ期伽藍で用いられた平城宮6691型式である。国分寺造営事業への在地勢力の取り込み、とりわけ郡司層の協力への見返りとする論考を支える根拠の一つとなっている。

3　荻生道遺跡

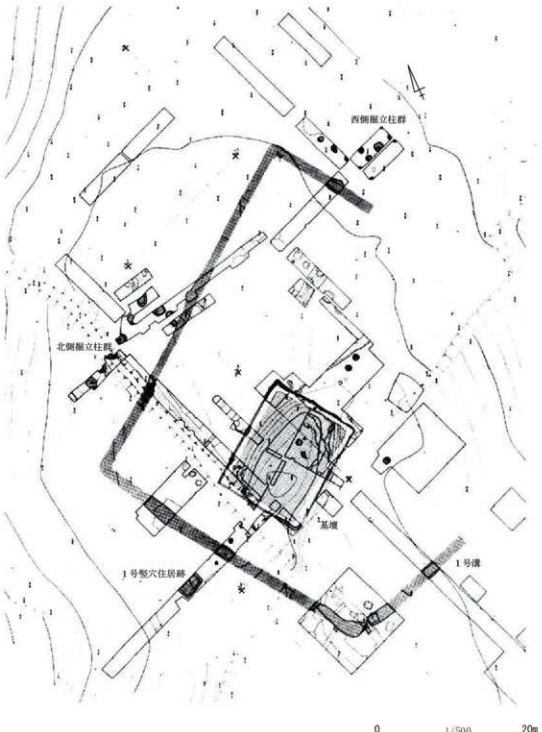
（1）これまでの調査成果

1次調査　昭和51年に第２駐車場造成に伴い遺跡の南半分の一部10,000㎡を全面調査。古墳３基（周溝のみ）、奈良・平安時代の方形区画溝１か所・掘立柱建物跡18棟・住居跡83軒・鍛冶炉跡１基・土坑を検出した。42×30mの方形区画溝の内部に、外周柱穴列をもつ掘立柱建物２棟が整然と並ぶ（後述）。建物の柱の一部と区画溝から８世紀前半の土器が出土している。遺構群の性格については、神社や大嘗祭の悠紀殿・主基殿との類似が指摘されているが（松村1989）、現在も不明確といえる。２号土坑は上部径約４m、深さ2.4mの大きな土坑で、下部が窄まって中央に窪みをもつ「井戸状遺構」と呼ばれることのあるタイプである。なかからは「仲万菩薩」「万得」銘墨書土器が出土している。そのほか置き竈、墨書土器「菩薩」「祈」など注目される遺物、多数の製鉄関連遺物や瓦が出土している。

保存措置と指定　方形区画溝と掘立柱建物跡２棟を伴う遺構群は埋め戻しを行い、文化庁・県との協議により2,500㎡を芝生地として保存措置を講じた。昭和54年３月に千葉県の史跡に指定されており、現在は公園第２入口広場緑地となっている。

2次調査　昭和58年に駐車場の拡張（第３駐車場）に伴い1,400㎡を対象とした確認調査と500㎡の本調査を実施、溝１条を検出した。

3次調査　昭和62年、第２駐車場東脇での駐輪場・トイレ・園路建設に伴い500㎡の本調査を実施。古墳１基（周溝のみ）、奈良・平安時代の住居跡２軒、縄文時代の土坑１基を検出した。



第107図　小食土廃寺跡調査区

４次調査　平成18年、遺跡北半部の北西斜面付近の公園進入路を拡幅するための工事に伴って、路線状に552㎡の確認・本調査を実施した。その結果、縄文時代の楕円型陥し穴１基、古墳時代の古墳２基、奈良・平安時代の住居跡10軒、時期不明の溝５条を検出している。平安時代の住居跡から「罪」「西または酉」「吉」銘墨書土器が出土している。溝のうち、ほぼ並行する２条は側溝の可能性が高く、一部で溝の間の硬化面を検出している。出土遺物は乏しく年代は不明であり、平安時代の住居跡との重複があるが、８ｍ幅をもつ古道の可能性がある。土気往還から北総方面に向かう道であろう。

５次調査　平成19年、千葉市重要遺跡事業の一環として千葉県指定範囲内の試掘調査を実施。遺構範囲を再確認し公共座標に乗せることを目的とした。

報告書　１次～３次調査の成果は『昭和の森Ⅰ』（塚原・飛田2004）に、４次調査の成果は『昭和の森Ⅱ』（塚原2009）に所収している。

方形区画溝を伴う掘立柱建物　松村恵司氏（1989「村のくらし」『古代史復元９　古代の都と村』講談社）は、以下のように指摘している。「住吉大社本殿との構造の類似性が指摘されている。この建物配置は歴代天皇の即位に際して行われる大嘗祭の悠紀・主基両正殿の配置に類似し、宮殿と神殿が分離する以前の形式をとどめたものと考えられる。」「８世紀の本格的な神社建築であり」「上総国山辺郡の中枢部に近接した位置にあることから、国府や郡衙に付属した官社とみるべきである。」

（２）奈良・平安時代

平成16年５月に報告書掲載漏れの遺物が確認されていたので、土製品３点と金属製品10点を追加掲載する。いずれも奈良・平安時代の遺物とみられる。

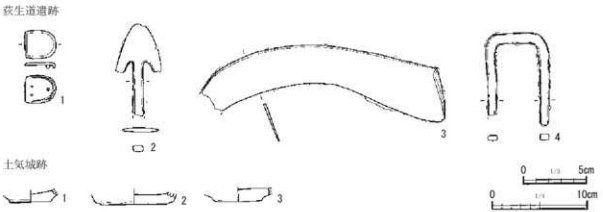
土製品（付表５）　１は土製紡錘車である。上面全体が平坦に摩滅しており砥石に転用されている。２は筒状の土製品の一部で外面が被熱により灰色に変色していることから羽口である。３は有孔土器片円板である。須恵器高台付杯の破片の周囲を研磨して楕円形を呈す。中央は両面から穿孔されている。報告済みの土製品は支脚５点と置きカマド１点である。

石器　方柱状の砥石が１点出土している。

金属製品（第108図、図版37）　帯金具１点、鉄鏃３点、不明金具２点、鎌・紡錘車各１点、不明金具２点の計10点がある（付表6-1－12～21）。うち４点を図化し、６点の写真を掲出する。第108図１は35号住居跡から出土した青銅製帯金具で、蛇尾の表金具である。表面周囲を面取りし内面に鋲が３か所付く。２は36号住居跡出土の鉄鏃の鏃身～頸部である。正三角形腸挟式で長い茎の途中で欠損している。４はU字状の金具で、同様のものがもう１点あり、写真のみ掲出した。付表6-1－15は8号住居跡出土の鉄製紡錘車の紡輪部である。報告済みの製品と合わせた金属製品の出土点数は、帯金具１、鏃７、鎌５、紡錘車１、刀子10、金具１、釘２となり、そのほか鉄滓が91点、2468.6ｇ出土している。

４　土気城跡

昭和の森の北側約１㎞に所在する中世城郭跡である（第３図）。当事業には該当しないが、近年資料を確認できた昭和54年度調査分の出土資料及び同時に採集された資料について、今後の事業化が難しいと考えて整理対象に加えることにした。以下のように未報告の調査が複数あることが判明したため、今後改めて事業化する方針に切り替えたが、すでに観察を行っていた遺物には13世紀に遡る資料が含まれていた。土気城跡については未だ不明な点が多いが、確実なのは土気酒井氏が15世紀末から16世紀代まで居城としたことのみである。今回、13世紀代の土器を確認できたことは、土気地区の中世を考える上で重要である。



第108図　荻生道遺跡・土気城跡出土遺物

（1）これまでの調査成果

昭和43年度　日本航空土気研修センター建設に伴い川戸彰氏が発掘を実施した。Ⅱ郭の一部から奈良時代の住居跡や戦国時代の土壙を検出している。

昭和54年度　昭和55年２月～３月、送電鉄塔建設に伴いⅢ郭内の４か所524㎡の本調査を実施した。井戸や地下式坑を検出しており、記録類とともにかわらけ、石臼、金属製品、砥石の実測図が保管されている。今回、これらの実物は確認することができなかった。保管されていた土器類112点についてのみ観察と記載を行った。

昭和63年度　昭和63年１月～５月、日本航空土気研修センター増設工事に伴い、Ⅱ郭内の400㎡について本調査を実施した。

平成４年度　平成５年３月、日本航空土気研修センター建て替え工事に伴い、604㎡/9112.68㎡の確認調査を実施した（山下1994）。Ⅱ郭に建てられた研修センターの周囲全体に17か所のトレンチを設定した結果、古墳時代住居跡３軒・中世空堀５条・地下式坑３基・土壙４基などを検出し、遺構が全域に及んでいることを確認した。従来知られていなかったⅡ郭を東西に二分する空堀の北側の建物群を確認するなど貴重な成果を得た。なお、平成５年度には千葉県教育委員会が測量調査を実施し、城の全体像が明らかになった。

平成19年度　平成19年７月、携帯電話無線基地局建設に伴い、Ⅲ郭内の212.9㎡について本調査を実施した（菊地2008）。奈良・平安時代の住居跡４軒、中世の建物跡５棟、地下式坑１基、井戸２基を検出した。

平成22年度　平成22年9月～10月、介護施設の増設に伴い、Ⅱ郭内の16.53㎡の確認・本調査を実施した（塚原2012）。攪乱をうけていたが溝を検出した。

（2）出土遺物（第108図、図版37）

中世から近世に到る陶磁器破片がみられた。図示したのは13世紀代とみられるかわらけ３点である。これ以外に常滑の甕の破片や瀬戸美濃の擂鉢の破片が多くみられたが、小片のため時期の特定はできなかった。近世の遺物は、陶器が多く、いずれも小片である。図示はしていないが、19世紀の大堀相馬（福島県）の製品が含まれる。陶磁器類以外では、寛永通寶１点、鍛冶滓11点（54年度D区中心）、動物骨３点（D区）、アカニシの殻軸片（A区・C区）、礫14点・2.3kgが出土している。

第11章　まとめ

事業終了にあたり、既刊報告書も含めた発掘成果について４つの時代に分けて記載しまとめとする。

1　縄文時代

（1）時期別の遺構と遺物

第３表は各遺跡で出土した土器の破片数であり、各分類群（第１章２）の占める割合を帯グラフで示している。掲載資料からみた動向や既報告分の成果もよく示している。圧倒的に多いのは早期から前期前葉であり、なかでも沈線文土器と関山式土器が多かった。次いで多いのは条痕文土器であり、そのほかの時期についても、早期から晩期まで土地利用があったが、撚糸文期、浮島・諸磯式期、前期末～中期初頭、阿玉台Ⅰａ～Ⅰｂ式期、加曽利E式前半・後半、堀之内1式期、加曽利B2式期が比較的まとまっており、それ以外の時期は少なかった。

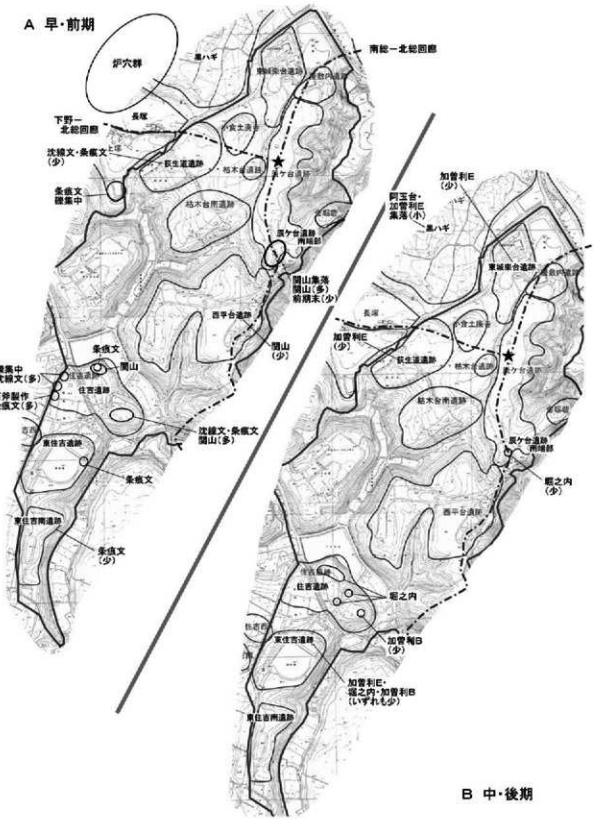
遺構は少ないことが特徴である。竪穴住居跡がつくられ集落を形成したのは関山式期の辰ケ台遺跡南端部のみである。陥し穴は、辰ケ台遺跡で溝型２基・溝型？１基・楕円型２基、荻生道遺跡で楕円型１基、住吉遺跡で溝型２基・楕円型６基、不明確だが東住吉遺跡で16基以上？（第８章２）を検出している。また、今回、住吉遺跡で石斧製作跡、礫集中２か所が追加された。

（2）各時期の土地利用の傾向

第109図に発掘成果の概要を早・前期と中・後期に分けて提示した。一点鎖線が二つの回廊、★はその交差点である。交差点付近の土地利用はどの時期も乏しいことが明らかである。関山式期のみ300m南に集落を営んだが、それ以外の時期には、交差点から半径500mほどの範囲には集落はおろか土器や礫の集中さえも形成されなかった。当遺跡群のなかでは、村田川の谷を隔てた住吉遺跡で沈線文期～関山期の土地利用が比較的活発であった。

第３表　縄文土器出土点数

群　時期	辰ケ台	東城楽台	枯木台南	西平台	住吉	東住吉	東住吉南	全体
1群　撚糸文			1	5	64	2	1	73
2群　沈線文				2	451	55	3	511
3群　条痕文	3			2	387	159	9	560
4群　羽状縄文	1,568			17	937	34	3	2,559
5群　浮島・諸磯	9			2	22			33
6群　前期末	15				18			33
8群　五領ヶ台	1				3			4
9群　阿玉台	4	1						5
10群　加曽利E	9	10	1	3	50	8	2	83
12群　称名寺					12			12
14群　堀之内	8			3	323	17	3	354
15群　加曽利B		1		1	74	22		98
17群　後期安行					3			3
18群　晩期	4			1	1			6
詳細不明縄文	110	8		2	2,346	183	50	2,699
全体	1,731	20	2	38	4,691	480	71	7,033
弥生	1				1			2



第109図　縄文時代の土地利用

この時期は土気・大網地区にもっとも多くの遺跡が集中する時期にあたる。土地利用が活発になった理由は二つの回廊が交わる狩猟好適地として記憶され、語り継がれたことによると考えられる。しかし、交差点付近は土地利用が少なく、稠密な遺跡分布は交差点を空白地とするドーナツ状であったことになる。

（3）特徴的な出土遺物

住吉遺跡11C区石器集中は、変質ドレライトと角閃岩という茨城県北部や新潟県北部から運ばれた礫を打ち割って礫石斧の素材を得る作業が行われた場と推定され、共伴する土器1点は早期末葉の東海系土器であった。石斧の製作遺跡は県内では知られておらず、きわめて貴重な例となる。石器の詳細な検討は未了であり、今後資料のもつ意味が明らかになることを期待したい。辰ケ台遺跡ではコハク製の玦状耳飾と剥片が出土している。コハクは中期なかごろの東金市羽戸遺跡や養安寺遺跡でも多数出土しており、九十九里海岸が流通に関わった可能性が高い。銚子産のコハク生産遺跡として銚子市栗島台遺跡が知られている。明確な生産工房の時期は中期だが、遺跡の形成は関山式期に始まっている。コハク利用の初期の事例として貴重な資料といえよう。住吉遺跡では含メノウ脈軟質凝灰岩製の玦状耳飾が出土した。白色で厚みのある形状から県内では古い部類に入る前期前葉のものであろう。東城楽台遺跡で出土した棗玉状の玉も、土器を伴っていないが、前期特有の形状である。

（4）昭和の森遺跡群の特質

土気地区遺跡群の動向をみると、生活や生業が狩猟につよく偏った時期の遺跡が多く、採集・狩猟・漁撈を組み合わせた定住度の高い集落が形成された時期の遺跡は少ない。昭和の森遺跡群の動向も同様であったが、周辺の土気南地区、土気東地区、鹿子地区に比べると遺構や遺物はかなり少なく、表土から手掘りした調査が多かったにもかかわらず石鏃もごく少なかった。資料としては劣るのであるが、面的な調査によって、二つの回廊の交差点付近の土地利用が乏しいことを確認できたことが最大の成果といえる。この交差点は、縄文ハンターにとってきわめて重要な場所であったことは疑いないが、そこを避けていたことの理由は今のところ不明だが、緩やかな谷斜面がないため谷に追い込む猟が難しかった可能性や、動物の移動を妨げることを嫌った可能性が考えられる。前期前葉・関山式期に限って、比較的近くに集落を形成した理由も興味深い。この時期は、奥東京湾と古鬼怒湾の谷奥が接近したことによって、東葛地区に圧倒的な集落と人口が集中した時期にあたる。谷奥は魚貝類の利用に適していただけでなく、下野―北総回廊の両側に内湾奥部が接近することにより、狩猟好適地でもあった。今回の発掘成果は、こうした生産・居住様式と縄文社会の問題を検討するうえで良好な情報を提供することになるであろう。

2　古墳時代

弥生時代から古墳時代後期の6世紀前半までほとんど生活の痕跡が認められないことが土気地区の特徴であり、今回の整理作業においても、土器の小片さえわずかであった。6世紀後半に突如として集落と古墳が出現するのは、東京湾側の菊間・海上・馬来田・須恵国造と、九十九里側の武射・海上国造という二大勢力を結びつける王権拡大の意図による大規模な地域開発によるものと考えられている。二つの地域を最短で結ぶ交通の要衝として「土気－生実ルート」が重視されたのである。調査された31基の古墳はこのルートに沿って並び、その西端に舟塚古墳がある。昭和の森地区の古墳は、第3図に示した道の枝分かれに沿って展開している。長塚遺跡から南東に向かう道沿いには荻生道遺跡の古墳群があり、分布の東端はこの道の終点＝二つの回廊の交差点に近い枯木台南1号墳である。一方、長塚遺跡から北東に向かう道は北総方面に向かうもので、沿道に黒ハギ遺跡の古墳群と東城楽台1号墳がある。二重周溝と横穴式石室をもち盟主墳と目される東城楽台1号墳と黒ハギ遺跡円墳3基は径25m～26mの大きなものである。枝分かれした道のうち、北に向かう道が重視されたのは、この道が生実－土気－武射を結ぶものであるからと推定され、古墳の分布はさらに土気中台遺跡につながる。なお、古墳群については詳細な検討と分布図の提示が行われているので参照されたい（塚原2009）。

3　奈良・平安時代

（1）特徴的な出土遺物

枯木台南遺跡１号住居跡のカマドから出土した土器（第64図６）は、口縁下部から胴部のハケ目調整痕や口唇内面の稜、及び胴部下端の水平な割れ口など「駿東甕」の特徴を持つ。類例は奥房台遺跡に多く、未整理だが黒ハギ遺跡でも見つかっている（第111図1）。屋敷内３号住居跡からは螺旋状暗文・斜格子状暗文を持つ畿内系土師器が出土した（第37図３・５）。胎土の特徴や無彩色であることなどから模倣品とみられ、五十石遺跡でも螺旋状暗文を持つ類似土器が出土している（第111図２）。多くの時代に他地域との交流の起点となった土気地区の特質をものがたる可能性が高く、黒ハギ遺跡の発掘成果の公表をなんとか実現したい。

屋敷内遺跡10号住居跡では、坏皿類を中心とした多量の土器が出土しており、後述するように祭祀的な要素が数多く見受けられる。特筆すべき遺物として天井部と体部に透かしを有する香炉蓋がある（第42図44）。同住居跡からは帯状の黒変をもつ坏が出土している。黒変は内外両面の相同する範囲に見られる。内面の黒変の下端ラインは鮮明で水平についており、強い印象を与える。このような痕跡を残す使用法を検討したところ、灰を敷き詰めて香を焚く行為に思い当たった。灰の断熱効果は絶大であり、外面の弱い黒変は灰より上のみ被熱したことによるものではないか。香炉蓋とは作りや色調が全く異なるが、サイズはぴったりであるので蓋にあう坏を見つけて組み合わせた可能性が高い（第110図）。この住居跡からは柄杓状土製品が坏・小型甕とともに安置された状態で見つかっており、香炉とともに祭祀の内容を知る一助となると期待される。

第110図　屋敷内10号住居跡出土香炉写真・実測図

（2）集落の変遷

今回検出した住居跡で最も古いのは、辰ケ台、屋敷内、東城楽台、枯木台南遺跡で検出した７世紀末～８世紀初頭のものである。辰ケ台19号住居跡や屋敷内1号住居跡、（東城楽台に属する）屋敷内19号住居跡、枯木台南1号住居跡の蓋受の痕跡を口縁に稜として残す非ロクロ坏がこの時期の目安であり、辰ヶ台19号住居跡では出土した土師器坏のすべてが非ロクロ坏であった。また、枯木台南1号住居跡では８世紀初頭の駿東甕が出土している。荻生道遺跡でもこのころの住居跡が出土しており、昭和の森遺跡群の集落は７

世紀末から８世紀初頭に形成されたものとみられる。

画期となるのは８世紀中ごろである。辰ケ台、枯木台南遺跡ではこの時期以降の住居跡が見つかっていない。一方、東城楽台、屋敷内遺跡は継続するが、屋敷内遺跡では８世紀前半までのと別の地点に、新たな集落を形成したようであり、東城楽台遺跡でも同様の傾向が伺える（第22図）。両遺跡の集落は９世紀末まで続くが、10世紀代の住居跡は見つかっていない。

これらの遺跡から南に外れた東住吉南遺跡では少し遅れて集落が形成される。大半の住居跡は９世紀以降のもので10世紀前半まで続くようである。

（３）土気東遺跡群との関係から見える集落の拡縮（第111図）

昭和の森遺跡群の北側、土気東遺跡群に属する黒ハギ遺跡は土気地域最大の拠点的位置付けが可能な集落である。住居の形成年代は７世紀～10世紀である。近隣の長塚遺跡と上塚遺跡は同じ期間、奥房台遺跡は７世紀末～９世紀半ばまでと、ほぼ同時期に集落群を形成している。荻生道遺跡の集落は８世紀初頭に始まり、８世紀後半から９世紀をピークとしている。こうした変遷を（２）で見た昭和の森遺跡群の集落変遷と合わせると次のような経緯を追うことができる。

８世紀前半においては、黒ハギ、長塚、上塚遺跡を中心とした拠点集落が展開され、昭和の森遺跡群の北半分と奥房台遺跡に集落群の範囲が拡大する（第111図１）。荻生道遺跡の方形区画溝を伴う掘立柱建物跡はこの時期に利用された宗教施設とみられる。

８世紀後半に入ると開発拠点と目される黒ハギ遺跡から、隣接する屋敷内、東城楽台、荻生道遺跡へと集落群の範囲が拡大する（第111図２）。上総国分寺の創建瓦や供献具を生産した南河原坂窯の操業開始と年代が一致しており、国分寺造営事業に伴い、古代山辺郡域の空閑地に次々と集落が拡大した現象の一部といえる。土気遺跡群は仏教関連の土器や墨書がきわめて多いことが特徴であり、民衆仏教の開花を伺うことができる。この時期に創建された小食土廃寺は教化の中心となった可能性が高い。

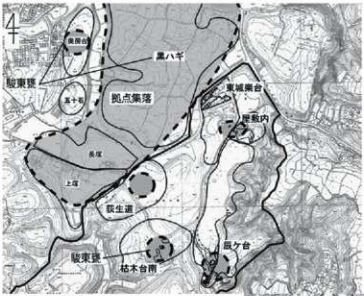
10世紀に入ると昭和の森遺跡群北側では住居がほとんど見られなくなる。この時期に下る可能性のある住居跡は屋敷内、東城楽台、荻生道遺跡にあるが分布密度の低下は明らかである（第111図３）。こうした現象は、９世紀末の南河原坂窯の操業停止など生産活動の縮減が関係している可能性が高い。

一方で村田川の谷の南にある東住吉南遺跡は10世紀前半まで集落が存続している。掘立柱建物の割合が高く、墨書土器が多いなど中鹿子遺跡（９世紀～10世紀前半）の様相に近く、鹿子遺跡群側の集落群に含まれる可能性が高い。

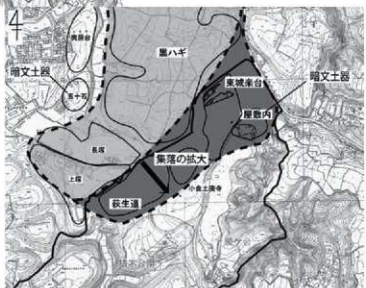
（４）祭祀関連遺構

今回の報告において祭祀にかかわるとみられる箇所は２つある。１つは屋敷内遺跡10号住居跡である。ここでは1,986点の土器が出土した。既に述べたが器種に関しても坏、皿の割合が周辺の遺構に比べて多く、さらに墨書土器、透かし彫りを持つ香炉蓋と香炉とみられる坏、大型の盤、片口鉢、砥転用の可能性のある須恵器甕胴部片、柄杓状土製品、加工されたとみられる材の炭化物など特筆すべきものが多くみられる。出土した坏には使用痕がほとんどなく、口縁や底部の角に擦れがない上、住居に比して点数が多いことから、この住居で日常使用されたものではなく、大掛かりな共食を伴う祭祀・儀礼で使用されたものが遺棄ないし廃棄されたと考えられる。類似の遺構として市原市稲荷台遺跡37号住居跡を挙げることができる。坏・皿を中心とした大量の土器が出土しており、「貞観十七年」紀年銘墨書土器により９世紀第３四半期の指標とされる土器群である。屋敷内10号住居跡は年代が一致するだけでなく、小型甕や香炉、灰釉陶器、砥転用須恵器甕片を伴うなどの共通点がある。

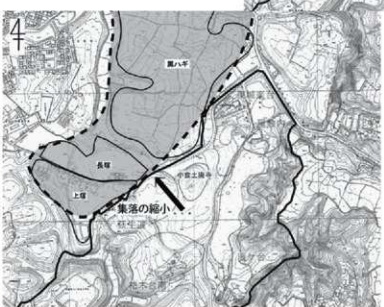
稲荷台例では床面ほぼ中央に設けた円形の土坑を中心として30cmほどの焼土が堆積しており、護摩など



1．8 世紀前半



2．8 世紀後半～ 9 世紀



3．10 世紀

第111図　集落の変遷

の焚火を伴う祭祀が想定されている。屋敷内例では床面中央からやや北寄りに方形の浅い土坑があり周囲の床面が焼けており、炭化材が出土している。土器には２次焼成が認められず、焼土の堆積もないことから断定はできないが、住居中央で焚火を伴う祭祀・儀礼が行われた可能性がある。

もう１つは東住吉南遺跡の遺構外出土の墨書土器である。伴う遺構は不明であるが、調査区南西のエリアから集中して墨書土器の破片が出土している。このエリアには竪穴住居や掘立柱建物群（建物群Ａ・Ｂ）も存在する。伴う遺物が少ない遺構もあるが、おおよそ９世紀後半～10世紀前半と推定される。調査の状況を考慮すると未調査区に土器集積遺構があったと考えられるが、屋敷内遺跡10号住において墨書土器はそう多くはなく、その点では異なる性質の遺構であるといえる。墨書土器が多く出土していることはすぐ南の中鹿子遺跡と同様である。

第４表　古代遺構出土遺物集計

遺跡	遺構	時期	破片数	甕・甑	坏鉢類	盤皿類	他	陶器	甕・甑	坏鉢類	土器以外
全体			9689	5586	3516				61%	39%	
辰ケ台	19号住	07C末-8C初	195	92	98				48%	52%	
辰ケ台	遺構外	—	454	307	104			7	75%	25%	
屋敷内	1号住	07C末-8C初	577	431	145			1	75%	25%	製鉄8、鉄床石1
屋敷内	6号住	07C末-8C初	121	93	27				78%	23%	製鉄21
屋敷内	7号住	08C	60	51	5	2	3		91%	9%	製鉄1
屋敷内	4号住	08C前	646	458	185				71%	29%	耳1、製鉄3
屋敷内	5号住	08C前	174	138	36				79%	21%	
屋敷内	13号住	08C前	9	7	2				—	—	
屋敷内	12号住	08C後	445	257	180	1			59%	41%	製鉄1
屋敷内	3号住	08C後-9C前	126	65	59				52%	48%	
屋敷内	2号住	08C後-9C	35	18	17				51%	49%	耳1、鉄床石1
屋敷内	8号住	08C後-9C	259	154	103	2			60%	40%	耳1、製鉄3
屋敷内	9号住	08C後-9C	443	204	234	4		1	47%	53%	耳1、製鉄2
屋敷内	16号住	08C-9C	369	294	75		2		80%	20%	製鉄2
屋敷内	10号住	09C後	1986	705	1228	42		9	36%	64%	耳3、焼成粘土9、刀子3、製鉄15
屋敷内	11号住	09C以降	6	6					—	—	
屋敷内	14号住	09C以降	61	45	16		1		74%	26%	
屋敷内	15号住	09C以降	172	122	49				71%	29%	製鉄1
屋敷内	17号住	09C以降	64	37	27				58%	42%	
屋敷内	18号住	09C以降	5		5				—	—	
屋敷内	遺構外	—	129	9	2		2	4	—	—	
屋敷内	19号住	07C末-08C初	69	63	6			2	91%	9%	
東城楽台	1号住	08C後	562	417	143			2	74%	26%	
東城楽台	5号住	08C3/4	47	38	8			1	83%	17%	
東城楽台	7号住	08C4/4	69	68	18			2	79%	21%	耳4
東城楽台	6号住	08C後-9C	250	189	60				76%	24%	
屋敷内	20号住	08C後-9C	112	70	42				63%	38%	耳1
東城楽台	2号住	09C前	405	320	84			1	79%	21%	
東城楽台	3号住	09C2-3/4	36	24	12				67%	33%	
東城楽台	4号住	奈良・平安	5	2	3				—	—	
東城楽台	1号建物	奈良・平安	17	15	2				88%	12%	製鉄1
東城楽台	遺構外	—	302	—	—	—	—	—	—	—	
枝木台南	1号住	08C初	52	36	15			1	71%	29%	
東住吉南	5号住	08C1/4	2		2				—	—	製鉄1
東住吉南	1号住	08C後	34	17	16			1	52%	48%	
東住吉南	8号住	09C末-10初	124	72	51			1	59%	41%	
東住吉南	7号住	10C前	972	629	343				65%	35%	耳4
東住吉南	2号建物	平安	37	24	13				65%	35%	
東住吉南	3号建物	平安	13	8	5				—	—	耳2
東住吉南	4号建物	平安	46	13	33		5		28%	72%	
東住吉南	遺構外	—	179	88	63				—	—	

4　中・近世

本報告書で扱った中世、近世の遺物はいずれも包含層などの一括遺物であり、出土状況もまちまちであるので、量的な把握にはむかない。しかし、全体を見渡すと、いくつかの特徴が見えてくる。以下に、それらを記して、まとめとする。

中世の遺物の年代を精査して、最も特徴的なのは、13世紀に比定される遺物が多く確認されたことである。住吉遺跡における、貿易陶磁や常滑片口鉢がその代表的な例である。

近隣の遺跡で、同時期の遺物が伴うものとして、緑区黒ハギ遺跡があげられる。黒ハギ遺跡では、13世紀から14世紀に比定される館跡と思われる遺構が１基確認され、かわらけ、貿易陶磁などが出土している。千葉市内では、当該時期に比定される遺跡はそれほど多くなく、これまで中世の遺跡は市内で城館が作られ始める15世紀以降のものが主体的であった。黒ハギ遺跡でも、その主たる時期は15世紀以降とされる。しかしながら、これらに先行する時期として、中世の早い段階での人々の生活の痕跡を確認していくことが、今後の課題と言える。

近世の遺物は、16世紀末の瀬戸美濃の製品から、幕末に到る製品まで、まんべんなく出土している。特に、16世紀末から17世紀中葉に比定される志野釉が施された皿は、各遺跡からの出土が確認できた。同様に、天目碗の破片も多くみられた。全体を見渡すと、圧倒的に陶器の割合が高く、磁器はそれほど多くはないが、東城楽台遺跡の17世紀後半の瓶や、18世紀後半の色絵碗のような、古い段階の製品や高級な製品も確認できた。また、辰ケ台遺跡では、茶入と思われる製品も出土しており、当時、茶の湯を嗜む文化が遺跡周辺にも行き渡っていたことが伺える。

辰ケ台遺跡、東城楽台遺跡、屋敷内遺跡などでは、肥前の陶器が出土している。17世紀後半から18世紀に見られる銅緑釉の施された製品や、京焼を模したもの、白泥による刷毛目や三島手など、その種類は多岐にわたる。肥前は、陶器、磁器ともに、近世の代表的な窯業の中心地である。しかし、18世紀末まで国内では独占市場であった磁器に比べ、陶器は、輸送手段が北前船であったため、主に日本海側で消費され、太平洋側にはあまり供給されていない。それらが少量ではあるがみられたことで、江戸市中だけではなく、その近郊地域にも、肥前陶器の流通があったことがわかる。

さらに、19世紀にはいると、大堀相馬(福島県)や飯能(埼玉県)など東日本各地の製品が確認できた。この時期、それまで陶器の分野では東日本で圧倒的なシェアを誇っていた瀬戸美濃は、磁器生産へと乗り出していく。瀬戸美濃の磁器は、それまで独占市場であった肥前磁器を圧倒し、江戸市中では磁器の産地の割合は瀬戸美濃へと大きく変化する。これにつれて、陶器の分野では、東日本の後発の産地が少しずつシェアを拡大する。大堀相馬のように、藩の殖産工業として力を入れる例もあり、これを後押しする。この流れが、江戸市中のみならず近郊の地域にも反映されると思われる。

量は少ないが、各遺跡で、銭貨が出土している。主として寛永通寶であるが、渡来銭もみられた。屋敷内遺跡の皇宋通寶、東城楽台遺跡の熙寧元寶は、中世の渡来銭としてはその出土量が上位に入る、中世を代表する銭貨である。寛永通宝では、類例の少ない鉄銭が住吉遺跡でみられた。また、東住吉南遺跡の寛永通寶は、銭銘が陰刻となっているようにみえる。類例がなく、あるいは二次加工品か仿鋳銭のたぐいである可能性もある。

さらに各遺跡で見られたどろめんこやミニチュア製品、サイコロなどの遺物は、おもちゃや嗜好品であり、これらを使用した遊びの文化が、近世から近代の生活の中にあったことが伺える。

第５表　中・近世土器類物集計

遺跡略称	挿図	No.	図版	種別	器種	産地	年代	法量	特徴
辰ケ台	21	1	7	陶器	天目碗	瀬戸美濃	16C		天目釉
	21	2	7	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	15C～16C		鉄釉
	21	3	7	陶器	皿	瀬戸美濃	16C末～17C中葉		志野釉
	21	4	7	陶器	茶入？	備前	16C末～17C		底部に細かな布目痕
	21	5	7	陶器	碗	肥前	18C前半		刷毛目
	21	6	7	陶器	鉢	肥前	18C前半		三島手
	21	7	7	陶器	皿	瀬戸美濃	16C末～17C前半	底7.4口11.5高2.2	二次焼成
	21	8	7	陶器	皿	瀬戸美濃	17C前半	底4.5口8.5高1.7	飴釉
	21	9	7	陶器	皿	瀬戸美濃	17C前半	底7.0口9.8高1.3	灰釉
	21	10	7	陶器	碗	瀬戸美濃	18C後半	口6.4	灰釉
	21	11	7	磁器	蕎麦猪口	肥前	18C前半	底4.7	染付、花唐草文、高台脇二重圏線
屋敷内	46	1	16	陶器	片口鉢	常滑	13C		砥石転用か
	46	2	16	陶器	片口鉢	常滑	13C		
	46	3	16	陶器	片口鉢	常滑	13C		
	46	4	16	陶器	片口鉢	常滑	13C		砥石転用か
	46	5	16	陶器	片口鉢	常滑	13C		
	46	6	16	陶器	片口鉢	常滑	13C		
	46	7	16	陶器	皿	瀬戸美濃	16C末～17C中葉		志野釉、鉄で花文
	46	8	16	陶器	鉢	瀬戸美濃	17C		灰釉、緑釉・鉄釉流しかけ
	46	9	16	陶器	皿	瀬戸美濃	16C	高台5.6口10.1高2.4	鉄釉
	46	10	16	陶器	皿	肥前	17C後半～18C前葉	高台4.4口11.4高2.9	内面銅緑釉、見込蛇の目釉剥
	46	11	16	陶器	碗	肥前	17C後半～18C前葉	高台4.4	外面銅緑釉
	46	12	16	陶器	皿	肥前	17C後半～18C前葉	高台5.2	鉄で山水楼閣文
	46	13	16	陶器	碗	肥前	17C末～18C中葉	高台5.0	刷毛目
	46	14	16	陶器	釜	大堀相馬	19C	底6.4最大8.2	銅緑釉
	46	15	16	土製品	管状土錘			孔径3.1mm	刺し網用、手捏練り状
	46	16	16	土製品	管状土錘			孔径3.1mm	刺し網用、手捏練り状
	46	17	―	銭貨	寛永通寳	日本	新寛永	径22.7mm	
東城奥台	61	1	21	陶器	甕	常滑	13C後半		
	61	2	21	陶器	天目碗	瀬戸美濃	15C～16C		天目釉
	61	3	21	陶器	皿	瀬戸美濃	15C～16C		天目釉
	61	4	21	陶器	皿	瀬戸美濃	16C		飴釉
	61	5	21	陶器	皿	瀬戸美濃	15C～16C	高台6.6	菊皿、灰釉、高台貼付
	61	6	21	陶器	皿	瀬戸美濃	16C末～17C中葉		志野釉
	61	7	21	陶器	皿	瀬戸美濃	17C		鉄釉、内面見込に目痕
	61	8	21	陶器	鉢	肥前	17C末～18C前半		透明釉（三島手？）
	61	9	21	陶器	香炉	瀬戸美濃	17C末～18C前半		飴釉
	61	10	21	磁器	碗	肥前	18C後半～19C		色絵、染付・赤・緑で鹿図文
	61	11	21	磁器	瓶	肥前	17C後半～18C初頭	高台5.0	染付、山水文
	61	12	21	陶器	半胴甕	瀬戸美濃	18C以降	高台9.4	灰釉流れ、高台内糸切痕、高台貼付
	61	13	―	銭貨	熙寧元寳	北宋	初鋳1068年	径24.6・内郭径21.4mm	真書体、背面は輪幅が極端に広い
枯木台南	68	1	22	陶器	擂鉢	備前	16C		鉄釉
	68	2	22	陶器	皿	瀬戸美濃	16C末～17C中葉		志野釉
住吉	88	1	30	磁器	鉢	中国	13C		青磁、連弁文
	88	2	30	磁器	瓶？	中国	13C～14C		青磁、唐草文
	88	3	30	磁器	皿	中国	13C		青磁
	88	4	30	素焼	かわらけ				底部糸切
	88	5	30	陶器	甕	常滑	13C前半		自然釉
	88	6	30	陶器	甕	常滑	13C前半		自然釉
	88	7	30	陶器	甕	常滑	13C前半		自然釉
	88	8	30	陶器	甕	常滑	14C中葉		自然釉
	88	9	30	陶器	甕	常滑	14C後半		
	88	10	30	陶器	片口鉢	常滑	13C前半		
	88	11	30	陶器	甕	常滑	中世		
	88	12	30	陶器	甕	常滑	中世		
	88	13	30	陶器	甕	常滑	中世		破面を二次加工、砥石に転用か？
	88	14	30	陶器	片口鉢	常滑	13C前半	高台14.9	高台丁寧なヘラケズリ、胎土に小石含む
	88	15	30	磁器	皿	肥前	18C後半	高台8.3	染付、見込に花文、高台内蛇の目
	88	16	30	陶器	碗		18C～幕末	口5.3高台3.0高3.1	灰釉
	88	17	30	陶器	片口鉢	瀬戸美濃	17C末～18C前半	口16.2	飴釉
	88	18	30	陶器	灯明皿		19C	口8.8受け7.0底3.4高2.4	灰釉
	88	19	30	陶器	片口鉢	常滑	14C後半		破面二次加工、砥石に転用か？
東住吉	93	1	31	陶器	皿	瀬戸美濃	16C末～17C中葉		志野釉
	93	2	31	陶器	片口鉢	瀬戸美濃	18C前半	高台8.6	飴釉、見込みに目跡
東住吉南	106	1	36	素焼	かわらけ		13C		
	106	2	36	陶器	皿	瀬戸美濃	16C末～17C中葉		志野釉
	106	3	36	陶器	皿	瀬戸美濃	16C末～17C前半		灰釉
	106	4	36	陶器	甕？	備前	近世？		
	106	5	―	銭貨					
土気城跡	108	1	37	素焼	かわらけ		13C	底7.2	底部糸切
	108	2	37	素焼	かわらけ		13C	底5.0	底部糸切
	108	3	37	素焼	かわらけ		13C	底4.0	底部糸切

写　真　図　版

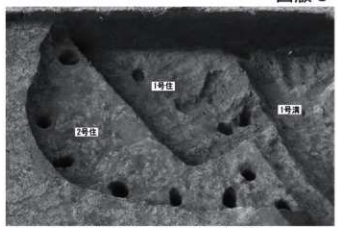
空中写真（1）平成 22 年

図版２

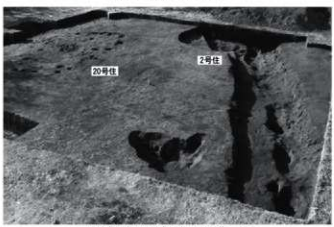
空中写真（２）平成７年・南から

空中写真（３）平成７年・北から

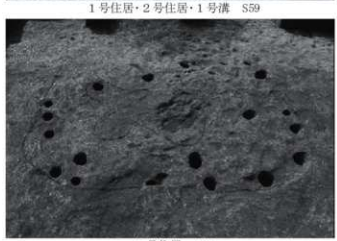
確認　S57-T13～T14



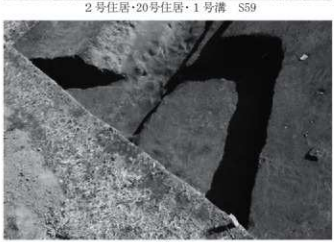
１号住居・２号住居・１号溝　S59



２号住居・20号住居・１号溝　S59



20号住居　S59



１号溝　S59

１号溝セクション　S59

確認　S57-T２

確認　S57-T３

確認　S57-T７～T５

確認　S57-T11

図版4　辰ケ台遺跡2

確認　S58-1A-d

確認　S58-1C-e

確認　S58-1C-d

確認　S58-2D-b

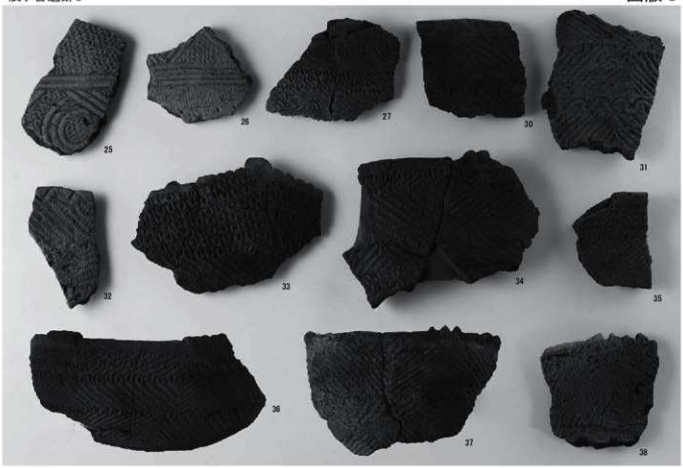
確認　S58-2B-e

確認　S58-2D-d

確認　S58-3D-d

確認　S58-2B-d

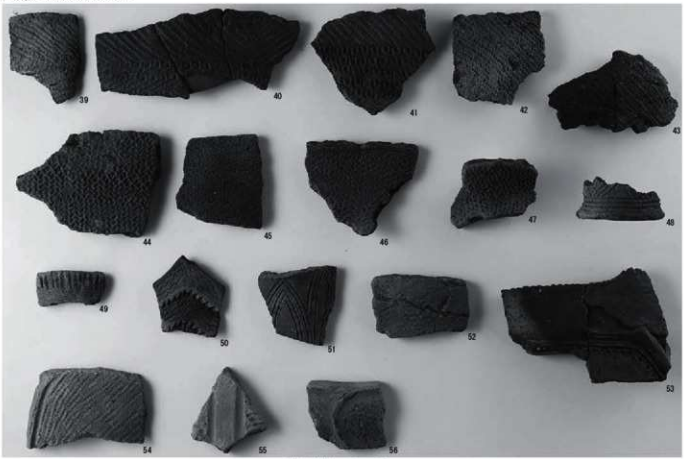
縄文土器　1～24



縄文土器　25～27・30～38

縄文土器　28+29

図版 6 辰ケ台遺跡 4



縄文土器　39 ～ 56

1　19号住居−1

2　19号住居−2

3　19号住居−3

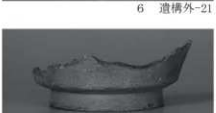
4　19号住居−4

5　19号住居−6

8　遺構外−12

6　遺構外−21

7　遺構外−26

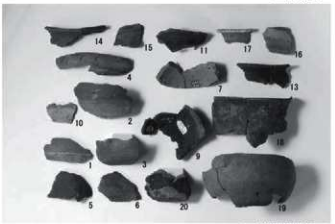


9　遺構外−30

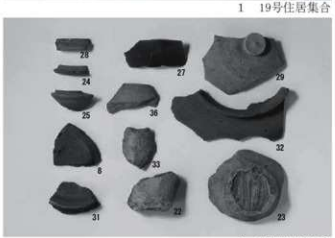
10　遺構外−34

11　遺構外−35

1　19号住居集合



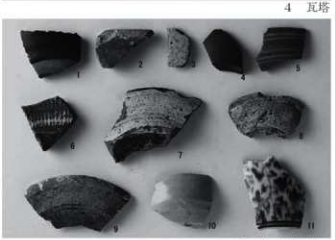
2　遺構外集合１



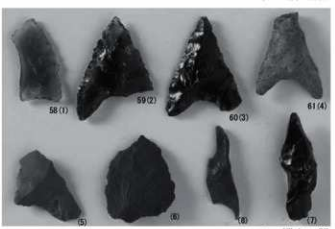
3　遺構外集合２

4　瓦塔

5　古代石器



6　中・近世土器



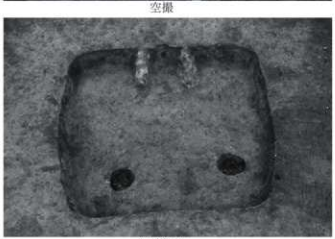
7　縄文石器

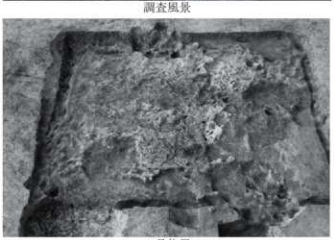
()内は付表番号

図版 8 屋敷内遺跡 1

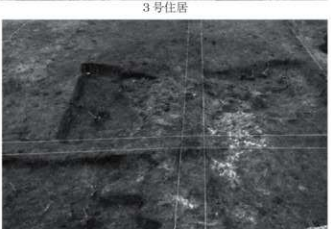
空撮

調査風景


2 号住居


3 号住居

4 号住居


4 号住居　焼土

5 号住居

6 号住居

7号住居

8号住居

9号住居

10号住居－１

10号住居　長方形くぼみ

10号住居－２

11号住居

12号住居

図版10 屋敷内遺跡3

12号住居 焼土集積

13号住居

14号住居

15号住居

16号住居

17号住居

18号住居

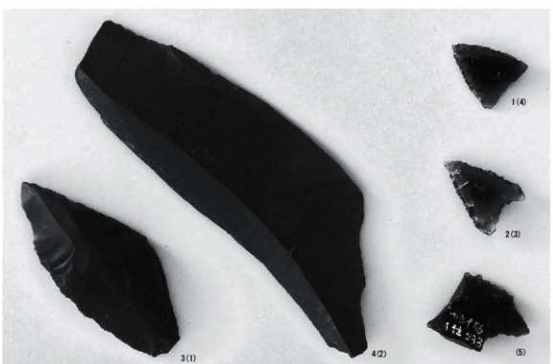
19号住居（東城楽台遺跡）

19号住居　カマド

20号住居（東城楽台遺跡）

20号住居　床面下壁溝

調査風景　9K



旧石器・縄文石器

()内は付表番号

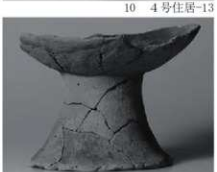
図版12 屋敷内遺跡5

1　1号住居-1

4　1号住居-13

7　4号住居-1

10　4号住居-13


13　5号住居-6

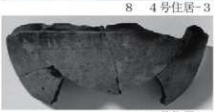
16　7号住居-2

20　8号住居-25

2　1号住居-2

5　1号住居-22

8　4号住居-3


11　5号住居-1

14　5号住居-7

17　8号住居-21

18　9号住居-3

21　9号住居-4

3　3号住居-5

6　3号住居-3

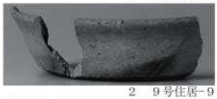
12　5号住居-2

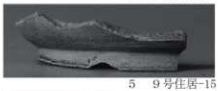
15　7号住居-1

19　8号住居-24

22　9号住居-6

1　9号住居-7


2　9号住居-9


5　9号住居-15

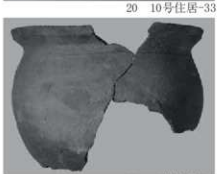
8　10住居-3

11　10号住居-6

16　10号住居-18

19　10号住居-29

20　10号住居-33


23　10号住居-36

3　9号住居-11

6　10号住居-1

9　10号住居-4

12　10号住居-7

13　10号住居-15

17　10号住居-21

21　10号住居-34

24　10号住居-39

4　9号住居-11

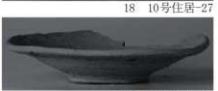
7　10号住居-2

10　10号住居-5

14　10号住居-14

15　10号住居-16

18　10号住居-27


22　10号住居-31

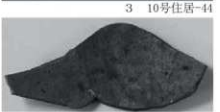
25　10号住居-37

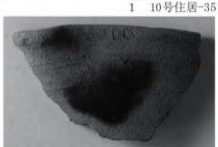
図版14 屋敷内遺跡7

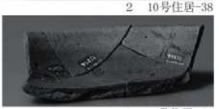
1　10号住居-35

2　10号住居-38

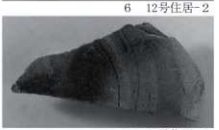
3　10号住居-44


4　10号住居-52


5　10号住居-53


6　12号住居-2

8　12号住居-21


7　12号住居-4

9　16号住居-23

10　19号住居-3

11　19号住居-4

13　19号住居-7

14　20号住居-2

12　19号住居-6

15　1号住居集合

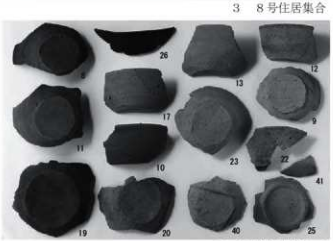
16　2～4号住居集合

1　5号住居集合

2　6・7号住居集合

3　8号住居集合

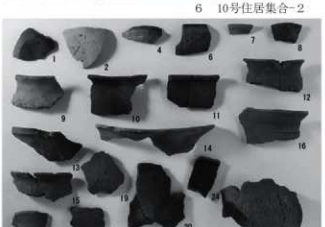
4　9号住居集合



5　10号住居集合-1

6　10号住居集合-2

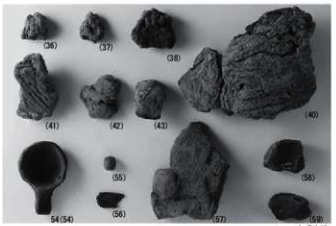
7　12号住居集合



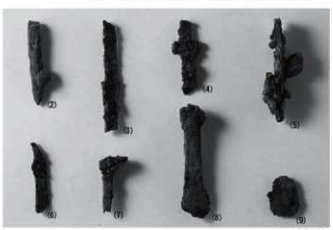
8　16号住居集合

図版16 屋敷内遺跡9

1　11・13～15・17・19・20号住居集合

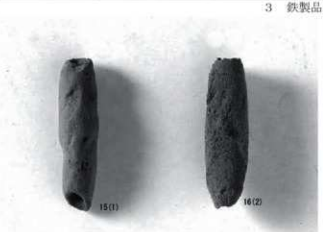


2　土製品

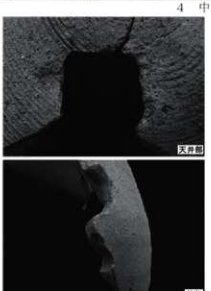


3　鉄製品

4　中・近世土器



5　管状土錘



6　10号住香炉蓋44透穴

7　土製品54拡大図

8　土製品(56)拡大図

()内は付表番号

１次空撮　S56

２次空撮　S58

２次調査後　S5810

１号住居

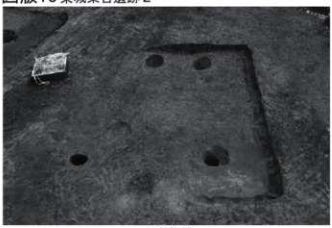
１号住居　カマド

２号住居

２号住居　カマド

３号住居

図版18 東城楽台遺跡2


4号住居

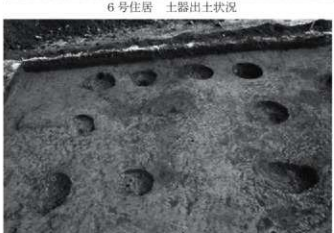
5号住居

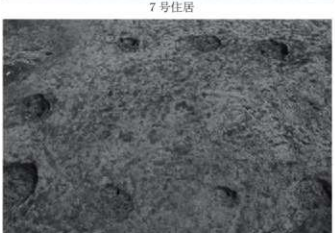
6号住居

6号住居　カマド

6号住居　土器出土状況

7号住居


1号建物


2号建物

東城楽台遺跡3

1号墳周溝遺物-1

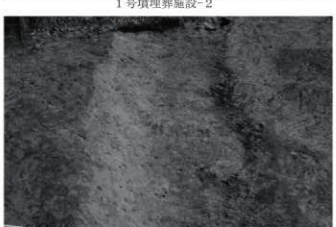
1号墳周溝遺物-2

1号墳鉄鏃

1号墳埋葬施設-1

1号墳埋葬施設-2

1号墳埋葬施設-3


1号溝

3号溝

図版20 東城楽台遺跡4

1　縄文土器

2　縄文石器

3　1号住居-1

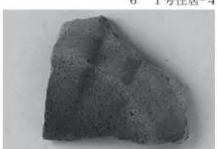
4　1号住居-2

5　1号住居-3

6　1号住居-4

7　1号住居-5

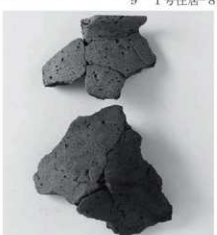
8　1号住居-7



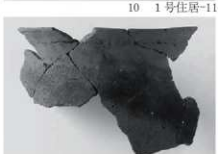
9　1号住居-8

10　1号住居-11

11　1号住居-12



12　1号住居-15・16



13　1号住居-17

14　1号住居-19

15　2号住居-13

16　1号住居-21

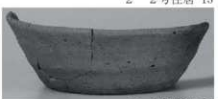
17　1号住居-20

1　2号住居-7

2　2号住居-15

3　2号住居-18

4　2号住居-20


5　6号住居-1

6　6号住居-9

7　6号住居-17

8　1号建物-1

9　6号住居-16

10　1号墳-1

11　1号墳-9

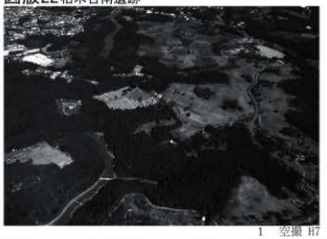
12　1・2・3・5号住居集合

13　6号住居集合

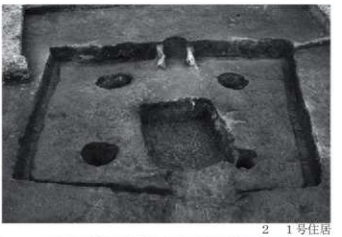
14　7号住居・2号建物・1～3号溝・1号墳集合

15　中・近世土器集合

図版22 枯木台南遺跡



1　空撮 H7



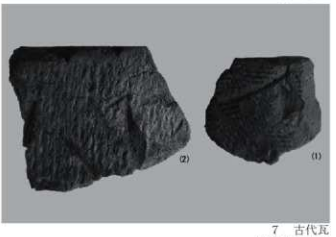
2　1号住居

3　1号住居　カマド

4　1号墳周溝

5　1号住居-6

6　1号住居集合



7　古代瓦
()内は付表番号

8　中・近世土器

空撮　S58

縄文土器　1～6

図版24 住吉遺跡 1

調査風景

確認調査（M9）

11C調査風景

11C出土状況（1）

11C出土状況（2）石器

11C出土状況（3）土器

2・4号溝

2・3号溝

縄文土器　1～10・12～32

縄文土器　33～63

図版26 住吉遺跡3

縄文土器　64～89・91・92

縄文土器　90・93～113

縄文土器　114～131・135～139

縄文土器　132～134・140～153

図版28 住吉遺跡5

縄文土器 154・155・157・159～175

縄文土器 11・156・158

旧石器・石鏃

縄文石器

()内は付表番号

図版30 住吉遺跡 7

1　11C区石器集中接合資料

2　遺構外-8

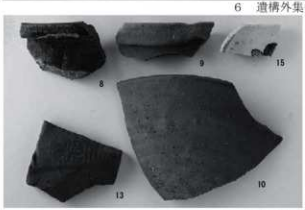
3　遺構外-13

4　遺構外-22

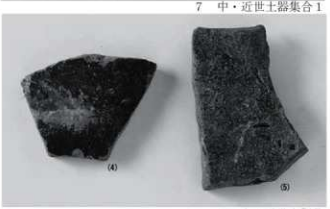
5　遺構外-27

6　遺構外集合

7　中・近世土器集合 1



8　中・近世土器集合 2



9　中・近世土製品
()内は付表番号

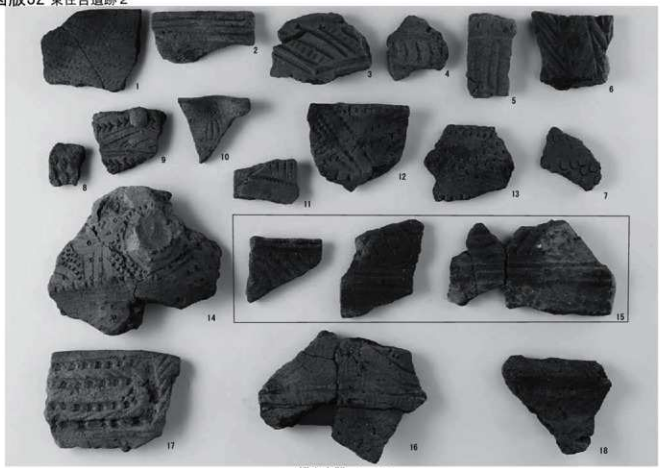
1　空撮S5407

2　調査風景-1

3　調査風景-2

4　中・近世土器

図版32 東住吉遺跡2



縄文土器　1～18

縄文土器　19～35

空撮　S5712

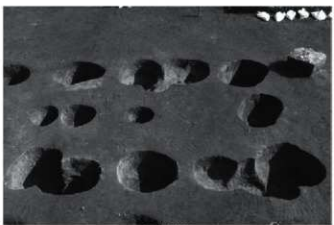
調査風景

1 号住居

7 号住居

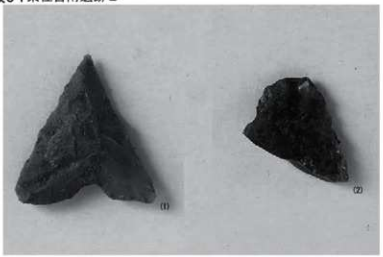
建物群調査

1号建物



3 号建物

図版34 東住吉南遺跡2



1　石鏃

2　5号住居-2

3　1号住居-5

4　1号住居-6

5　1号住居-4

6　5号住居-1

7　7号住居-1

8　7号住居-2

9　7号住居-3

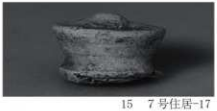
10　7号住居-27

11　7号住居-12

12　7号住居-13

13　7号住居-14

14　7号住居-15



15　7号住居-17

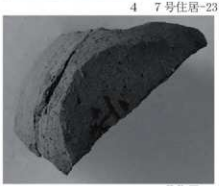
16　7号住居-26

17　8号住居-3

()内は付表番号

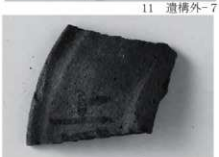
1　7号住居-18

4　7号住居-23



8　8号住居-6

11　遺構外-7



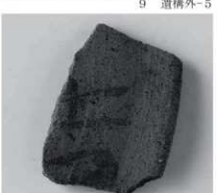
14　遺構外-8

2　7号住居-19

5　8号住居-4

6　8号住居-7

9　遺構外-5

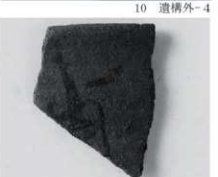


12　遺構外-10

3　7号住居-20

7　8号住居-5

10　遺構外-4



13　遺構外-9

15　遺構外-11

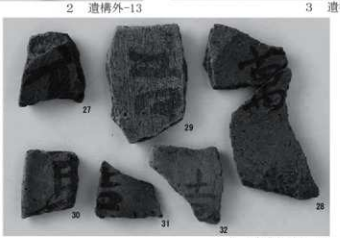
図版36 東住吉南遺跡4

1　遺構外-12

2　遺構外-13

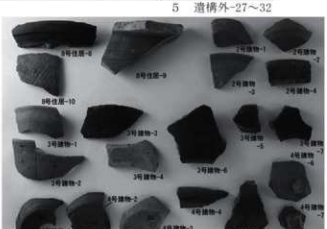
3　遺構外-14

4　遺構外-15

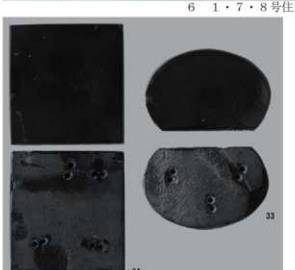


5　遺構外-27～32

6　1・7・8号住居集合

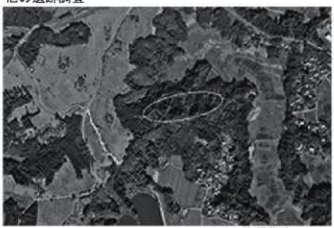


7　8号住居・2～4号建物集合



8　古代石製品

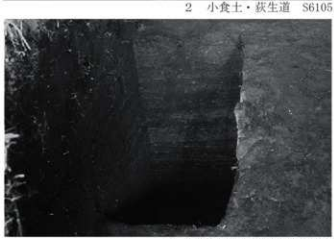
9　中・近世土器



1　金堀砦跡　S5810

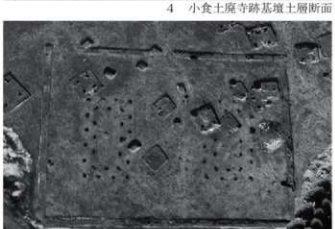
2　小食土・荻生道　S6105

3　小食土廃寺跡基壇西から



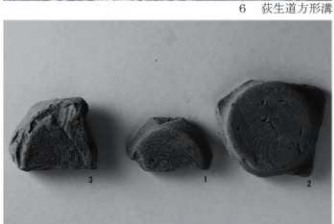
4　小食土廃寺跡基壇土層断面

5　荻生道空撮



6　荻生道方形溝

7　荻生道　鉄製品
()内は付表番号



8　土気城跡　中・近世土器

3，4は千葉県教育委員会提供

報告書抄録

ふりがな	ちばししょうわのもりいせきぐんさん－たつがだいいせき・やしきうちいせき・ひがしじょうらくだいいせきた－
書名	千葉市昭和の森遺跡群Ⅲ―辰ケ台遺跡・屋敷内遺跡・東城楽台遺跡他―
編著者名	西野雅人・岸本高充
編集機関	千葉市教育委員会
所在地	〒260-8730　千葉市中央区問屋町1番35号　千葉ポートサイドタワー11・12階　TEL. 043-245-5960
発行年月日	2021年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査年次	調査期間	調査面積	調査原因
たつがだいいせき 辰ケ台遺跡	ちばしちばやさしだ 千葉市緑区小食 しょう 土町848他	12104	緑区339	35° 31′ 12″	140° 17′ 2″	昭和55	1980年10月20日～1980年11月26日	3000㎡（本調査）	千葉市昭和の森整備に伴う
						昭和57	1982年6月7日～1982年6月30日	100㎡（確認）	
						昭和58	1983年7月4日～1983年8月6日	224㎡（確認）	
						昭和59	1984年10月1日～1984年10月25日	136㎡（本調査）	
やしきうちいせき 屋敷内遺跡	ちばしちばやさしだ 千葉市緑区小食 しょう 土町589他	12104	緑区342	35° 31′ 22″	140° 17′ 7″	昭和56	1981年12月1日～1982年2月3日	900㎡（本調査）	
ひがしじょうらくだいいせき 東城楽台遺跡	ちばしちばやさしだ 千葉市緑区土気 ちょう 町33他	12104	緑区306	35° 31′ 26″	140° 17′ 1″	昭和56	1981年5月25日～1982年2月27日	5000㎡（本調査）	
						昭和56・57	1983年2月7日～1983年6月6日	4900㎡（本調査）	
かれきだいみなみいせき 枯木台南遺跡	ちばしちばやさしだ 千葉市緑区小食 しょう 土町809他	12104	緑区337	35° 31′ 7″	140° 16′ 49″	昭和57	1982年7月26日～1982年7月30日	216㎡（確認）	
						昭和59	1984年9月6日～1984年9月29日	160㎡（本調査）	
にしひらだいいせき 西平台遺跡	ちばしちばやさしだ 千葉市緑区小食 しょう 土町955他	12104	緑区324	35° 30′ 59″	140° 16′ 51″	昭和57	1982年6月7日～1982年6月30日	100㎡？（確認）	
						昭和59	1984年9月3日～1984年9月5日	40㎡（確認）	
すみよしいせき 住吉遺跡	ちばしちばやさしだ 千葉市緑区小食 しょう 土町822他	12104	緑区345	35° 30′ 46″	140° 16′ 36″	昭和58	1983年9月5日～1983年11月19日	1600㎡（確認）	
						昭和59	1984年10月26日～1985年1月25日	310㎡（本調査）	
						昭和59	1984年10月26日～1985年1月25日	1340㎡（確認）	
ひがしすみよしいせき 東住吉遺跡	ちばしちばやさしだ 千葉市緑区小食 しょう 土町1153-1他	12104	緑区346	35° 30′ 39″	140° 16′ 29″	昭和53	1984年2月5日～1984年3月7日	175㎡？（確認）	
ひがしすみよしみなみ 東住吉南 いせき 遺跡	ちばしちばやさしだ 千葉市緑区小食 しょう 土町1101他	12104	緑区397	35° 30′ 40″	140° 16′ 25″	昭和57	1982年4月19日～1983年2月5日	8000㎡（確認）	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
辰ケ台遺跡	集落	縄文	住居跡2	縄文土器・石器（石鏃・磨石類）、貝類・獣骨	縄文前期・関山式の集落の一部を調査、関山式土器多数出土。奈良・平安時代の瓦塔、須恵器瓦鉢、灰釉陶器、製鉄関連遺物・鉄床石出土。中世末から近世の瀬戸美濃天目茶碗・備前茶入出土
		奈良・平安	住居跡2	土師器・須恵器・灰釉陶器、瓦塔、瓦、製鉄関連遺物（鉄滓・羽口）	
	包蔵地	中・近世	溝	陶磁器、土鍋、砥石	
屋敷内遺跡	集落	奈良・平安	住居跡20	土師器・須恵器・灰釉陶器、鉄製品（刀子・鉄鏃）、瓦、土製品（網杓状、焼成粘土塊）、製鉄関連遺物（鉄滓・羽口）	奈良・平安時代の大規模集落の一部。多量の坏・皿類一括廃棄を伴う住居跡あり。畿内産模倣坏、「丈部」銘墨書土器、瓦鉢、香炉蓋。13世紀から19世紀の陶磁器出土。
	包蔵地	中・近世		陶磁器、土鍾、銭貨	
東城楽台遺跡	包蔵地	縄文		縄文土器、玉	二重周溝の円墳を調査。土気古墳群中第2位の規模。奈良・平安時代の大規模集落の一部を調査。15～16世紀中心の陶磁器多数出土
	古墳	古墳	円墳	土師器・須恵器、金属製品（大刀・鉄鏃）	
	集落	奈良・平安	住居跡7、掘立柱建物跡2	土師器・須恵器、瓦、製鉄関連遺物（鉄滓）	
	包蔵地	中・近世	溝	陶磁器、銭貨	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
枯木台南遺跡	古墳	古墳	円墳1		土師器ハケ調整甕（駿東甕）出土。
	集落	奈良・平安	住居跡1	土師器、瓦	
	包蔵地	中・近世	溝	陶磁器	
西平台遺跡	包蔵地	縄文		縄文土器	加曽利B式の釣手土器破片
		奈良・平安		土師器・須恵器・灰釉陶器、瓦	
住吉遺跡	包蔵地	縄文	石器集中（石斧製作跡）、礫集中	縄文土器、石器（接合資料・叩石・台石・石鏃）、石製品（けつ状耳飾）	縄文早期末の石器集中（石斧製作跡）を調査。早期中葉田戸下層式と前期前葉・関山式土器多数出土。後期前葉・堀之内１式の注口付浅鉢出土。縄文時代の礫集中あり。奈良・平安時代の鍛冶関連遺物集中を調査。13世紀の中国産青磁出土
	生産遺跡	奈良・平安	製鉄関連遺物集中	土師器・須恵器・灰釉陶器、瓦	
	包蔵地	中・近世	溝	陶磁器、銭貨、砥石、硯	
東住吉遺跡	包蔵地	縄文		縄文土器、石器（石皿・打製石斧・磨石類）	縄文時代早期前葉～前期前葉の土器、礫多数出土
		奈良・平安		土師器・須恵器	
東住吉南遺跡	集落	奈良・平安	住居跡５、掘立柱建物４	土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器、瓦、石製品（石帯）、土製品（紡錘車）、製鉄関連（鉄滓・羽口）	平安時代の建物群を検出、大半は途中で中止。墨書土器多数。香印盤、石帯２点出土。
要約	千葉市緑区小食土町・土気町・小山町地先の千葉市昭和の森整備に伴う発掘調査報告の４冊目である。公園整備は旧地形を活かしており、遺跡の大半は公園の地下に保存されている。部分的な調査が多いが、房総の三大水系が交わり二つの自然道が交差する交通や狩猟活動の枢要の地について土地利用の歴史が明らかになった。 **辰ケ台遺跡**：昭和55・58・59年度の確認・本調査の結果を所収。縄文時代は前期関山式期の住居跡２軒、遺構外出土の縄文土器多数（関山式が大半）、コハクの剥片等が出土。奈良・平安時代は８世紀初頭の住居跡２軒ほかを調査、遺構外出土の須恵器瓦鉢や東海産灰釉陶器、瓦塔、製鉄関連遺物がある。中世末～近世初頭の瀬戸美濃天目碗、備前茶入が出土した。 **屋敷内遺跡**：昭和56年度の本調査結果を所収。奈良・平安時代の大規模集落の一画を調査。８・９世紀の住居跡20軒、一部は10世紀に下る可能性あり。多量の一括廃棄遺物を伴う１軒は坏・皿が多く、香炉・灯明具・「丈部」銘墨書・柄杓状土製品・焼成粘土塊を含む。11軒から鍛冶関連遺物が出土した。13世紀の常滑片口鉢が多数出土した。 **東城楽台遺跡**：昭和56～58年度の本調査結果を所収。縄文時代はメノウ製玉が出土。二重周溝と横穴式石室をもつ土気古墳群の盟主墳を調査。古代大集落の一部を調査、8世紀後半～９世紀主体の住居跡７軒・建物跡２棟。 **枯木台南遺跡**：昭和57・59年度の確認・本調査結果を所収。円墳１基、７世紀末～８世紀初頭の住居跡１軒。「駿東型甕」類似のハケ調整甕出土。 **西平台遺跡**：昭和57・59年度の確認調査結果を所収。縄文土器、９・10世紀の土器が出土。 **住吉遺跡**：昭和58・59年度の確認・本調査結果を所収。縄文土器多数、早期前葉～前期末、中期後半～晩期終末が連続し長期断続的な土地利用を示す。関山式期中心、沈線文、条痕文、堀之内式も良好な資料。石斧製作跡から打ち割った礫・叩石・台石と早期末土器が共伴。石製けつ状耳飾出土。13世紀の中国産青磁出土。 **東住吉遺跡**：昭和53年度の確認調査結果を所収。早期前葉～前期前葉、後期前葉～中葉主体の縄文土器多数。 **東住吉南遺跡**：昭和57年度の確認調査結果を所収。8～10世紀の住居跡３軒と掘立柱建物群を調査。墨書土器多数。瓦多数、須恵器脚付盤（香印盤）、石帯出土。 **他の遺跡**：荻生道遺跡の報告漏れ遺物を掲載（土製紡錘車、青銅製蛇尾、鉄製鎌・刀子・紡錘車）。土気城跡出土のかわらけを掲載、13世紀台に遡る可能性を示す。 **縄文時代**：縄文土器は早期初頭～前期前葉が圧倒的に多く、沈線文・関山式が充実する。撚糸文～関山、浮島・諸磯～阿玉台Ｉｂ、加曽利E式前後半、堀之内1式期、加曽利B2式期の土地利用を示す。土気遺跡群は県内有数の草創期～関山式期遺跡の宝庫だが、狩猟活動枢要地において陥し穴や石鏃はごく少なく、二つの自然道の交差点付近は関山式期の集落以外は、半径500mの範囲には土器や礫さえ少なかった。稠密な遺跡分布は当地を空白地とするドーナツ状であったことが判明した。 **古墳時代**：土気地区の特徴である弥生～６世紀前半の空白と６世紀後半以降の土器出土を確認できた。東京湾側と九十九里側の二大勢力を結びつけるための大規模開発によるものと考えられている。東城楽台１号墳は二つの地域を最短で結ぶ生実－土気－武射ルート上にある盟主墳と目され、７世紀代の年代を与えることができた。 **奈良・平安時代**：黒ハギ・東城楽台・屋敷内とつながる土気地区最大の集落域の一画の内容が明らかになった。東住吉南は建物と墨書土器の数が突出しており鹿子遺跡群に連なると推定される。仏教関連遺物が多く、上総国分寺造営の一端を担った国境の集落群の様相が明らかになった。 **中・近世**：13世紀の遺物が確認され中世前半の生活の痕跡が追加された。近世遺物は16世紀末から幕末までまんべんなく出土。16世紀末～17世紀中葉志野釉皿は各遺跡から出土している。圧倒的に陶器が多いが、東城楽台遺跡の17世紀後半の瓶や18世紀後半の色絵碗など古い段階の高級磁器もみられた。少量だが肥前陶器がみられ江戸近郊に流通したことがわかる。19世紀には大堀相馬や飯能など東日本各地の製品が確認できた。				

千葉市昭和の森遺跡群Ⅲ

―辰ケ台遺跡・屋敷内遺跡・東城楽台遺跡他―

令和３年３月29日発行

発　　行　千葉市教育委員会
千葉市中央区問屋町１番35号
千葉ポートサイドタワー11・12階
TEL：043-245-5962（文化財課）

編　　集　千葉市埋蔵文化財調査センター
千葉市中央区南生実町1210
TEL：043-266-5433

印　　刷　株式会社弘報社
千葉市緑区古市場町474-268